

明治大学平和教育登戸研究所資料館 館報

第2号 2016年度

目次

2015年度川崎市文化賞受賞の言葉……………	渡 辺 賢 二	1
特別寄稿 論文		
長野県における陸軍登戸研究所の疎開資料について —上伊那地方（伊那谷）を中心として—……………	木 下 健 蔵	3
第6回企画展「NOBORITO 1945 —登戸研究所 70年前の真実—」記録……		23
展示		
第一期：8月15日までの登戸研究所		
風船爆弾作戦の遂行と終結……………	塚 本 百 合 子	23
分散疎開と継続された秘密戦研究を中心に……………	椎 名 真 帆	43
第二期：8月15日以降の登戸研究所		
戦後の登戸研究所の証拠隠滅作業・勤務員の復員・関連研究の活用 ……………	椎 名 真 帆	69
元所員らの戦後……………	塚 本 百 合 子	83
企画展記念講演会		
第一回 第一期：8月15日までの登戸研究所……………	山 田 朗	101
第二回 第二期：8月15日以降の登戸研究所……………	山 田 朗	121
第三回 長野県に疎開した登戸研究所と高校生たちとの調査		
第一部 講演……………	木 下 健 蔵	141
第二部 パネルディスカッション……………	木下 健蔵・渡辺 賢二 山田 朗	148
企画展関連イベント「証言会」		
元登戸研究所関係者が語る1945年の登戸研究所……………		175
2015年度年次報告……………		199
1. 2015年度活動概要と今後に向けての展望		
2. 開館状況		
3. 資料		
4. 活動内容		
5. 取材		
6. 来館者感想		

2015年度川崎市文化賞受賞の言葉 —登戸研究所の調査・研究・保存の活動が評価され光栄です—

渡辺賢二

明治大学平和教育登戸研究所資料館展示専門部会委員

2015年度川崎市文化賞を受賞しました。私自身、たいしたことをしてきた自覚はないので最初はとまどいました。しかし、受賞理由を見てこれは私が個人的に受賞したものではなく、多くの皆さんと一緒にやってきたことが評価されたのだと知り、得心しました。

受賞の理由には「陸軍登戸研究所の発掘・調査・保存に貢献」したことがあげられています。しかも「長年にわたって高校生・市民と共に調査」していたことが書き添えられていました。多くの皆さんのご指導ご鞭撻のおかげでもあります。

いまから31年前の1985年、川崎市は教育委員会主催の平和・人権学習を開始しました。それには市民が企画委員として参加し、自主的に運営し学ぶことが出来ました。私は法政二高に勤務していましたので、早速、生徒をつれて参加しました。1986年度からはじめましたが87年度は、ただ講師の先生の話聞くのではなく自分たちで地域の戦争を調べてみようということになりました。川崎空襲の傷跡などを調査するところからはじめました。川崎市北部を調べていた時のことです。東京新聞の記者から「このあたりで戦争末期稲が実らなかった事件があった」と聞きました。どうも現在の明治大学生田キャンパスに秘密の研究所があったということです。すぐに、行ってみました。明治大学農学部が使用していて、古い建物が沢山ありました。そして目立たないところに「動物慰霊碑」と書かれた3メートルくらいの巨大な石碑がありました。「どんな動物を実験に使ったのだろうか」と企画委員のメンバーで話し合いました。碑の後ろには「昭和十八年三月建之」と「陸軍登戸研究所」と記載されていました。「大変な研究をしていた可能性がある」とは思いました。そこで防衛庁（現・防衛省）防衛研究所にいて資料調査をしてみました。ところが基本資料になるものは皆無でした。資料がないから明らかにならないことを実感しました。ところが高校生や市民と一緒に活動したことが活路を開いたのです。数回目の見学会の時でした。私たち以外に高齢の方がついてきました。「ここにお勤めでしたか」と聞くと「そうだ」というのです。井上さんという方でした。この出会いがなかったら永久に歴史から消えていたともいえるかも知れません。「みんなこのことは墓場まで持っていこう、と別れた」といいました。しかし、戦後40年以上経って「青春を消しさるのが苦しくなって最近近くから通っていた仲間で会をつくった」というのです。一緒に参加し

ていた仲間が「アンケートを採ろう」といいました。99名の方に出したら、26名の方から返事が来ました。その中のお一人、15歳でタイピストとして勤めていた小林コトさんから「資料を持っている」という返事をいただきました。少女だった人が持っているのだからたいしたものではないのではないか、との思いは覆されました。960枚を超える綴りだったのです。この資料提供が登戸研究所の歴史をひとくもとになりました。

その後、法政二高と長野県赤穂高校生が関係者から聞き取りをしました。関係者は、「大人には話さないが高校生には話そう」と言って、秘密研究所の実態が浮かび上がりました。さらに重要なことは登戸研究所に勤務していた方々がつくる登研会が明治大学に資料館設置を求めたのです。市民の保存を求める動きも進む中で明治大学が英断を下し資料館設置を決め、2010年4月から明治大学平和教育登戸研究所資料館を開館しました。このように、いろいろな力が結びあい、歴史に埋もれようとしていた秘密戦研究所がしっかりとした資料館になりました。科学が戦争に動員されるときどうなるか、秘密戦とは何か、私たち自身の問題として一緒に考えたいと思います。

〔渡辺賢二氏プロフィール〕

法政大学第二高等学校教諭時代より四半世紀以上にわたり、市民、高校生たちと共に登戸研究所の実態について発掘・解明してきたパイオニア。2015年川崎市文化賞受賞。現在、明治大学平和教育登戸研究所資料館展示専門部会委員。主著に『陸軍登戸研究所と謀略戦』（吉川弘文館、2012年）。

長野県における陸軍登戸研究所の疎開資料について —上伊那地方(伊那谷)を中心として—

木下健蔵

元長野県辰野高等学校教諭

要旨 陸軍登戸研究所では、陸軍省軍事課が終戦時に通達した「特殊研究処理要領」により、全ての文書が処分された。長野県の疎開先でも、この通達により本部のあった宮田村の真慶寺や、研究部門の中心であった中沢国民学校（現駒ヶ根市立中沢小学校）でも1週間以上にわたり、多くの関係書類が焼却処分された。

このように陸軍登戸研究所の関係資料は、終戦時の焼却処分によりほとんど現存していないが、唯一、陸軍兵器行政本部が作成した1945年8月31日付の資料が残されている。この資料には、陸軍登戸研究所の任務、疎開先、編成、人員、研究概要等が記されている。しかし、この文書には陸軍登戸研究所が研究していた生物化学兵器や偽札製造などの重要な研究は載せられていない。

疎開先の文書は、伴繁雄技術少佐が作成した2種類の疎開計画文書がある。当時の伊那村、現在の駒ヶ根市東伊那に疎開した陸軍登戸研究所の製造工場について記されたもので、「伊那村工場建設業務分担計画」と「伊那村工場構成建物及坪数調書」である。内容は、1945年6月末をもって工事を完成し研究整備に着手すると方針のもと、建設業務と担当者や疎開先への出発日などが記されている。

陸軍登戸研究所の疎開先は学校などで、多くは軍需工場として使用されていた。最近、中沢青年学校や飯島国民学校の疎開文書が発見され、疎開時の実態が明らかになった。申請者は陸軍登戸研究所中沢製造所、校舎転用期間は1945年4月から1946年3月までの1年間となっている。その間、生徒たちの授業は中止され、陸軍登戸研究所の工場などに動員された。終戦後、GHQが疎開先を訪れ兵器などを押収したことが文書に記されており、その日付は10月25日であった。これにより、上伊那地方にGHQが来た時期が明らかになった。

キーワード：陸軍登戸研究所の長野県への疎開、陸軍登戸研究所伊那村工場疎開文書、陸軍登戸研究所中沢青年学校疎開文書、陸軍登戸研究所飯島国民学校疎開文書、特殊研究処理要領

はじめに

「特殊研究処理要領」と標題のついた陸軍の文書がある。この文書は陸軍省軍事課が敗戦と同時に関係機関に発した通達である。

内容は、「敵ニ証拠ヲ得ラル、事ヲ不利トスル特殊研究ハ全テ証拠ヲ隠滅スル如ク至急処置ス」という方針のもとに、処分すべき特殊研究が5項目にわたり取り上げられている。

この通達の最初に出てくる文が、「ふ号及登戸関係ハ兵本草刈中佐ニ要旨ヲ伝達直ニ処置ス」

というもので、登戸研究所への証拠隠滅の伝達時刻は8月15日午前8時30分となっている。

その後、731部隊および100部隊関係、糧秣本廠1号関係、医事関係、獣医関係と続き、最後の獣医関係機関に伝達された時刻は午前10時である。

この通達により、陸軍では登戸研究所関係の証拠隠滅が最重要であったことがわかる。文書のなかに出てくる「ふ号」とは登戸研究所の第1科が研究開発していた風船爆弾の秘匿名であり、「兵本」とは兵器行政本部のことである。「731部隊」は関東軍防疫給水部の秘匿名で、人体実験をしたことでも有名である。「糧秣本廠1号」とは種子島で研究されていた穀物に多大な被害を与える黒穂病の病原性の研究のことで、風船爆弾にも搭載する計画であったといわれている。

長野県の疎開先でも、この通達により本部のあった宮田村の真慶寺や、研究部門の中心であった中沢国民学校（現駒ヶ根市立中沢小学校）において、1週間以上にわたり多くの関係書類が焼却処分された事実が、元所員の証言から判明している。

現在までに登戸研究所が上伊那に疎開したことは、元所員の証言や学校日誌などの断片的な資料により明らかになっていたが、疎開に関する公文書類は見つかっていない。唯一の政府側の資料が兵器行政本部作成の資料である。

長野県上伊那地方（伊那谷）に、秘密戦の研究機関である陸軍登戸研究所が疎開したのは1945（昭和20）年の3月から4月にかけてである。

登戸研究所は謀略や防諜などの資材を研究していた機関であるため、戦時中はもちろん戦後も一切明るみにならなかった研究所である。秘密のヴェールに包まれたこの研究所を調査し、当時の関係者から聞き取りなどを行い、その実態を明らかにしたのは高校生たちである。駒ヶ根市にある赤穂高校平和ゼミナールの生徒たちと登戸研究所の地元である川崎市の法政二高の平和研究会の生徒たちである。これらの活動は『高校生が追う陸軍登戸研究所』（教育史料出版会）に詳しく述べられている。また、当時平和ゼミナールの顧問であった筆者は、登戸研究所の歴史をはじめ体系的にまとめた『消された秘密戦研究所』（信濃毎日新聞社）を出版した。本稿では、両書の出版後発見された疎開関係の新資料を中心に、伊那谷での実態を述べようと思う。

1. 唯一の公式資料

陸軍登戸研究所は1927（昭和2）年に新宿の陸軍科学研究所の一室を使用してできた「秘密戦資材研究室」が前身である。研究内容は物理兵器関係と化学（毒ガス）関係の2部門からなり、1939（昭和14）年川崎市登戸に移転した頃から、秘匿名である「登戸研究所」と呼ばれるようになった。この研究所の正式名称は「第九陸軍技術研究所」であるが、この名称で呼ばれることは一切なかったのである。

登戸研究所の関係資料は、敗戦時の焼却処分によりほとんど現存していないが、唯一兵器行政本部が作成した1945（昭和20）年8月31日付の資料（防衛研究所戦史研究センター所蔵）が残されている。この資料には、登戸研究所の任務、疎開先、編成、人数、研究概要等が記されている。以下がその内容である。

1. 任 務 超短波ノ基礎研究並ニ挺進部隊用資材、宣伝資材、憲兵資材ノ研究其ノ製造

2. 所在地 本 部 長野県上伊那郡宮田村
 北安分室 長野県北安曇郡松川村
 中沢分室 長野県上伊那郡中沢村
 小川分室 兵庫県氷上郡小川村
 登戸分室 川崎市登戸

3. 編 成 本部及北安分室、中沢分室、小川分室、登戸分室ヨリ成ル

本 部 企画、庶務、人事、経理、医療、福利

北安分室 強力超短波ノ基礎

中沢分室 — 挺進部隊用爆破焼夷及行動資材、宣伝資材、憲兵資材並ニ

小川分室 — 簡易通信器材ノ研究及製造

登戸分室 資材ノ収集、上級官衙其ノ他トノ連絡及疎開後ノ残務整理

4. 人 員 所長以下861名ナリ

区 分	高等官	判任官	雇員及行員	計
武 官	124			
文 官	7	112	618	
計	131	112	618	861

5. 研究現況 研究現況ノ概要次ノ如シ

研究項目	研 究 ノ 現 況
強力超短波ノ基礎研究	超短波ノ強力発振集勢及之ガ効果ニ関シ基礎的ニ研究シ之ガ性能ノ向上ニ努メツツアリ
簡易通信器材ノ研究	制式通信機ノ整備隘路ヲ補フ為「ラヂオ」部品等ヲ以テ製造容易ナル通信器材ニ関シ研究シ且一部製造シツツアリ
爆破焼夷資材ノ研究	挺進部隊用ノ小型爆発缶袋入爆薬焼夷筒成型焼夷剤ニ関シ研究シ且一部製造シツツアリ
挺進部隊用行動資材ノ研究	挺進部隊ノ行動資材トシテ登攀渡渉夜行表示板、防水夜行時計、耐水「マッチ」ヲ研究シ、尚捕力資材トシテ携行口糧、精力剤及食糧自活方法ニ関シ研究シ且一部製造シツツアリ
写真資材ノ研究	簡易望遠写真撮影方法、複写装置、野戦写真処理用具ニ関シ研究シツツアリ
憲兵資材ノ研究	憲兵科学装置用指紋採取用具、現場検証器材、理化学鑑識器材ニ関シ研究シ且一部製造シツツアリ
宣伝資材ノ研究	傳單散布方法、携行放声装置、放声宣伝車ニ関シ研究シ且一部製造シツツアリ

6. 予 算 本年度配当予算 約650万円

7. 施 設

区 分	所 在 地	敷 地	主 要 建 物
本 部	長野県上伊那郡宮田村	ナ シ	借上施設ノミトス
北 安	長野県北安曇郡松川村	3万坪(借上)	研究室2棟約300坪
中 沢	長野県上伊那郡中沢村	ナ シ	借上施設ノミトス
小 川	兵庫県氷上郡小川村	ナ シ	借上施設ノミトス
登 戸	神奈川県川崎市生田	11万坪	約2千坪(残務整理ノ一部ヲ使用。 他ハ兵器行政本部ニ移管シタリ)
計		11万坪	約2千坪
	他ニ借上約3万坪		他ニ借上施設

備 考 空襲ニ対スル疎開トシテ前記各地区ニ移転セリ。各地区ハ何レモ民間施設ヲ一時借上タルモノニシテ各戸ニ分散シアルヲ以テ正確ナル坪数ハ困難ナリ。従来ノ駐屯地タル登戸ハ疎開後ノ残置土地建物アルモ其ノ半部ハ兵器行政本部ニ移管シ且下同部技術部並ニ調査部疎開シアリ

この資料によれば、長野県における登戸研究所の疎開先は、本部（上伊那郡宮田村）、北安分室（北安曇郡松川村）、中沢分室（旧中沢村、現駒ヶ根市中沢）の3カ所である。そのほか兵庫県の小川村（現丹波市）にも第1科の一部が疎開している。この資料には載せられていないが、第3科が福井県の武生に疎開していることも明らかになっている。

登戸研究所の任務は「超短波ノ基礎研究並ニ挺進部隊用資材、宣伝資材、憲兵資材ノ研究其ノ製造」となっている。ここにある挺進部隊とは、遊撃部隊（ゲリラ部隊）のことである。

本部および各分室の研究内容は、本部が「企画、庶務、人事、経理、医務、福利」、北安分室が「強力超短波ノ基礎」、中沢分室および小川分室が「挺進部隊用爆破焼夷及行動資材、宣伝資材、憲兵資材並ニ簡易通信機材ノ研究及製造」であり、元の本部のあった登戸は名称が登戸分室となり、内容は「資材ノ収集、上級官衙其ノ他トノ連絡及疎開後ノ残務整理」である。

研究概要は、①強力超短波ノ基礎研究、②簡易通信器材ノ研究、③爆破焼夷資材ノ研究、④挺進部隊用行動資材ノ研究、⑤写真資材ノ研究、⑥憲兵資材ノ研究、⑦宣伝資材ノ研究の7つの研究があげられている。

しかし、この研究概要には当たり障りのない研究しかあげてなく、第2科で研究されていた毒物や細菌などの研究、第3科の偽造紙幣の研究には触れられていない。これらの研究は国際法に抵触していることから、この資料はGHQへの提出用に作成されたものである可能性が高い。

疎開先の資料についてみると、多くの分室が借上施設のみであるのに対して、北安分室だけ

は2棟の研究施設を建設している。このことから北安分室は、他の分室に比べ重要な位置づけであったことがわかる。それは、松代に大本営が建設されたことと関係があったためと思われる。登戸研究所の長野県への疎開は、大本営の建設と時期を同じにしていることから、両者の関連をみることができる。

次の写真は、北安分室に建てられた研究施設の礎石跡である。



2. 伊那村工場疎開計画文書

昭和20年5月22日付の「伊那村工場建設業務分担計画（案）」と、5月24日付の「伊那村工場構成建物及坪数調書」と標題のついた2種類の文書がある。この文書は第2科の元所員の山田高嶺が所有していたもので、伊那村工場の責任者である伴繁雄技術少佐が計画を立案したものである。

山田は1926（大正15）年生まれ、旧制の前橋工業学校（現前橋工業高校）卒業と同時に登戸研究所へ配属となった。工業学校での専門が染物の発色に関するものであったため、登戸研究所では第2科の有川俊一技術大尉の研究室に入所した。

既に述べたように、登戸研究所関係の文書は敗戦時にすべて焼却処分になっており、これらの文書も本来なら現存しないものであるが、山田が昭和20年5月に召集されたため、そのまま荷物の中に紛れ、敗戦時の処分を免れたものである。

「伊那村工場建設業務分担計画（案）」の内容は、以下のとおりである。なお、標題は「伊那工場」となっているが、「伊那村工場」の間違いであると思われる。

ママ
伊那工場建設業務分担計画（案）

昭和20・5・22

伊那工場

1. 方針 敵前疎開ニ即応シ委員長ノ統率下全員全力ヲ画シ建設業務ニ邁進シ、6月末日ヲ以テ工事ノ大略ヲ完成シ速カニ研究整備ニ着手セントス

2. 建設業務任務分担表

任務係別	常駐箇所	業 務 分 担
庶 務 係	登 戸	庶務の事項全般（輸送係転出後ハ輸送業務全般）。 残務整理，伊那村トノ連絡，対外交渉，残留工員ノ指揮， 其他庶務の一般事項
	伊那村	労務ノ獲得，対外交渉，宿舍，給与，登戸トノ連絡， 内務取締，随伴家族ノ生活指導，其他庶務の一般事項
企画設計係	伊那村	建設工事ニ関スル企画及設計
現 場 係	伊那村	建設工事作業ノ指揮監督
輸 送 係	登 戸	貨物ノ梱包並ニ発送
	宮田村	貨物ノ受領，伊那村ヘノ輸送
格 納 係	伊那村	宮田常駐輸送係ヨリ貨物受領，整理格納並ニ解包
資 材 係	登 戸	建設工事研究並ニ必要ナル資材ノ獲得
	伊那村	同 右

3. 各分担業務担当者左ノ如シ

業 務	常駐箇所	業 務 分 担
庶 務 係	登 戸	○蓮池中尉，田中雇員
	伊那村	○小島中尉，菅野曹長，高橋雇員，月村雇員
企画設計係	伊那村	○山田見習士官，坂東技手，井野雇員
現 場 係	伊那村	火工班 ○伊藤中尉
		精機班 ○鈴木嘱託
輸 送 係	登 戸	○柳沢嘱託
	宮田村	○八反田中尉，坂口工員
格 納 係	伊那村	(柳沢嘱託)，松田技手
資 材 係	登 戸	○野村中尉
	伊那村	○長田中尉
備 考	○印ハ係長トス 柳沢嘱託ハ6月15日以後，格納係ヲ担当ス 工員ハ庶務係ニテ一括掌握シ，其ノ日々ノ分配ハ庶務係ニ於テ行フ	

4. 建設業務実施期間

自昭和20年5月25日 至昭和20年6月30日

5. 業務従事者ノ伊那村赴任期日

出 発 日	出 発 予 定 者
5月14日	×菅野曹長
5月16日	×八反田中尉，×高橋雇員，×池田工員，×坂口工員
5月18日	×山田見習士官
5月25日	松田技手，井野雇員，榎本工員，田巻工員，田中工員，米山工員， 山田工員

6月1日	小島中尉，伊藤中尉，鈴木嘱託，坂東技手，小川工員
6月3日	月村雇員
6月15日	柳沢嘱託，飯田工員，大沢工員，桎浦工員，平山工員，長谷川工員
7月1日	野村中尉，蓮池中尉
備考	×印出張者ハ25日付転属命令ヲ以テ転出セシム 家族ハ6月3日，集团的ニ転出セシムル予定

6. 7月1日以後ハ編成ヲ解キ一部ヲ以テ建設ヲ続行シ他ハ研究整備ニ着手ス

「計画案」には方針，任務分担表，業務担当者，実施期間，赴任期日の5項目と最後に研究整備の実施日が記されている。

方針は，「敵前疎開ニ即応シ委員長ノ統率下全員全力ヲ画シ建設業務ニ邁進シ」とあり，建設業務は「6月末日ヲ以テ工場ノ大略ヲ完成シ速カニ研究整備ニ着手」するように計画されている。登戸研究所のことが伊那村国民学校（現駒ヶ根市立東伊那小学校）の『学校日誌』に最初に出てくるのが昭和20年5月2日であることから，この「計画書」を作成するにあたり，事前に疎開先で確認をとっていることがわかる。

建設業務実施期間は，5月25日から6月30日の約1ヵ月で建設する予定であった。さらに，「7月1日以後ハ編成ヲ解キ一部ヲ以テ建設ヲ続行シ他ハ研究整備ニ着手ス」となっており，7月1日より研究を開始する予定であったことがわかる。また，所員は5月14日より7月1日まで8次にわたり疎開する計画で，家族は6月3日に集団で疎開する計画であった。

疎開のための係は6つで，輸送班が宮田村となっている以外，他の係の常駐箇所はすべて伊那村である。登戸研究所の荷物は通常赤穂駅（現駒ヶ根駅）を使用して輸送しているが，伊那村は宮田駅が最寄駅のため，そちらを使用したと思われる。

一方，「調書」によれば，伊那村に建設予定の建物は研究室4室，工場長室・庶務室・図書室を兼ねた庶務室1室，精密機械工場3室，付属建物3室，倉庫8庫となっており，その他宿舎として3カ所が記されている。主な疎開場所は，伊那村国民学校と栗林集会所である。

「調書」の内容は，以下のとおりである。

伊那村工場構成建物及坪数調書						
昭和20年5月24日						
区 分		室 名	場 所	坪 数	小計	合計
研 究 室	研究室	「ハ」研究室 「ホ」研究室 信管研究室 特殊資材研究室	伊那（村）国民学校	35		

区 分		室 名	場 所	坪 数	小計	合計
工 場 及 付 属 建 物	庶務室	工場長室	同 右			
		庶務室				
		図書室				
	精密機 械工場	設計室 機械室 仕上組立室	伊那村栗林集会所			
	火工場		善込山林内			
	揚水室		伊那（村）国民学校			
倉 庫	ガス室		同 右			
	庶務班倉庫（2庫） 工場倉庫（2庫） 火薬庫（2庫） 危険薬品庫 油脂庫					
	寿屋 共同宿舎（営内居住者宿舎） 集会所（高等官宿舎）					
	総 坪 数					
	備 考					

伊那村国民学校に建設予定の施設は、研究室、庶務室、揚水室、ガス室であり、栗林集会所には精密機械工場が建設予定であった。その他、善込山林内に火工場が予定されたことが記されているが、具体的な場所は記されていない。

施設の坪数は「ハ」研究室のみ35坪と記されている以外、どの施設にも坪数の記入がない。そのため、この「調書」は作成途中のものであると思われる。

「調書」に記されている研究室は、「ハ」研究室、「ホ」研究室、信管研究室、特殊資材研究室の4室である。「ハ」「ホ」は研究の秘匿名である。このうち、「ハ」研究室は、「ハハリユ」と呼ばれていた特殊爆弾（手榴弾）のことであることが、聞き取り調査の結果、明らかになったが、「ホ」については確認ができなかった。

長野県に登戸研究所が疎開してきた理由は、戦局の悪化により本土決戦を準備しなければならない時期に入り、登戸研究所には新しい役割が求められることになったと考えられる。

それは松代の大本営との関係で、大本営を守る役割のため本土決戦時用の特殊兵器開発を行う必要があったのではないかと、さらに長野県が軍事機関、軍需工場の一大疎開先になっていた事実も、登戸研究所の疎開先を長野県に決定した理由のひとつになっていたと思われる。

上伊那地区に隣接する諏訪地区には軍需工場の他にも中央气象台をはじめ大学の研究室が疎開している。これらの研究室の多くが物理関係の研究をしていたところである。

さらに兵器行政本部余丁町分室が、富士見町の富士見高校、本郷小学校、境小学校、茅野市

の金沢小学校、原村の原小学校に疎開している。この余丁町分室は、決戦兵器のひとつである熱線ホーミング爆弾の研究をしていたところであることが判明している。この爆弾は、敵艦の煙突などから出る熱線（赤外線）を感知し、爆弾に装着した自動操縦装置により熱線に向かって落下し命中させるというものである。

余丁町分室の設立は1944（昭和19）年5月で、この研究には無制限な研究費や資材の確保など、あらゆる便宜が与えられたが、当時の技術では実戦に使用できる物を作るだけの技術がなかったため完成しなかった。しかし敵の熱線を感知して自動操舵をとる方法は、戦後、対空ミサイルに応用されている。

上伊那地方に疎開した登戸研究所関係の施設は、本部（総務関係）が宮田村の真慶寺に、第2科が旧中沢村の中沢国民学校（現駒ヶ根市立中沢小学校）に、第2科の土方博少佐を中心とする毒物班が旧飯島村の飯島国民学校（現飯島町立飯島小学校）に、伴繁雄少佐を中心とする爆薬班が旧伊那村の伊那村国民学校（現駒ヶ根市立東伊那小学校）に疎開している。その他、赤穂国民学校（現駒ヶ根市立赤穂小学校）をはじめ国民学校や青年学校に疎開している。

北安曇地方に疎開した登戸研究所関係の施設は、松川村の松川国民学校（現松川村立松川小学校）に物理関係を担当する第1科の本部が疎開している。その他北安曇農学校（現池田工業高校）、旧会染村の会染国民学校（現池田町立会染小学校）等に疎開し、松川村の神戸原地区では電波兵器のための直径10メートルのパラボラアンテナを建設中に敗戦となり、未完成のまま終わっている。

3. 国民学校・青年学校における疎開資料

登戸研究所の疎開先は国民学校や青年学校である。このように疎開先の多くが学校となっているのは、1944（昭和19）年4月28日の「決戦非常措置要綱ニ基ク学校工場化実施要綱」によるものである。

長野県は1945（昭和20）年3月26日、軍事施設・軍需工場・研究機関の疎開受け入れのため中等学校・青年学校・国民学校の校舎転用について、6月18日には「学校校舎ノ転用ニ関スル件」を通達している。

最近、これらに関する資料が見つかった。中沢国民学校に隣接する中沢青年学校の「申達文書」綴りが発見され、中に登戸研究所関係の資料が複数存在していたのである。

(1) 中沢青年学校疎開文書

この申達文書は学校から県（上伊那地方事務所）への報告のためのものである。登戸研究所関係の書類は全部で6種類。最初の書類は昭和20年4月16日付けのもので、標題は「中沢青年

学校校舎転用計画書」, 校舎転用申請者は「陸軍登戸研究所中沢製造所」となっている。その文書の内容は表1のとおりである。

表1

(昭和20年) 4月16日	
長野県上伊那郡	
中沢青年学校校長 小松茂喜	
中沢青年学校校舎転用計画書	
1. 校舎転用申請者	陸軍登戸研究所中沢製造所
2. 校舎転用ノ目的及其ノ内容	特殊兵器製造資材倉庫並事務所トシテ転用
3. 校舎転用期間	自昭和20年4月 至昭和21年3月
4. 転用建物及設備	普通教室4 倉庫, 裁縫教室1 事務所
5. 転用校舎ニ収容スル作業人員	約40人(男)
6. 建物及設備使用料其他	
申請者ニ於テ負担スヘキ事項	軍規定ニヨル
7. 校舎転用ニ伴フ教育上ノ	
影響及支障ノ有無	教室授業停止
8. 其他	青年学校関係教室全部転用ニ付国民学校一部ヲ借用中ナリ

この文書によれば校舎転用の目的は「特殊兵器製造資材倉庫」と「事務所」となっており, 校舎転用期間は昭和20年4月から昭和21年3月の1年間, 授業も1年間の停止となっている。

このように疎開先が学校となっているのは, 昭和19年4月28日に政府が出した「決戦非常措置要綱ニ基ク学校工場化実施要綱」によるもので, これを受けて長野県は昭和20年3月26日, 軍事施設・軍需工場・研究機関の疎開受け入のため中等学校・青年学校・国民学校の校舎転用について<教第234号>をもって指示し, 6月18日には「学校々舎ノ転用ニ関スル件」を通達している。

内容は, 軍事施設・軍需工場・研究施設の疎開について, 校長や関係者は積極的かつ全面的に協力するように要請している。中等学校・青年学校の普通教室・特別教室・武道場・屋内体操場・講堂, 国民学校の高等科用教室・初等科用教室の2分の1・特別教室・武道場・屋内体操場・講堂は原則として軍用または軍需工場に転用することとなっていた。

表2の文書は7月6日付のもので, 標題は「青年学校生徒出席日通知ノ件」となっている。この文書は授業は1年間停止中であるが, 義務課程の生徒が7月に4回学校に出席することを登戸中沢製造所長に報告した内容である。

表 2

昭和20年 7 月 6 日		長野県上伊那郡	
		中沢青年学校長 小松茂喜	
登戸中沢製造所長殿			
青年学校生徒出席日通知ノ件			
7 月ニ於ケル青年学校生徒義務課程出席日左記ノ通り及報告候 記			
1. 始業時刻	午前 7 時50分		
	7 日	15日	21日 29日

表 3 の 8 月 1 日付の文書は、「学校校舎転用状況報告書」である。この文書には宛先がないが、内容からして県への報告書と思われる。内容は次のとおりである。

表 3

進捗別	使用者名	種 別	全 校		使 用		全校対使用歩合	
			室数	坪数	室数	坪数	室数歩合	坪数歩合
転用 完了	陸軍登戸研究所 中沢製造所	教 室	4	110	4	110	100%	100%
		裁縫室	1	44	1	44	〃	〃
		体操場						
		其 他						
		計	5	154	5	154	100%	100%
摘 要	職員室 銃器室 講堂等ハ従前ヨリ国民学校校舎ノ教室ヲ借用ス							

使用者は陸軍登戸研究所中沢製造所、使用施設は中沢青年学校校舎転用計画書のとおり教室が 4 教室110坪、裁縫室が 1 教室44坪となっている。その他、中沢国民学校の職員室・銃器室・講堂等が使用されていることが記されている。

戦時中の文書は以上の 3 点である。戦後、最初の文書は表 4 の 9 月21日付のもので「学校々舎転用ニ関スル件」と標題にある。これは上伊那地方事務所長が中沢青年学校長宛てに 9 月14 日付で発した<総第351号>に対する報告である。

表 4

昭和20年 9 月21日					
上伊那郡中沢青年学校長					
上伊那地方事務所長殿					
学校々舎転用ニ関スル件					
20総第351号 9 月14日付標記ノ件 左記ノ通り及報告候也					
記					
学校々舎転用撤去状況調査表					
学校名	会社工場名	撤 去 ノ 状 況			
		原形復旧ノ状況	機械器具移転先	未撤去坪数	未撤去ノ事由
中沢青年学校	陸軍 登戸研究所	5 教室使用中 2 教室復旧	ナシ 作業場並ニ事務 室トシテ使用ス	3 教室 84坪	器具類集積所 1 教室使用 事務所ニ 2 教室使用中

内容は「学校々舎転用撤去状況」で、原形復旧の状況は5教室使用中、復旧したのは2教室のみで、未撤去の教室は3教室84坪となっている。その内訳は器具類集積所として1教室使用、事務所として2教室となっている。

表5の文書は保存文書の中で最も重要なものである。昭和20年11月18日付の文書で、標題は「青年学校武器等接收セラレシ品名調査ニ関スル件」となっており、進駐軍により接收された武器等の品名調べである。

表 5

昭和20年11月18日					
上伊那郡中沢青年学校長					
上伊那地方事務所長殿					
青年学校武器等接收セラレシ品名調査ニ関スル件					
20総号外標記ノ件ニ関シ 左記ノ通り報告候也					
記					
青年学校武器等接收セラレシ品名調					
品 名	数 量	接收月日	届出ノモノナリヤ否ヤ	接收状況	
小銃	89	10月25日	届 出	米兵 3 名 通訳 1 名 警官 1 名 来校シ 本校器具室へ入り	
銃剣	80	全	〃		
軽機	4	全	〃		
擲弾筒	3	全	〃		
木銃	77	全	否		
幕的	15	全	否		

手榴弾	30	全	届 出	米兵自身ニテータ調べ 持出シ トラックニ積荷ス 態度極メテ平静ナリキ 有難ウト言葉ヲ残シ 去ル
手旗	100	全	否	
十字鋏	2	全	〃	
円ヒ	2	全	〃	
遊動的	5	全	〃	
保心筒	17	全	〃	
竹刀	5	全	〃	
雑品		全	〃	

GHQが中沢国民学校に来校したことが、『学校日誌』の10月25日に「米進駐軍2名来校，青年学校ノ銃・剣其他，国民学校ノ木剣ヲ持去ル」という内容で記述されている。

中沢青年学校の文書でも接収年月日が10月25日なので，中沢国民学校と中沢青年学校は同じ日に接収されたことがわかる。この進駐軍は，日系2世を中心としたG2の傘下にある「CIC441支隊」の隊員であると思われる。写真は中沢国民学校をGHQが接収に来たときのもので，中央が第2科の科長である山田桜大佐である。



内容では，銃剣・手榴弾・擲弾筒などの武器類は事前に届けていることがわかる。このなかで注目する武器は擲弾筒が3筒あったということである。擲弾筒は手榴弾を遠くまで飛ばす道具である。この文書を見ても，手榴弾を30本所有していたことからある程度推測できる。これらの手榴弾は国民学校の高等科2年生が工場で製造していたものである。

表6は昭和21年1月23日付の文書で，標題は「軍部私下物品報告ノ件」となっている。

表 6

昭和21年 1 月23日

上伊那郡中沢青年学校長

上伊那地方事務所長殿

軍部払下物品報告ノ件

登戸研究所中沢製造所ヨリ当青年学校ニ払下ノ物品

左記ノ通り報告候也

記

更衣類	1	机	1	作業台	3
丸椅子	10	六尺腰掛	10	衝立	2
前置棚	4	紙屑箱	4	椅子	6

中沢国民学校の『学校日誌』にも、昭和20年 8 月19日の記述に「登戸研究所ヨリ文房具ノ寄贈アリ」という内容の文があり、多くの器材を学校等に寄贈したことが当時の関係者からの証言でも明らかになっている。

内容はほとんどが備品関係の物で、実験器具類などの記述はない。それは中沢青年学校が資材置場と事務所として使用されたためであると思われる。

(2) 飯島国民学校疎開文書

中沢青年学校と同様の文書が飯島小学校でも発見された。飯島小学校には中沢小学校にあった当時の『学校日誌』がなく、登戸研究所のことを知る手がかりがなかったのである。しかし幸い、『飯島町学校教育百年誌』を作成するための資料が残されており、その中に登戸研究所関係のものがまとまって綴られていた。基本的には、中沢青年学校の資料と重複するものが多いが、それらの資料から重要と思われる文書を見ていきたい。

当時の飯島国民学校の酒井宇宙治校長が長野県知事に提出した、登戸研究所のために校舎を転用するという文書がある。文書を提出した時期は明らかではないが、転用期間として「自昭和20年 4 月 至昭和21年 3 月」とあることから、中沢青年学校と同様昭和20年の 3 月か 4 月頃のものであると思われる。以下は、その一部である。

当校校舎転用ニツキ申込有之候条左記事項具申候也	
1. 校舎転用申請者	陸軍登戸研究所中沢製造所
2. 校舎転用ノ目的及ソノ用途	特殊兵器研究ニ関スル重要資材倉庫並 事務所トシテ転用

3. 校舎転用ノ期間 自昭和20年4月 至昭和21年3月

4. 転用部分建物及其ノ延建坪数 別紙ノ通り

右ニ対スル意見 本転用ニ依リ教育上特別ノ支障ヲ来サズ貸与可能ト認ム

この文書によれば、校舎転用の申請者は「陸軍登戸研究所中沢製造所」、校舎転用の目的および用途は特殊兵器研究に関する重要資材倉庫と事務所となっており、中沢青年学校の場合と同様である。転用期間も中沢青年学校と同様に、昭和20年4月から昭和21年3月となっている。

この具申に対して、同年5月19日付をもって長野県内政部長より学校長宛に次のような指示がなされている。

学校校舎転用ニ関スル件

サキニ貴校舎一部ヲ陸軍登戸研究所中沢製造所ノ倉庫及事務室ニ転用ノ件ニ関シ
具申相成候処右転用ノ儀ハ差支無之候ニ付管理者並ニ申請者ト細部協議ノ上
3月26日教234号学校々舎転用ニ関スル件通牒ニ依リ学校々舎転用実施報告書ヲ
遅滞ナク提出相成度

追而校舎転用ニ当リテハ左記事項御留意ノ上実施相成度

記

1. 転用建物ノ決定ニ当リテハ作業ノ内容及備付器機ノ種類等ニ充分意ヲ用ヒ転用ノ為学校全体ノ教育上大ナル障害ヲ及スガ如キコトナキ様厳ニ注意スルコト著シキ騒音ヲ伴フ作業ハ他ノ校舎内ニ於ケル児童ノ教育ニ影響勘カラザルニ付之ヲ避クルコト
2. 現下ノ状勢ニ鑑ミ雨天体操場ノ転用ハ之ヲ認ムル方針ナルコト必要止ムヲ得ズシテ2部教授ヲ実施スル場合ハ初等科低学年ニ限り之ヲ認ムルモ之ガ実施ノ場合ハ土地ノ状況其他充分考慮スルコト
3. 作業内容ニ付テハ申請者ノ工場ヲ実地ニ参観スル等ノ方法ニ依リ充分知悉シ置クコト
4. 原則トシテ校舎ハ工員ノ寄宿舍ニハ転用セザルコト

このように、飯島国民学校および飯島青年学校の校舎が登戸研究所の研究室・製造所に転用された。登戸研究所のために転用された教室は、7教室140坪である。その他倉庫60坪も資材置場として転用されている。なお、昭和20年6月26日付の報告書に基づきまとめると、飯島国民学校の校舎転用状況は次のとおりである。

1. 陸軍登戸研究所中沢製造所, 研究室, 兵器製造, 事務室, 倉庫

200坪

2. 東京文理科大学（現筑波大学）研究室	25坪
3. 浅野重工業 研究室及事務室	35坪
4. 各務原陸軍航空 浜松航空研究所研究室（田切分教場裁縫室契約済）	35坪
5. 東京内海工場研究室（皇国3013工場）（田切分教場予定）	25坪

同年8月には、登戸研究所はさらに南校舎理科準備室、実験室など3教室60坪の使用をはじめ、田切分教場の雨天体操場35坪、本郷分教場3教室の使用を申請し、学校はこれを許可している。

(3) 赤穂国民学校疎開文書

赤穂国民学校については、昭和20年5月1日の『学校日誌』に「登戸工場赤穂へモ移り、第5体錬場ノ床板ヲハガシ工場ニ改造ヲハジメル」という記述があり、5月9日の『職員会議録』の記録には学校内工場の設置について、次のように記されている。

学校校舎ノ工場設置ニツイテ	
使用校舎	
登戸工場	第1校舎、第5体錬場、理科校舎
帝国通信	北校舎2階
海軍衣料廠	女学校校舎
工場出勤生徒	
団体訓練、勤労意欲ノ助長、師弟同行、陣頭ニ立ッテ工場モ自分ノ教室ト心得、手持チ時間ハ勉学、自学自習ノ体ヲ十分ナス	

登戸研究所に貸与した校舎は第1校舎、第5体錬場、理科校舎となっている。ここには記入されていないが赤穂青年学校の校舎も使用されていたことが判明している。

敗戦と同時に生徒たちの動員も中止の予定であったが、8月17日の『学校日誌』には登戸工場と帝国通信への動員が記録されている。実際に各工場への動員が中止となり解散式が行われたのは、登戸工場が8月24日、帝国通信が8月27日である。

今回紹介した文書により、上伊那地方における疎開の経過がある程度明らかになった。登戸研究所の資料が「特殊研究処理要領」により処分されたことを考えると、これらの資料が現存していることは奇跡に近い。

なお、今回使用した資料の数字は原本では漢数字であるが、本稿では算用数字を使用している。

〔木下健蔵氏プロフィール〕

1980年代より、長野県赤穂高等学校教諭時代に同校の平和ゼミナール顧問として、高校生たちと共に長野県に疎開した登戸研究所の実態について研究を始める。2016年3月まで長野県辰野高等学校教諭。主著に『消された秘密戦研究所』（信濃毎日新聞社、1994年）。

Materials on the Evacuation of the Imperial Japanese Army Noborito Laboratory to Nagano Prefecture: The Kami Ina Area (Ina Valley)

KINOSHITA Kenzo

Former Teacher, Nagano Prefecture Tatsuno High School

Summary

All documents from the Imperial Japanese Army Noborito Laboratory were disposed of based on “Points Regarding the Handling of Special Research” (Tokushu kenkyū shori yōryō), which was circulated by the Army Ministry’s Military Affairs Bureau. Due to this notification, at the laboratory’s evacuation sites in Nagano Prefecture, many documents related to it were incinerated over the course of one week at Shinkei-ji Temple (Miyada Village; where headquarters were located), and the Nakazawa Kokumin School (where its research division was located; currently Komagane Municipal Nakazawa Elementary School).

While due to their disposal at the end of the war almost no materials related to the Imperial Japanese Army Noborito Laboratory currently exist, one does remain: a document dated August 31st, 1945 created by the Army Weapons Administrative Headquarters. It describes the laboratory’s mission, evacuation site, composition, personnel, research, and so on. However, its major research on biochemical weapons, counterfeit currency, and so on is nowhere to be found.

There are two types of evacuation plan documents created by Technician Major Shigeo Ban. They both are about the laboratory’s manufacturing plant, which had been evacuated to Ina Village (today Higashi Ina, Komagane City), and entitled “Ina Village Plant Construction Work Allocation Plan” and “Report on Ina Village Plant Buildings and Area Measurements.” Based on the plan that in June 1945 construction would be completed and research would begin, they describe construction responsibilities, the people in charge, dates of departure to evacuation sites, and so on.

Most of the evacuation sites of the laboratory were schools. Many of them had been used as munitions factories. Recently, evacuation documents from Nakazawa Seinen School and Iijima Kokumin School were discovered, making the situation during evacuation clear. The laboratory’s Nakazawa Plant used a school from April 1945 to March 1946. During this time students’ classes were suspended, and they were mobilized to work in the laboratory’s

plants and such. A document dated October 25th states that after the end of the war the GHQ visited evacuation sites and seized weapons and the like. This made clear the time when the GHQ came to the Kami Ina area.

Keywords : The Imperial Japanese Army Noborito Laboratory's Evacuation to Nagano Prefecture, Imperial Japanese Army Noborito Laboratory Ina Village Plant Evacuation Document, Imperial Japanese Army Noborito Laboratory Nakazawa Seinen Gakkou Evacuation Document, Imperial Japanese Army Noborito Laboratory Iijima Kokumin Gakkou (National Elementary School) Evacuation Document, Points Regarding the Handling of Special Research (Tokushu kenkyū shori yōryō)

第6回企画展「NOBORITO 1945 ―登戸研究所 70年前の真実―」記録

展示 第一期：8月15日までの登戸研究所 風船爆弾作戦の遂行と終結

塚本百合子

明治大学平和教育登戸研究所資料館特別嘱託学芸員

はじめに

本稿は2015年に開催した第6回企画展第一期のうち、ふ号（風船爆弾）作戦に関する展示内容を基に構成する。

2014年度の企画展では、「紙」からふ号作戦の実態を解明したが、本稿では過去の気象データ、関係者の証言・手記、当時の資料を基に作戦が軌道に乗ってからの1945年1～4月、各月毎に作戦遂行の実態を解明していく。このようにふ号作戦を時系列で捉えることにより、なぜ4月をもって作戦は中止されなければならなかったのかを本稿では解明し、日本軍の本土決戦準備が本格的に進められるようになるのは、ふ号作戦の終結も関係していた点を示唆する。

1. 風船爆弾と気象

本来兵器とは、気象条件に左右されずにいかに最大の効果が出せるかという点も考慮にいられて研究開発が行われるものである。しかし、風船爆弾はこの点において他の兵器とは大きく異なっていた。風船爆弾は、地上気象、高層気象状況に戦果を大きく左右される兵器であり、作戦を遂行するにあたり、気象状況を把握することは必須だった。そのため、まずは風船爆弾と気象について見ていきたい。

(1) 放球の判断

気象状況は刻々と変化するため、放球可否を毎日判断しなければならなかった。そのため、風船爆弾放球基地（気球連隊）の本部である大津基地（茨城県）に気象隊を設置し、以下の点をもって放球可否を日々判断した。

① 北太平洋上の推測高層気象図

陸軍は中央气象台とは別に独自に高層気象定時観測を行っており、高層気象観測のノウハウとデータを蓄積していた。また、陸軍気象部では、飛行場や朝鮮、満州、中国、東南アジアの各部隊に設置した気象隊の定時観測データを集めていた。こうやって集めたデータを基に、同部第二課⁽¹⁾では、風船爆弾放球期間中毎日、北太平洋上の推測高層気象図を作成し、大津基地に電話報告をしていた⁽²⁾。

② 地上気象

放球予定時刻より6時間前の天気図から放球可否を判断し、低気圧が日本にごく接近しているか通過直後はできるだけ放球を見送るようにし、高気圧通過後は放球に最適だと判断した⁽³⁾。また、地上風が強い日も放球には適さなかった。なぜならば、放球準備作業が困難であり、爆発事故が起こる可能性があるからである。しかし、ふ号作戦が遂行された時期は、晴天時は強い地上風を伴うことが多く、午後になるにつれ風が強まっていったため、作戦初期は風が弱まる午前5～7時に限定して打ち上げていた⁽⁴⁾。

(2) 放球期間の気象状況

それでは、放球期間166日間あるいは145日間⁽⁵⁾のうち何日間放球が可能だったのか、気象庁が公開している過去の気象データ⁽⁶⁾より推測する。風船爆弾の放球は、勿来（福島県）、大津（茨城県）、一宮（千葉県）にて行われたため、各地点の測候を担当していた小名浜測候所（福島県）・水戸測候所（茨城県）・銚子測候所（千葉県）の気象データを基にする。

まず、放球期間中の降水量は過去10年間の平均に対して多かったか、少なかったかを探るため、1934～1943年の各地点の平均降水量と比較する。

		11月	12月	1月	2月	3月	4月
小名浜	放球期間中の月間降水量 (雨天日数)	132.0 (11)	12.2 (4)	7.5 (8)	66.1 (7)	104.0 (11)	75.5 (9)
	1934～43年の月間平均降水量 (平均雨天日数)	76.5 (9)	41.9 (6)	38.8 (6)	79.3 (8)	99.7 (11)	135.0 (13)
水戸	放球期間中の月間降水量 (雨天日数)	107.1 (14)	12.7 (6)	7.8 (3)	66.3 (8)	78.1 (12)	80.4 (11)
	1934～43年の月間平均降水量 (平均雨天日数)	71.8 (11)	39.0 (7)	38.5 (6)	67.5 (9)	81.7 (12)	134.4 (13)
銚子	放球期間中の月間降水量 (雨天日数)	239.9 (15)	27.8 (7)	15.8 (12)	100.3 (9)	122.6 (15)	103.3 (9)
	1934～43年の月間平均降水量 (平均雨天日数)	110.8 (13)	86.3 (11)	61.6 (9)	117.3 (12)	105.9 (15)	131.3 (14)

表1 月間降水量 (mm) および雨天日数の放球期間中と1934～1943年平均の比較

気象庁 Web サイト「過去の気象データ」(<http://www.data.jma.go.jp/obd/stats/etrn/>)より作成（最終閲覧日2016年9月7日）。放球期間は11月3日～4月20日、そのうち11/4～6は事故のため放球は行われなかったが、データの整合性をとるため、1934年～1943年の11月1日～4月30日と1944年11月1日～1945年4月30日の月間合計降水量および雨天日数を比較する。また、記録に残っている日間合計降水量が0となっている場合は雨天日数に含んでいない。

放球が開始された11月は過去10年間に比べ降水量が多かったことがわかる。特に放球初日の11月3日は、一日の降水量が小名浜34.9mm、水戸41.2mm、銚子84.4mmだった⁽⁷⁾。

次に11月3日の時間ごとの降水量を見てみる。

計測時間	23－6時	7－15時	15－22時	23－6時			最大降水量 (1時間)	最大降水量 (10分間)
小名浜	－	7.4	27.5	6.2			欠測	欠測
計測時間	23－6時	7－12時	13－14時	15－18時	19－22時	23－6時	最大降水量 (1時間)	最大降水量 (10分間)
水戸	－	1.9	2.4	14.8	22.1	0.5	10.2	2.1
計測時間	1－6時	7－12時	13－14時	15－18時	19－22時	23－24時	最大降水量 (1時間)	最大降水量 (10分間)
銚子	0.9	10.2	3.7	22.6	41.0	6.0	17.1	5.0

表2 11月3日の時間ごとの降水量 (mm)

気象庁 Web サイト「過去の気象データ」(<http://www.data.jma.go.jp/obd/stats/etrn/>) より作成 (最終閲覧日2016年9月7日)。

当日は、午前3時から風船爆弾放球の準備を進め、午前5時より放球を開始し⁽⁸⁾、前項に挙げたように、午前7時に放球を終了したので、雨が降り出したのは放球後だと思われるが、この日は大津基地で死者3名を出す事故も起きており、関係者はこの作戦の行く先に不安を抱えたのではないだろうか。

しかし、過去10年間の平均値より降水量が多かった11月を除けば、12～1月は降水量が少なく、2～4月は同程度の降水量だったので、想定外に放球が滞ったという状況はなさそうである。

では、実際に何日間放球が可能だったのか。次に日々の降水量と風速の観測データを分析する。

まずは日々の降水量を分析する。どの程度の降水量で放球を中止したかを示す資料は見つからない。そのため、気象庁が防災気象情報のため定義づけている雨の強さに関する用語⁽⁹⁾より、10mm/h以上の降水量があった場合は放球が見送られたと本稿では仮定する。なお、筆者は降水量が10mm/h以上あった日に、傘を使用せずゴアテックスのレインウェアを着用して外に立つ実験を行ったところ、雨で視野は狭く、30分程度で雨水が浸透してきた⁽¹⁰⁾。そのため、降水量が10mm/hある場合は作業は困難だと感じた。

放球期間中に10mm/h以上の降水量があった日は、以下の通りである。

小名浜	該当なし
水戸	11月3日
銚子	11月3日、3月24日、3月30日

表3 各放球地点で放球期間中の降水量が10mm/h以上あった日

気象庁 Web サイト「過去の気象データ」(<http://www.data.jma.go.jp/obd/stats/etrn/>) より作成 (最終閲覧日2016年9月7日)。大津基地は11月3日～4月20日まで放球したため、4月20日までの水戸の観測データを使用。勿来基地と一宮基地は11月3日～3月31日まで放球したと仮定し、3月31日までの小名浜と銚子の観測データを使用。なお、3地点いずれもが放球を中止した11月4日～6日は除外。

次に日々の風速観測データを示す。放球期間中に、風速を観測していたのは銚子測候所のみのため、一宮基地に限ったものではあるが、「やや強い風」と定義づけられた平均風速10m/s以上、瞬間風速20m/s以上⁽¹¹⁾あった日は以下の通り。

	11/3	11/16	11/28	12/13	2/2	2/22	2/26	3/4	4/4
平均風速 (m/s)	8.3	10.7	11.9	9.6	10.6	9.9	10.6	12.3	10.8
最大瞬間風速 (m/s)	32.2	18.7	25	21.4	21.8	21.2	26.4	21.6	17.5
最大瞬間風速風向	北東	北東	北北東	北東	北北西	北	北東	北西	北東

表4 銚子で放球期間中平均風速10m/s以上、最大瞬間風速20m/s以上観測された日

気象庁Webサイト「過去の気象データ」(<http://www.data.jma.go.jp/obd/stats/etrn/>)より作成（最終閲覧日2016年9月7日）。

放球期間中で風速の観測データがあるのは銚子のみである。

以上、放球期間中の降水量と風速観測データより、一宮では145日間で134日、降水量の観測データにより、大津では166日間で165日、勿来では145日間で145日放球が行われたと考えられる。

(3) 放球終了と気象

さて、高田貞治氏が翻訳した「アメリカから見た日本の風船爆弾 —Coast Artillery Journal誌より—」（『自然』Vol. 6, No. 4, 中央公論社, 1951年）には「最後の気球が放たれたのは1945年4月20日であった」とある。風船爆弾とともに放球した観測専用気球搭載のラジオゾンデの無線をアメリカ側が受信した結果に拠る。では、当日の水戸の気象状況はどうだったのか。以下に当日の時間ごとの降水量を示す。

23－6時	7－12時	13－14時	15－18時	19－22時	23－6時	1時間 最大降水量	10分間 最大降水量
23.9	0.1		1.8	7.5		4.1	1.2

表5 水戸の1945年4月20日の時間ごとの降水量 (mm)

気象庁Webサイト「過去の気象データ」(<http://www.data.jma.go.jp/obd/stats/etrn/>)より作成（最終閲覧日2016年9月7日）。

明け方まで雨が降り続けていたので、早朝の放球は見送られた可能性が高い。しかし、23時～翌6時には降雨が観測されていないため、4月20日深夜の放球をもってふ号作戦は終了したと言える。

2. 風船爆弾1945

前章では気象状況からふ号作戦がどのように遂行されたかを考察したが、本章ではふ号作戦関係者の証言と記録を基に1945（昭和20）年の作戦終了までの経緯を分析する。

(1) 1945年1月 ―現場のようす

作戦が開始されて二か月後の1月，放球地，気球製造地そして登戸研究所は何をしていたのか，それぞれの現場から見ていく。

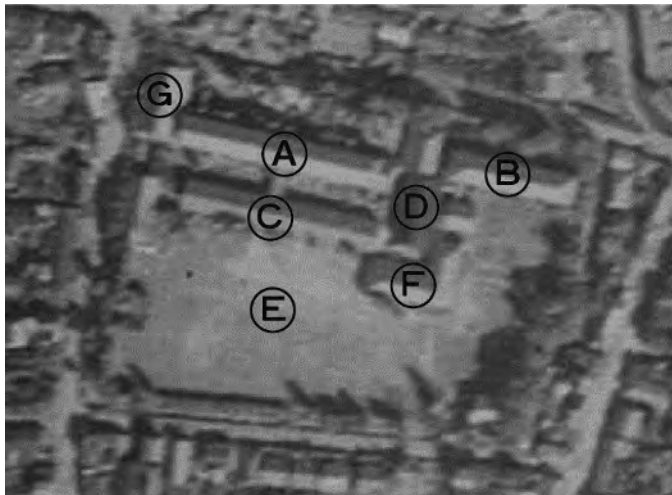
① 放球基地

作戦当初は一ヶ月間に700発程度の放球数だったが，1月になると，一ヶ月間に2000発放球できるようになった⁽¹²⁾。

なぜ放球開始後二ヶ月で放球数が倍以上になったのか。その要因として，放球を開始した当初は充分ではなかった水素補給量が安定してきた点，昇騰装置の考案や防風設備が整備された点⁽¹³⁾，照明が設置され夜間も放球が可能になった点⁽¹⁴⁾が挙げられる。昇騰装置は，登戸研究所第一科の武田照彦（陸軍少佐）チームが考案した。これによって，それまでは1球を打ち上げるのに30名で約40分要していたが，時間・要員数ともに半減し⁽¹⁵⁾，さらに風速2 m/s程度の地上風であれば放球できるようになった⁽¹⁶⁾。

② 気球製造現場

1944年夏頃から，多くの女学生が動員され，日本各地で風船爆弾の製造が始まった。中には，彼女たち自身が通う学校が工場となり，風船爆弾製造を行う女学生もいた。その一例として，群馬県立高崎高等女学校（以下高崎高女）で風船爆弾製造を行っていた牛込やす子氏，川野堂子氏，内藤ちゑ子氏，村田喜代子氏の証言を以下に紹介する⁽¹⁷⁾。



第1図 高崎高等女学校航空写真
国土地理院所蔵，1947年10月29日米軍撮影。

A本校舎，B東校舎

いずれかに東京第二陸軍造兵廠岩鼻火薬製造所（以下岩鼻火薬製造所）員が詰めていた。

C南校舎

1944年4月に学校工場用に新設。4教室で火薬製造が行われていた⁽¹⁸⁾。

D体育館

「連絡係」の同校女学生が「軍人」と打ち合わせを行っていた。

E校庭

気球原紙貼り合わせ用作業台が並び，原紙貼り合わせと乾燥が同校女学生によって行われていた。

F炊事場

コンニャク糊を作っていた。できあがったものはバケツに入れて校庭まで運ばれてきた。

G講堂

8月14日の空襲で大破⁽¹⁹⁾。

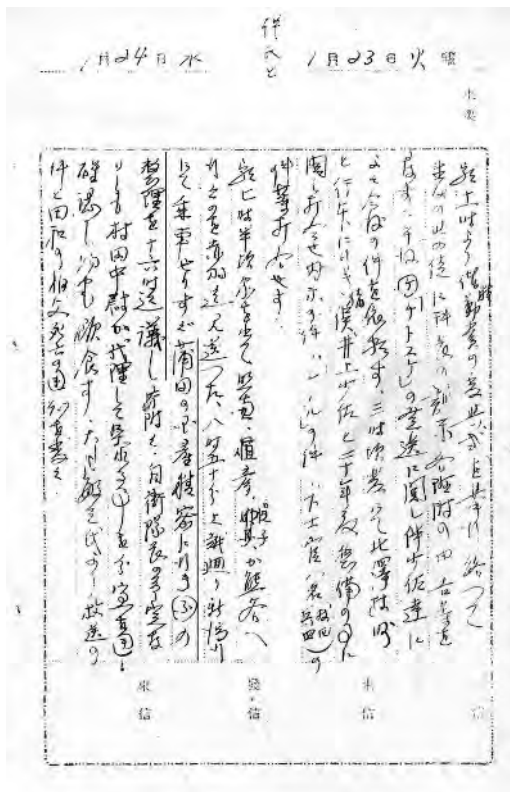
C南校舎で火薬製造が行われていたのは，同校が岩鼻火薬製造所の分工場だったからだ⁽²⁰⁾。

東京第二陸軍造兵廠は風船爆弾の火薬、火具類製造のすべてを請け負っていたと風船爆弾の研究主任だった草場季喜（陸軍少将）は自身の論文で述べている⁽²¹⁾ ため、分工場だった高崎高女は気球原紙の貼り合わせ以外にも、火薬製造を請け負っていたと推測する。

具体的にどのようなものだったか、高崎高女卒業生が次のように語っている⁽²²⁾。

- ・直径10cm程度のドーナツ型の布地を縫い合わせ、天秤で正確に測った火薬をその中に詰め、詰め口を綴じ、綴目はシンナー系の接着剤を塗布した。
- ・火薬は岩鼻火薬製造所より毎日納入され、一日の最後に出来上がったものはまとめてトラックで運ばれていった。
- ・火薬は顆粒だった。

それではこの火薬袋は何に使用されたのか。この点について、当初筆者は風船爆弾気球自爆用火薬袋だと推測し、2015年度企画展でそのように紹介した。しかし、陸軍兵器行政本部が作成した気球製造マニュアル⁽²³⁾、及び米軍の風船爆弾調査資料を用いたMikesh論文⁽²⁴⁾で提示されている気球自爆用火薬袋は円筒形であり、ドーナツ型とは言い難いフォルムである。そのため、高崎高等女学校で気球自爆用火薬袋を製造していたとは断言できず、その用途については現時点では不明である。しかし、1月の冷たい風が吹く屋外で冷たい糊を使用した貼り合わせ作業、危険と隣合わせである火薬製造作業は、14～16歳の少女たちの手によってすべて行われていた事実には変わりはない。



第2図 1945年1月24日付「大月日誌」
大月昌彦氏寄贈。傍線部「蒲田の国産機密に行き
㊦の整理を十六時迄議し」とある。

③ 登戸研究所のようす

この頃の登戸研究所の状況はどうだったのか。登戸研究所で庶務を担当していた大月陸雄（陸軍技術大尉）の1月24日付日記によると、大月が蒲田の国産機密へ「㊦」＝風船爆弾の調整に出向いていることがわかる（第2図傍線部参照）。

国産機密とは、蒲田にある点から、風船爆弾製造の主要会社である国産科学工業株式会社のことだと思われる。

また、第二科で特殊カメラの研究開発に携わっていた細川陽一郎（陸軍技術大尉）も、自身の研究とは異なる風船爆弾に駆り出され、水素メーターを借用するため名古屋に行ったと証言している⁽²⁵⁾。他所に融通を利かせてもらう場合には、将校クラス未満では困難なため、細川も駆り出されたのであろう。



第3図 細川陽一郎（陸軍技術大尉）
細川陽一郎蔵。2列目右から2番目が細川。

このような事実から、登戸研究所では風船爆弾の研究開発だけではなく、作戦を全面バックアップする態勢を整えていたことが伺える。

(2) 1945年2月 一風船爆弾戦果の報道

一ヶ月間に2500発も放球可能になった2月⁽²⁶⁾。その頃大本営では、1945年秋頃の米軍日本本土上陸に備える本土決戦準備を具体的に定め、沖縄をはじめとする本土以外の全ての作戦は、本土決戦準備のための時間稼ぎと位置付ける。また、物資だけではなく兵力も不足する中、大本営は、本土決戦のために50個師団急造を決定する。このような状況下、唯一の米国本土攻撃手段であった風船爆弾の戦果が待たれた。

風船爆弾の飛行経路と到達状況確認のため、日本軍はラジオゾンデを搭載した観測専用気球を風船爆弾とともに放球していたが、米大陸西海岸付近までは発信される電波を確認できても⁽²⁷⁾、風船爆弾到達は推測の域を出ることはなかった。これに加え、米国は風船爆弾に関して報道管制を敷き、日本に一切の情報が入らないようにしていたこともあり、風船爆弾の具体的な戦果は一向に判明しなかった。

こうした状況下で関係者や軍中枢部にふ号

作戦は失敗ではないかと焦りが見え始めたころ、2月に米国側のニュースが中国を通じて日本に伝えられる。これについては新聞各紙が1面で報じた⁽²⁸⁾。そのうちの一つ、1945年2月18日付『朝日新聞』とともに、報道を知った関係者たちの反応を以下見てみる。

① 1945年2月18日付『朝日新聞』報道

以下、『朝日新聞』紙面を基に著者書き起こし。

「風船爆弾」アメリカ本土を脅かす
日本製 時速二百哩で襲撃

外電の報ずるところによれば、昨秋以来米國各地に頻々と原因不明の爆発あるひは火災が発生、これに関聯し米國民衆の間に各種の臆測が行はれ、不安と動搖を醸してゐたが、米國聯邦檢察當局調査の結果、日本の氣球が米本土内に落下し、これがその原



第4図 1945年2月18日付『朝日新聞』紙面

朝日新聞社「聞蔵Ⅱビジュアル・フォーライブラリー」より。果、日本の氣球が米本土内に落下し、これがその原

因で判明したと報じてゐる、このわが新兵器の戦果に関しては米當局が緘口令を布いてゐるため詳細には知り得ないが、敵が故意に沈黙を守つてゐること自体がこれを裏書するものにほかならない、わが科學陣は日夜前線將兵に劣らぬ固き決意をもつて新兵器の創案と製作に懸命の努力をなしてをり、先般議會において八木技術院總裁が言明したごとく戦局の進展にともなひ今後眞に敵陣營を困惑せしめるやうな新兵器の出現が期待される

【上海十七日發同盟】ワシントンより當地に達した情報によれば、アメリカ聯邦檢察局は最近次の通り發表した

日本文字の記された巨大な氣球が去る十二月十一日モンタナ州カリスペル附近の山嶽地帯に落下してゐるのが發見された、氣球は良質の紙製で迷彩が施されその直径三十三フィート、容積一万八千立方フィート以上で八百ポンドの搭載能力があると推定される、氣球の側面には自動的に氣球を爆破するためか爆薬が装置されてあつた

一方カリスペル來電によれば同地の檢察局當局は右につき次の通り言明したといはれる

氣球は自由氣球だが決して天候観測用のものでない、結びつけられてあつた爆薬はアルミニウムと酸化物からできた六吋爆弾であつた、この種氣球は順風に乘れば時速二百哩の高速にも達しよう

死傷五百突破 十二月廿日迄

【廣東十六日發同盟】昨年十月以來モンタナ州、ワイオミング州、ネブラスカ州、アイダホ州等々の民衆の間では夜空を東へ相當の速度で浮動していく無氣味な怪物を目撃した者も多数あり、人心は恟々たるものがあつたが然も米當局はその後も依然として右に関する一切の報道および批判を嚴禁し、單に桑港戦時情報局が十二月十一日モンタナ州カリスペン市附近に日本文字の記された焼夷彈を裝備せる大型氣球の残骸一個を発見した、恐らく右氣球の完全なる姿においては数人を搭載し得る船体を有せることを示唆してゐる、當局筋ではこの氣球が合衆國內に破壊行爲者を降下させるために使用されたのであらうといふ臆測に対しては批判を加へることを拒否したと報じたに過ぎない、だが日毎に高まり行く太平洋岸地區の人心動搖にさすがの米當局も事実を隠し切れず、最近に至つて米國聯邦檢察局長官の名を以て

敵は我が第一線陣地に対すると同様に、我が國內戦線に対しても反撃を加へ得るに至つた、最近破壊工作使用せらるゝ可能性ある日本の氣球が米本土内に落下した、我々は警戒を怠らず敵のかゝる新攻撃に対し万般の準備をしなければならない

と發表した、米側は損害程度の公表を避けてゐるもののワシントン及びモンタナよりの電報によれば大氣球爆弾による損害は十二月二十日までに既に死傷者五百名を突破したといはれる

巧妙な仕組

タイム誌報道

【ストックホルム特電十六日發】一月一日附の米誌タイムは日本の風船爆弾が飛來し始めた當時の米國のあわて振りを左のごとく傳えてゐる

昨年十二月も始めの頃、米太平洋岸西北部なるワシントン州の北部地帯上空を音もなく流れてゐた風船は、鉄兜型で直径三十三フィート半ばかり「日の丸」が目も鮮やかにつけられ、これにさげられた長さ七十フィートばかりの導火線の先には紙製の焼夷彈袋がつけられてをり物にあたればこれが發火、風船もろ共周辺を焼

くといふ巧妙な仕組みになつてゐた、この風船は米國西北部を音もなく東へ東へと流れ來つて遂に太平洋岸から四百七十五キロの奥、モンタナ州カリスペル（人口六千余）附近の丘に落下した

「何だか變なものが落ちてゐる」と二人の木樵がこれを発見報告するとすぐさまエフ・ビー・アイ（聯邦探偵局）と陸軍航空隊からは調査員が派遣されこの風船がどこからどうして飛んで來たかを調査したが、これは水素ガスで浮揚されるもので極めて巧妙、有効的に作成されたものだといふことが判明した

而も風船に印刷された文字からこれが昨年十月以前に日本の工場で作成されたということも判つたが、一昨年一九四二年に太平洋岸に接近した日本の潜水艦から飛び立つた日本の小型水上機が焼夷弾攻撃で大山火事を起したことがあつたがこの風船もおそらく沿岸沖の日本潜水艦から揚げられたものと思はれてゐる、風船爆弾は発火と共に風船まで空中で燃えてしまふことになつてゐるので風船は人の知らぬ間に米國西北部を通つてあちこちに落下してゐる模様である、従つて聯邦探偵局や航空隊の氣球専門家は目下モンタナ州方面の兵器業者と共にこの風船爆弾の真相、対策につき大童の活動を行つてゐる

② 報道を知った関係者の反応

それでは、この報道を見た、草場季喜と、氣球製造を行っていた女学生2人の反応を手記と日記から紹介する。

草場季喜（登戸研究所第一科長・風船爆弾研究主任）

攻撃の開始とともに、参謀本部では外国の新聞・放送によって到達の情報をえることに勤めたが、なかなかそれらしい情報は入ってこなかった。2月中旬になつてはじめて報道が出た。内容はまったくわが「ふ」号兵器と一致している。われわれはこの報道によって、ともかくも到達したものはあることは確實だとほっと胸をなでおろした⁽²⁹⁾。



第5図 草場季喜（陸軍少将）

草場浩氏寄贈。

愛媛県立川之江高等女学校3年生 1945年2月18日日

記より

今日は嬉しいニュース、工場長さんが氣球爆弾のことについて新聞記事を読んで下さった。アメリカの山林地帯が大火事で、死傷者五百名、その他次々と損害を与え、かなり成果があがったという記事だった。しかし、米本土を脅かした兵器が日本製らしい、という事が知れたことも事実であった。敵はどんな手で報復を迫ってくるかもしれない。一喜一憂しながらも、今日の残業は勇氣凛々、手先の感覚がわからなくなるまで頑張った⁽³⁰⁾。



第6図 愛媛県立川之江高等女学校四分隊
愛媛県立川之江高等女学校三十三回生の会『風船爆弾を作った日々』（2007年）より。

※証言者と写真の女学生は異なる。

愛媛県立川之江高等女学校2年生 1945年2月18

日日記より

誰かが「みんな、氣球が大戦果ぞな」と言った。それで中土間を北へ行き、新聞を囲んで見た。「米本土、

猛攻開始。大気球各地に炸裂」の大活字を見た。教室で感激のあまり泣いて、みんなに笑われた。後は一心不乱に作業した⁽³¹⁾。

朝日新聞他全国各紙でもこの戦果は報道され、関係者は喜びを隠せなかった。しかし、この報道は実際には風船爆弾「目撃者500人」を「死傷者500人」とした誤報だった。これに続く情報もなく、一時期は歓喜に沸いた関係者たちだったが、再び戦果に疑問を持ち始める。



第7図 愛媛県立川之江高等女学校動員中の服装

愛媛県立川之江高等女学校三十三回生の会『風船爆弾を作った日々』(2007年)より。

※証言者と写真の女学生は異なる。

(3) 1945年3月～4月 一ふ号作戦の終結

3月は作戦中、最も多くの数を放球し⁽³²⁾、一日に150球打ち上げることもあった⁽³³⁾ので、順調に作戦は進んでいるように見えた。しかし、いくら放球しても戦果があがっているのかどうかを確かめる術を日本は持ちえなかった。

このような中、気球を製造している女学生たちの下には和紙やコンニャクといった原料が届かなくなり、製造が滞るようになる⁽³⁴⁾。また、空襲も激しさを増し、各地の風船爆弾関連工場が被害に遭い、動員されていた女学生の中にも死傷者が出た。こういった状況下、3月中には各地の風船爆弾製造工場で解散式が行われ、その後女学生らは他の軍需工場へ動員されるなど、風船爆弾からは離れていった。こうして風船爆弾製造は約半年間で終わりを迎えることとなった。



第8図 表彰状

鈴木和子氏寄贈。気球原紙製造に動員された女学生に贈られた表彰状。3月中に製造が終了したことを示している。

一方、各放球地も空襲による甚大な被害を受けていた。3月の川崎空襲で、水素ガスの主要供給先だった昭和電工が焼け落ちる。また、幹線鉄道も銃爆撃にあったため、ガスボンベ輸送が厳しくなった。打ち上げる風船爆弾は放球地にあるものの、肝心の水素ガスの供給がストップしたため、水素ガス発生装置を有する大津基地以外は放球終了を余儀なくされた⁽³⁵⁾。

大津基地では引き続き風船爆弾放球が行われたが、4月に入って偏西風がしだいに弱まり、攻撃に適さなくなった。さらに気球製造の中止、気球に搭載する様々な機器を製造していた工場の空襲被害といった要因から、4月20日を持って放球が中止⁽³⁶⁾となった。なお、放球中止より前に次期放球に関する器材研究および準備一切の中止が軍より登戸研究所に命じられた⁽³⁷⁾。これは相次ぐ本土爆撃による製造工場・人員の不足や原料の不足に加え、戦果がまったく判定できないことから、軍中枢部の風船爆弾に対する興味が薄れてきたことも中止の理由だと草場季喜が示唆している⁽³⁸⁾。



第9図 大津基地

米陸軍撮影 (U.S. Army photograph, SC 284816)。左手に水素発生装置が確認できる。

この作戦中止を受け、天長節（昭和天皇誕生日）である4月29日には、草場をはじめとする、風船爆弾研究開発に携わった機関・人物に「陸軍技術有功章」（第10図）が贈られ、これをもって風船爆弾は正式に終結を迎えたと考えられる。



第10図 陸軍技術有功章 賞状

草場浩氏寄贈。草場季喜（陸軍少将）が所蔵していたもの。

同日、登戸研究所では天長節式典で涙ながらに訓示をのべる篠田鐮登戸研究所長（陸軍中将）の姿があった。

この時の式典の様子を語った資料を以下に紹介する。これは、登戸研究所第四科技師であった北澤隆次が陸軍関係OB会で述べた篠田追悼の辞である⁽³⁹⁾。

最後にもう一つ強烈な思い出を申し上げます。

それは昭和二十年四月の天長節に、篠田さんは登戸研究所の全員数百名を本館前庭に集め祝詞と訓話をなされました。

そのお話の中で現戦況の苛烈さを思い、天皇陛下のご心情を、と云いかけた儘声が出ず、暫く嗚咽の後

涙を拭かれてからお話を終了したことであります。集合した全員はその間水の様に鎮まり、ある者は落涙しておりました。篠田さんはこの時既に心中敗戦を覚悟して居られたことと存じ上げましたことで御座居ます。

(『故 北澤隆次 追憶集』1999年、木下憲蔵氏寄贈資料より抜粋)

この式典の日を境に、登戸研究所は本土決戦準備のため、東西へ分散疎開をする。4月以降、草場は本土決戦に備えて電波兵器の研究開発を行うため、長野県北安曇郡へ他の登戸研究所所員らとともに移り、風船爆弾からは離れることとなった。

3. 第二期放球の可能性

4月を持って中止となったふ号作戦。しかし、全ての関係者がこれで終わりだとは思っていなかった。ここでは、もし1945年8月15日に敗戦を迎えていなければ、秋に再び風船爆弾放球を行う可能性はあったのかどうかを、実際の資料とともに推測していく。

(1) 倉庫に残った気球

最後まで放球を続けていた大津基地の倉庫には、まだ多量の風船爆弾が残っていた。しかし梅雨の時期を迎え、カビが発生してしまった。カビを放置しておく、と、球皮が傷つく可能性があるため、第八陸軍技術研究所にカビ対策が命じられた⁽⁴⁰⁾。これは時期を見て、再び放球させようと考えていたことを示すのだろうか。

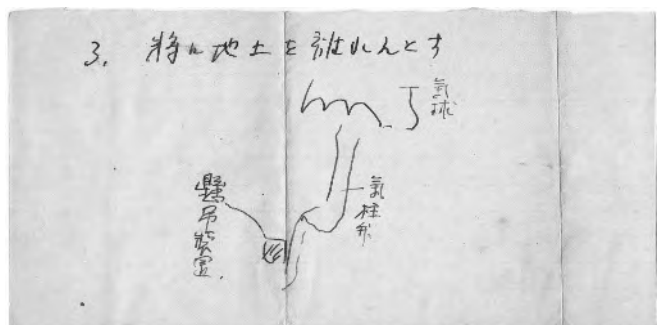
(2) 15m気球の研究

風船爆弾研究主任者の草場季喜(陸軍少将)としては、1シーズンのみで作戦を終えるつもりではなかった。戦況が悪化し財政が緊迫する中であっても、多額を投資して風船爆弾用施設を新設したのは、次年度以降も放球する事を見込んでのことだった。さらに草場は、4月以降も偏西風が無くなるわけではないため、上空14,000mまで飛翔させられれば夏季でも攻撃可能だと推測していた。そのため、より高度飛翔が可能な15m気球の研究に着手していた⁽⁴¹⁾。ただし15m気球は2球のみの製造で終わった。

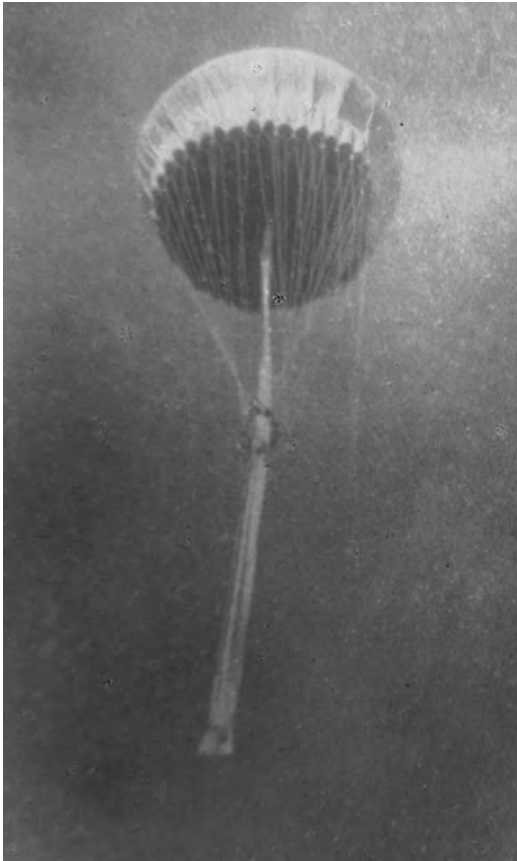
2015年に、草場のご子息より、15m気球放球実験時の写真と草場本人直筆による解説メモの寄贈を受けたため、以下紹介する。この写真は、戦後草場の荷物の底より偶然みつかったフィルムよりプリントされたものである⁽⁴²⁾。風船爆弾に関する原資料の大半が焼却されるか或いは米軍に渡っているため、これは大変貴重な資料である。



第11図 15m 気球昇騰の瞬間
草場浩氏寄贈。



第12図 15m 気球が地上を離れる瞬間
草場浩氏寄贈。ヒラヒラと気球部より垂れているのが気球弁。



第13図 15m気球飛翔直後

草場浩氏寄贈。気球弁の中央あたりにあるのが懸吊装置。懸吊装置には、10m気球と同じく、高度維持装置、バラスト、爆弾が搭載されていたと草場のメモにはある。

草場とともに放球実験に関わった武田照彦（陸軍少佐）の記録⁽⁴³⁾によると、15m気球の放球実験は一宮で行われ、2球作成したうちの1球のみ飛ばしたそう。他にも20m気球を試験的に1球のみ製造していたが、こちらは放球は行っていないようだ。15m気球の重量は125kgであり、体積は1,780 m^3 とのこと。ただし、実験が実施された時期については不明である。

(3) 4月以降も気球が製造された可能性

気球紙製造の現場では、埼玉県・小川町では気球用和紙「生紙」抄紙用の原料・楮が4月、5月も配給されていたことが第14図からわかる。福岡県では3月以降、8月14日まで気球の原紙製造が続けられたという女学生の証言が残っている⁽⁴⁴⁾。

また、敗戦間近の8月2日に登戸研究所庶務担当の大月陸雄（陸軍技術大尉）が東京方面の風船爆弾製造主要工場があった埼玉県・越生へ行こうとしていたこともわかっている（第16図）。

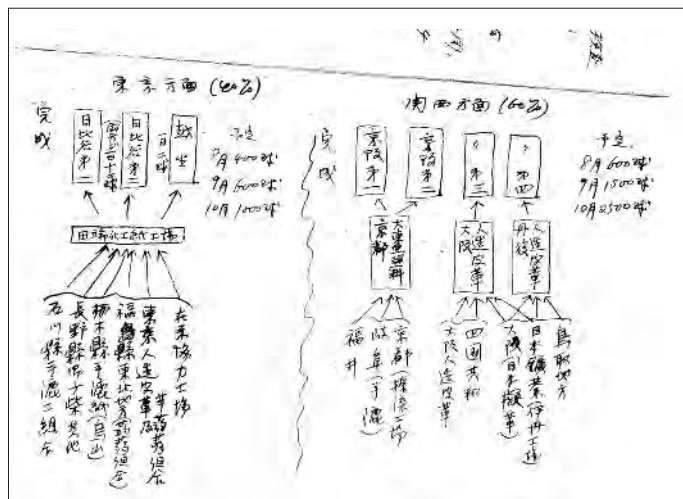
もし、1945年秋に二回目の放球があったとすれば、日本はどのような兵器を搭載しようとしたのか。

年月日	摘要	数量	规格	单价	金额	备注
5.2	金线	1号	1条	2.10	2.10	
5.26					1.90	
6.27					1.00	
6.28					1.15	
6.29					1.375	
6.4					1.15	
9.14					1.75	
9.14	裤子	2号	2条	4.00	8.00	
9.15					6.00	
11.12					1.10	
11.15					1.10	
11.22	冬季大衣	2号	1件	11.12	11.12	
12.4					1.00	
12.20	大衣	2号	1件	2.00	2.00	
12.20	大衣	2号	1件	12.20	12.20	
1.20	温床	1号	1张	4.00	4.00	
2.1	温床	1号	1张	4.00	4.00	
2.14	温床	1号	1张	2.10	2.10	
2.27	温床	1号	1张	4.00	4.00	
4.8	温床	1号	1张	2.40	2.40	
8.30	裤子	1号	1条	2.40	2.40	
10.18					4.75	
7.2					4.60	
4.10					4.40	
7.31					5.75	
					7.10	
					2.10	

第14図 『昭和三十年度 楮配給明細簿』

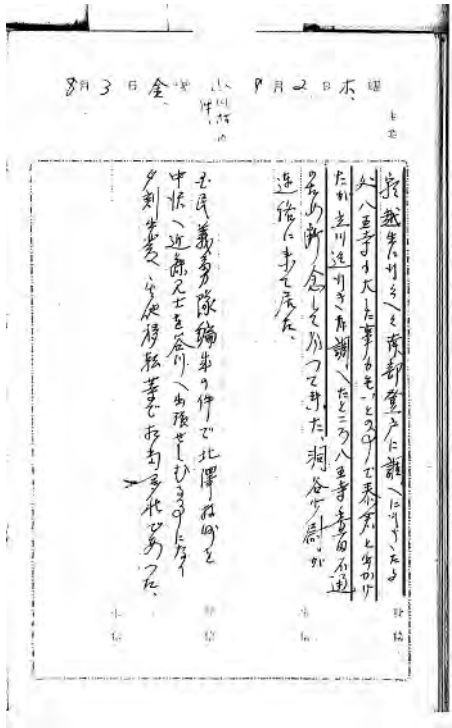
埼玉県小川和紙工業協同組合所蔵。国内矢印部に紙種類・規格「生紙・1号」とあり、納期4・5月で一俵分の楮が生紙のために配給されたことがわかる。

また「キ」とあるのは「生紙」を示しているため、6月まで生紙を製造していた可能性がある（図内囲み部）。



第15図 「風船爆弾関係文書 仕様書 工程表等準備ノート」

東京都江戸東京博物館所蔵。中外火工品株式会社の社員だった、山村文治氏が書いたもの。同氏は日比谷第一工場（東京宝塚劇場）、日比谷第二工場（日本劇場）、京都第一工場の責任者を担当した。ここから越生は東京方面の主要な風船爆弾製造工場だったことがうかがえる。



第16図 1945年8月2日付「大月日誌」

大月昌彦氏寄贈。傍線部「朝越生に行くべく南武登戸に調べに行きたる処八王子が大した事もないとのことで秦君と出掛けが立川まで行き■調べたところ八王子の方面不通のため断念して帰って来た」とある。第15図に示す通り、越生は風船爆弾製造の主要工場があった場所であり、大月陸雄（陸軍技術大尉）が風船爆弾に関して何らかの調整に向いたのではないかと考えられる。

おわりに

莫大な労力、資金を投じて遂行されたふ号作戦だが、わずか半年の放球期間をもって作戦中止となった。日本軍は風船爆弾で戦局を有利に展開したかったが、具体的な戦果が判明しないまま、戦況は日本にとってさらに悪化した。そのため、米軍本土上陸が差し迫っている中、これ以上ふ号作戦を続行することは無意味だと日本軍が判断した点を本稿で示した。この判断を受け、ふ号作戦が終結するや否や登戸研究所は分散疎開を始める。

こうして、これまでふ号作戦を全面的にバックアップしてきた登戸研究所は、米軍本土上陸に備えた兵器の研究開発および製造を本格的に行うようになる⁽⁴⁵⁾。つまり、第二期放球の可能性を残すとはいえ、ふ号作戦の終結は、日本軍の本土決戦準備を本格的に進めさせる一因となった。ふ号作戦は、兵器としての特異さゆえに単体で捉えられがちだが、日本軍の本土決戦計画全体の枠組みの中で考えた方が、先の大戦の本質を見失わないであろう。

なお、放球期間である冬季では絶大なる戦果は風船爆弾には期待できず、気象条件にも左右されやすい、兵器として未熟なものだと関係者は認識していながら、なぜ莫大な予算を投じてふ号作戦が遂行されたのか、という疑問が本稿を書くにあたって生じた。この点については、登戸研究所だけではなく、日本軍の体質や各作戦の遂行実態など、軍全体からふ号作戦を捉えなおす必要があるだろう。

謝辞

本稿の基となる2015年度企画展第一期「1945年8月15日までの登戸研究所 ―風船爆弾作戦の遂行と終結―」を執筆するにあたり、下記の方々・機関にご協力いただきました。ここに記して感謝の意を表します。(敬称略・五十音順)

伊藤滯子, 岩男英子, 小川町教育委員会, 草場浩, 群馬県立高崎高等女学校45期生(牛込やす子, 川野堂子, 内藤ちゑ子, 村田喜代子), 埼玉県小川和紙工業協同組合, 四国中央市教育委員会, 東京都江戸東京博物館, 細川陽一郎, 増田善信, 弓削昭道

《参考文献》(編著者五十音順)

- Mikesh, Robert C "Japan's World War II Balloon Bomb Attacks on North America" (Smithsonian Institution Press, 1973年)
- W.H. ウィルバー「日本の風船爆弾」(『リーダーズダイジェスト』第5巻第9号, リーダーズダイジェスト日本支社, 1950年)
- 荒川秀俊「風船爆弾の気象学的原理」(『地学雑誌』第60巻第4号, 東京地学協会, 1951年)
- 愛媛県立川之江高等女学校三十三回生の会『風船爆弾を作った日々』(鳥影社, 2007年)
- 科学朝日編集部「海外情報・日本の新兵器“風船爆弾”」(『科学朝日』第5巻第6号, 朝日新聞社, 1945年)
- 科学朝日編集部「わが秘匿兵器の覆面を剥ぐ」(『科学朝日』第5巻第14号, 朝日新聞社, 1945年)
- 草場季喜「風船爆弾による米本土攻撃」(日本兵器工業会編『陸戦兵器総覧』, 図書出版社, 1977年)
- 桜井誠子『風船爆弾秘話』(光人社, 2007年)
- 高崎市教育史研究編さん委員会編『高崎市教育史』下巻, 別巻(高崎市教育委員会, 1978年)
- 高田貞治「風船爆弾(Ⅰ)～(Ⅲ)」(『自然』第6巻第1号～第3号, 中央公論社, 1951年)
- 高田貞治訳「アメリカから見た日本の風船爆弾 ―Coast Artillery Journal 誌より―」(『自然』第6巻第4号, 中央公論社, 1951年)
- 中川勇編著『陸軍気象史』(陸軍気象戦友会協議会, 1989年)
- 中條克俊『中学生たちの風船爆弾』(さきたま出版会, 1995年)
- 林えいだい編『風船爆弾 乙女たちの青春』(あらき書店, 1985年)
- 伴繁雄『陸軍登戸研究所の真実』(芙蓉書房出版, 2001年)
- 淵秀隆『自然とのふれあい半世紀余 自己開発の人生・金婚記念』(東海大学出版会, 1991年)
- 松井かおる「風船爆弾と学徒勤労動員―風船爆弾関係文書を中心に―」(『東京都江戸東京博物館研究報告』第16号, 2010年)
- 吉野興一『風船爆弾 純国産兵器「ふ号」の記録』(朝日新聞社, 2000年)

第6回企画展「NOBORITO 1945 ―登戸研究所70年前の真実―」

第一期 8月15日まで登戸研究所

風船爆弾作戦の遂行と終結 展示資料一覧

本稿図表番号	資料名	所蔵先	資料番号	展示番号
第4図	1945年2月18日付『朝日新聞』（複製）	朝日新聞社原本蔵	—	1
第8図	表彰状	当館蔵（鈴木和子氏寄贈）	1036	2
掲載なし	表彰状（複製）	四国中央市教育委員会原本蔵	—	3
第10図	陸軍技術有功章 賞状	当館蔵（草場浩氏寄贈）	1300	4
第11図	15m気球昇騰の瞬間	当館蔵（草場浩氏寄贈）	1348	5
第12図	15m気球放球の瞬間	当館蔵（草場浩氏寄贈）	1349	6
第13図	15m気球飛翔直後	当館蔵（草場浩氏寄贈）	1350	7
第11～13図	草場季喜による写真に対するメモ	当館蔵（草場浩氏寄贈）	1337, 1339, 1341, 1340	8
第14図	『昭和式十年度 楮配給明細簿』（複製）	埼玉県小川和紙工業協同組合原本蔵	—	9
第16図	「大月日誌」1945年8月2日付	当館蔵（大月昌彦氏寄贈）	1018	10
第15図	「風船爆弾関係文書 仕様書 行程表等 準備ノート」（複製）	東京都江戸東京博物館原本蔵	—	11

- (1) 吉野興一『風船爆弾 純国産兵器「ふ号」の記録』（朝日新聞社、2000年）pp.215-217に陸軍気象部第二課に所属し、風船爆弾に関する仕事をしていた水田玲子の証言が紹介されている。水田の証言によると、同課予報班内に成層圏班が新設され、毎日大津基地に北太平洋上の気象データを送っていたとある。
- (2) 同上 p.203, pp.215-217。
- (3) 荒川秀俊「風船爆弾の気象学的原理」（『地学雑誌』第60巻第4号、東京地学協会、1951年）p.5。
- (4) 高田貞治「風船爆弾（Ⅲ）」（『自然』6巻3月号、中央公論社、1951年）p.77。
- (5) 最後まで放球を行っていた茨城県大津基地の放球期間である11/3～4/20と3月中に放球が中止された勿来・一宮基地の放球期間11/3～3/31のうち、事故で放球が見送られた11/4～11/6の3日間をひいた放球日数。
- (6) 気象庁Webサイト「過去の気象データ」（<http://www.data.jma.go.jp/obd/stats/etrn/>）（最終閲覧日2016年9月7日）。
- (7) 同上。
- (8) 草場季喜「風船爆弾による米本土攻撃」（日本兵器工業会編『陸戦兵器総覧』、図書出版社、1977年）p.544。
- (9) 気象庁リーフレット「風と雨」（気象庁、2014年）。10mm/h以上の降水量がある場合、「やや強い雨」～「猛烈な雨」と5段階に分けて雨の強さに関する用語を定義づけている。
- (10) 2016年8月20日17時から30分ほど千葉県千葉市美浜区内にて実験。同地区の当日の17時の降水量は10mm/h以上20mm/h未満だったことを、日本気象協会Webサイト「雨雲の動き」tenki.jp（<http://www.tenki.jp/past/2016/08/20/radar/3/15/>）で確認（最終閲覧日2016年9月7日）。
- (11) 前出、気象庁リーフレット。
- (12) 高田、前掲論文「風船爆弾（Ⅲ）」p.77表。

- (13) 同上 pp.75-76。
- (14) 同上 p.78。
- (15) 同上 p.75。
- (16) 草場, 前掲論文 p.540。
- (17) 牛込氏, 内藤氏, 村田氏には2015年6月15日に, 川野氏には同年9月17日に筆者聞き取り。
- (18) 高崎市教育委員会『高崎市教育史』下巻(高崎市教育委員会, 1978年) p.183,p.189。
- (19) 高崎市教育委員会, 前掲書 p.1219にも「8月14日の空襲で高崎高女被爆」との記述あり。
- (20) 高田貞治「風船爆弾(Ⅱ)」(『自然』6巻2月号, 中央公論社, 1951年) p.46。
- (21) 草場, 前掲論文 p.542
- (22) 前出, 牛込氏, 内藤氏からの聞き取りによる。
- (23) 松井かおる「風船爆弾と学徒勤労動員－風船爆弾関係文書を中心に－」(『東京都江戸東京博物館研究報告』第16号, 2010年3月) p.199
- (24) Mikesch, Robert C "Japan's World War II Balloon Bomb Attacks on North America" (Smithsonian Institution Press, 1973年) p.43
- (25) 細川陽一郎より2015年5月25日に筆者聞き取り。
- (26) 高田, 前掲論文「風船爆弾(Ⅲ)」 p.77表。
- (27) 草場, 前掲論文 p.545。
- (28) 毎日新聞, 読売報知, 西日本新聞で報じていたことを確認している。
- (29) 草場, 前掲論文 p.546。
- (30) 愛媛県立川之江高等女学校三十三回生の会『風船爆弾を作った日々』(鳥影社, 2007年) p.25。
- (31) 同上 pp.25-26。
- (32) 高田貞治訳「アメリカから見た日本の風船爆弾 —Coast Artillery Journal 誌より—」(『自然』6巻4月号, 中央公論社, 1951年) p.45。
- (33) 草場, 前掲論文 p.546。
- (34) 愛媛県立川之江高等女学校三十三回生の会, 前掲書 p.15。
- (35) 吉野, 前掲書 p.197。
- (36) 高田訳, 前掲論文 p.44。
- (37) 草場, 前掲論文 p.547。
- (38) 同上。
- (39) 北澤は1933年に陸軍科学研究所に入所して以来, 篠田とは交流があり, 戦後も仕事を通じて関係が続いたため, 北澤は篠田追悼の辞を任された。
- (40) 吉野, 前掲書 pp.267-268。
- (41) 当館所蔵の草場季喜手記6枚目。この手記は, 1951年『自然』に発表された高田貞治「風船爆弾(Ⅰ)～(Ⅲ)」の相違点を指摘するために草場が戦後作成したもの。
- (42) 同上17枚目。なお, 当館が所蔵している15m気球の写真は, 高田が1951年1～3月にかけて『自然』(中央公論社)に発表した「風船爆弾(Ⅰ)～(Ⅲ)」にも使用されており, この写真について草場手記によると「参考のため高田貞治氏に差上げたものである」とのことであるので, 高田に提供した際にネガからプリントされたものと推測される。
- (43) 武田照彦「ふ号兵器の開発」(林えいだい編『写真記録 風船爆弾 乙女たちの青春』, あらき書店, 1985年) pp.16-17。
- (44) 櫻井誠子『風船爆弾秘話』(光人社, 2007年) pp.229-230。
- (45) この点については本誌に収録されている木下健蔵「長野県における陸軍登戸研究所の疎開資料について—上伊那地方(伊那谷)を中心として—」, 椎名真帆「分散疎開と継続された秘密戦研究を中心に」, 山田朗「第一回 第一期: 8月15日までの登戸研究所」および当館第4回企画展「本土決戦と秘密戦—その時登戸研究所は何をしていたか—」(2013年11月20日～2014年3月29日開催)を参照されたい。

第6回企画展「NOBORITO 1945 ―登戸研究所 70年前の真実―」記録

展示 第一期：8月15日までの登戸研究所 分散疎開と継続された秘密戦研究を中心に

椎名真帆

明治大学平和教育登戸研究所資料館特別嘱託学芸員

はじめに

風船爆弾作戦終結後、1945年8月15日までの登戸研究所の分散疎開と疎開先で継続された秘密戦研究について述べる。それとともに、1945年に登戸研究所に勤務していた元従業員らの証言、特別展示についても記録する。

1. 分散疎開と継続された秘密戦研究

登戸研究所の疎開は、実際は1944年から検討されており⁽¹⁾、1945年4月までにはそれぞれの科の疎開先が決定された⁽²⁾。風船爆弾作戦の終了と3月以降の国内各地の空襲の激化などの戦況から、本土決戦が現実味を帯び、想定される秘密戦が本土決戦構想に沿って変化していった。それに伴い、登戸研究所の役割と重点とされる研究も変化した。

	登戸研究所の動き	陸軍の動き	日本・世界の戦況
1944（昭和19）年			
初頭		大本営移転計画案浮上	
7月			サイパン島陥落 絶対国防圏崩壊
10月			レイテ沖海戦敗北
11月	風船爆弾作戦に力を注ぐ （～翌年4/29）	風船爆弾作戦開始 松代大本営工事開始	B-29東京初空襲
冬	日本各地で疎開先を選定		
1945（昭和20）年			
初頭		本土決戦準備に取り掛かる	
3月	疎開準備		東京大空襲
4月	登戸研究所疎開先での受け入れ式 各疎開先工場での学徒動員	風船爆弾作戦終了 陸軍中野学校が富岡に疎開	沖縄本島に米軍上陸
5月	疎開地への資材輸送がひと段落か ⁽³⁾		ドイツ降伏
6月		本土決戦方針の再確認 義勇兵役法制定・公布	沖縄戦終結
7月	疎開先工場の製作業務に暗雲 ⁽⁴⁾ 登戸研究所の編成について会議が繰り返される		
8月初頭		本土決戦水際作戦方針決定 国民義勇隊編成準備	
8月15日	敗	戦	

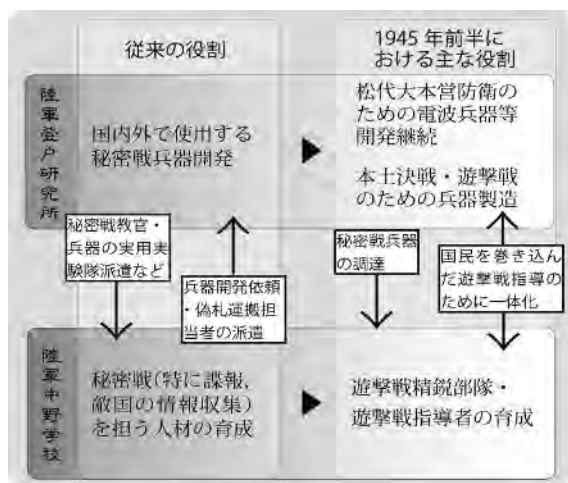
第1表 登戸研究所の分散疎開と研究、兵器製造に関する年表

(1) 1945年4月以降 変化した「秘密戦」と登戸研究所の役割

従来から秘密戦を担う両輪として登戸研究所と陸軍中野学校は密接な関係にあった。登戸研究所は秘密戦兵器を開発製造し、中野学校は秘密戦を担う人材を育成、卒業生は情報収集や諜報活動のために登戸研究所製の兵器を使用した。中野学校へ教官として派遣された登戸研究所員もおり⁽⁵⁾、また中野学校卒業生も登戸研究所製造の偽造法幣の運搬に参加した⁽⁶⁾。

1945年の陸軍中野学校と登戸研究所の役割

1944年7月絶対国防圏が崩壊、同年10月にはレイテ沖海戦の敗北で戦局が悪化し、米軍の上陸、本土決戦を覚悟した陸軍は、中野学校に、全国民を巻き込んでの本土決戦の際の遊撃戦（ゲリラ戦）部隊の指導者育成としての役割を期待する。陸軍上層部が本土決戦までの「捨て石」であり「時間稼ぎ」としていた沖縄戦における秘密戦、即ちゲリラ戦を中野学校卒の指導者が実際に指導し⁽⁷⁾、また登戸研究所において製造した「爆弾、手榴弾を沖縄に送る、と聞いた」という関係者の証言もある⁽⁸⁾。それと時期を同じくし、登戸研究所も本土決戦で使用するゲリラ戦用兵器の製造と松代防衛のための電波兵器などの開発に特化していった。



第1図
登戸研究所・中野学校の役割の変化

(2) 1945年4月以降 各疎開先の研究内容と登戸分室として残留した部門

登戸研究所は目的に応じて移転先を決定した。例えば、本土決戦に備えての遊撃戦用爆弾の量産を目的とした工場部門は東日本では長野県、西日本では兵庫県へ。また松代への大本営移転計画のため、第一科の電波兵器部門は松代への空襲に備え、研究を継続しつつ実戦に備えるため松代に近い北安曇郡松川村へ分散した。登戸研究所から研究者ごと多摩陸軍技術研究所へ移管されていたレーダーの研究は、関係分野の権威であった大阪大学教授岡野金次郎と連携するため関西地方へ移転した。

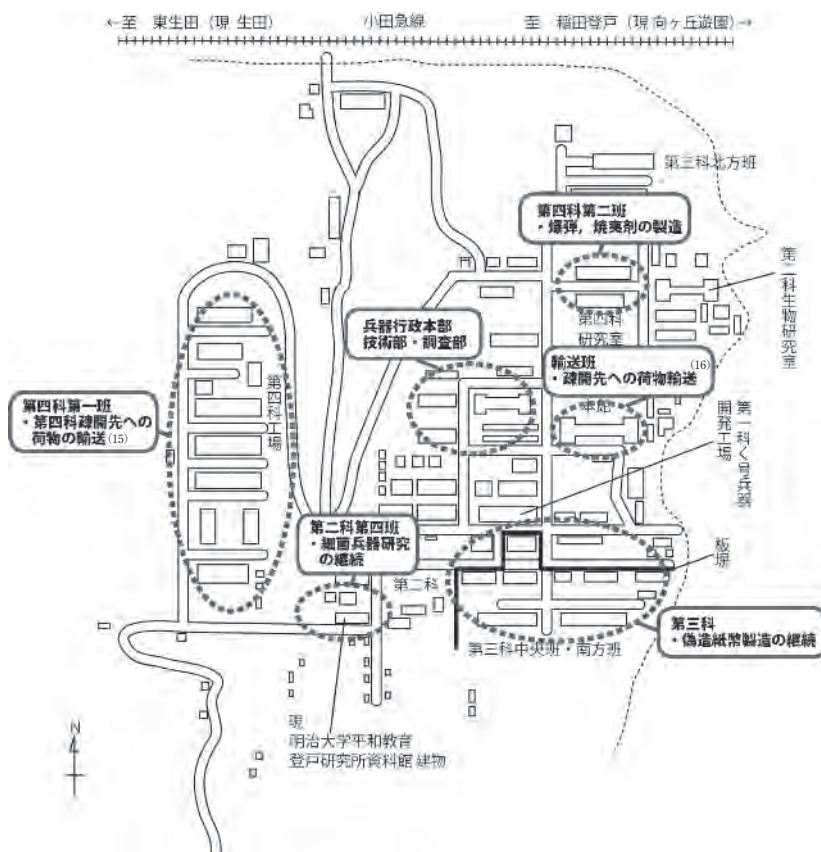
登戸研究所の登戸分室は、表向きは「残務整理のため」⁽⁹⁾に使用となっていたが、実際に

は第四科第二班の爆発物製造班が残り、爆弾、手榴弾を製造⁽¹⁰⁾し、第三科の偽札製造部門は一部福井に移転準備したものの大型印刷機の移動の難しさなどから残留し、8月まで偽札製造を継続していた。また、敗戦まで医務室も残り、医務室の担当軍医（黒田中尉）が責任者として細菌兵器を研究開発していた第二科第四班は疎開をしなかった⁽¹¹⁾。

多くの部門の疎開により空室が増えたこともあり、5月の空襲で全焼した陸軍兵器行政本部が後に一部移転してきた⁽¹²⁾。



第2図
登戸研究所の疎開先



第3図
【登戸分室】の研究内容
（資料館作成）

部門	中心となる疎開先 (住所表記は当時)	近年新たに判明した 疎開先など	主な研究内容など
庶務課	長野県上伊那郡宮田村真慶寺【本部】	元宮神社、姫宮神社、新田教員住宅ほか ⁽¹⁷⁾	企画、庶務、人事、経理、給与関係、資材受渡し ⁽¹⁸⁾ ほか
第一科のうち、電波兵器部門	長野県北安曇郡松川村ほか【北安分室】	旧池田鉄道信濃池田駅本社建物 【北安分室（池田研究班）】 ⁽¹⁹⁾	迎撃用電波兵器・ロケット砲の開発 ⁽²⁰⁾
第一科のうち、レーダー開発部門	兵庫県武庫郡良元村（現・宝塚市）【多摩陸軍技術研究所関西出張所】	おばやし 小林聖心女学院 ⁽²¹⁾	1943（昭和18）年以降多摩陸軍技術研究所に移管、超短波レーダーの開発を継続
第一科その他の部門とその工場部門としての第四科の一部 ⁽²²⁾	兵庫県氷上郡小川村【小川分室】		爆発物製造
第二科のうち、爆発物開発部門、毒物開発部門、写真部門ほか、第二科工場部門としての第四科の一部	長野県上伊那郡中沢村ほか【中沢分室】 【伊那村分工場】	原稚蚕飼育所	爆発物の製造と研究開発、毒物関係、写真関係の研究の継続
第二科のうち、細菌兵器開発部門	川崎市生田【登戸分室】	現在の資料館建物付近で研究継続	実験動物を利用した細菌兵器開発
第三科 偽札製造部門	川崎市生田【登戸分室】、 福井県南条郡武生町ほか【北陸分廠】		偽札印刷工場は疎開せず終戦直前まで偽札を印刷、一部福井県武生へ移転準備
第四科 第一科・第二科の工場	長野県上伊那郡中沢村【中沢分室】、 兵庫県氷上郡小川村【小川分室】、 川崎市生田【登戸分室】		東日本が壊滅しても抵抗が継続できるよう西日本へも疎開、遊撃戦用爆薬の製造を始めたところで終戦

第2表 登戸研究所の疎開先と残留した部門【登戸分室】の研究内容

(3) 1945年4月～8月に登戸研究所が重点としたこと①

本土決戦に向けての遊撃戦用爆弾、焼夷剤^{*}の製造

敗戦間際、登戸研究所は本土決戦で使用する遊撃戦兵器としての爆弾や放火謀略兵器である手投げ焼夷剤を製造していた実態が明らかになった。これら兵器は疎開先である中沢分室、小川分室と登戸に残留した第四科第二班（爆薬班）が敗戦まで製造した。

※焼夷剤とは…陸軍の本土決戦の遊撃戦で使用する、放火を目的とした謀略兵器として量産が期待されていた。大本営陸軍部作戦部長として本土決戦を指揮した宮崎周一の1945年5月13日付の日記にも、登戸研究所による焼夷剤の製作状況や7月以降の生産計画が記されており、本土決戦の作戦を練る上で期待されていたことがわかる。伊那谷は中沢村の、篠山は小川村における登戸研究所の各疎開先を表している。

爆薬 一六万 九月迄三分一 手持約一万

七月初ヨリ増加、疎開伊那谷（中沢）三分二

篠山（小川）三分一

焼夷一六万 防水缶一万 防水マッチ一〇万

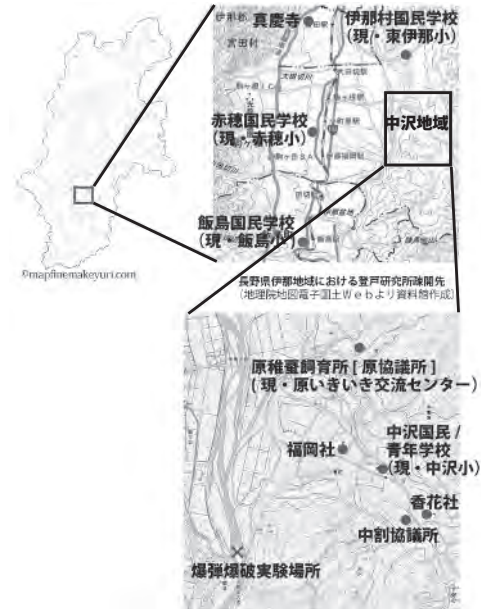
（軍事史学会編『宮崎周一中将日記』（錦正社,2003）より）



第4図

伊那谷遠景（資料館撮影）

南アルプスと中央アルプスに挟まれた天竜川兩岸の風光明媚な平野。中沢地域は写真右手奥、南アルプスの麓に位置する。



第5図

長野県伊那地域における登戸研究所疎開先
（地理院地図電子国土Webより資料館作成）

① 中沢での爆弾・焼夷剤の製造実態—元少年工員小林治人氏の証言

登戸研究所の主な疎開先である長野県の伊那地域では、戦後70年を経た今でも新しい証言が発掘されている。例えば、疎開先の中心となった現・駒ヶ根市中沢在住の小林治人氏は1945年の春、中沢国民学校高等科を卒業してすぐ14歳で登戸研究所に少年工員として現地で雇用された。以下は小林氏の証言である。

i) 登戸研究所中沢製造所の実態

- ・ 地元で国民学校高等科を出て登戸研究所に勤めた。同期は5人。第二工場に2人、第三工場に3人配属された。
- ・ 月給は月30円（当時）、日曜日は休み。
- ・ 中沢の工場は第三まであって、第一工場が中割協議所、第二工場が中沢青年学校、第三工場が福岡社という神社。第一工場は香花社という神社も附属工場として使用。
- ・ [小林氏は] 第三工場で焼夷剤製造に従事。たまに爆弾の爆破実験の際に第二工場にも行った。
- ・ 第二工場の責任者は杉山大尉、第三工場は村田大尉という人。[少年工員として] 上

官に言われるがまま働いていた。学徒への指導はしなかった。学徒とは別に作業していた。

- ・ 第一工場では、中沢国民学校高等科2年男子が爆弾の外側のブリキの筒状容器の製造、女子は第二工場で爆弾に爆薬を詰めた。
- ・ 爆弾の爆破実験は月2回天竜川の河原でやった。学徒と工員は別の週に見学した。
- ・ これら焼夷剤、爆弾は、上官からは沖縄などで肉弾突撃に使うと聞いた。

ii) 中沢で製造していた焼夷弾・爆弾

小林氏は登戸研究所で実際に製造した「焼夷剤」および「爆弾」の紙製模型を、当時の記憶に基づいて作成した。模型の写真とその図解は本稿第14図を併せて参照されたい。

焼夷剤について

- ・ 大きさ…縦約10cm×横約9cm×厚さ約5cm
- ・ 表面のTの字に見えるものは埋め込まれている
- ・ Tの字の横棒部分が「擦り板」で、下の足の部分が「点火剤」
- ・ 使用するときは「擦り板」を外して点火剤の頭をこすり発火させて投げ込む
- ・ この「点火剤」は、福岡社で発見された「長い黄色い棒」⁽²³⁾を5cm程度に切ったものだったかもしれない
- ・ 「擦り板」, 「点火剤」を埋め込んだ状態で包装した
- ・ 「品質管理のためか、」焼夷剤を燃やしての実験は福岡社の境内で行った

爆弾について

- ・ 大きさ…直径約5cm×長さ約18cm, 導火線は約20cm
- ・ 爆弾本体は紙巻
- ・ 爆薬は味噌の様なペースト状のもので、容器に棒で詰めた。爆薬を固くすると強力になったのかもしれない。

これらの兵器は遊撃戦用として登戸研究所で開発製造されたものである。遊撃戦とは、正規軍とは別に、敵陣後方で破壊行為などにより攪乱を狙い、劣勢の正規の武力を補うものである。敗戦間際の本土決戦体制下においては、陸軍は一般市民を国民義勇戦闘隊などとし遊撃戦実行部隊として動員、その使用兵器を登戸研究所の製造工場に大量に製造した⁽²⁴⁾。

工場名	使用施設	附属施設	主な動員学徒	作業内容
第一工場	中割協議所	香花社	中沢国民学校高等科 2年男子	爆弾の外側のブリキの筒状容器の製造
第二工場	中沢青年学校 (中沢国民学 校敷地内)		中沢国民学校高等科 2年女子	ブリキのハンダ付けと火薬詰め、雷管・導火 線付け（主に、火薬詰めは女子、雷管導火線 付けは男子が担当）
第三工場	福岡社		伊那村国民学校	焼夷剤製造（ろう、マグネシウム、硝石を混 ぜて固める）

※中沢地域では、以上に加え、工場として上割協議所、研究室として個人宅二階を借上げていた、という証言もある⁽²⁵⁾。

第3表 登戸研究所の中沢地域における爆弾、焼夷剤の製造工場（小林治人氏による）

② 伊那地域で新たに判明した疎開先での登戸研究所の実態

本企画展に際し調査を進めたところ、以下の内容が判明した。疎開先の実態についてはまだわからない点も多く、戦後70年が経過してもなお新しい証言がある。

i) 新たに判明した疎開先—原稚蚕飼育所（原協議所）【中沢分室】

原稚蚕飼育所は、登戸研究所の疎開先として最近判明した場所である。この場所は中沢の中心から少し離れているが、同じく陸軍に、登戸研究所伊那村分工場として借上げられていた伊那村国民学校と、中沢国民学校の間位置する。当時の雇員を知る下島大輔氏（終戦時7歳）によると、ここにはアンテナが立っており、若い男性が12～3人勤務し全員レシーバーを持っていた、爆弾などの兵器の製造工場には見えず、学徒が動員された様子はなかった、という。これらの状況から、元の場所に残留した登戸分室と通信し連絡をとるための部署であったと考えられる。



第6図
戦時中にも使用されていた原稚蚕飼育所建物
(原いきいき交流センター提供)

ii) 不明書類の発見—毒物研究と飯島国民学校の登戸研究所校舎転用関係書類【中沢分室】

第二科第三班は、中沢分室の一部として伊那地域の飯島国民学校に疎開し、毒物の研究を極秘で継続していた。そのため現地での研究内容はまだ解明されていないが、これまで存在が不明であった、登戸研究所による国民学校校舎転用関係書類の原本が最近発

見された。各写真について、関係書類は **資料展示 第16図**、**第17図**、ならびに登戸研究所が使用していたと思われる校舎は **写真展示 第19図**を参照のこと。

iii) 伊那村分工場の実態

第二科第一班班長、伴繁雄は、疎開後は伊那村分工場長として、中沢にほど近い場所で、現地調達品目の一つとして想定された遊撃戦用の焼夷剤や爆薬の研究を行っていた。

伊那村分工場の工場であった伴繁雄氏の旧自宅には、疎開先で製造された爆弾に取り付ける時限装置と考えられる時計が残っていた。



第7図
時限爆弾の時限装置と思われる時計（伴幸雄氏寄贈）
伴繁雄氏の旧自宅にて発見された。

(4) 1945年4月～8月に登戸研究所が重点としたこと②

松代大本営防衛のための電波兵器

第一科の所員も1945年初頭は風船爆弾作戦を全面的にサポートしていたものの、4月に作戦が終了してからは松代大本営移転計画とあいまって電波兵器の開発に再び重点を置いた。関西では、登戸研究所から移管されたレーダー関連の研究も継続されていた。

① 再び重点が置かれた「く号兵器」

登戸研究所が松川村など北安分室へ移転したのは、大本営が松代へ移転した後に敵機の来襲を想定し、く号（怪力電波）兵器をさらに強力にした電波で飛行機のエンジンを停止させたり、強力電波を用いる電波誘導弾で迎撃するための電波誘導装置やロケット砲の研究部門であった。また、この地域は水力発電が盛んなため、電波の研究に必要な莫大な電力の供給が可能であった⁽²⁶⁾。松代にも近いこの場所では、研究の成果を、即、実戦で使うことが期待されていたと考えられる。



第8図 北安分室の位置

北安分室には怪力電波兵器開発の責任者笹田技師，第一科長で風船爆弾責任者の草場季喜少将の研究班も移動し⁽²⁷⁾，登戸研究所の疎開先としては唯一，研究用の建物の建築や発生電波放射のための巨大パラボラアンテナ設置⁽²⁸⁾など，他の疎開先では見られない充実した研究施設が用意された。しかし，期待した成果は上がらないまま終戦を迎えた。現地には，現在でも研究施設として登戸研究所が設置した建物の跡が残っており，これは，借上げ施設がほとんどであった登戸研究所の疎開先各地において，新たに研究施設を建てた唯一の事例である⁽²⁹⁾。



第9図

現在も残る登戸研究所北安分室の史跡（平川豊志氏撮影）
登戸研究所が設置した研究施設の基礎。疎開先で新規に施設を建造した唯一の例。

写真展示 第22図，第23図の北安分室関連史跡も参照されたい。



第10図

〔参考〕北安分室図（木下健蔵氏寄贈）

敗戦直前，北安分室の地元であった神戸原の住民が当時の記憶を元に登戸研究所の施設の配置を記した地図。北安分室には新たに建物2棟とパラボラアンテナを設置したが，その礎石のコンクリートと考えられるものが見てとれる。

また、「山田愿蔵手記」によれば、終戦後GHQに提出した内容より、1945年時点の第一科が行った研究進捗状況が読み取ることができ、北安分室での研究内容について推測できる。中でも、10メートル規模の反射鏡（パラボラアンテナ）の北安分室での1945年時点における施工についても明記されている（以下の下線部）。

終戦後GHQに提出した内容より、1945年時点の第一科が行った研究進捗状況⁽³⁰⁾
(太字は北安分室での研究に関するものと推定される内容)

一 超短波に関する基礎研究

1 超短波発振に関する研究

八〇^{センチ}糎〔以降カタカナで表記〕波…三〇〇「キロワット」

2 超短波集勢の研究

十^{メートル}米〔以降カタカナで表記〕反射鏡を設計し北安分室に施工中，終戦。別に導波管及び電磁ラッパに関する基礎研究開始。

3 真空管製作に関する研究

八〇センチ三〇〇キロワット及び二〇センチー〇〇キロワットを目途とする真空管設計製作中，終戦。

4 真空管材料及び超短波用絶縁物の研究

(昭和十六年 編制改正に伴い八研に移管す。)

5 ドブラー効果を利用するロケーターの基礎研究

(昭和十六年 編制改正に伴い七研に移管す。)

6 生物に対する効果の研究

(昭和十八年 各種波長により殺傷効果を探求し、一メートル～六〇センチ級に於いて肺出血を死因とし、六〇センチ以下に於いては脳の異常を原因とすることを認む。)

(昭和十九年 主としてやや大なる電力を以って輻射電場における効果（距離一〇^{ない}乃至三〇メートル）について研究す。)

大電力電場にて研究して軍事用途を見出さんとし計画中，終戦となる。

7 発動機機関に対する効果の研究

(昭和十九年 飛行機機関につき研究す。〔機体は〕遮蔽良好にして効果少なし，スリット〔＝機体の隙間〕よりの電波の出入りにつき研究す。)

スリットよりの電波の出入りにつき研究を継続す。

8 化学的效果に関する研究

化学効果の研究の大電力にての再興せんとするも終戦となる。

(中略)

五 飛行機発動機の発する火花放電を受信し、これを標定せんとする研究

(昭和十七年 八木アンテナを伴う六メートル受信波一〇キロメートルまでの受信可能なるを認めしも、超短波ロケーターの実用化に伴い研究を中止す。)

(中略)

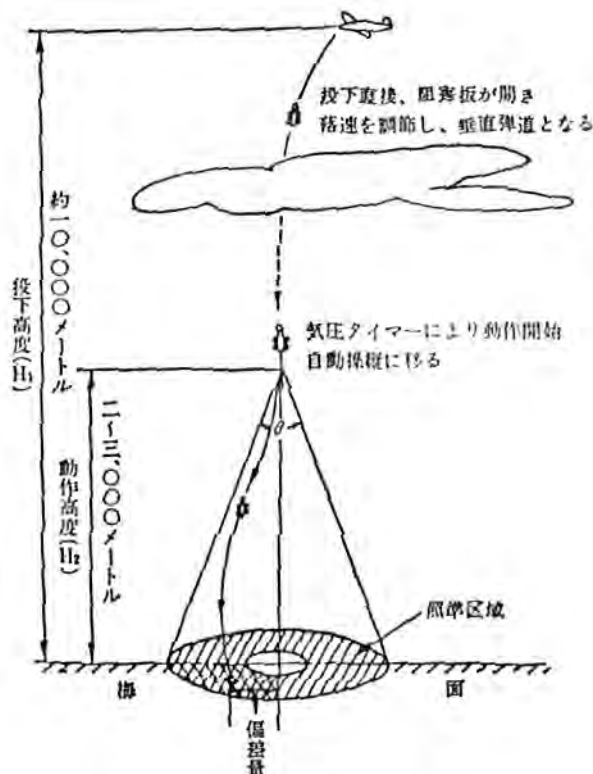
七 超高压X線に関する研究

(昭和十六年 一〇〇万ボルトX線及び中性子発生装置を設計す。)

(昭和十九年 軍用用途として適切なきを以って中止す。)

② 陸軍における「ね号兵器」研究と「決戦兵器㊦」への期待

登戸研究所設置当初の上部組織、陸軍科学研究所では、特殊兵器研究として、飛行機のエンジンや艦船の機関の熱源を標定し自動的にこれに向かう兵器「ね号」の開発を行っていたことが分かっているが⁽³¹⁾、これは、戦争末期においては形を変え、陸軍が威信をかけた「決戦兵器㊦」の研究へ結びついたと考えられる。登戸研究所もこの㊦に関係があったことが1月23日の「大月日誌」からうかがえる。㊦は水上に浮かぶ敵の艦船を空爆する際に艦船の熱源を標的にして自動的に爆弾を誘導し命中率を劇的に向上させるものであった⁽³²⁾。開発のために外部への大規模な研究の委嘱や1300人もの学徒動員が15か月計画されたが、完成直前に敗戦となった。



第11図

㊦の爆弾投下時の設想図

(『陸戦兵器総覧』(日本兵器工業会編、1977)より引用)

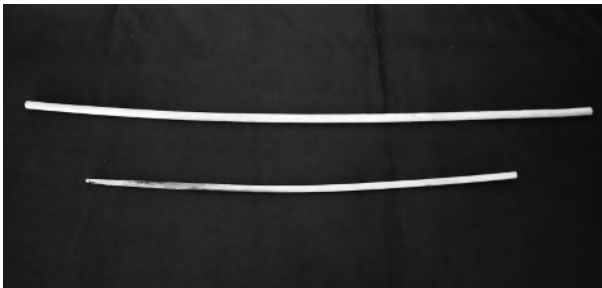
資料展示



第12図

木箱（大月昌彦氏寄贈）

庶務将校大月陸雄大尉が保管していたもの。兵庫県小川村に疎開した際に使用された可能性が高い。



第13図

登戸研究所製造の放火用謀略兵器と思われるもの
（矢澤古里氏寄贈）

（上）置いた状態，（中）先端部の拡大（使用済みのものは芯が空洞となり，熱のためカギ状に曲がっている），（下）人物が支持した状態。登戸研究所中沢分室の第三工場である福岡社から戦後直後に発見され，近隣住民が保管していた。全長は未使用のもので約100cm。火をつけると約20cmの炎が出る。成分分析の結果，樹脂は植物セルロースを原料とするセルロイドである可能性があり，無煙火薬と推定される。小林治人氏によると，約5cmずつに切って，同じく第三工場で製造していた焼夷剤に埋め込み点火剤として使用した可能性もある。登戸研究所が製造した謀略兵器またはその一部であれば，現存する唯一のもの。





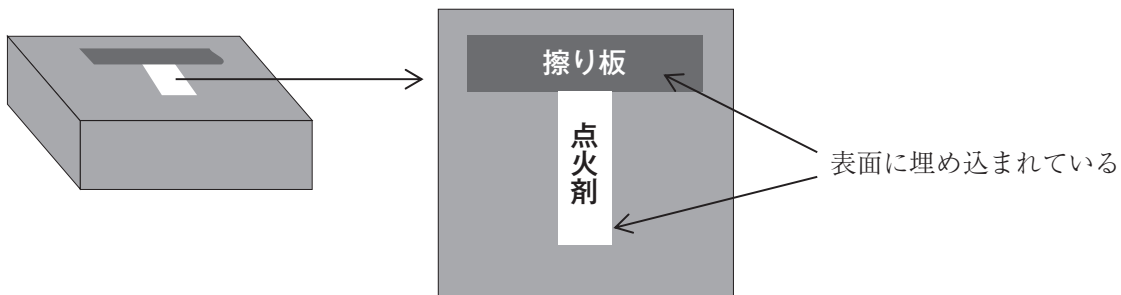
第14図

登戸研究所中沢分室で製造していた爆弾（上）と焼夷剤（下）の模型の複製

（原模型作成・小林治人氏，複製作成・資料館）

大きさは、爆弾が直径約5 cm×長さ約18cm，焼夷剤が縦約10cm×横約9 cm×厚さ約5 cm。小林氏の当時の記憶に基づいて作成された。細長いものが爆弾で，平たいものが焼夷剤。爆弾には味噌のようなペースト状の火薬を詰め、蓋がされる前の状態。導火線は約20cmほどだった。焼夷剤はろう，マグネシウム，硝石を混ぜて熱してプレスし煉瓦型に固めた。焼夷剤のT字は，埋め込み式の「擦り板」と「点火剤」。横棒が「擦り板」で，使用する際は取り外して縦棒の「点火剤」にこすり付けて点火し，放火対象に投てきする（小林治人氏証言）。

焼夷剤図解



第15図

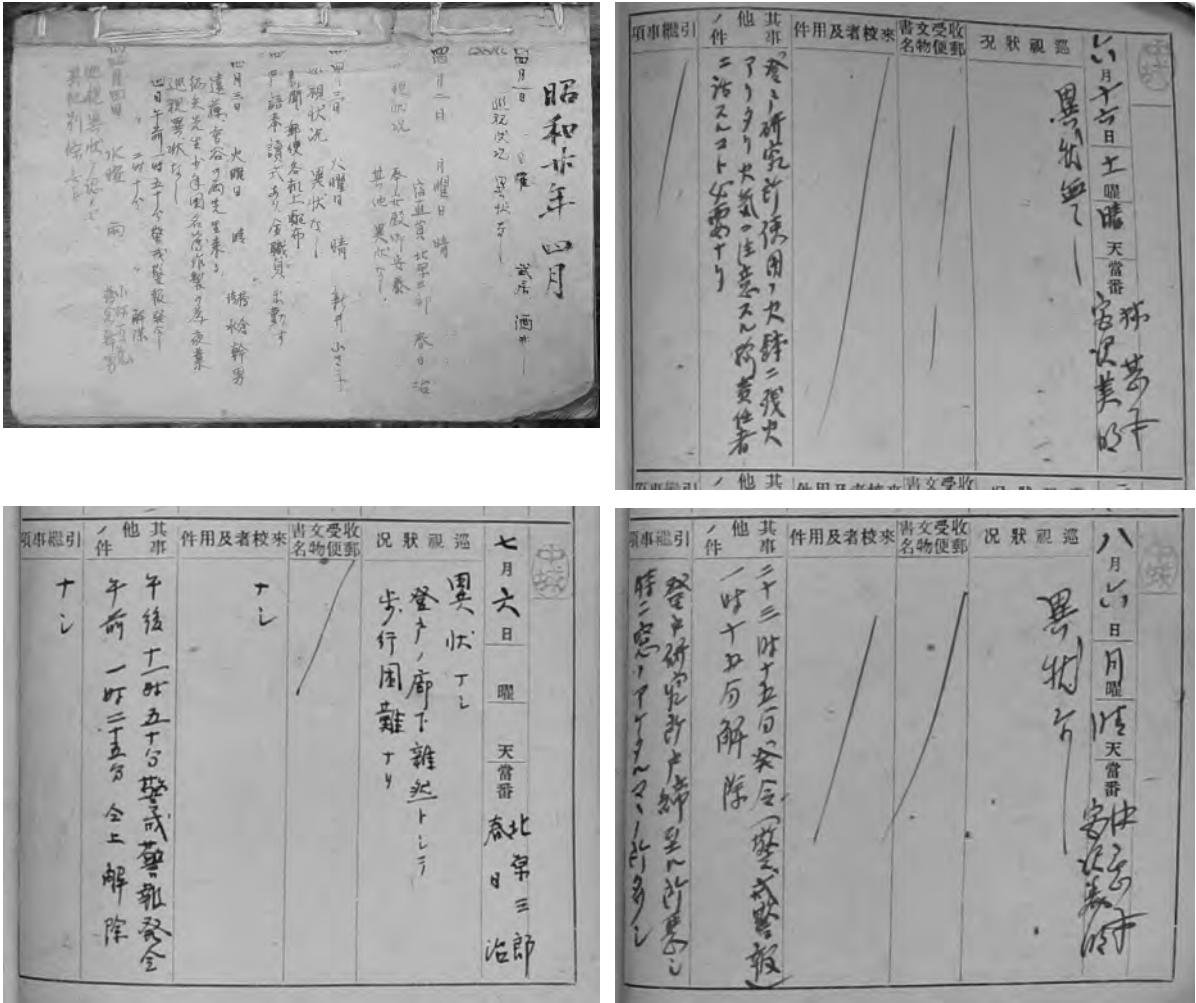
登戸研究所蔵書印付書籍「植物研究雑誌第6巻」と登戸研究所使用薬品瓶

（書籍・駒ヶ根市立中沢小学校寄贈，

薬品瓶・宮下与兵衛氏寄贈）

登戸研究所の疎開先であった中沢国民学校（現・中沢小学校）に残っていた。書籍には登戸研究所蔵書印が鮮やかに残る。薬品瓶の中身は水溶性のフェノール系の薄い青紫色の物質で，染料である可能性が高い⁽³³⁾。

(左) 飯島国民学校校長が長野県知事に対し、校舎を登戸研究所に転用することについて貸与可能と具申している。(右) 1945(昭和20)年6月26日現在の飯島国民学校転用利用状況。2棟200坪分を登戸研究所が使用中と記載されている。



第17図 飯島国民学校当直日誌（複写）〔表紙と登戸研究所に関する記載の抜粋〕（飯島町立飯島小学校提供）
2015年の調査で新たに発見された1945（昭和20）年の飯島国民学校当直日誌。登戸研究所の毒物の研究班が使用していた飯島国民学校は、1945年の他の記録が一切残っていないが、表紙が欠けているために処分されず残った可能性が高い。登戸研究所が校舎を使用していたことが読み取れる。

〔書き下し文〕

上段左 表紙（欠）

上段右 六月十六日

（其他ノ事件）

登戸研究所使用ノ火鉢ニ残火

アリタリ 火気ニ注意スル様責任者

ニ話スルコト必要ナリ

下段左 七月六日

（巡視状況）

異常ナシ

登戸ノ廊下雑然トシテ

歩行困難ナリ

下段右 八月六日

（引継事項）

登戸研究所戸締至ル所悪シ

特ニ窓ノアケタルマヽノ所多シ

写真展示



第18図

香花社（上伊那郷土研究会編『写真記録 上伊那の太平洋戦争』（しなのき書房，2007）より）

登戸研究所中沢分室第一工場の付属施設だった。舞台ではブリキを材料に爆弾の筒を製造していた。舞台は神社の右手にあった。昭和初期撮影。



第19図

飯島国民学校校舎（飯島町立飯島小学校提供）

現・飯島町立飯島小学校。登戸研究所の第二科第三班（毒物研究班）が疎開し、極秘に研究を継続していた。1935（昭和10）年撮影。



第20図

現在の福岡社（資料館撮影）

登戸研究所中沢分室第三工場として使用されていた神社。当時の建物を撮影したものは現存しない。手前の遊具がある場所に登戸研究所の工場として使用されていた舞台があった。2015（平成27）年撮影。



第21図

中割協議所（撮影者不詳，木下健蔵氏提供）

登戸研究所中沢分室第一工場として使用されていた建物
外観と内部。撮影年不明。



第22図

旧池田鉄道信濃池田本社建物（平川豊志氏撮影）

登戸研究所北安分室（池田班）が使用した。現在は廃線
となった路線駅に立つ。建物手前に旧プラットフォーム
が残っている。2015年撮影。



第23図

送電のための鉄塔（平川豊志氏撮影）

登戸研究所北安分室の建物のあった方向を撮影。電波兵
器開発には大きな電力が必要とされた。2015年撮影。

2. 元雇員の1945年—8月15日まで

1945年，敗戦までの間，登戸研究所の所員たちの身には何が起こっていたのか。ここでは個人の記録・証言の残る人物に焦点を当てる。

(1) ^{はらじまかねふさ}原島兼房氏—召集された勤務員

登戸研究所から軍に召集された元勤務員もいた。次頁，第25図の日章旗はその中の一人，原島兼房氏が召集された際に送られたものである。

原島氏はどんな1945年を生きたのか、ここでは8月15日までを見ていく。

登戸在住だった原島氏は1942（昭和17）年の春から登戸研究所の庶務科経理班給与係で働き始めた（当時16歳）。毎月10日と22日に特別手当や給料のためのお金を日本銀行に受け取りに行くのが主な仕事であった。主計の上官が付き添っていたとはいえ、当時10代の雇員が相当な金額を受領する役を任された。日銀に行く際は、研究所所長・篠田鎌少将（当時）の車（ドイツ車のベンツ）で、ボンネットに黄色旗（将官旗）を立てて走行したので他のドライバーは徐行していた、と原島氏は回想している⁽³⁴⁾。

登戸での経理業務の経験が2年半ほどたった時、上官から召集令状が来るので準備をしておくよう命じられた⁽³⁵⁾。軍の重要な機関である登戸研究所であっても、勤務員が「徴兵逃れ」ができたとは限らなかった。

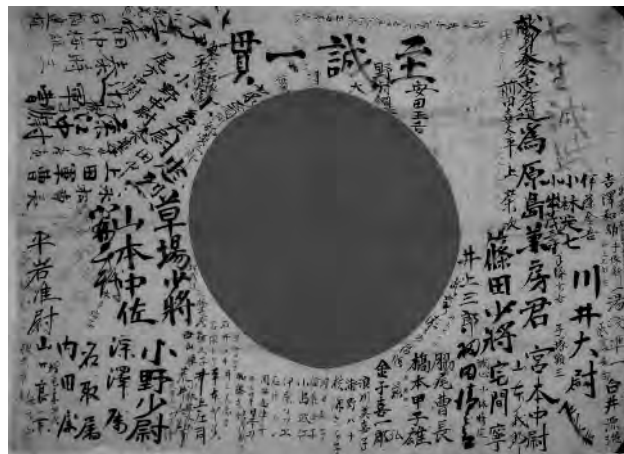
1945年2月13日、原島氏は召集令状を受け、16日には溝ノ口の東部第六十二部隊（歩兵第101連隊）に入営する。3ヶ月の初年兵教育では、毎日、「米兵の日本上陸を想定した攻撃一筋の訓練」や「蛸壺を掘って中に潜み、…戦車を爆破する演習」が行われた。その後、幹部候補生となりさらに訓練を受けたところで終戦を迎えた⁽³⁶⁾。

年 月 日		年齢	
1925（大正14）年	2月3日		現在の川崎市多摩区登戸にて出生
1941（昭和16）年	12月	16歳	帝京商業学校（現・帝京大学）を繰り上げ卒業
1942（昭和17）～ 1945（昭和20）年		16歳～ 20歳	登戸研究所庶務科経理班給与係として勤務
1945（昭和20）年	2月13日	20歳	召集令状を受ける
	同16日		溝ノ口の東部第六十二部隊（歩兵第101連隊）に入営、初年兵訓練のち幹部候補生教育を受ける
	8月		伍長昇任と同時に終戦

第4表 原島兼房氏略年表（終戦まで）



第24図 召集直前の原島兼房氏（原島花子氏寄贈）



第25図 原島兼房氏に送られた日章旗（原島花子氏寄贈）

寄せ書きの中には多くの勤務員の名前が見られ、登戸研究所の所長を務めた篠田鎌、風船爆弾作戦の責任者で第一科長だった草場季喜の名前も見える。また血書（血書きの文字）が、茶色く変色しているものの、現在でもよく残っている⁽³⁷⁾。

(2) ^{しょうじつぐお}正地次男氏—召集を免除された第三科勤務員

陸軍の中でもとりわけ成果を期待され、東条英機陸相にも「予算には不自由させるな」と言わしめた偽札謀略⁽³⁸⁾に関わる雇員については特別な配慮がされた。

第三科で偽札製造の検査係として勤務していた正地次男氏は、〔敗戦間際には繰り上がっていた〕召集の対象年齢である19歳当時、「登戸勤務中に召集令状が来たが、上司が横浜の連隊区司令部〔陸軍の召集管掌部門〕へ一本電話をかけたら、召集が解除された」⁽³⁹⁾と証言している。

(3) ^{あいづ やすのぶ}會津保進氏—少年工員の「の」の字バッジ

會津保進氏は、1944（昭和19）年に地元の登戸国民学校高等科を卒業後、14歳で第四科第二班の爆弾製造班に少年工員として勤務していた。敗戦間際の登戸研究所で上官に言われるがまま爆弾の製造に関わったという。現在でも当時の工員バッジを保管しており、これは資料館が把握する限りでは現存する唯一のものである。



左 第26図 左襟に工員バッジをつけた會津保進氏

右 第27図 登戸研究所工員バッジ

（ともに會津保進氏所蔵）

登戸研究所では写真のような少年も多く勤務員として働いていた。バッジには登戸研究所の頭文字である「研」の字がデザインされており、直径は約1 cmで身分や職種により色分けされていた⁽⁴⁰⁾。

3. 8月15日

ポツダム宣言受諾^{じゅだく}がすでに内密には決定されていたこの日、正午の玉音放送に先立つ朝8時30分、陸軍省軍事課は「特殊研究処理要領」を通達、登戸研究所は全ての証拠を隠滅することを命じられる⁽⁴¹⁾。

登戸研究所の関係者は8月15日をどのように迎え、過ごしたのか。その記録や証言を紹介する。（特に記載が無いものは全て資料館の聞き取り調査による。）

◆第二科第一班長 伴繁雄（疎開先の長野県伊那村分工場から上京中）

「通常の連絡業務として参謀本部兵器出張となっていたが、その目的は知らされていなかった。^{（ママ）}正午過ぎ、科学研究所内の分室で一科長の草場少将と偶然出会い、ともに玉音放送を聞いた。草場科長は午前中に参謀本部へ立ち寄っていたので、何らかの指示を受けていたような感じだった。放送を聞き終わると草場科長は再び参謀本部へ向かった。筆者〔伴繁雄氏〕は、用件をそこそこに翌十六日夜伊那に帰着した。」

（当資料館所蔵資料『伴繁雄手記』より）

◆庶務科（本部）女性勤務員（登戸研究所本部疎開先の長野県宮田村にて）

「玉音放送の前日に、明日は大切な放送があるから聞くように、と言われた。（中略）何を言っているかは解らなかったけど、上の人に負けたってことを教えてもらった。」

◆庶務科女性タイピスト（残留していた登戸分室にて）

「桜の木の下で玉音放送を聞いていたら、〔落ちてくる〕毛虫の事が気になった。何人ぐらいで聞いたかは忘れちゃったけれど、みんな疎開してしまったから少なかったと思う。」

◆第四科第一班男性工員（登戸研究所第四科疎開先の兵庫県小川村にて）

「小川村は山の中のため、玉音放送が聞こえなかった。天皇にがんばれといわれたと思った。」

◆風船爆弾に動員された高崎高女の女学生たち（風船爆弾製造が3月に終了した後、岩鼻火薬製造所などに動員されていた）

「8月15日は、動員先から学校へ戻れと言われ、和紙貼り合わせに使った作業台などを泣きながら校庭で燃やした。」

資料展示



左 第28図 佐藤耕寛筆「漁待つ人々」(当資料館所蔵) 173cm × 227cm, 日本画

右上 第29図 裏面に貼付された作品および作者名

右下 第30図 作品左下の落款の拡大写真

元研究所雇員⁽⁴²⁾の「大きな、漁師の奥さん達の絵が将校食堂にあった」との証言から、旧登戸研究所本館内の将校食堂に飾られていたと考えられる。これが研究所の食堂に飾られることとなった経緯は不明であるが、この証言から、1945年8月15日にも登戸研究所内にあったことはほぼ確実である。登戸研究所本館として使用されていた建物を1990年代まで使用していた当大学の就職課が長らく保管していた。

佐藤耕寛（1902生～1975没）について…雅号は耕寛，耕然莊。宮城県出身。

池田輝方，荒井寛方，堅山南風の門下で日本美術院院友。

登戸研究所との関係は不明である。

4. 特別展示

川崎市内に残っていた陸軍正装

企画展期間中には特別展示として陸軍の正装を展示した。第25図の日章旗を贈られた登戸研究所元所員，原島兼房氏の叔父にあたる人物が着用していたもの。



第31図 川崎市内に残っていた陸軍の正装—近衛砲兵少尉用上着、ズボン、肩章、尉官飾帯、正帽、前立て（原島弘氏寄贈）

通称、大礼服と呼ばれる。元陸軍中尉で近衛砲兵であった原島直治氏が着用していたもので、川崎市内で保管されていた。袖口、ズボンの黄色のラインは砲兵、袖の突起章（模様）が一本であることから少尉時代にあつたものであることがわかる。また、近衛兵の正帽は赤色で、尉官の前立ては白鷺の羽。正装は宮中参賀、靖国参拝、実家の冠婚葬祭などで着用された⁽⁴³⁾。



第32図 正装の原島直治氏（原島弘氏寄贈）

准尉の頃に撮影された写真で、着用しているのは准尉の正装であるが、前立てを付けた近衛兵正帽を着用している。

1901（明治34）年	6月28日	出生
1921（大正10）年	12月	陸軍工科学学校銃工科入学
1923（大正12）年	11月	近衛師団、近衛歩兵隊付
1932（昭和7）年	11月	近衛師団兵器部付、東京陸軍兵器補給廠
外地従軍歴 ＜第32師団司令部所属 楓部隊＞		
1943（昭和18）年	8月～ 翌年3月	中国華北山東省
1944（昭和19）年	3月～4月	中国華中
1945（昭和20）年	5月～ 翌年6月	インドネシア・ハルマヘラ島
1946（昭和21）年	6月	帰国・復員
1974（昭和49）年	10月19日	死去（享年73歳）

第5表 原島直治氏略歴⁽⁴⁴⁾

謝辞

本稿は2015年度に開催された明治大学平和教育登戸研究所資料館第6回企画展「NOBORITO 1945 - 登戸研究所70年前の真実 -」のうち、第一期の担当分の記録を目的として、企画展での展示内容にその後の研究成果をふまえて再構成・加筆・修正したものである。企画展に係る調査、ならびに本稿執筆に際し、以下の個人、各機関には多大なご協力をいただいた。本稿部分についてお世話になった皆様をここに記し、感謝の意を表する。(敬称略・五十音順)

會津保進/飯島町立飯島小学校/大月昌彦/北原いづみ/木下健蔵/栗山武雄/
公益財団法人松平公益会/小林治人/小林昭江/駒ヶ根市教育委員会/駒ヶ根市立中沢公民館/
駒ヶ根市立中沢小学校/下島大輔/下島元彦/正地次男/楚良深/高木さと子/高木幸伸/
原島花子/原島弘/平川豊志/細川陽一郎/三上峰緒/矢澤古里/弓削昭道

また、特に当大学講師・当資料館展示運営委員である渡辺賢二氏には、本企画展全般において企画立案、調査、資料提供ほか、ご助言、ご尽力をいただき、企画展の成功にただならぬ貢献をされたことに格別の感謝を申し上げます。

- (1) 斎藤充功『謀略戦 ドキュメント陸軍登戸研究所』(時事通信社, 1987) p.95には、すでに1944(昭和19)年9月には登戸研究所は「参謀本部と協議の上、地方に疎開を決定」していたとあり、木下健蔵『消された秘密戦研究所』(信濃毎日新聞社, 1994) p.315にも、疎開のために、「登戸研究所の関係者を最初に上伊那地方に連れてきたのは44年11月ころ」とある。
- (2) 当館所蔵資料1018「大月日誌」の記述において、「4月8日(中略)〔小川村〕谷川附近に決定す」、「4月27日 関西小川分所〔室〕設置の会議」と記載がある以降は疎開地の選定についての記述は見られず、このころに疎開先は全て決定されたとみられる。
- (3) 同前、5月25日の記述に「輸送班の慰労会を実施」とあり、疎開関係の輸送については一区切りがついたものと考えられる。その後、資材関係の輸送については別に継続された。
- (4) 同前、7月5日「登戸の編成会議。折角軌道に乗りかけた四科の制作業務が目茶目茶になりそうで困った」とあり、翌6日、7日と編成の会議が繰り返されている。
- (5) 中野校友会編『陸軍中野学校』(中野校友会, 1978) pp.58-59では、中野学校実験隊において登戸研究所資材が秘密戦の実行手段としての実験研究の対象になっていることがわかる。また、登戸研究所第二科第一班班長であった伴繁雄が、昭和17年5月~18年6月の期間において中野学校の実験隊の第五班に所属し、同期間に他の「登戸研究所所員」も編成に組み込まれていたことが記載されている。
- (6) 登戸研究所と中野学校の関係は同前 pp.132-137に詳しい。
- (7) 同前 pp.635, 639ほか。
- (8) 元登戸研究所中沢分室動員学徒小林昭江氏証言。
- (9) 伴繁雄『陸軍登戸研究所の真実』(芙蓉書房出版, 2001) p.195。
- (10) 元登戸研究所第四科第二班勤務員會津保進氏証言。作業に従事した場所についても同様。
- (11) 元登戸研究所第二科第四班勤務員栗山清氏証言。

- (12) 元兵器行政本部技術部制式課タイプスト三上峰緒氏証言。第1図の示す兵器行政本部の技術部，調査部が疎開した場所についても同様。元々兵器行政本部は新宿の百人町にあった。伴，前掲書p.195にも11万坪の敷地のうち，登戸分室が使った2000坪の他は兵器行政本部へ移管された，とある。
- (13) 木下，前掲書p.313。
- (14) 渡辺賢二氏聞き取りによる元登戸研究所第三科勤務員大島康弘氏証言。
- (15) 元登戸研究所第四科第一班勤務員伊澤昭三氏証言。
- (16) 元登戸研究所輸送班臨時勤務員証言（氏名不詳）。
- (17) 宮田村誌編纂委員会編『宮田村誌下巻』（宮田村誌刊行会，1983）pp.106,844。
- (18) 元登戸研究所勤務員証言（所属・氏名不詳）。
- (19) 平川豊「松本強制労働調査団 安曇野の戦争遺跡の戦跡巡りツアーについて概略」（『第18回戦跡保存全国シンポジウム 神奈川県川崎大会 分科会提出リポート集』）。
- (20) 木下，前掲書pp.358-359。北安分室での研究については日本兵器工業会編『陸戦兵器総覧』（図書出版社，1977）pp.598-599にも詳しい。
- (21) 小林聖心女子学院教諭楚良深氏聞き取りによる，関係者〔元多摩陸軍技術研究所関西出張所研究員か〕証言。
- (22) 元登戸研究所第四科第一班勤務員栗山武雄氏証言。
- (23) 本稿 第13図 登戸研究所製造の放火用謀略兵器と思われるもの（矢澤古里氏寄贈）を指す。
- (24) 伴，前掲書pp.44,72-76。焼夷剤は「成型レンガ型焼夷剤」，爆弾の，「味噌のようなペースト状」の爆薬は登戸研究所が開発した遊撃部隊用兵器としての小型爆発缶や缶詰型変形爆薬に使用する「研「う」薬第三号」をそれぞれ指すものと考えられる。「研「う」薬第三号」の材料は「医薬品ウロトロピンを硝酸で処理してできた化学名トリメチレントリニトラミンという新爆薬を主剤としたもの」で，現在のプラスチック爆弾の主成分。
- (25) 木下，前掲書pp.326,354-355。
- (26) 同前pp.355-364。
- (27) 草場氏関係者証言。
- (28) 木下，前掲書p.360。
- (29) 伴，前掲書p.195。
- (30) 「山田愿蔵手記」。
- (31) 前掲書『陸戦兵器総覧』p.762。
- (32) 同前p.549-565。
- (33) 明治大学理工学部協力の簡易実験による。
- (34) 当館所蔵資料891原島兼房『自我の綴り』（自費出版本）。
- (35) 同前。
- (36) 同前。
- (37) 当館所蔵資料890「原島兼房氏旧蔵 アルバム」中の，召集時の写真の添え書きに，「日の丸の旗血書の文字も勇々〔ママ〕しく…」とある。
- (38) 山本憲蔵『陸軍贋札作戦』（現代史出版会・徳間書店，1984）pp.109-110。
- (39) 正地次男氏本人より資料館聞き取り。
- (40) 會津保進氏本人より資料館聞き取り。
- (41) 渡辺賢二『陸軍登戸研究所と謀略戦』（吉川弘文館，2012）p.159。
- (42) 元登戸研究所勤務員高木さと子氏。
- (43) 中西立太『日本の軍装』（大日本絵画，1991）pp.6-9,22-23。
- (44) 当館所蔵資料1251-2「写真（1251-1）〔本稿 第32図〕補足メモ（原島直治略歴と原島兼房との関係について）」（原島弘氏寄贈）。

参考文献（編著者五十音順）

- 海野福寿・山田朗・渡辺賢二『陸軍登戸研究所—隠蔽された謀略秘密兵器開発』（青木書店，2003）
- 川崎市中原平和教育学級編『私の街から戦争が見えた』（教育資料出版会，1991）
- 木下健蔵『消された秘密戦研究所』（信濃毎日新聞社，1994）
- 斎藤充功『謀略戦—ドキュメント陸軍登戸研究所』（時事通信社，1987）
- 永瀬ライマー桂子，河村豊「日本における強力電波兵器開発計画の系譜　一戦時下の「殺人光線」に関する検討—」（『IL SAGGALATORE』No.41，2014（訂正版20140619））
- 中野校友会編『陸軍中野学校』（中野校友会，1978）
- 日本兵器工業会編『陸戦兵器総覧』（図書出版社，1977）
- 伴繁雄『陸軍登戸研究所の真実』（芙蓉書房出版，2001）
- 防衛庁防衛研修所戦史室編『戦史叢書　本土決戦準備<1>　関東の防衛』（朝雲新聞社，1971）
- 防衛庁防衛研修所戦史室編『戦史叢書　大本営陸軍部<10>　昭和二十年八月まで』（朝雲新聞社，1975）
- 松尾博志『電子立国を育てた男　八木秀次と独創者たち』（文藝春秋，1992）
- 松平公益会編『松平頼明伝』（松平公益会，2004）
- 渡辺賢二『陸軍登戸研究所と謀略戦』（吉川弘文館，2012）

第6回企画展「NOBORITO 1945 ―登戸研究所70年前の真実―」

第一期 8月15日まで登戸研究所

分散疎開と継続された秘密戦研究を中心に 展示資料一覧

番号	資料名	員数	所蔵者など	資料番号	備考
1	木箱	1	大月昌彦氏寄贈	1045	第12図
2	登戸研究所製造の放火用謀略兵器と思われるもの	1	矢澤古里氏寄贈	1272	第13図
3	登戸研究所中沢分室で製造していた爆弾と焼夷剤の模型の複製	1	資料館複製	—	原模型作成：小林治人氏 第14図
4	登戸研究所蔵書印付書籍『植物研究雑誌第3巻』,『同第6巻』	各1	駒ヶ根市立中沢小学校寄贈	1297, 1298	第15図
5	登戸研究所使用薬品瓶	1	宮下与兵衛氏寄贈	1138	第15図
6	飯島国民学校校舎転用関係書類〔具申書〕(複写)	1	飯島町立飯島小学校提供	1256	第16図左
7	飯島国民学校校舎転用関係書類〔学校施設転用利用状況〕(複写)	1	飯島町立飯島小学校提供	1258	第16図右
8	飯島国民学校当直日誌〔表紙と一部抜粋〕(複写)	1	飯島町立飯島小学校提供	1267	巻頭(表紙欠), 6/16, 7/6, 8/6抜粋 第17図
9	日章旗	1	原島花子氏寄贈	888	第25図
10	登戸研究所工具バッジ	1	會津保進氏所蔵	—	展示期間2015年8月5日～9月26日 (以降は当館製作レプリカを展示) 第27図
11	『漁待つ人々』	1	資料館所蔵	1250	第28図
12	軍服ズボン	1	原島弘氏寄贈	897	第31図左
	軍服上着	1		898	
	軍服肩章	1組		900	
	軍服尉官飾帯	1		901	
13	軍服正帽	1	原島弘氏寄贈	902	第31図右
	軍服正帽用前立て	1		903	

第6回企画展「NOBORITO 1945 ―登戸研究所 70年前の真実―」記録

展示 第二期：8月15日以降の登戸研究所 戦後の登戸研究所の証拠隠滅作業・勤務員の復員・関連研究の活用

椎名真帆

明治大学平和教育登戸研究所資料館特別嘱託学芸員

はじめに

1945年、8月15日の終戦にともない登戸研究所は解散した。ここでは、その翌日から行われた証拠隠滅作業や復員した勤務員の記録、また戦後、登戸研究所の研究が活用された例を取り上げる。

1. 登戸研究所の証拠隠滅作業

8月15日、特殊研究処理要領が下達された登戸研究所では、各地の疎開先を含め、約2週間、証拠隠滅作業を行った。所員、雇員だけでなく、国民学校の学徒も動員されて作業が進められた。器材・書類などを燃やしたため、研究所の周辺は煙が蔓延した。証拠隠滅作業の後、年内のGHQによる接収を経て、残務処理は翌1946（昭和21）年初頭まで続いた⁽¹⁾。

(1) 8月15日直後から始まった証拠隠滅作業



第1図

中沢小学校の校庭（資料館撮影）

右奥には校舎が見える。登戸研究所の使用機材の燃え残り（瓦礫）が大量に発掘された。資料館が寄贈をうけたのは、写真中央右寄りの取水枡周辺から2014年7月に採取されたもの。

登戸に残った者も、疎開先で関わった者も、共通しているのは「穴を掘って〔登戸研究所の証拠となる書類や器材を〕燃やして埋めた」という証言である⁽²⁾。登戸研究所の疎開先として最も規模の大きい「中沢製造所〔分室〕」があった長野県駒ヶ根市の中沢小学校では、敗戦直後に燃やして埋められた研究器材の燃え残りと思われるガラス片や焦げたレンガ様のものが、最近まで大量に発掘されていた。



第2図

採取時の状態で撮影された中沢小学校校庭の瓦礫

(資料館撮影)

熱で溶けた試験管や薬品瓶と思われるガラス片，レンガ様の物質などが確認できる。

毒入りチョコレート誤食事故

同じく登戸研究所の疎開先，伊那村分工場として使用されていた伊那村国民学校（現・駒ヶ根市立東伊那小学校）では，8月18日，証拠隠滅作業中に，校内で見つけた毒入りチョコレートを動員された学徒に誤って与えるという事故が起こった。将校の判断で，胃を洗浄するなどの処置により，幸い学徒は無事だったようである⁽³⁾。伊那村分工場に動員予定であったある人物は，「[敗戦間際に同所に出向き] 毒入りチョコレート製造の任務を遂行する予定だったが，駅に着いた途端，敗戦になりとんぼ返りした」と証言をしている⁽⁴⁾ ことから，毒入りチョコレートは疎開先で計画的に製造されていた事が分かる。これらは米軍の上陸に備え，後方攪乱のための兵器として準備されたとも考えられる。

印校長		気正温午	天候	日曜	上日	八月八	事皇御
他ノ其	品物書文	児童生徒	職員	事	行		項係影
登戸学徒有毒チョコレート誤食事前処置完了	健康優良児童図書贈与 タニシロ已ラセテ三ツ日送附 丁度ヨ通先神別課		下島出立早良	一水泳中止 (チブス係連)	一戦車隊跡三隊とテ 証書月留下貯し庫底へ		

第3図

伊那村国民学校昭和20年8月18日の学校日誌

(駒ヶ根市立東伊那小学校提供)

左端，「その他」の項目に「登戸学徒有毒チョコレート誤食事前処置[事後処置の誤りか]完了」と記載されている。

(2) 「偽札」の行方

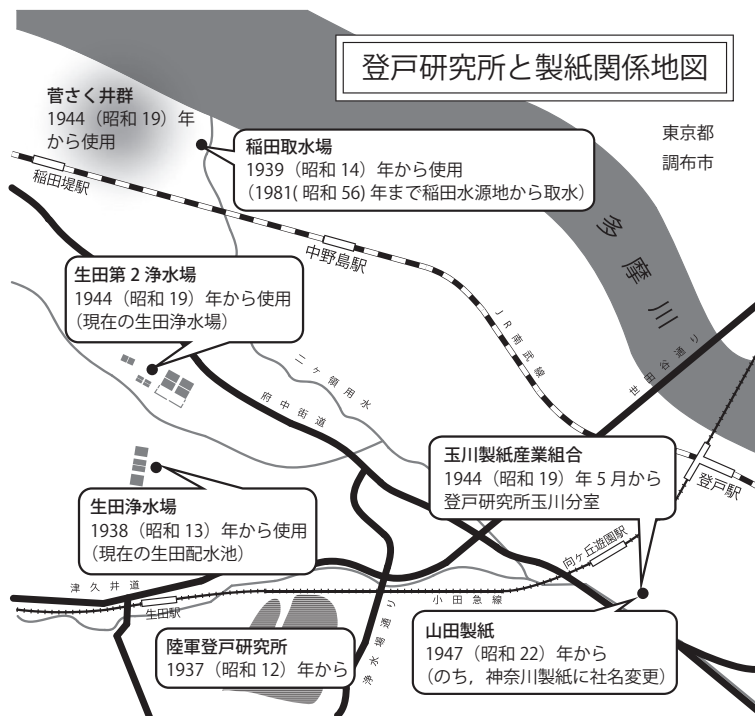
登戸に残留した第三科の偽札の印刷部門は，敗戦直後から，大きな印刷機は谷に埋めるか大手印刷会社へ払い下げ，残っていた偽札は燃やして多摩川に流し，証拠隠滅を図った。しかし，

多摩川の水量が十分でなく、堰の蛇籠〔小石が詰められた竹籠〕にひっかかった灰は、灰となっても偽札であることがわかったため、「夜中に腰越漁港付近の相模湾から海に流すことにした」(元第三科勤務員正地次男氏の証言より)。

また、偽札とはわからない切れ端や製紙原料は証拠隠滅せず、登戸研究所の分室(現・ダイエー向ヶ丘遊園店)で保管し、その後同所に設立された山田紙業へ払い下げた。紙不足かつパルプ調達も困難だった戦後日本の状況下で、上質な紙幣原料・紙を入手できたことは同社にとって大きな成果であった⁽⁵⁾。



第4図
現在の多摩川の川崎市多摩区宿河原付近の堰
(資料館撮影)
多摩川では偽札の灰を流しただけでなく、
爆弾の爆破処理も行った。

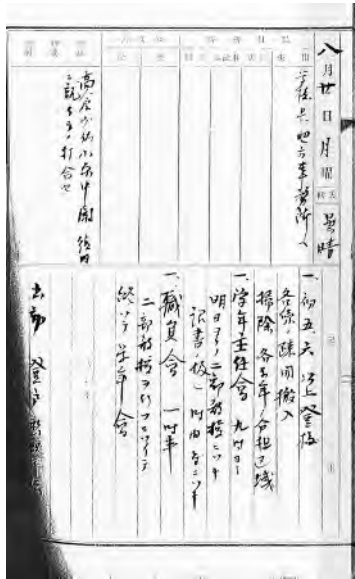


第5図
登戸研究所と製紙関係地図
(資料館作成)

資料展示

第6図 疎開してきた登戸研究所に関する記載のある国民学校の日誌〔複写〕

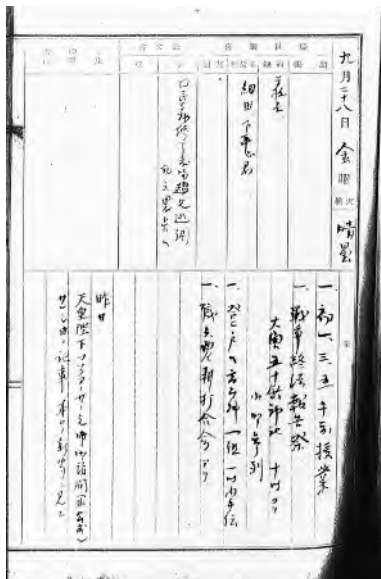
駒ヶ根市内の各国民学校、青年学校の学校日誌、学級日誌などには、1945年8月以降、登戸研究所の証拠隠滅に学徒動員されたことや、残務処理のために翌年まで所員らが入りを出入りをしていたことがわかる記載が残っている。10月には進駐軍の接収について、また翌年3月には登戸研究所が学校を引き上げた記載が見られる。



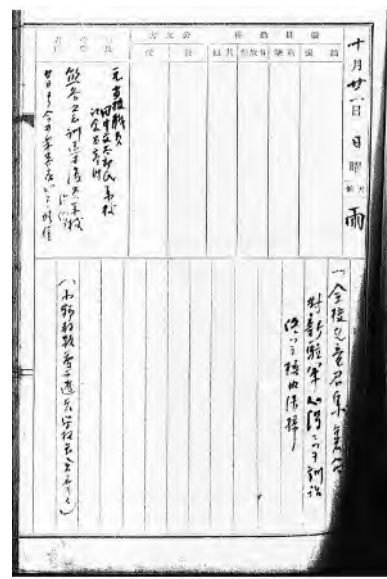
第6図の1
赤穂国民学校昭和20年度学校日誌 8月20日
(駒ヶ根市立赤穂小学校提供)
記事欄左端、「出動 登戸整理手伝い」



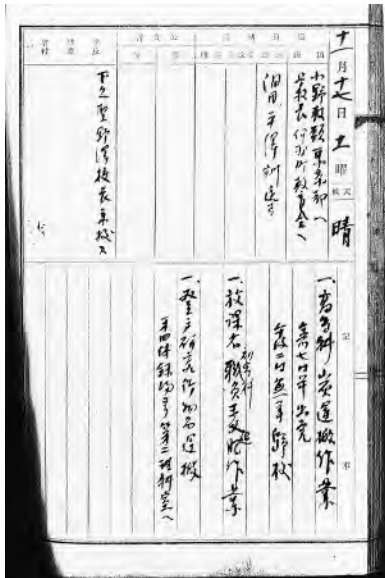
第6図の2
同 8月24日
記事欄「一、登戸分場学徒出動解散式午前十時」



第6図の3
同 9月28日
記事欄「一、登戸へ高等科一組 一時間手伝い」



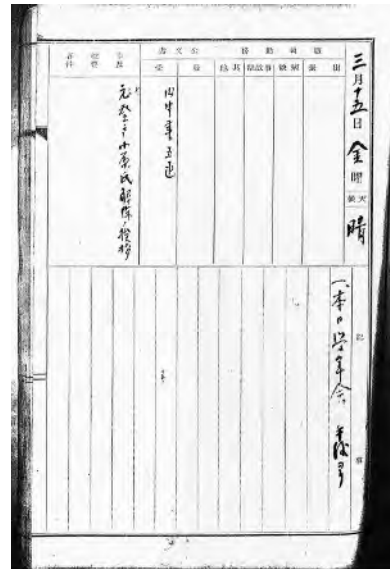
第6図の4
同 10月21日
記事欄「一、全校児童召集午前八時 対進駐軍心得につき訓話 終わって校内清掃」
※この後、10月25日に進駐軍が伊那谷を訪れている。



第6図の5

同 11月17日

記事欄「一、登戸研究所物品運搬 第四体練場より第二理科室へ」



第6図の6

同 3月15日

来校者および要件欄「元登戸小原氏解除の挨拶」



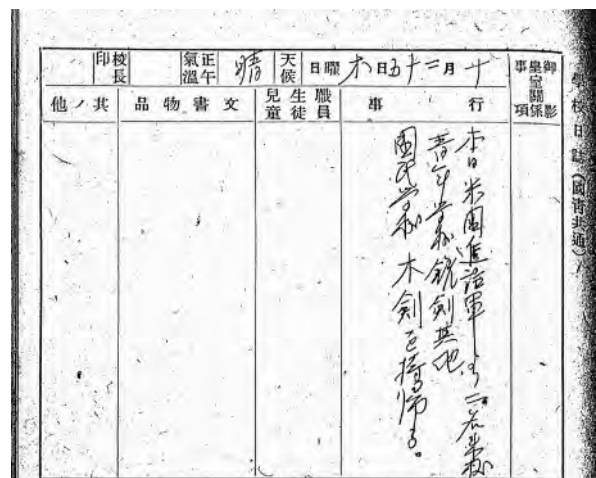
第6図の7

中沢青年学校昭和20年度2・3年男子学級日誌

9月30日

(駒ヶ根市立中沢小学校提供)

2, 3 限目「登戸の手伝をした。」、反省欄「今日は二、三年は登戸の御手伝をした 自動車に乗ってとても面白かった」



第6図の8

中沢国民学校昭和20年度学校日誌 10月25日

(駒ヶ根市立中沢小学校提供)

行事欄「本日米国進駐軍より二名来校 青年学校 銃剣 その他、国民学校 木剣を持帰る。」

省友	7	6	5	4	3	2	1	時限	朝礼	印
		家	家	家	普	普	修	学	登戸に貸した教室	二月十六日
		平井	平井	平井	田村	田村	北原	学	朝礼	登戸に貸した教室
					英語	英語	英語	学	朝礼	登戸に貸した教室
					英語	英語	英語	学	朝礼	登戸に貸した教室
					英語	英語	英語	学	朝礼	登戸に貸した教室
					英語	英語	英語	学	朝礼	登戸に貸した教室
					英語	英語	英語	学	朝礼	登戸に貸した教室
					英語	英語	英語	学	朝礼	登戸に貸した教室
					英語	英語	英語	学	朝礼	登戸に貸した教室
					英語	英語	英語	学	朝礼	登戸に貸した教室

第6図の9
中沢青年学校昭和20年度2・3年女子学級日誌 2月16日
朝礼欄「登戸に貸した教室も又一つあいたのこれからそこを講堂にして朝礼を行う」

印校長	氣正温午	天候	日曜	本	日	七	月	三	事象印
他ノ共	品	物	器	文	兒童	生徒	職員	事	行

第6図の10
中沢国民学校昭和20年度学校日誌 3月7日
行事欄「登戸関係者本日を以て学校より引上ぐ、山田大佐他一名挨拶に来校」
※山田〔桜〕大佐は登戸研究所第2科科長。疎開先の中沢分室の責任者でもあった。



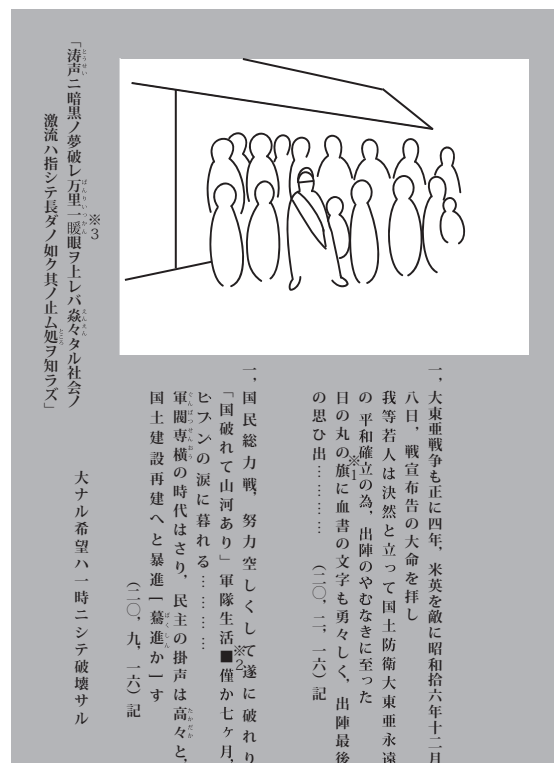
第7図
中沢小学校校庭採取物
(駒ヶ根市教育委員会寄贈)
2014年7月、中沢小学校校庭整地工事の際に採取された、本稿第2図のバケツに入る残土様のものから取り出したもの。かつて登戸研究所が工場や研究室として使用した同校の教室では、研究機材を焼却して埋め、証拠隠滅作業が行われた。
採取物中の黒いすすけた実験器具らしきガラス片や炭化した物質などがこれを裏付ける。

2. ある雇員の1945年—8月15日以降—

復員した原島兼房氏

元登戸研究所勤務員で、召集された際に日章旗を送られた原島兼房氏は、1945年2月より初年兵教育、その後幹部候補生教育を受け、伍長に昇進したところで終戦を迎えた。そして9月16日に解放され、復員する。召集前と復員後ではその心の内にはどのような変化があったのであろうか。8月15日を挟んでの思いがこの1ページに綴られている。

資料展示



- ※1 第2章の日章旗を指す。
 ※2 書き損じか。
 ※3 大いに見る、の意を持つ字。読みは「カン」。(『大漢和辞典』より)

第8図

原島兼房氏のアルバム（左）と書き下し（右）

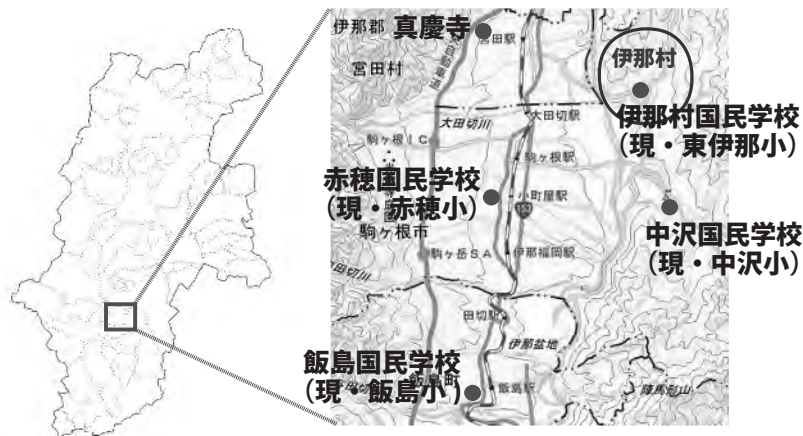
3. 元所員による戦後の関連研究の活用

所員の中には8月15日の敗戦の後にも登戸研究所での研究や人脈を生かした人物もいた。ここでは、疎開先の長野県にその後一時的に移住、起業をした伴繁雄氏や、関連研究に従事した元所員たちを追う。

(1) 伴繁雄の上伊那農村工業研究所

① 疎開後の長野県での起業

登戸研究所の疎開先の一つ、伊那村分工場の工場長として敗戦直後から現地で戦後処理を続けていた伴繁雄氏（疎開前は第二科第一班班長）は、伊那地域の「雄大な自然に魅せられ一時的に居を構えることにし、家族と共に移り住」んだ（資料館所蔵「伴繁雄手記」より）。そして他の元所員らと協力し、多様な日用品を製造する「上伊那農村工業研究所」を設立する。もともとこの地域では地下資源としてアルミニウムの原料にもなる「白土」が多く埋蔵されており、それらを利用した製品を製造する企業の一つとなった。



©mapfinemakeyuri.com

第9図
長野県伊那地域で登戸研究所に使用された主な施設と伊那村(当時)の位置
(地理院地図電子国土Webほかより筆者作成)

② 登戸の研究成果の利用ーパーマネントキャンドル

上伊那農村工業研究所が製造開発した商品で、登戸研究所時代に開発した挺進隊用資材の理論、体験を応用した一例である。戦後の電力不足に対応し、山間辺地に適した特殊なろうそくで、近隣の飯田市で大規模火災があった際にも役立てられた。燃料のパラフィンの補充と芯の交換ができる、理論上では永久使用が可能なものであった⁽⁶⁾。



第10図
伴繁雄氏と燃焼するパーマネントキャンドル
(木下健蔵氏寄贈、1989年撮影)

③ 元事務職員が見た「上伊那農村工業研究所」

松崎昭子氏は女学校を卒業後、1946（昭和21）年4月から上伊那農村工業研究所に事務職員として勤務した人物で、当時の様子を証言している。

「工場はもともと田んぼだった場所で、初めは集会所を使い、農機具や石鹼、マッチなどの日用品を製造していた。また、山から持ってきた「白土」の研究をしていた。最盛期には従業員は22～23人いた。伴氏は軍人の雰囲気が残る無口な人柄だったが、怖い印象ではなかった。〔戦後、伴氏が関連を疑われた〕帝銀事件⁽⁷⁾に関する書類の清書を頼まれたこともあった。」

この証言は伴繁雄氏の残した手記を裏付ける。また、松崎氏が伴氏の工場で勤務していた時に支給された、白土を使用したベントナイトクレンザーが近年発見され、当資料館に寄贈された。



第11図

長野県農業会伊那村工場（＝上伊那農村工業研究所）製造「ベントナイトクレンザー」外箱

（新井幸徳氏寄贈）

上伊那農村工業研究所が長野県農業会（現在の農協）の専属指定工場となり、地元産の白土（ベントナイト）を利用して製造した日用品の一つ。1950（昭和25）年に閉鎖されるまで事業は続いた。

(2) 日本高周波株式会社

① 電波兵器開発者たちの戦後

登戸研究所が分散疎開した際、電波兵器を開発していた北安分室があった長野県北安曇郡池田町には、「日本高周波株式会社（本社：横浜市）」の一部も疎開していた⁽⁸⁾。この企業は1932（昭和7）年に電磁波の研究開発のために設立された。高周波、レーザー、真空の技術といった登戸研究所の怪力電波開発にもつながる研究を行い、電波の研究機材等を製作していたと考えられる⁽⁹⁾。北安分室の、く号（怪力電波）兵器開発担当の笹田技師も戦時中から日本高周波の研究室をよく訪れていた⁽¹⁰⁾。また戦後、同社には第一科長であった草場季喜^{くさばすえき}や笹田技師が役員として招かれ、元第一科所員ら数名が勤務した。1950（昭和25）年に横浜に戻るまで、日本高周波は池田町で研究を継続した。

その後は登戸研究所の研究にも関連が深い、マイクロ波の技術に最も早く取り組んだ⁽¹¹⁾といわれ、戦後、日本高周波に勤務した元登戸研究所第一科所員 山田愿蔵氏は手記に以下のように残している。

私は戦後間もない昭和二十二年七月、笹田技師や草場少将の紹介により、横浜の日本高周波株式会社に入った。同社で電波エネルギーを通信以外の平和産業に利用することを考えているから、一緒に働かないかと声をかけていただいたのである。草場少将も笹田技師も、日本高周波KKの社長の信頼を受け、戦後に役員として招かれていた。私は陸軍の研究所で勉強した電波工学を、戦後、今度は平和産業に100パーセント利用することになった。その主なものを挙げれば、次の通りである。

- 一、木材の乾燥、ベニヤ板の接着、曲木
- 二、歯車、ミシン針の焼入
- 三、塩化ビニールの接着加工
- 四、ゲルマニウム、シリコンのゾーン精製
- 五、金属の半田付^{はんだづけ}、ロー〔蠟〕付溶解^{ろうづけ}
- 六、低温プラズマ装置（IC製造用）
- 七、高温プラズマ装置（超微粉の作製、シリコンファイバーの作製、ニューセラミック研究等用）

（元第一科所員「山田愿蔵手記」より）

② その後の電波の平和利用

登戸研究所が行った電波兵器に関する研究は応用され、現在は多岐に渡る用途で平和利用されている。山田愿蔵氏手記による戦後の技術の利用先と登戸研究所の電波兵器開発で到達した

成果を結びつけると次のようになる。



第12図
登戸研究所が到達した電波兵器開発の研究とその技術の利用先⁽¹³⁾
(日本高周波株式会社技術資料をもとに資料館作成)

資料展示



第13図
パーマネントキャンドル（左）とベントナイトクレンザー（右）
(木下健蔵氏（パーマネントキャンドル）／新井幸徳氏（ベントナイトクレンザー） 寄贈）
どちらも、伴繁雄氏が戦後設立した上伊那農村工業研究所（＝長野県農業会伊那村工場）で製造されたもの。
「パーマネントキャンドル」は登戸研究所で培った理論、実地の体験が生かされた、理論上は永久に使用できる特殊ろうそく。写真はその陶製の本体。
「ベントナイトクレンザー」は、伊那村（現・駒ヶ根市東伊那周辺）特産の白土（ベントナイト）を活用したもので、工場で事務職として働いていた女性の自宅に保管されていた。

謝辞

本稿は2015年度に開催された明治大学平和教育登戸研究所資料館第6回企画展「NOBORITO 1945 ー登戸研究所70年前の真実ー」のうち、第二期の担当分の記録を目的として、企画展での展示内容にその後の研究成果をふまえて再構成・加筆・修正したものである。企画展に係る調査、ならびに本稿執筆に際し、以下の個人、各機関には多大なご協力をいただいた。本稿部分についてお世話になった皆様をここに記し、感謝の意を表する。(敬称略・五十音順)

會津保進/新井幸徳/岸井三治/北原いづみ/木下健蔵/駒ヶ根市教育委員会 /
駒ヶ根市立中沢小学校/草場浩/正地次男/高木幸伸/原島花子/原島弘/松崎昭子

また、特に当大学講師・当資料館展示運営委員である渡辺賢二氏には、本企画展全般において企画立案、調査、資料提供ほか、ご助言、ご尽力をいただき、企画展の成功にただならぬ貢献をされたことに格別の感謝を申し上げる。

- (1) 各元所員の証言による。書籍では川崎市中原平和学級編『私の街から戦争が見えた』(教育資料出版会, 1989)などで確認できる。
- (2) 中沢地域などについても元登戸研究所中沢分室勤務員小林治人氏、同地域在住の下島大輔氏などから同様の証言がある。
- (3) 木下健蔵『消された秘密戦研究所』(信濃毎日新聞, 1994) pp.336-338。
- (4) 証言者の弟にあたる方より、お兄様の経験として資料館聞き取り。
- (5) 元登戸研究所第三科北方班勤務員岸井三治氏、元山田紙業従業員川村一夫氏の証言。
- (6) 当資料館所蔵資料「伴繁雄手記」pp.122-125には上伊那農村工業研究所での事業について記されている。なお、当該資料は、同氏による『陸軍登戸研究所の真実』(芙蓉書房出版, 1991)の原稿としてまとめられたが、著書には掲載されなかった箇所も多く残されている。
- (7) 戦後間もない1948(昭和23)年1月26日、閉店後の帝国銀行椎名町支店に一人の男が現れ、近辺で集団赤痢が発生したといって行員らを集め、予防薬と称して青酸化合物を飲まされた12人が毒殺された事件。当初、捜査本部は犯人が毒物に深い知識を持っていることに注目、その扱いに慣れている旧軍関係者の捜査を進めたが、捜査は一転、同年8月に画家の平沢貞通氏を逮捕した。1955年5月、平沢氏は死刑が確定。平沢氏は再審を訴えながらも1987年5月10日、獄死した。捜査の中で、登戸研究所関係者では、元第二科の伴繁雄氏ら複数名も事情聴取を受けており、中でも伴氏は、捜査会議や証人尋問においても、使用された青酸化合物についての意見を述べているが、捜査の当初と事件公判開始後では意見が異なっている。また、伴氏は登戸研究所において毒物開発の責任者であった土方博氏と合同で捜査本部に意見書を提出している。登戸研究所と帝銀事件の関わりについては、木下、前掲書pp.388-404に詳しい。
- (8) 元登戸研究所第一科科长草場季喜氏次男、草場浩氏より聞き取り。
- (9) 同前。
- (10) 同前。

- (11) 同前。
 (12) 「山田愿蔵手記」。
 (13) 日本高周波株式会社ホームページより 技術資料
 「電磁波の周波数・波長と用途」 <http://www.nikoha.co.jp/doc/freq.pdf>
 「高周波加熱装置の原理(2)」 <http://www.nikoha.co.jp/doc/genri.pdf> (ともに2015年8月閲覧)。

参考文献(編著者五十音順)

- 海野福寿・山田朗・渡辺賢二『陸軍登戸研究所—隠蔽された謀略秘密兵器開発』(青木書店, 2003)
 川崎市中原平和教育学級編『私の街から戦争が見えた』(教育資料出版会, 1991)
 木下健蔵『消された秘密戦研究所』(信濃毎日新聞社, 1994)
 伴繁雄『陸軍登戸研究所の真実』(芙蓉書房出版, 2001)
 渡辺賢二『陸軍登戸研究所と謀略戦』(吉川弘文館, 2012)

第6回企画展「NOBORITO 1945 —登戸研究所70年前の真実—」

第二期 8月15日以降の登戸研究所

戦後の登戸研究所の証拠隠滅作業・勤務員の復員・関連研究の活用 展示資料一覧

番号	資料名	員数	所蔵者など	資料番号	備考
1	『昭和20年度赤穂国民学校学校日誌』(部分複写)	1	駒ヶ根市立赤穂小学校提供	1130-1	8/20, 8/24, 9/28, 10/21, 11/17, 3/15の抜粋 第6図の1～6
	『昭和20年度中沢青年学校学級日誌』(部分複写)	1	駒ヶ根市立中沢小学校提供	1236	2・3年男子9/30, 2・3年女子の2/16の抜粋 第6図の7, 9
	『昭和20年度中沢国民学校学校日誌』(部分複写)	1	駒ヶ根市立中沢小学校提供	1132	青年学校学校日誌を兼ねる, 10/25, 3/7の抜粋 第6図の8, 10
2	中沢小学校校庭採取物	1	駒ヶ根市教育委員会提供	1273	2014年7月採取残土より選別したもの 第7図
3	原島兼房氏旧蔵 アルバム(一部)	1	原島花子氏寄贈	890	第8図左
4	上伊那農村工業研究所(=長野県農業会伊那村工場)製 パーマネントキャンドルとベントナイトクレンザー	各2	木下健蔵氏(キャンドル), 新井幸徳氏(クレンザー) 寄贈	205, 206(キャンドル) 1374(クレンザー)	第13図

第6回企画展「NOBORITO 1945 ―登戸研究所 70年前の真実―」記録

展示 第二期：8月15日以降の登戸研究所 元所員らの戦後

塚本百合子

明治大学平和教育登戸研究所資料館特別嘱託学芸員

はじめに

戦前の登戸研究所の活動については、登戸研究所関係者・ジャーナリスト・研究者らの論文・書籍、そして当館が2010（平成22）年に開館したことによって解明が進んでいる。しかし、戦後の登戸研究所関係者の活動については先行研究が少ない。そのため、第6回企画展第二期の準備段階等で新たに収集した証言・資料を基に、以下3点について解明することを本稿の目的とする。

第一に挙げるのは、GPSO（Government Printing Supplies Office＝政府印刷補給所）の活動である。この活動については今まで関係者から詳細に語られたことはなく、残っている記録は、伴繁雄（登戸研究所第二科第一班長）が『陸軍登戸研究所の真実』（芙蓉書房出版、2001年）を出版するにあたり用意した手記⁽¹⁾のみだった。本稿では、新規に他のGPSO関係者からも証言を集め、国土地理院が収蔵している横須賀上空の航空写真と併せて考えることで、GPSOの実態を解明することを試みる。

第二には、登戸研究所関係者の公職追放である。GPSOで勤務する元登戸研究所関係者がいる一方で、公職追放によって職を制限される関係者もいた。本稿では、1950年代に地元の村会議員に立候補した大月陸雄（登戸研究所庶務科）が残した関連資料を元に、登戸研究所関係者の公職追放について解明する。

第三に、登戸研究所関係者の交流によって、戦後何十年も語られることがなかった登戸研究所の活動が公になっていく過程を解明する。

1. GPSO（政府印刷補給所）と元登戸研究所関係者

(1) GPSOの発足

アジア・太平洋戦争後、ソビエト連邦（以下、ソ連）とアメリカ合衆国（以下、米国）の対立が深まり、1950（昭和25）年6月に朝鮮戦争が勃発する。その直前である1950年の春ごろ、元

第三科所員ら数名に、第三科長であった山本憲蔵（終戦時陸軍主計大佐）より突然連絡が入ったという。山本は高給を保証するだけで伝え、勤務先・仕事内容について具体的に触れることなく彼らに面接を求めた⁽²⁾。

山本は、GHQに召喚され取り調べを受けた後、1950年頃、米海軍横須賀基地内にあったFRU（野戦研究班）の下部機関であるGPSO（Government Printing Supplies Office = 政府印刷補給所）のチーフに抜擢される⁽³⁾。GPSOとは、米国が対共産圏、朝鮮戦争下で〈秘密戦〉を遂行するにあたり、必要な資材を供給するために設立したと考えられる組織である。

米国が山本をチーフに抜擢したのは、偽造券製造と流通に関する十分なノウハウを蓄積しており、かつ対ソ連情報戦の経験もあったためである⁽⁴⁾。要請を受けた山本は、元第三科所員10名ほどを集め⁽⁵⁾、初期GPSOを発足させる。初期は元第三科メンバーのみで構成されていたようだ⁽⁶⁾。

1952年、伴繁雄（終戦時陸軍技術少佐）の下に山本から連絡が入る。同年6月に山本は新拠点設置準備のためサンフランシスコに移るので、伴を横須賀でのGPSOチーフ後任にしたいという申し入れだった⁽⁷⁾。

第三科ではなく第二科だった伴に声がかかったのは、第二科では写真に関する高度な研究が行われていた点⁽⁸⁾、秘密インキを開発していた点（偽造には高度なインク知識が必要）、そして写真やインクの高度な知識・経験を持った元第二科所員を集めるには彼が適任だと考えられたためだと推測される。伴は山本の申し入れを受け、1952年4月よりGPSOのチーフとして米海軍横須賀基地に勤め始める。



第1図 GPSOのメンバーたち

個人蔵。1956～59年頃撮影。「GPSO」と書かれたフラッグを手にしている。撮影地は不明。右から2番目が山本憲蔵。

(2) GPSOの仕事内容

伴繁雄の契約期間は10年間であり、給与はドル建てで支払われた。当時は1ドル=360円だったため、一般的な日本人収入に比べ給与は高額だったと伴は手記に残している⁽⁹⁾。伴がチーフになってからは、従来の元第三科員に加え元第二科員、そして登戸研究所関係者以外からも優秀な人材が横須賀に集められ⁽¹⁰⁾、20人ほどの規模に拡大した。彼らは1961年にGPSOが横須賀から撤退し、サンフランシスコに移転するまで、2年交替でサンフランシスコと横須賀を

行き来していた⁽¹¹⁾。

横須賀では朝鮮戦争や共産圏との＜秘密戦＞のため、中国・北朝鮮・ソ連のパスポートや各種証明書の製造を行った。これらの国で使用されていた用紙は粗悪であり、印刷は凸版・オフセットで、高度な製紙技術・印刷技術を使ったものは稀だったそうだと⁽¹²⁾。また、真贋判定についての研究も元登戸研究所関係者たちによって進められ、登戸研究所で養われた技術・知識は米軍で活かされることとなった。

横須賀の工場は少量・多種品目生産の小規模なものだったと伴は手記に残している⁽¹³⁾。製造に必要な機械類手配は山本に一任されており、抄紙機（紙すき機）は登戸研究所北方班で使っていたものをベースに、国内の抄紙機メーカーに作らせていた⁽¹⁴⁾。第三科で養われた山本の偽造ノウハウに米軍が大きな信頼を寄せていたことが伺える。

その後、米国のベトナムへの介入が本格化する1961年以降、横須賀から完全移転したサンフランシスコでは、ベトナム紙幣の製造も行われた⁽¹⁵⁾。

(3) 勤務場所

基地内のどこで働いていたか、今まで具体的な場所が特定されたことはなかったため、ここでは勤務場所を特定することを試みる。

場所について述べられているのは、従来は伴手記のみであったが、2015年にGPSOで勤務していた2名から証言を得ることができ、伴手記および横須賀上空の航空写真と併せて考えることで具体的な勤務場所が見えてきた。

① 勤務場所についての証言

【横須賀について】

- ・横須賀基地内の正面ゲートから入って最も遠いトンネルをくぐった海辺にあり、人目につきにくいところだった。（「伴繁雄手記」138）
- ・正門まで専用のバスが迎えにきていた。ゴルフ場の近くだった。（細川陽一郎証言⁽¹⁶⁾）
- ・正門から入って左側、海沿いに行った旧日本海軍の建物で初めは働いた。1954年頃にトンネルをくぐった先の、突き当りを右にいった海辺を埋め立てた場所に施設を新たに建設し、ここに移転。ゴルフ練習場が近くにあった。松が浜という地名だった。（元第三科北方班・GPSOメンバーP氏証言⁽¹⁷⁾）

【サンフランシスコについて】

- ・郊外のサン・ブルーノにあり、施設はNED（Navy Engineering Division = 海軍機械部品補給処）と呼ばれた。（「伴繁雄手記」138）

② 航空写真との照合

証言にあった場所を航空写真で検証してみる。年代の異なる下記4点の航空写真において以下A～Cに注目していく。

A 初期GPSOがあった場所

B 「伴手記」およびP氏の証言にあるトンネル

C Aから移転後の施設があったと推定される場所。海岸沿いの地名が1958年「横須賀市街図」によると「松が浜」と明記されている点⁽¹⁸⁾、伴手記およびP氏の「トンネルをくぐった」という証言にも合致する点からそのように推定する。

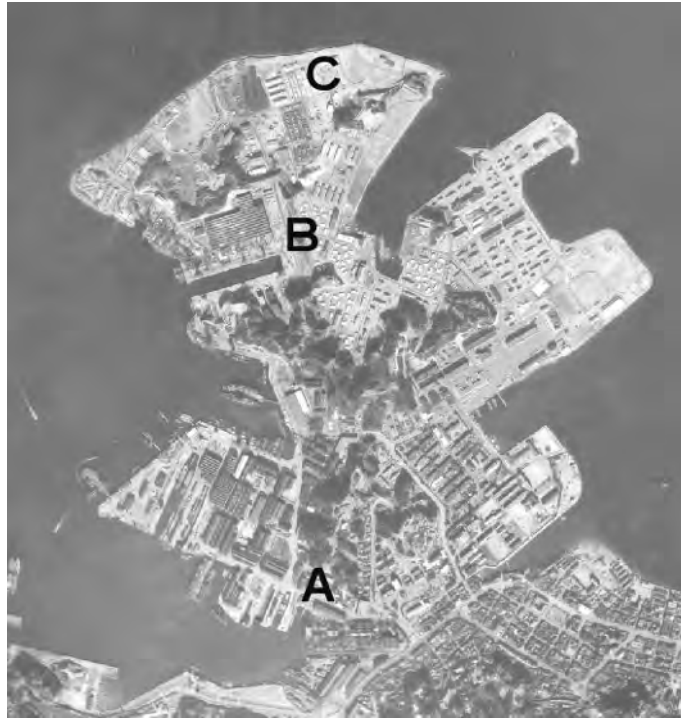


A部拡大



C部拡大

第2図 1947年の米海軍横須賀基地
同年2月米軍撮影，国土地理院所蔵。



A部拡大



C部拡大

第3図 1955年の米海軍横須賀基地
同年1月米軍撮影，国土地理院所蔵。



C部拡大

第4図 1963年の米海軍横須賀基地
同年6月米軍撮影，国土地理院所蔵。



第5図 現在の米海軍横須賀基地

右上2007年国土地理院撮影，国土地理院所蔵。左上，右下は2015年資料館撮影。

第2図はGPSOの活動が開始される前に撮影された航空写真である。A部をはじめとして多くの旧日本海軍施設が残っている。また、B部のトンネルも確認することができる。一方C部はまだ施設が整っていない。

第3図が撮影されたのは、サンフランシスコにGPSOの一部が移転し、横須賀とサンフランシスコを関係者が行き来していた時期である。第2図と比較すると、C部が整備されており、「(GPSOは)旧海軍施設を当初使用していたが(A部)、のちに松が浜に新たに施設を建設し、移転した」というP氏の証言を裏付けている。1955年までには、A部からC部へ移転したのであろう。

第4図は、GPSOがサンフランシスコに完全移転した後に撮影されたものである。完全移転した後もC部の施設はそのまま残っている。なお、A部については撮影範囲外のため資料はない。

第5図は、現在の米海軍横須賀基地である。A・B・C部が現存していることがわかる。第5図左上，右下に紹介している2点の写真は、A部に現存し、初期のGPSOが活動していたと推測される建物である⁽¹⁹⁾。ここは、戦前は日本海軍工廠造船部設計係製図工場・刷版所だっ

た⁽²⁰⁾。1階は元第三科員らがいた製紙関連、2階は伴繁雄チームがいたという証言が残っている⁽²¹⁾。

以上、伴手記、細川証言、P氏証言を航空写真と現存する建物より裏付け、具体的な勤務場所を特定した。

2. 登戸研究所関係者の公職追放

登戸研究所で庶務を担当していた大月陸雄（終戦時陸軍技術大尉）は、1951（昭和26）年の第二回統一地方選挙で地元である兵庫県・高橋村村会議員に立候補した。立候補した時期は公職追放期と重なるため、元軍人であった大月は、調査表など各種書類を選挙管理委員会に提出しなければいけなかった。その関係資料が2011（平成23）年当館に寄贈されたため、ここではこの資料を基に、登戸研究所関係者の公職追放について見ていくこととする。

(1) 公職追放

1946年1月4日、GHQは日本政府に対して、戦争犯罪人・陸海職業軍人・極端な国家主義者・国策会社の重要ポストだった人物など7つの項目を挙げ、該当する人物の公職からの罷免、官職からの排除を指令した⁽²²⁾。篠田鐮登戸研究所長、草場季喜同第一科長、山本憲蔵同第三科長は公職には就いていなかったが、公職追放潜在的該当者として1947年11月に仮指定されている⁽²³⁾。また、大月は終戦時大尉であったため、公職を希望する際は調査表（履歴書・職歴書から成る）を提出し、審査を受ける必要があった。以下、大月の調査表関連資料を紹介する。

第6図 海外旅行及滞留 補助紙（上）

大月昌彦氏寄贈。作成時期不明。大月陸雄が1938（昭和13）年から44年の間に兵器輸送のため、中国2回、満州2回行ったことがわかる。公職追放該当者に提出を求められた調査表関連資料と推定。

第7図 職業及軍務の履歴 補助紙（右）

大月昌彦氏寄贈。作成時期不明。大月陸雄が1945（昭和20）年10月26日まで登戸研究所の残務処理に関わっていたことがわかる。公職追放該当者に提出を求められた調査表関連資料と推定。

[illegible]

昭和三年二月九日 二島牧野村(勸令才工年 八才)	昭和三年二月九日 一善牧野村	昭和三年二月九日 中華民國(出張主命才)	昭和三年二月九日 間司港出張	昭和三年二月九日 長崎港出張	昭和三年二月九日 中華民國(出張主命才)	昭和三年二月九日 宮口港出張	昭和三年二月九日 長崎港出張	昭和三年二月九日 陸軍部研究部(勸令才工年 八才)	昭和三年二月九日 滿洲國(出張主命才)	昭和三年二月九日 宇呂港出張	昭和三年二月九日 下関港出張
-----------------------------	-------------------	-------------------------	-------------------	-------------------	-------------------------	-------------------	-------------------	------------------------------	------------------------	-------------------	-------------------

出石郡野村公用紙

昭和五年 二月十九日	工兵少尉 持命被仰付
昭和五年 四月十日	平海役被仰付 臨時召集 陸軍研究所 附付被仰付
昭和五年 六月十日	少尉 (勅令第五〇號ノ下ル)
昭和五年 七月二日	兵隊中尉
昭和五年 八月一日	陸軍技術本部附(南成改)兵隊中尉
昭和七年 十月十一日	才九陸軍技術研究部附(廣成改)中支那(有限生命)
昭和七年 十月十一日	福岡歸着
昭和七年 五月十六日	滿洲心(有限生命)
昭和七年 五月十七日	下関曉書堂

出石郡町村公用紙

昭和七年四月

昭和九年六月六日
八月十日
授爵中尉
九月五日
授爵大尉
九月二十日
二等叙下賜
昭和十年十月二十日
免本職

下関憲兵署

出石郡町村公用紙

昭和十年四月

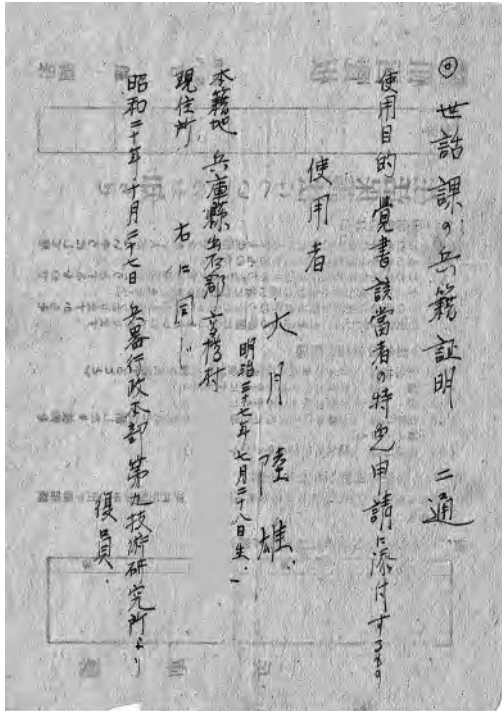
第8図 大月陸雄（陸軍技術大尉） 履歷書

大月昌彦氏寄贈。作成時期不明。1926（大正15）年11月30日～1945（昭和20）年10月27日までの大月陸雄の履歴。公職追放該当者に提出を求められた調査表関連資料と推定される

(2) 特免申請

米ソ間の対立が激しくなる中、日本は米国にとってアジア防衛に欠かせない重要な立場となるため、GHQは日本に対する占領政策を変更し、1949年2月8日に公職追放に対する特免措置を講じ、「第二次公職資格訴願審査委員会」を設置する。これを受け、各市町村では該当者に対し特免申請の手続きをするよう通知を出した⁽²⁴⁾。

大月陸雄も特免申請手続きを希望したことが第9図からわかる。

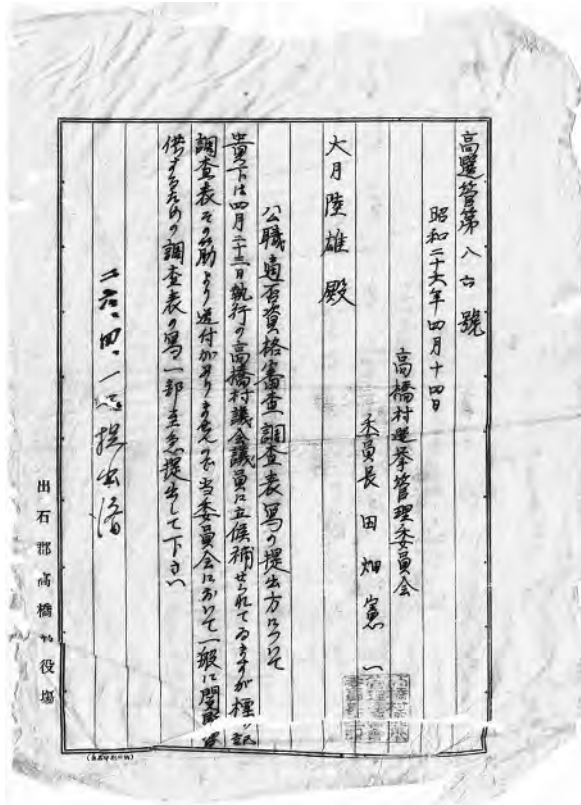


第9図 覚書該当者の特免申請に関するメモ
大月昌彦氏寄贈。作成時期不明。

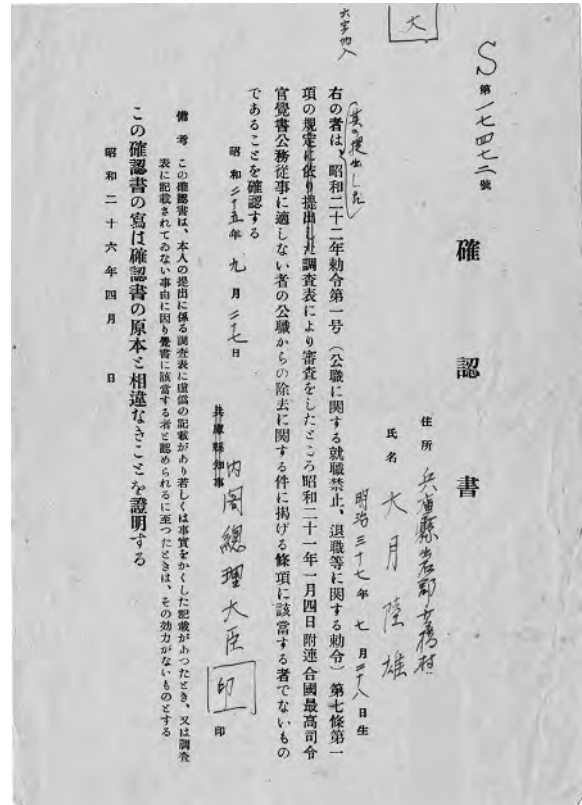
(3) 公職追放解除

朝鮮戦争勃発後の1951年6月20日に日本政府は第一次追放解除を発表し、一部の人々に対する公職追放が解除される（1952年のサンフランシスコ講和条約発効とともに全面解除）。

第一次追放解除前の1951年4月、第二回統一地方選挙において、大月は高橋村（兵庫県）村議会議員に立候補した。その際に、選挙管理委員会に公職追放に該当しないか調査表写しの提出を求められている（第10図）。また、立候補に前後して、大月が公職追放に該当しないことを示す確認書が用意されたことが第11図からわかる。



第10図 公職適否審査調査表寫の提出方について
大月昌彦氏寄贈。1951（昭和26）年4月14日発行。



第11図 確認書
大月昌彦氏寄贈。1950（昭和25）年9月27日付。

なお、第二回統一地方選挙日程は以下の通りである。

1951（昭和26）年4月3日	告 示
4月13日	立候補届出締切
4月20日	補充立候補届出締切
4月23日	投 票 日
4月24日	開 票 日

この選挙で大月の立候補が認められたかどうかは資料が残っていないため不明だが、公職追放全面解除後の1955年に行われた第三回統一地方選挙では当選し、町会議員を務めたことがわかっている⁽²⁵⁾。

3. 元勤務員らの戦後の交流

(1) 登研会発足と「登戸研究所跡碑」建立

1970年代末、生田近辺に住む元勤務員らから、「登戸研究所跡碑」を明治大学生田キャンパス内に建立しようという声上がる。その建立資金を集めるため、元同僚・上司らに呼びかけ「登研会」を発足することとなった。

第12図に示す第一回登研会案内状には「いつか一同が会して当時の話しに花を咲かせ語り尽くせたらと考えておりましたが、中々その機会をつくることが出来ず今日に至りました。この度有志の方々のご協力によりこの念願をはたす事がようやく出来ました（後略）」とある。

それまでも各科毎に名簿を作成し、OB会を設けるなど交流はあったが、科を超えて集まることはあまりなかったため⁽²⁶⁾、登研会が発足することで関係者に新たな交流が生まれた⁽²⁷⁾。登研会発足は、のちに渡辺賢二氏⁽²⁸⁾や川崎市民、高校生たちの手によって登戸研究所が解明されていくきっかけへと繋がっていく。

また、元第三科関係者らは独自に「三科会」を立ち上げる。これは、第三科の業務が他と比べても格段に秘匿性が高かったので、他科の人を交えることを避けていたためだった。三科会の中でも数名は登研会にも所属していたが、その数はごく僅かだった。

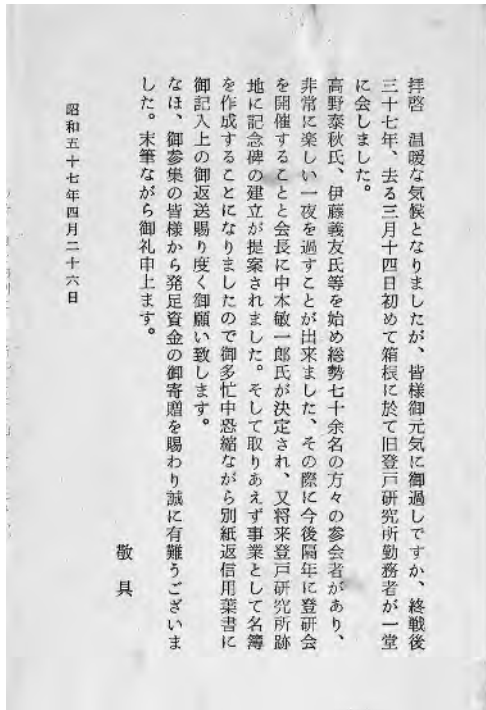
その後、1988（昭和63）～1989年頃に明治大学生田キャンパス内の生田神社境内に登戸研究所跡碑が建立される⁽²⁹⁾。裏面には「すぎし日は この丘に立ち めぐり逢う」という句が刻まれている。この句は、登研会メンバーの投票により三案の内から選ばれた。2000年頃から登研会に出席するようになっていた渡辺賢二氏は、登研会は科長・将校から雇員・工員に至るまであらゆる身分・科の人が参加していたが、上層部の意見が採用されたのではなく、身分や科を超えて、すべての元登戸研究所勤務員の思いが句にこめられていることに意味があると語っている⁽³⁰⁾。



第12図

第一回登研会案内状

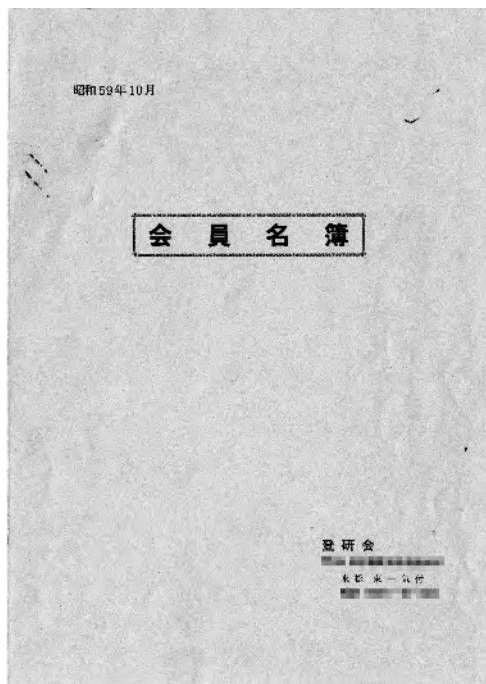
栗山武雄氏寄贈。1982年に登研会が初めて開催された。初代会長は庶務班長だった中本が務めた。



第13図
登研会名簿への参加を呼びかけるハガキ
栗山武雄氏寄贈。1982年(昭和57)年4月26日付。
「[[第一回登研会で] 登戸研究所跡地に記念碑の
建立が提案されました。』とある。



第15図
登戸研究所跡碑
2012年資料館撮影。



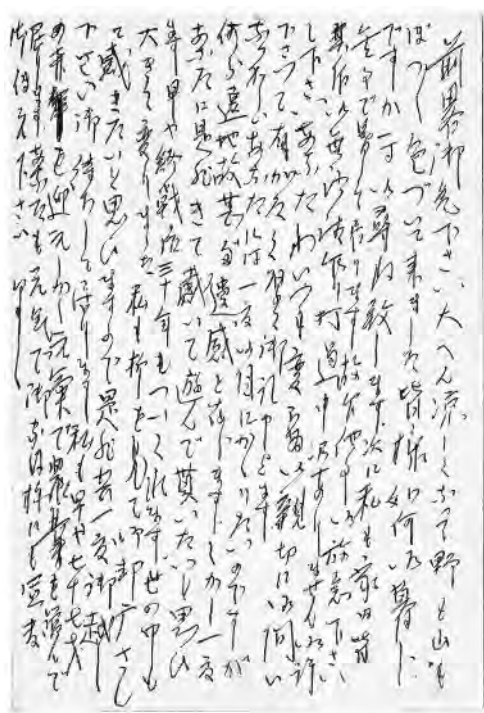
第14図
昭和59年版登研会会員名簿
洗谷光子氏寄贈。



第16図
登戸研究所跡碑除幕式の写真
洗谷光子氏寄贈。1989年春撮影。写っているのは伴繁雄。

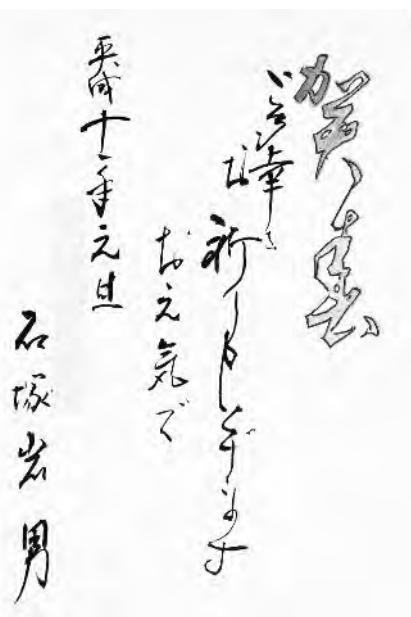
(2) 元勤務員と疎開先との戦後の交流

第四科で働いていた栗山武雄氏は、1945年4月の登戸研究所分散疎開時に兵庫県小川村へ疎開する。その際に、下宿した石塚家と長年に渡る交流があったことを示すのが第17図と第18図の資料である。昭和50年代に栗山氏が小川村を訪れた際には、当時の関係者が集められ歓待されたとのこと⁽³¹⁾。



第17図
ハガキ

栗山武雄氏寄贈。1974（昭和49）年10月11日付。
差出人：石塚奎治氏，受取人：栗山武雄氏。



第18図
年賀状

栗山武雄氏寄贈。1999（平成11）年1月1日付。差出人：石塚岩男氏，受取人：栗山武雄氏。岩男氏は奎治氏の息子。2世代に渡って交流が続いていたことがわかる。

(3) 元勤務員らによる記録の出版

GHQの取り調べ終了後、主として風船爆弾関係者らが作戦の概要や研究開発過程を公に発表するようになった。しかし、他の登戸研究所の活動については、詳細に公表されることはなかったが、1984年に第三科長であった山本憲蔵、2001年に第二科第一班長であった伴繁雄が自身の活動の全容をまとめた記録を出版したことは、他の元登戸研究所関係者に大きな影響を与えた。

① 山本憲蔵

山本憲蔵は、1981年にNHK総合テレビで放映された『歴史への招待～中国法幣贋造作戦』に出演をし、第三科の活動を語っている。これは、今まで公にされてこなかった登戸研究所第三科の活動を、関係者、しかも責任者本人がテレビで証言をするという初めての出来事だった。

それに続き、1984年には、自身の経験を基に第三科の活動についてまとめた『陸軍贋幣作戦』を現代史出版会より出版した。

この2つの出来事は、今まで「秘密にしなければいけない」と関係者が口を閉ざしてきたことが、「もう公になっているから話してもいい」と気持ちに変化するきっかけとなる。

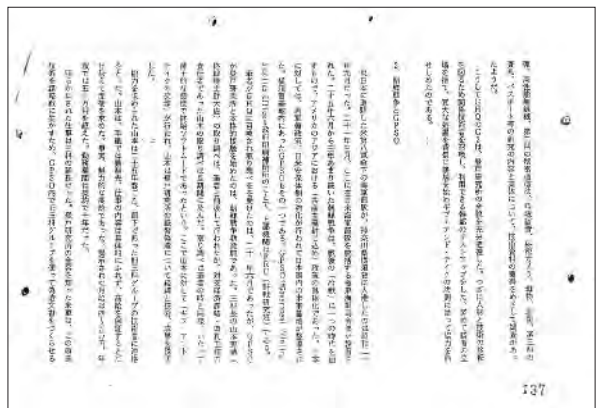
② 伴繁雄

第二科第一班長であった伴繁雄は、元同僚にも原稿協力と呼びかけ、1988年から5年ほどかけて、登戸研究所の全容を明かす『陸軍登戸研究所の真実』を書きあげる。第19図に示す妻および知人が代筆した草稿には何度も手が入れた跡が見られ、自身の経験を後世に残そうとする伴の強い思いが伝わってくる。また、第20図に示す「伴繁雄手記」には、書籍には掲載されていない帝銀事件やGPSOの活動など、戦後の自身の歩みについても詳しく書かれている。

しかし、伴は『陸軍登戸研究所の真実』が出版されるのを見届けることなく、1993年11月に亡くなる。その後、2001年に芙蓉書房出版社より同書が出版される。



第19図
『陸軍登戸研究所の真実』草稿
伴和子氏寄贈。



第20図
「伴繁雄手記」(複写)
渡辺賢二氏寄贈。『陸軍登戸研究所の真実』初期の原稿である。

おわりに

以上、新しい資料・証言を基に、本稿では元登戸研究所関係者の戦後の活動の一端について紹介した。GPSOについては、新たな証言が出てきたこともあり、複数名の証言を検証できたことで、活動の一端を解明することができた。しかし、公職追放も含め、本稿で紹介した登戸研究所関係者らの戦後についてはこの度の第6回企画展で紹介するのが初めての試みであり、資料収集・調査をこれからも継続し、より一層の解明を進めていかなければならない。

謝辞

本稿の基となる第6回企画展第二期「1945年8月15日以降の登戸研究所 一元所員らの戦後一」を執筆するにあたり、下記の方々・機関にご協力いただきました。ここに記して感謝の意を表します。(敬称略・五十音順)

大月昌彦, 岸井三治, 栗山武雄, 今野淳子, 米海軍横須賀基地, 細川陽一郎, 町井敏子, 森田忠正, 弓削昭道

《参考文献》(編著者五十音順)

- 神奈川県教育委員会『神奈川県の近代化遺産 - 神奈川県近代遺産(建造物等)総合調査報告書-』(神奈川県教育委員会, 2012年)
- 草場季喜「風船爆弾による米本土攻撃」(日本兵器工業会編『陸戦兵器総覧』, 図書出版社, 1977年)
- 自治大学校『公職追放』(自治大学校, 1964年)
- 伴繁雄『陸軍登戸研究所の真実』(芙蓉書房出版, 2001年)
- 増田弘『公職追放論』(岩波書店, 1998年)
- 増田弘『公職追放 三大政治パージの研究』(東京大学出版会, 1996年)
- 横須賀市『新横須賀市史』別編 文化遺産(横須賀市, 2009年)
- 渡辺賢二「陸軍登戸研究所の実相をみつめて」(歴史科学協議会編『歴史評論』8月号通巻772号, 校倉書房, 2014年)

第6回企画展「NOBORITO1945 ー登戸研究所 70年前の真実ー」

第二期 1945年8月15日以降の登戸研究所

元所員らの戦後 展示資料一覧

本稿図表 番号	資料名	所蔵先	資料番号	展示番号
第19図	『陸軍登戸研究所の真実』草稿	当館蔵(伴和子氏寄贈)	152	1
掲載なし	山本憲蔵『通貨謀略』の原稿(複写)	当館蔵(渡辺賢二氏寄贈)	164	2
第11図	確認書	当館蔵(大月昌彦氏寄贈)	1021	3
第10図	公職適否資格審査調査表寫の提出方について	当館蔵(大月昌彦氏寄贈)	1022	4
第9図	覚書該当者の特免申請に関するメモ	当館蔵(大月昌彦氏寄贈)	1023	5
第6図	海外旅行及滞留 補助紙	当館蔵(大月昌彦氏寄贈)	1024	6
第7図	職業及軍務の履歴 補助紙	当館蔵(大月昌彦氏寄贈)	1025	7
第8図	大月陸雄(陸軍大尉) 履歴書	当館蔵(大月昌彦氏寄贈)	1020	8
第13図	登研会名簿への参加を呼び掛けるハガキ	当館蔵(栗山武雄氏寄贈)	970	9
第12図	第一回登研会案内状	当館蔵(栗山武雄氏寄贈)	971	10
第17図	栗山武雄氏宛 ハガキ(石塚奎治氏より)	当館蔵(栗山武雄氏寄贈)	1363	11
第18図	栗山武雄氏宛 年賀状(石塚岩男氏より)	当館蔵(栗山武雄氏寄贈)	1364	12

- (1) 伴繁雄「伴繁雄手記」(1988～1993年頃, 当館所蔵資料No.1128) のこと。本稿第20図に紹介。
- (2) 伴, 同前137
- (3) 伴, 同前137, 138
- (4) 山本は1921(大正10)年, 陸軍経理学校卒業後, 歩兵第35連隊付, 歩兵第3連隊付, 第1師団, 第11師団経理部員などを経験した後, 1938年参謀本部第二部第七課兵要地誌班に配属されている。またこの間, 1929年にはロシア語研修のため東京外国語学校へ委託生として派遣されている(以上, 秦郁彦編「日本陸海軍総合辞典」東京大学出版会, 1991年より)。以上の経歴から, 山本は登戸研究所第三科長に任命される以前は, ソ連-満州国境域周辺で対ソ連情報戦を行っていたことがわかる。
- (5) 伴, 前掲資料138
- (6) 伴, 前掲資料138～140
- (7) 伴, 前掲資料138～139
- (8) 伴, 前掲資料140～141には第二科第5班(カメラ関係の秘密戦器材を研究開発)班長だった丸山政雄や細川陽一郎らをGPSOメンバーに加え, 偽造防止用の無色印刷インキの研究試作実験を重ねたとある。
- (9) 伴, 前掲資料138-139
- (10) 伴, 前掲資料140
- (11) P氏(仮名)より筆者聞き取り, 2015年10月9日。伴, 前掲資料141～142には, 1960(昭和35)年にGPSOは閉鎖され, 伴はその後残務処理を行い, 1961年まで日系ボスの下で岡田正敬とともに翻訳作業をしたとあるため, 伴とP氏の証言は合致する。なお, P氏は第三科北方班員として登戸研究所で勤務した後, 山本の呼びかけにより1953年よりGPSOで勤務した人物である。
- (12) 伴, 前掲資料139
- (13) 伴, 同前
- (14) 前掲P氏より資料館聞き取り, 2015年10月9, 24日。P氏によると静岡の「スギモトテッコウ」に製造を依頼したという。
- (15) 前掲P氏より資料館聞き取り, 2015年10月9日, 24日。
- (16) 細川陽一郎より資料館聞き取り, 2015年5月25日。細川は第二科で超縮写器材の研究開発をしていた。
- (17) 前掲P氏より資料館聞き取り, 2015年10月9日, 24日。
- (18) 横須賀市『新横須賀市史』別編 文化遺産(横須賀市, 2009年) p.31
- (19) 前掲P氏より筆者聞き取り, 2015年10月9日, 24日。またP氏に建物の写真を見せ, 確認をとっている。
- (20) 神奈川県教育委員会『神奈川県の近代遺産-神奈川県近代遺産(建造物等)総合調査報告書一』(神奈川県教育委員会, 2012年) p.134, 『新横須賀市史 別編 文化遺産』 p.28, p.70。
- (21) 前掲P氏より筆者聞き取り, 2015年10月24日。
- (22) SCAPIN-548, 550
- (23) 総理庁官房監査課編『公職追放に関する覚書該当者名簿』(日比谷政経会, 1949年)
- (24) 例えば鳥取県長瀬町(現・東伯郡湯梨浜町)において昭和24年4月19日付で出された「覚書該当指定特免申請の手続きについて」には「(前略)特免申請手続きは昭和24年2月8日公布の総理庁令第九号に定められてあり, 特免申請手続きを希望される方は本月25日までに役場へおいで下さい(以下略)」とある。
- (25) 但東町議会編『但東町議会のあゆみ』(但東町議会, 2005年)に, 大月は第一期但東町議会議員(1956.9.30～1957.9.29)を務めていたことが記録されている。高橋村は1956年9月に合橋村・資母村と合併し但東町となるが, 合併以前の議員関連資料について豊岡市, 豊岡市立図書館および但東町分館に問い合わせたところ所蔵が無いとのことで, 1951年の選挙において大月の立候補が認められたかどうかは現時点ではわからない。
- (26) 表紙に「38.5.25 登研第二, 第四科会記念」と書き込みがされている『登研第四科会住所録(1963年4月1日版)』(当館所蔵資料No.588)および「登研第二・四科会集合写真」(1963年5月25日撮影, 当館所蔵資料No.1053)より第二科と第四科の交流は登研会発足以前にもあったことが推測される。
- (27) 奥原タミ氏, 河本和子氏, 横山サト子氏より資料館聞き取り, 2011年3月4日。奥山氏は総務科, 河本

氏は庶務科兵器班，横山氏は4科所属だった。3人とも近所に住んでいたが，会っても話をするということもなく，仲良くなったのは登研会発足後だという。ただし，登研会発足後も，登戸研究所のことは誰にも話してはならないとの思いから，出席することはなかった人もいた。

(28) 渡辺賢二氏については本誌 pp.1-2を参照されたい。

(29) 跡碑には「昭和六十三年十月 建之」とあるが，跡碑除幕式は1989年春に行われた。元登戸研究所技師・北澤隆次の知人宛ての1988年12月29日付書簡（当館所蔵資料No.270）によると，昭和天皇の病状が悪化していることに伴い，明治大学生田キャンパス内で天皇制反対の学生運動が活発なため，落ち着くまで境内に跡碑建立を見送るとあり，生田神社境内にいつ建立されたか明確な時期は不明である。

(30) 渡辺賢二「陸軍登戸研究所の実相をみつめて」 pp.44～45（歴史科学協議会編『歴史評論』8月号通巻772号，校倉書房，2014年）

(31) 栗山武雄氏より筆者聞き取り，2015年7月16日。

第6回企画展「NOBORITO 1945 ―登戸研究所 70年前の真実―」記録

企画展記念第一回講演会 第一期：8月15日までの登戸研究所 本土決戦準備と登戸研究所

山田 朗

明治大学平和教育登戸研究所資料館長

はじめに

従来11月から企画展をやっていましたが、今年は戦後70年にちなんで8月から企画展第一期を始めました。11月にさらに第二期の展示が始まります。11月以降も現在の第一期の展示はご覧いただくことができます。入れ替わりではなく展示が増えるという形になります。今日はこの第一期分のテーマ、8月15日までの登戸研究所についてお話をさせていただきます。11月からの第二期では8月15日以降、つまり、登戸研究所が解散し、その後、どうなったのかということをお話させていただきます。

今日は戦争中のお話です。「NOBORITO 1945」というメインタイトルがついています。1945（昭和20）年の登戸研究所。実はこの1945年というのは登戸研究所にとっては非常に大きな事件があった年です。もちろん戦争が終わったというのが最も大きな事件ですが、登戸研究所にとっては、まず一つは風船爆弾作戦がこの1945年の2月・3月辺りがピークです。登戸研究所から打ち上げているわけではないのですが、千葉県・茨城県・福島県に発射基地があって、2月・3月はひと月に2500発以上の風船爆弾が打ち上げられて、まさに風船爆弾作戦のピークでした。この風船爆弾というのは太平洋を横断する上空の偏西風が強い時期しか使えません。春から夏にかけては風船爆弾が使えず、兵器としては非常に制限があります。そこで登戸研究所では夏でも使える風船爆弾を開発しようとしていました。風船爆弾は通常、地上1万メートルくらいを飛んでいましたが、もっと高い1万5000メートルくらいまで気球をあげると、夏でも偏西風が吹いているので、そこに届くようなもっと大きな気球をつくって風船爆弾を打ち上げれば夏でもアメリカに到達することができるということがわかり、その研究と新しい風船爆弾の試作を行ないます。これはまた後でお話しします。

それから、登戸研究所にとって大きな事件の二つ目は登戸研究所が移転することです。生田にあった登戸研究所のうち偽札関係部門を除き、電波兵器や風船爆弾の第一科、毒物・薬物・生物兵器・スパイ用品の第二科、それから量産工場であった第四科、これらのセクションが長野県の伊那地方を中心としたところに移転をします。大きな区切りは1945年の4月29日、

今は昭和の日ですが、当時は天長節＝天皇誕生日です。この4月29日を期して、研究所はここ〔現・生田キャンパス〕の本部が、登戸分室になり、本体は長野県、他は分散疎開します。これは空襲を恐れての疎開というよりは本土決戦準備のための移転です。本土決戦のためには松代に大本営を設置しようということで、工事を進めているわけです。この松代に近いところに登戸研究所、それからあとでお話しますが、中野学校、これら秘密戦関係部門は長野県、群馬県の本土決戦の最後の抵抗の拠点と想定されたところに移転をしていきます。

登戸研究所にとって三つ目の大きな事件になりますが、移転してその後、登戸にあった時から少し編成が変わります。研究項目が、さしあたっての本土決戦に、より必要なものに重点が移されていくのです。大きく分けて二つあります。一つは本土決戦に何とか間に合わせようとした特殊兵器、く号兵器、電波を使った兵器です。それからロケットだとか、あるいは、ね号兵器と言われる爆弾が熱源に向けて自動的に落ちていく装置。これは今では赤外線誘導ミサイルとして実用化されている技術です。例えば船だとか戦車だとか、エンジンを積んでいるものが発している熱をめぐらして爆弾が自動的に誘導されていくという技術、この開発を最後の最後までやっています。このような本土決戦に期待されていた特殊兵器の開発というのが一つ。それから、本土決戦の時には遊撃戦、つまり上陸してきた米軍を混乱させるための破壊工作、ゲリラ戦、これらが想定されていて、そのためのいろいろな兵器作りです。これは正規軍が持っている兵器に比べると、変わったちゃちな兵器が多いのですが、民間人を装って米軍がいるところに紛れこんで放火をするといった目的をもった道具や兵器がこの時期の登戸研究所では開発され、また量産されます。

今日は、まず1945年の戦況を見た上で本土決戦準備がどんなかたちで行われていたのかということ扱います。そして、登戸研究所における風船爆弾作戦、それから移転後の重点研究や兵器生産についてです。今回この企画展にあたって長野に行き、いろいろと調べて参りましたので最新の調査報告をさせていただきます。

最初にこの生田キャンパスの戦争遺跡について触れておきます。1947（昭和22）年にGHQが撮影した航空写真に写っている建物は全て登戸研究所の建物で、100棟以上ありました。最盛期には1000人ぐらいの人が働いていた非常に大規模な研究所です。これだけたくさんの建物があったのですが、現在資料館になっている1棟だけが当時のまま残っています。あとは建て替えられました。このキャンパス内には動物慰霊碑、弥心神社、消火栓といった当時を偲ぶ物がいくつか残っています。資料館そのものも登戸研究所時代の遺跡といってよく、中は展示室になっています。もう一つ明治大学がらみで言いますと、中野キャンパスというのが現在JR中野駅の北口、中野サンプラザに近い所にあるのですが、当時は陸軍中野学校の敷地でした。日本陸軍の秘密戦のためのモノづくりをやっていたのが登戸研究所、それが現在明治大学の生田キャンパス、農学部・理工学部のキャンパスです。一方、秘密戦のためのヒトづくりをやっ

ていた陸軍中野学校は、現在明治大学の中野キャンパス、国際日本学部と総合数理学部という二つの学部がそこを使っています。現在の明治大学中野キャンパス、帝京平成大学、早稲田大学の留学生会館、東京警察病院、当時はこのあたりが全部中野学校ですから随分広いです。もっともこの生田キャンパスも同じです。現在、明治大学の生田キャンパスは5万坪ぐらいあるのですが、登戸研究所は11万坪ありましたから生田キャンパスよりももっと広いです。こちら〔中野学校〕も同じです。現在この3つの大学キャンパスが入っていて、しかも病院まであります。残念ながら中野学校の跡を偲ぶものは一切残っていません。東京警察病院の中に1mもないぐらいの石碑が立っていて、「陸軍中野学校趾」と書いてあるのですが、他には何も彫り込まれていません。いつ、誰が立てたのかもわかりません。これを見つけるのも結構大変で、意識して探さないと見落としてしまう。どちらかというが目立たないように、おそらく中野学校関係者が人目を忍んで立てた石碑であろうと思います。

I 1945（昭和20）年における戦況と〈本土決戦〉準備

1 戦況の悪化と戦力の消耗

1945年3月にはアメリカ軍がフィリピンの主要なところを制圧してしまいます。日本軍はマニラを失って、どんどん山岳部に退却するという状況です。ビルマでもイギリス軍が主要な所を制圧して、非常に厳しい状況になります。3月には東京大空襲をはじめとして、日本本土の大きな都市は軒並み大空襲を受けます。3月26日からは沖縄戦が始まります。慶良間諸島に米軍が上陸し、4月1日に沖縄本島に米軍が上陸しています。4月7日には戦艦大和が沖縄に特攻、そして航空特攻作戦が4月から5月にかけてピークを迎えます。4月には一日に200機以上飛び立った日もあるぐらい大変な数の特攻機が飛び立ちました。沖縄の近海でこれらの特攻作戦が行なわれました。そして沖縄戦が始まった直後に日本では内閣が変わります。小磯国昭内閣から鈴木貫太郎内閣、終戦内閣に変わります。しかしすぐに戦争が終わったわけではありません。戦況がどんどん悪化していく一方で、5月にはついにドイツが降伏します。ちょうど5月1日に日本の大本営にヒットラーが死んだという情報が入ってきます。同じ日にはなんとムッソリーニも殺されたという情報が届いて、かつて三国同盟を結んだ盟友はすべて潰えたことが明らかになりました。そして、5月上旬には沖縄戦の戦況も極めて厳しい状況になります。5月4日を期して、要するに翌日5月5日、端午の節句の日に勝利をあげようと、沖縄本島で日本軍は反撃を始めますが失敗してしまうのです。実は5月上旬に、天皇も無条件降伏やむなしという気持ちになります。これは側近であった木戸幸一内大臣という人が海軍の中で終戦工作を進めていた高木惣吉少将という人にそのことを語っています。つまり5月上旬までは本土決戦もありうると天皇自身も考えていた。しかし、その沖縄戦で調子が悪い、ドイツも降伏し、

もうどうしようもないなということで天皇の気持ちも変わった。ところが、この後まだ6月・7月・8月と戦争は続くわけです。なぜ天皇の気持ちが無条件降伏やむなしになったにもかかわらず戦争が続いたのかというと、天皇も含めて日本の国家指導者たちが、ソ連を仲介にした和平工作にこだわってしまったからです。また、ヨーロッパで戦争が終わったのでイギリス・アメリカ陣営とソ連が対立を始めるだろう、と陸軍の一部は観測していました。これは本土決戦派です。戦争をまだ続けたいという人たちも、この際日本はソ連側にシフトして戦争を継続しようじゃないか、その内にソ連対英米という新たな戦争がヨーロッパで始まるだろうから、それに日本もうまく乗れば無条件降伏は避けられるのではないか、という考え方です。ですから戦争続けたいという人も戦争やめようという人も、みんなソ連を仲介とした和平工作というのに乗りました。結果から言うと大失敗でした。つまりソ連はこの年2月のヤルタ会談で対日参戦を決めています。イギリスやアメリカに対してソ連は8月15日を期して参戦し、日本に対して攻撃することを約束していました。実際には1週間早くなって8月8日になりました。なぜかというとアメリカが原爆を落としたからです。アメリカが日本に原爆を落としたらすぐに日本が降伏してしまうと考えたソ連は参戦を1週間早めて、8日に日本に宣戦布告をするのです。アメリカはアメリカで、ソ連がどんどん侵攻してくるとややこしいことになるので、2発目の原子爆弾を8月9日に落として早く日本を降伏に追いこもうとする。このような状況が8月には展開するわけです。

2 本土決戦準備の本格化

本土決戦準備はいつから始まったのかというと、レイテ決戦、これはフィリピンで行われていた決戦ですが、1944（昭和19）年10月から始まりました。しかし、12月の下旬になって大本営はレイテ決戦方針を放棄、断念します。次はどこだとなると、沖縄ではなく本土決戦なのです。ですから1945年1月になると、大慌てで本土決戦準備が始まります。1月20日に「帝国陸海軍作戦計画大綱」が作られて、そこに「皇土（天皇が治める土地）、特に本土及び朝鮮」の作戦準備を本年初秋までに概成し、本土決戦を一応秋だと想定して、相手が上陸してくるのがおそらく秋ぐらいになるだろうと日本側も予想しました。米軍も実際に10月・11月ごろに、まず南部九州に上陸、そして翌1946（昭和21）年の3月から4月にかけて関東地方に上陸する、だいたいこういう構想を立てているのですが、日本側もそのぐらいだろうと予想して本土決戦準備を進めていくわけです。そして、大本営陸軍部は「国土築城実施要綱」というのを3月に発令して、1945年7月までに全陣地の骨格を完成せよ、そして10月までにこの本土決戦用陣地を完成せよと命じます。4月になると、まさに沖縄戦が始まった直後ですが、本土決戦は「決号作戦」と名前が付き、4月8日「決号作戦準備要綱」、つまり本土決戦を想定した命令が出ます。そして敗戦時、陸軍は内地・朝鮮に300万近い兵力を展開します。しかし、その半分は

1945年になって急遽編成された部隊で、根こそぎ動員をして約150万人を徴集する、あるいは軍隊にいた経験のある人をもう一回召集し部隊を編成するといった、かなりの泥縄ですけれども部隊編成が行なわれました。

もともと本土決戦準備は「内陸防御」という考えに基づいていました。内陸部に立て籠って長期に亘って抵抗するという考え方ですから、長野県の松代に大本営を移して内陸に相手を呼び込んで戦う。この内陸防御という考え方は硫黄島で成功したやり方、成功と言っても硫黄島は陥落するわけですが、長期にわたって抵抗する内陸防御という考え方で硫黄島や沖縄戦は基本的に行なわれました。これに対する言葉は、「水際防御」という海岸線で防御するやり方です。これはサイパン島で大失敗をしました。水際で米軍を食い止めようとして海岸線に部隊を配置したところ艦砲射撃と空爆であつという間にやられてしまうのです。ですから、水際防御は難しいという考え方で、段々日本軍は一旦米軍を上陸させておきそれから反撃をする。内陸に引き込んで反撃すると、米軍と日本軍が混在状態になりますから、米軍得意の艦砲射撃と空爆が十分に活かせないのです。ところが、内陸防御をとっていて内陸から移動する間に、大きな損害を蒙るのではないかという心配が段々出てくるのです。この内陸防御という考え方に基づいて、埼玉県や神奈川県でも作戦道路、戦車なんかが走れる道路がどんどん作られます。例えば国道16号線は大体その頃整備されたのです。埼玉でもそうです。そういう作戦用の戦車なんかを通れる立派な道路をたくさんの住民を大動員して造るのです。しかし、それが出来上がってみると別の心配が起きてきます。つまり、立派な道路を造ったけれど、結局米軍が利用するだけではないだろうかという心配が段々強くなってきて、埼玉なんかでは造った道路を壊しています。そういう無駄なことをやったのです。実は沖縄でも、伊江島という所に立派な飛行場を造ったのですが、結局米軍が使うだけだということでまた住民を大動員して、立派にできた飛行場に穴を掘って破壊しました。だんだん米軍のために道路を造っているような感じになってきたものですから、内陸防御ではなくなるべく移動距離を少なくしようということで、もともと駄目だと言われていた水際防御に近い態勢にまた戻ります。例えば千葉県とか神奈川県なるべく海岸線に近い所に部隊を貼り付けて、もしそれが突破されてしまったら、本土決戦用に長野・群馬辺りに決戦部隊を立て籠らせる。だが、その中間地帯はどうするのか。つまり水際に貼り付いていた部隊が突破された、しかし内陸の決戦部隊までは距離がある。その中間地帯は、秘密戦つまりゲリラ戦で抵抗するという考え方、まさにここは中野学校と登戸研究所の出番だ、ということになるわけです。

総司令部（大本営）は長野県の松代、長野県のかなり北の方に置かれます。なぜ松代が選ばれたのかというと、松代周辺の山の岩盤が非常に強固であるということが決め手になりました。非常に岩盤が強固だというのは、軍人にとっては良いかもしれませんが、穴を掘る人にとっては大変なことです。その強固な岩盤を削り貫いていかなければならないですから、大変な難工

事になるわけです。

また、地理的に松代というのは、例えば太平洋側に米軍が上陸した時に、一番距離があります。なるべく時間が稼げるという考え方がありました。6月に義勇兵役法というのが公布されて「国民義勇隊」「国民義勇戦闘隊」が組織されることになりました。この国民義勇隊は一応組織されるのですが、先程の土木工事、そういう工事に動員されたことがほとんどで、実際に本土決戦が起ったとすると、国民義勇戦闘隊という組織になって、軍隊の補助業務、弾薬を運んだりとか、若い人たちは偵察部隊になったりだとか、沖縄戦で、学徒隊もしくはひめゆり部隊というような若い人たちが戦争に動員されましたけれども、同じようなことが本土でも起こった可能性があります。

国民義勇隊というのは性別にかかわらず、男性だけではなくて女性も含めて義勇兵役法という法律を作って軍隊の中に編成するというものです。最終的に軍隊の中に女性を入れるということにはなりませんでした、土木工事なんかには相当動員されています。

3 本土決戦準備の実態

本土決戦準備の実態ですが、特攻兵器の生産と出撃基地の建設が大規模に行なわれます。例えば「震洋」,「震洋」というのは特攻用のモーターボートです。「回天」,これは人間魚雷です。「伏龍」,「伏龍」というのはアクアラングを付けた生身の人間が、棒の先に爆薬を付けて海に潜って上陸用舟艇を海の中から衝くという、人間機雷と言われたものです。さすがに実戦では使われませんでした、訓練の途中でアクアラングの故障で、少なくとも10名、証言記録によっては50名近くの人が亡くなっています。神奈川県海岸地帯、例えばサーフィンでも有名な稲村ヶ崎も、「伏龍」の基地がありました。アクアラングを付けた人が海に入るための場所がちゃんと設置されていたのです。そういう準備が行なわれました。

先ほど話しました作戦用の道路や飛行場の建設が進みます。関東地区では「富士リ号演習」という名前で道路の構築が大規模に行なわれます。しかし、後に大規模にまたそれを破壊するという作業が行なわれました。沿岸部では陣地の構築、あるいはレーダーの設置などが行なわれます。軍司令部機能や軍需工場は内陸部に移転します。特に長野県や群馬県、その山間部に軍需工場、トンネル工場が作られます。トンネル工場は一見、攻撃に強い感じがしますが、トンネルというのは大体水が出ます。そんなところに工作機械を入れようものならみんな錆付いて、なかなか再稼働できません。航空機の部品工場などは随分山間部のトンネル工場に移転するのですが、再稼働して生産再開とまではなかなか行き着きません。

陸軍登戸研究所などの秘密戦研究部門、中野学校などの秘密戦実施部門をこの長野県、群馬県に移転します。登戸研究所は長野県に移転しますし、中野学校の本部は群馬県の、製糸場で有名な富岡に移転します。それから中野学校は遊撃戦のための分校ができます。これが静岡県

の二俣という天竜川に沿ったところで、ずっとのぼって行くと長野県の伊那地方に行けるんですね。

Ⅱ 〈秘密戦〉における登戸研究所と中野学校の役割

1 〈秘密戦〉とは何か

登戸研究所や中野学校はまさに秘密戦のための研究組織で、秘密戦という言葉を手簡単に説明しますと、戦争には必ず付随しますが、歴史に記録されないという特徴があります。ですから秘密戦やスパイ活動などで戦果があっても全く記録されないため、戦果があったのかなかったのかを含めてわからないというのが実状です。裏側の戦争です。それから、戦時に限らず、平時においても密かに行われている水面下の戦争のことで、現在では情報戦、という言い方で語られる場合もあります。情報戦というのは戦争になって急に始まるのではなくて、戦争が始まる前から当然スパイ活動をやっているわけです。そういう意味では水面下の戦争、表面に現れない戦争です。秘密戦というのは4つの要素から成りたっています。防諜、スパイの防止です。諜報、スパイ活動そのものです。謀略、破壊活動だとか相手（敵）を混乱させるようなことをひっくるめたものです。宣伝、相手（敵）を惑わすための宣伝です。この4つの要素から秘密戦は成り立っています。登戸研究所もこの諜報・謀略、こういうところに重点を置いているいろいろなものを開発しました。

2 陸軍登戸研究所：日本陸軍における〈秘密戦〉兵器・資材の専門開発機関

もともと登戸研究所というのは、新宿百人町という今でいうと新大久保に近いところにあった陸軍科学研究所の中に秘密戦資材研究室というのが1927（昭和2）年にできたのがその源です。これが篠田研究室で、篠田とは登戸研究所の所長になった篠田鐐のことです。1937（昭和12）年になって陸軍科学研究所登戸実験場というのができます。ここからが通常登戸研究所と言われているものです。1939（昭和14）年に陸軍科学研究所登戸出張所という名前になります。実験場から出張所であり変わってないように見えますが、中身は随分変わりました。もともと電波兵器の実験場であったのが、電波兵器だけではなく、毒物・薬物、生物兵器、スパイ用器具、それから偽札、これらのものも併せて〔扱うようになったのは〕日中戦争の泥沼化が原因です。日中戦争というのは日本と中国との戦争ですが、裏側では対英米戦争です。なぜかと言うと、援蔣ルートとありますが、イギリス・アメリカが中国を支援していろんな物資を送る、それをなんとか阻止しようというのが日本側の考えです。しかし、イギリス・アメリカを直接攻撃はできませんので、秘密の手段、秘密戦によってそれを妨害する、あるいは情報を得るといったものです。ですから日中戦争は日本と中国との戦争ですが間接的にイギリス・アメリカと

の戦争が秘密戦という部門では始まっているものです。そのためにスパイ用品を作れということになりますし、中国の経済を混乱させるということで偽札が作られるわけです。このあと1942（昭和17）年に第九陸軍技術研究所という名前になります。これでわかりますように、実は登戸研究所というのは一度も「登戸研究所」という名前になったことはないのです。これは秘匿名称、秘密の名前です。登戸研究所とか中野学校と言っている分にはなんの学校か研究所かわからない、そういう通称を秘匿名称と言います。そして1945年4月を期して本土決戦に備えて登戸研究所は長野県の伊那地方などに移転をします。「など」としましたのは一部関西にも移転しているからで、秘密戦の拠点を関西にも置いておこうということで分散して疎開をしました。

3 陸軍中野学校：日本陸軍における〈秘密戦〉要員の専門育成機関

中野学校は日中戦争が始まった翌年1938（昭和13）年に後方勤務要員養成所という名前できます。これが中野学校の前身です。1939年に中野の旧電信隊跡に移転してここからずっと中野に組織が置かれます。陸軍中野学校というのは秘匿名称ではなく正式名称です。1944（昭和19）年、太平洋戦争の最中に静岡県磐田郡に二俣分校、これはゲリラ戦、秘密戦のための人材を養成するための組織を作ります。1945年4月に本土決戦に備えて群馬県の富岡町に移転をします。この中野学校は前身から入れますと、2000人以上が卒業し、300人くらいが戦死しています。残置工作員のような形でいろんなところに派遣されて、生死不明のまま外国でずっと生活をしていた人たちも結構いました。小野田〔寛郎〕さんなんかがそうです。小野田さんはおそらく二俣分校を出たのではないかと思います、そういう活動をしていた人たちは戦後も全く生死不明の人たちがたくさんおられるわけです。中野学校だけではなく、秘密戦というのは主に憲兵の仕事でした。資料館の第3展示室に展示していますが、『秘密戦関係』というテキストが憲兵学校で使われていました。

Ⅲ 〈本土決戦〉準備と登戸研究所

1 沖縄における〈秘密戦〉

秘密戦は沖縄戦においても行われ、沖縄本島の北部、山岳地帯に派遣されていた独立混成第44旅団の第2歩兵隊（宇土部隊あるいは国頭支隊）が、秘密戦、遊撃戦を展開したと言われています。けれども、沖縄の人にとっては非常に評判が悪いです。この秘密戦をやっていた部隊はしばしば住民をスパイ扱いして住民を襲ったりしたからです。要するに、米軍占領地の人は米軍に毛布や食料などをもらったりするわけです。ところがそれを日本軍のゲリラ部隊が出てきて奪ったり、あるいは米軍に通じているということで住民を攻撃することが実際起きてしま

うのです。^{おおきみそんとのきや}大宜味村渡野喜屋というところでは宇土部隊の兵士が一般住民に手榴弾を投げて二十人近い人が亡くなるという事件も起きています。

本土決戦準備はなかなか進まなかったのですが、例外的に進展した部門が松代大本営の建設工事です。これは1944（昭和19）年の11月11日、1並びの日に、たぶん縁起担ぎですが、工事が始まりました。これは大変な資材と労働力を投入して、敗戦時にほぼ完成をしています。現在でもこれは見学できます。それから本土決戦を側面から支える作戦として、登戸研究所が開発した風船爆弾が実戦に投入されます。実は風船爆弾は兵器としては決定的な欠陥があります。なぜかという、まず季節限定。偏西風が強くないと使えない。春から夏、秋口にかけてはまだ使えず、11月から翌年3月・4月ぐらいまででないと使えないという点。それから、風任せでどこに落ちるかはわからない。ですから命中精度という点では極めて低いです。兵器の歴史を見ますと、破壊力を強めるか、命中精度を高めるか、この二つの方向で兵器は発展していくのですが、風船爆弾の命中精度はそもそも悪いわけで、目標が北米大陸という大きなターゲットでないと使えない。一方で破壊力を強められるかという、10メートルの気球に吊るせる爆弾の重さは30キロぐらいに限定されてしまう、となると大きな爆弾は吊れないのです。ですから当初考えたのは生物兵器、細菌兵器を積んでの攻撃です。ポツンポツンと風船爆弾が落ちたとしても細菌がどんどん広がっていってくれば命中精度の低さと破壊力の小ささを補うことができる。ということで、もともとは細菌兵器等を積む予定でした。ところが、ものごとは思った通りに進まないんですね。最初は731部隊が開発したペスト菌を積もうとしますが、風船爆弾は上空1万メートルを飛んでいきます。零下50度という環境、となると、ペスト菌が凍え死んでしまう。で、これは使えないということになり、牛疫ウイルスという牛を殺すウイルス。これはいったん凍ってもまた元に戻ると復活するので、これはいいぞということで、この開発をします。けれども結局、この手の兵器をアメリカに使用するとアメリカは日本に対して同じように生物兵器あるいは化学兵器で報復する虞がある、ということでやめたのです。国際条約（1925年ジュネーブ議定書）上、先制使用が禁止されているのです。ですからアメリカに対し先にこの手の兵器を使うのはやめておこうということになり、結局ふつうの爆弾やふつうの焼夷弾を風船爆弾に吊って飛ばします。ですから破壊力は小さいままです。当初の謳い文句は決戦兵器だったのですが、実際にはそれほどの破壊力はありませんので、後方攪乱のための謀略兵器と位置付けられるかと思います。風船爆弾は非常に大きなもので、和紙でできています。ふ号兵器というのが正式な名前ですが、アメリカ本国に対する謀略兵器で、大げさな言い方をすると初めての大陸間横断兵器です。ただし、季節限定、ピンポイント攻撃も不可能です。直径10メートル、下に積んでいるのは、全部が爆弾ではなく、ほとんどが高度維持装置という装置とバラスト（おもりの砂袋）です。風船爆弾は夜になると、中の水素ガスが収縮して落ちてしまうので、夜になって高度が下ると気圧計（高度計）でそれを感知して積んでいるバラス

ト、砂袋を自動的に落として高度を回復するという仕組みです。実際、100キロ以上砂のおもりを積まなければならないわけですから、積める兵器の重さがどんどん少なくなる、こういう特徴です。ただ、このバラストを積まないと太平洋横断ができないわけです。

風船爆弾は実際に1944（昭和19）年11月に700個、12月に1,200個、1945年1月に2,000個、2月に2,500個、3月にも2,500個、4月に400個、合計9,300個がアメリカに向けて飛ばされました。ハッキリとアメリカでの着弾地がわかっているのが361個、あと着弾地はハッキリしないけれども到達しているであろうというアメリカ側の推定を含めると少なくとも1,000個と言われています。もっとも日本側が計画したのはもっと多く、1万5,000個を飛ばそうとしましたが、風船爆弾の製造がここまで間に合いません。1万個できるかどうかというところです。これは球皮生産、つまり和紙の生産とこんにゃくの生産に規定されるので、造りたいだけは造れなかったんです。しかし、1945年になってからが風船爆弾のピークであるということがわかります。計画上も1月2月までに一番たくさん飛ばそうとしていましたし、実際には2月3月に最もたくさん、ひと月あたり2,500個を飛ばしています。アメリカ側の対応・反応ですが、気球そのものを捕獲しているので、直ちに構造を解明します。現在でも風船爆弾の現物は日本に一つもないのですが、アメリカやカナダには本物があります。当時捕獲したものがアメリカやカナダの軍事博物館には残っています。最終的には、千葉県・茨城県・福島県の3箇所の放球基地も、バラストに積んでいる砂の分析から、アメリカ側はその場所を突き止めてきます。放球基地付近を空襲しています。アメリカ側も考えることは同じで、ふつうの小さな爆弾や焼夷弾を積んでくるのはどうもおかしい、生物兵器や毒ガスを積んでくるのではないかと疑っています。ただパニックを起こすのが日本側の狙いですから、アメリカ側も報道管制を敷いて報道させませんでした。そのために民間人が6人、オレゴン州で不時着した風船爆弾の焼夷弾の破裂で亡くなっています。風船爆弾のもう一つ困った点は、戦果が確認できないことです。誰も乗ってない無人の気球ですから、本当に戦果が上がっているかどうかというのは相手が発表してくれないとわからないという、困った状態です。ところが、資料館で見いただきますとわかりますが、1945年2月18日の朝日新聞が、中国の報道を転載するという形で、「死傷者500名」と報道しています。この時に初めて「風船爆弾」という名前が使われました。ですから私たち今でも、風船爆弾と言っているのは、この2月18日付の朝日新聞の報道で大々的に風船爆弾という名前が使われたためです。「あ、あれは風船爆弾というものなんだ」と製造にたずさわった人も気がついた。軍はこれを「ふ号装置」とか「ふ号兵器」と呼んでいましたので、一般に風船爆弾という名前はこれによって広まることになります。ただし、死傷者500名というのは全くの誤報で、目撃者が500人というのが間違っただけです。もともとアメリカからの情報がいったん中国に行って中国から日本に伝わってきたのです。間にいろんなものが入るとだんだん情報は不正確になっていくわけです。



【写真1・15m気球】

通常の風船爆弾よりももっと大きな直径15メートル気球というのを登戸研究所では試作しました。これなら夏場でも放つことができるのだそうです。何個か2月ごろに試作したのですが、結局これによる作戦は行なわないまま戦争は終わりました。打ち上げの様子が写真に残っていますが、ちょっと10メートル気球とは形状が異なっております。この第一科の科長、責任者であった草場季喜（陸軍少将）が戦後までこの写真をお持ちだったのですね。草場さんのご遺族が相模原にお住まいで、これらの資料をご寄贈いただきました。非常に珍しいものです。これは試作の15メートル気球の写真です。この写真は企画展で展示をしております。

2 決戦準備と〈秘密戦〉関係諸機関の疎開・移転

登戸研究所は疎開と同時に電波兵器関係は別のセクションに統合されました。多摩研という、別の研究所にレーダー部門は統合されます。本部・二科・四科、こういうスパイ兵器を開発している所は長野県の伊那郡、現在の駒ヶ根市を中心としたところに移転をします。それから電波兵器、く号兵器ですね。電波を使って飛行機を撃ち落とそうという電波兵器関係は、長野県の北安曇郡に移転します。どこにどういうものが移転したのかは詳しく企画展でご紹介しています。電波兵器などの研究部門は松代に近い北の方に、実際に物をつくっている工場関係は比較的南の方に置いています。これは恐らく南の方から戦場になるという事を想定したためだと思われます。要するに天竜川に沿って米軍が北上してくるということを想定したのかもしれませんが。ですから、その天竜川に沿って中野学校の二俣分校があり、この登戸研究所の工場があり、秘密戦関係がこの天竜川沿いにかなりまとまって作られています。

偽札製造工場は基本的にこの登戸（生田）に残るのですが、製紙部門、和紙を生産するということで、福井県の武生、ここも、もともと和紙の産地ですので、そちらにも分工場を作っています。

中野学校は、教育の重点を遊撃戦、ゲリラ戦に変更して、この静岡県の中野に二俣分校を

開設して遊撃戦幹部の養成をしています。本部も1945年に富岡に疎開をします。

3 本土での〈秘密戦〉の準備

実際に本土での秘密戦準備ということで中野学校が中心となって「遊撃戦戦闘教令」という秘密戦・ゲリラ戦のためのマニュアルを作ります。敵中に潜入する、奇襲する、陽動作戦、それから謀略工作、後方攪乱などが主な目的で、薬物・細菌・時限爆弾・焼夷弾を使用して、正規軍戦ではありませんが、米軍が日本に上陸して基地を設定したらそこに忍び込んで混乱させる、というようなことを想定しています。それから、この中野学校と直接関わりはないのですが、実は1944（昭和19）年12月に天竜川下流の河川敷で毒ガスの雨下（飛行機から毒ガスを撒くこと）の実験をやっています。実際に日本陸軍の飛行機から、天竜川の河川敷を行軍する一個小隊めがけてイペリットガス、これはびらん性ガスですから大変な致死性のガスです、これを液状にして撒いて攻撃する。もちろん下で行軍している人たちは毒ガスマスクを持っています。最初からつけていると息苦しくて行軍できないので外して、合図があったらさっとマスクをつけるんです。それから皮膚に毒ガスがつくとただれてしまいますから、防護服を着て行軍しているのですが、この実験ではなんと、その小隊長だけがガスマスクを付け遅れて重傷を負うという事故が起きてしまいました（岡沢正「告白的『航空化学戦』始末記」,「丸」編集部編『告白的「航空化学戦」始末記』光人社NF文庫, 2012年所収）。成功していたら何も書き残さなかったのですが、そこで重傷を負ったために、その小隊長が、戦後、こんな実験をやったということを書き残したので、まさに本土決戦では場合によっては毒ガス戦もありうると想定していた事実がわかりました。これはもちろん、米軍が毒ガスを使った時に備えての訓練だったということになっていますが、日本軍が撒いているわけですから、撒く実験でもあったわけで、どっちもあるということです。毒ガスはこのようにやっておりまして、更に、細菌戦もありうるということでした。これはまた後でお話します。

登戸研究所は、戦争末期に重点項目を定めて兵器の開発をしていました。まず、第一は「研う」、これ書き間違いではありません。「研う」という兵器です。「う」というのはウロトロピンという薬品を主原料としていて自由自在に形を変えることができる粘土のような爆薬です。ですから、仕掛け爆弾、缶詰なんかに詰めて使うと言われています。作った人の証言では、粘土というより、味噌のような、というような言い方をされる人が多いです。これを筒の中に詰めたりしたということです。この「研う」、何にでも充填できる粘土状、もうちょっとドロツとした感じのもののようなのですが、そういう爆薬を作りました。これは多くの方が作ったという証言、この伊那地方はそれを金属製の容器につめた、というような証言があります。それから焼夷剤。これは焼夷弾というよりは、手投げ弾式で火災を起こすもの、こういうものを特に伊那地方中沢地区において生産をしています。

それから、こういう簡便な兵器とは違うのが「マルケ」。○を書いて決戦の「ケ」を入れる、決戦兵器という意味ですね。これはまさに、開発が期待されていた兵器で、熱線、赤外線を発生している物に対して、爆弾が自動的にそこめがけて落ちていくものです。もともとは、当時、〔熱線の頭文字をとって〕「ね」号兵器という、赤外線を発生しているものに対して、銃口が向くような制御装置が開発されていたのです。それをもっと発展させて空中の爆弾が熱線めがけて落ちていくもの〔が「マルケ」〕。これは現在、赤外線誘導方式のミサイルとして実用化されている技術です。熱源に対して銃口を自動的に向ける装置（「ね」号兵器）も現在では実用化されています。以前に東シナ海における不審船事件があったときに、海上保安庁の巡視船がその不審船にめがけて機関銃を撃っている映像が公開されました。これまさに、ここでいう「ね」号兵器、つまり熱源に向けて自動的に機関銃が指向されるという仕組みを持った機関銃で撃っています。ですから、熱源、つまりエンジンをめがけて撃っている、自動的にそれができる装置です。現在では完全に実用化されているものですが、その開発を急いでいた。銃口を向ける、あるいは爆弾そのものが可変翼（動く翼）を持っていて、誘導されながら熱源に向けて落ちていく。これができれば特攻隊はいらなかったわけですね。けれども、まさにそれを人間が操作したのが特攻隊ということになってしまうというわけです。

あと「く号」兵器、これは登戸研究所でずっと研究していた怪力光線で、強力な電磁波を使って人員を殺傷する。実は静岡県島田で海軍も殺人光線という名前で作っていました。海軍の方がちょっと進んでいたような感じです。電磁波を使って飛行機を撃ち落とす、あるいは人員を殺傷する。登戸では実験動物を殺傷するところまではいっていましたが、強力な電力が必要なのでちょっと手軽に持ち歩ける兵器にならない。そこがネックで、それこそ発電所のそばでないと設置できない。海軍も天竜川のダムの近くにこの種の兵器を配置しようと準備していました。結局、その直前で戦争は終わります。

それから細菌兵器。何の細菌兵器を使おうとしたかはわかりませんが、石井式濾水機用の大量の濾過筒を登戸研究所が伊那地区に搬入していました。戦後、伴繁雄さんという登戸研究所関係者の自宅に保管されていましたが、これはひょっとしたら細菌戦の準備だったのではないかと推定しています。



【写真2・放火用謀略兵器とおもわれるもの】

写真2は今回見つかった放火用謀略兵器と思われるものです。単なる長い筒状のものですが、筒状のこの中に穴が開いていて可燃性の物（着火剤）が入っています。火をつけるとボーッと20センチくらい火が噴き出ます。一見すると花火みたいですが、恐らく放火をする道具です。実はこれは中沢の工場から戦後、周辺にお住まいになった方が持って来たものです。そこで作っていた物を黙って持ち出したということだと思いますが、持って来て、この2本あるうち短い方の1本は火をつけてみたようです。火をつけたらボーッと火が出て、ちょうど蜂の巣を焼くのに都合が良くって何回かそれで蜂の巣を焼いたという証言があります。実際に焼いた人がお持ちだったので、それはまず確実だと思います。1本は全く使っていない、1本は何回か使って短くなったものです。これは完成するとどんな姿になるのかはよくわかりません。もともと傘に仕掛けた放火用の兵器というのがありますが、傘の柄の中に入れるようなものなのか、それともこれをぶつ切りにして、導火線のような役割をはたすような使い方をしたのか、はっきりとはわかりません。が、少なくともこれは伊那地方の中沢小学校、当時の国民学校を中心に登戸の工場ができるのですが、その近くの神社も工場になっていて、この兵器を作っていたそうです。今回私たちが調査に行った時に、この放火用謀略兵器をお持ちの方に会い、実際燃えた跡がはっきり残っていました。ちょっと危険な物ですから、火が点かないようにして展示しています。

本土決戦に際しては、登戸研究所というのは研究・開発・生産部門で、中野学校は人材養成部門なのですが、そんなことは言っていられなくなり、どんどんこの2つは融合していきます。登戸研究所は生産してすぐそれを使うと。実戦部隊とだんだん統合されていくような流れです。この本土決戦に際しては、秘密戦関係機関が地理的にも接近し、開発・製造・実戦がだんだん融合する体制になりつつあったのだというふうに見えます。登戸研究所が北安曇・伊那、中野学校が二俣・富岡と、いずれも松代を防衛する重要拠点に置かれていく。だから単に生産する、人材を養成するということだけではなく、いざとなれば実戦部隊に変わっていくということが想定されていたと思われます。ただ本土決戦関係の文書資料的なものは徹底的に焼却されたので、それを裏付ける証拠はありませんが、状況証拠からするとそう言えるのではないかと、思

います。

第5展示室で展示中の伴繁雄さんの自宅にあった石井式濾水機濾過筒、水を濾過するためのカートリッジです。実際に長野県は水が良いところですから、このようなカートリッジは必要ありません。もしこれを必要とするということになると、水が汚染されていることが前提です。どうして汚染されるかというと、細菌戦です。細菌戦をやれば当然水が汚染され、これがないと日本軍も飲み水を確保することができません。全国どこを探してもこのように濾過筒が大量に発見された場所はなく、みんな破壊されています。なぜかと言うと、よく見ると、1本1本「軍事秘密」と刻印されていて、兵器と同じ扱いですから、戦後は完全に破壊されて残っていません。ところがなぜかここにはそれが大量に残されています。大量に持ち込んだと同時に戦後も密かにずっと置かれていたということです。

おわりに

今年2015年は戦後70年ですけれども、戦争、特に秘密戦というのは証拠が残らないものです。特殊な分野ではありますが、やはり秘密戦には戦争の本質を示すところがあります。手段を選ばないということになっていきますし、非合法の部分というのも当然あるわけです。どんどん戦争体験者が減少していく今日、私たちがこの秘密戦も含めて意識的に、あるいは組織的にこの記憶を継承しないと、どんどん失われてしまうものです。そのために資料館もいろいろな工夫をしたいと思っていますし、調べれば調べるほど、本土決戦というのは幻ではなかったということがわかってきます。できたかどうかは別として一定の準備は進めていたことが明らかです。この明治大学は、偶然ではありますが、この秘密戦のためのモノづくりの拠点であった登戸研究所の跡地がこの生田キャンパスですし、ヒトづくりの拠点であった中野学校の跡地が中野キャンパスということですから、明治大学がきちんと残していけよ、という啓示なのだろうと考えています。戦争と技術、戦争と人材、戦争と倫理ということを考える非常に重要な素材です。資料館では、今この企画展の第一期をやっているとして、秘密戦というよりも登戸研究所に勤めていた方から寄贈されたあるいはお借りしたものも特別展示しております。登戸研究所に勤めていた雇員さんが出征をした時に登戸研究所に勤めていた人が日の丸に寄せ書きをしているのです。この中には所長である篠田少将や第一科科长であった草場少将の寄せ書きも入っています。それからその御親戚がお持ちだった陸軍近衛砲兵の大礼服や、登戸研究所に勤めていた工員さんが付けていたバッジもあります。ちょっと分かりづらいかもしれませんが、これは現物を資料館で見たいのですが、これは、直径1センチくらいの、すごく小さなバッジで、登戸の「の」がデザインされています。秘密の機関ですから、はっきりと登戸研究所などを書いてしまうとやっばりまずいのでしょう、見る人が見れば分かるという、バッ

ジになっているのです。この現物は本当に珍しいです。これはお借りしているもののため9月26日までの展示になりますので、お早めにご覧頂ければと思います。こういうものも含めて今回展示をしています。

質疑応答

質問者1：どうもご講演ありがとうございました。いろんな施設が現状どうなっているかということを一、二お尋ねしたいです。登戸研の多摩陸軍技術研究所についてどうなったか。それから二番目の、長野県伊那地方に登戸研が疎開しているのか、それが現状どうなっているのか。更に、松代大本営跡が天皇・皇后・皇太子等の居住区、棟が作られたそうですが、それらがどうなっていたのか。最後の質問は、慶應大学のキャンパスが連合艦隊司令部に接收された時に、地下壕が作られましたが、あれも連合艦隊司令部が移転の方針、というより最初から防空壕、地下壕が作られたのか、それとも後になって作られたのか。それに絡んで、登戸研には爆撃されたら非常にと非常に困るというようなものがあつたと思うので、地下壕が一切掘られなかったのか。以上です。

山田：はい、今のご質問にまとめてお話をさせていただきます。多摩研については、残っているものがほとんどないと思われます。陸軍の研究施設は中央線沿線にわりと集中していたのですが、戦後、いろいろな施設に使われて、一部、例えば一橋大学の中に残っている施設などがありますが、特にまとまったものが現在残っているとは思えません。伊那地方に移転した登戸研究所については、中沢国民学校、現在の駒ヶ根市立中沢小学校が、登戸研究所が使っていた当時の校舎を民俗資料館として今でも残しています。小学校を接收して工場にしたわけですが、それらが一部残っています。当時、神社なども工場にしたり、お寺を登戸研究所の本部にしましたが、それらは残っています。比較的この伊那地方は小学校だとかお寺だとか神社とかを使ったがためにわりと関連するものが残っていたり、戦後、きちんと撮影されたりしています。もちろん、どんどん取り壊されていたりしていますので、残っている物はどんどん減ってはきていますが、その中心地であった中沢小学校には、市の教育委員会が小さな資料館をつくり、当時使っていた物を一部展示していて、駒ヶ根市の施設として保存されています。それから、松代大本営にあった皇族の住居、天皇の御座所も含めたものは、現在、気象庁の施設となってそのまま使用されながら残されているので、松代は比較的ものが残っています。もちろん、周辺部分のいろんな施設はかなり壊されてしまっていますが、一番重要な仮皇居のような部分は現在でも見学することができます。それから日吉の地下壕については、連合艦隊の司令部がそこに移るということでトンネルを掘ったということです。もともと連合艦隊司令部は開戦時には戦艦長門に、そのあと戦艦大和や戦艦武蔵にありましたが、軍艦にある必要はないということ

で、結局陸に上がることになりました。そのためには通信設備と攻撃を受けた時の耐弾性といえますか、攻撃を受けた時の耐える力があればいいということで、日吉に地下壕を掘って、一応、大学のキャンパスをカモフラージュに使うわけです。その地下にトンネルを掘って連合艦隊司令部を移したと、こういうことです。この登戸には大規模な地下壕はありません。ただ小規模な防空壕だけはあります。登戸研究所はなぜか空襲、爆弾による攻撃は受けていません。ですから建物も破壊されておりません。ただ機銃掃射は受けていたようで、そのための防空壕と言いましょか、地下壕は斜面を利用して何ヶ所か掘ってあったみたいです。現在でもその跡は残っておりますが、大規模な地下壕があったということは聞いていません。以上です。

質問者2：旧陸軍登戸研究所というので登戸の駅の方かと思いました。そしたらこの生田の方で。昔はここら辺を登戸と言ったのですか。どういうことで登戸という名称になったのでしょうか。

山田：はい、この地が登戸という地名になったことは一度もありません。ここは戦前から生田です。登戸という地名はどこから来たのかと言うと、現在の向ヶ丘遊園駅あたりがもともとの登戸というところ。登戸郵便局も、登戸交差点もそこにあります。戦前において向ヶ丘遊園駅は稲田登戸駅という名前でした。そこから行く研究所という意味なんですね。ですから、そのものズバリの名前を付けてしまうよりは、ちょっとずれた名前を使っているということです。そういうのは、わりと軍事施設にはよくある話です。例えば厚木航空隊〔厚木飛行場〕というのは必ずしも厚木にない、というのは、そのような理由からです。ですから近い地名は付いているのですが、中野学校みたいにそのものズバリの地名がついている場合もありますけれども、やはり少しずらした地名、特に秘匿名称として使う場合にはそこから行くのだ、というだけで、この土地がそのものズバリ登戸であったわけではない、まさに地名としての登戸というところではないということです。秘匿するということからそういう名称が使われたのだらうと思われま。

質問者3：先ほど登戸は空襲を受けていないという話がありました。これはアメリカがここをそういうふうに認識してなかったのか、あるいは意図的に空襲しなかったのでしょうか。それともう一点、実は私は伊那飛行場近くに居るんですけども、伊那地方も、私聞いたところでは空襲はないと思っているんです。が、先ほど話で天竜川を上りながら空襲の計画があった話があったので、出来たのが4月に入ってから、そこでもアメリカは当時そこに登戸研究所の移転先だという認識はなかったのでしょうか。米軍がなぜ空襲しなかったのかという点でちょっとお話しただけだと思います。お願い致します。

山田：はい、これは非常に大きな問題で、私たちも不思議に思っています。当時の航空写真を

見ると非常に大規模な施設が並んでいて、これが空襲を免れたのは偶然とはどう考えても思えないです。しかも現在、南の方の農学部畑になっているところは、風船爆弾の打ち上げ実験場なので、風船爆弾関係の事をやっているということはある程度わかっていて、わかった上で敢えて空襲しなかった場所ではないかと推定しています。その場所が何なのかわかってはいるけれども、占領した後に使おうとか、あるいは人材を一網打尽にしようとか、そういう理由で空襲していない場所というのは確かにあります。そういう点では実は米軍側の資料が明らかにならないと真相は分かりませんが、川崎〔南部〕は非常に激しく空襲されているわけですし、この近くでも空襲されている場所があります。しかし敢えて、大きな施設が空から見たら丸わかりであるにもかかわらず空襲されなかったのは、偶然というよりはアメリカ側に何らかの意図があってここをあえて残したというふうに思われます。そして実際に、多くの登戸関係者が米軍に戦後、非常に重用され、重要視されています。研究成果と引き換えに戦犯の免責が行なわれたということだけでなく、実際に技術を使って米軍で働く。毒物・薬物の専門家だった伴繁雄さんなどは、横須賀基地で働いていますし、偽札の責任者である山本憲蔵大佐はアメリカまで行って仕事をしています。もちろん後からの推定ですが、陸軍が対ソ戦、ソ連の情報をかなり持っていたということもあるのだと思いますが、ひょっとしたら米軍は貴重な人材確保ということを意図していたかもしれないです。戦後そういう人たちを非常に米軍が丁寧に扱い、待遇よく働かせているところを見ると、そういう部分もあったのかと推定しています。

質問者4：私は敗戦の年は、今で言う小学校、当時は国民学校の2年生でした。住んでいたところは岡山県の鳥取に近い山間部だったのですが、私が2年になったころ、学校が軍隊に接収されて、その軍隊が山の中にトンネルを掘っていたと思うんです。そこに、敗戦になったときにわかったのですが、たくさんの物資を貯蔵していたということがあります。当時、私は小さい歳でよくわかりませんでしたが、そうこともやっぱり本土決戦に迫られてやっていたのではないかと最近になって思っています。そんなことが全国的にはどういう規模でやられていたのかということがわかりましたら教えていただきたいです。

山田：はい、今、ご指摘のように、本土決戦に備えて各所に物資の集積場所というのをつくっています。弾薬だけではなく食糧もです。これはほんとうに全国あらゆるところにつくっていて、戦後、隠匿物資として摘発されたり、軍の関係者が個人的にそれをどこかにもっていったり、そういういろんな事件があります。実は本土決戦期には、物がなく、とは言えるものの、わりと早い時期から〔本土決戦の可能性を〕言われていたものですから、それなりに物資の集積が行なわれています。特にこれは九州の南部で最初に米軍が上陸してくるおそれがあったこともあり、宮崎県、熊本県の山間部にはかなりそういう物資の集積のトンネルの跡が現在でも多く発見されています。四国、それから中部地方、先ほどの天竜川周辺にも、やっぱりなにか想

定していた可能性があります。米軍の上陸を想定してすぐに対応できるように弾薬を集積するといったような場所があったんです。まだ全国レベルで全貌が明らかになっているということではありませんが、特に最近になって本土決戦遺跡というような言い方もされるようになり、特攻艇の基地であるとか、あるいは何に使ったかよくわからないけれども倉庫のようなトンネル、そういうものが結構発見されていて、また戦後それらが再利用されたりなんてことも結構あります。特に今年はかなり報道もあってそういう本土決戦関係の遺跡が随分新たに、今までそこに何かあるとわかっていても、何であるのかよくわからないもの、というのが結構あったのですが、そういうものがわかってきつつあります。この戦後70年ということをきっかけにして、よくわからなかったことが、もう少しわかってくるのではないかと期待していますし、実際、調査はいろんな場所で進んでいくと思います。

質問者5：私が一番気になっているのが石井部隊のことにに関してなんですが、資料があまり無いようですが、もしかして先ほどの濾過装置は、進駐軍に対して、本土で実際に使おうとしたのではないのでしょうか。

山田：私たちもそのように推定しています。石井式濾水機過筒というのはまさに石井部隊、731部隊が軍隊用に作った濾水機で、要するに細菌に汚染されたような水も飲み水に変えることができます。それは当然そういう使い方もあるのですが、細菌戦を実施した場合には基本的にすべての水は汚染されますから濾水機・濾過筒がないと日本軍も困るということになります。あえて非常に水が良い長野県に大量の濾過筒を持ち込んだのは、水を汚染する、ということを考えないと濾過筒を大量に持ち込んだ理由というのがなかなか出てこないのです。ですから本土決戦に際しては場合によっては細菌戦も有りうる。さきほども言いましたように毒ガス戦を想定しているくらいですから細菌戦の想定があっても全然おかしくないわけです。それに備えて濾過筒を長野県にかなり持ち込んでいたのではないかと推定しています。これは文書史料で残らない記録ですが、物から推定してこのように考えた方がわかりやすいと考えます。本土決戦に際しては場合によっては日本側の細菌戦も一つの選択肢として考えていた可能性があるのではないかと、ということです。

それでは、これで記念講演会を終わりたいと思います。どうもありがとうございました。

〔終〕

〔追記〕

本稿は、2015年8月22日(土)に明治大学生田キャンパス第二校舎2号館2001番教室にて開催された第6回企画展記念第一回講演会「NOBORITO 1945 ―8月15日までの登戸研究所―」の書き起こしに加筆・修正したものです。

第6回企画展「NOBORITO 1945 ―登戸研究所 70年前の真実―」記録

企画展記念第二回講演会 第二期：8月15日以降の登戸研究所 戦後の登戸研究所と所員たち

山田 朗

明治大学平和教育登戸研究所資料館長

はじめに

皆さん、こんにちは。登戸研究所資料館企画展記念講演会にお越しいただきましてどうもありがとうございます。従来、企画展は11月から始めて3月までの期間でやっているのですが、今年度に限りまして戦後70年ということがございますから昨年8月から企画展を始めまして、第一回の講演会を8月にやらせていただいております。それを受けて今日が第二回の講演会です。企画展の方でも第一期、第二期というふうに分れておりまして、一期は8月15日までの登戸研究所ということで1945（昭和20）年の登戸研究所は、敗戦までどんなことをやっていたのかということの第一期の企画展で展示をいたしました。そして11月から第二期ということで8月15日以降の登戸研究所はどうなったのか、もちろん陸軍登戸研究所という組織としてはなくなるわけですが、そこに勤めていた人たちにも戦後の歴史があるわけです。それから、何といいましても8月15日以降にこの登戸研究所に関係するさまざまな証拠が隠滅されたというようなこともありますので、そのあたりを中心にこの第二期の企画展を開催しております。その内容と、さらにそこからわかってきたことを皆様にお伝えをしたいというのがこの講演会の目的です。

70年前、1945（昭和20）年の8月15日以降、何が起こったのか。一言でいえば、登戸研究所での証拠隠滅ということですが、当時の登戸研究所は大きく言うと二つに分かれていました。まず、この生田の地にある登戸研究所。これはもともとここに登戸研究所があって、昭和20年4月を期して全国に分散疎開するのです。主だったものは長野県の伊那地方に移転をします。それから研究部門は同じく長野県の安曇野に移転をするのです。伊那地方で行われた証拠隠滅について、私たちも調査をして参りましたので、ここでお伝えすることができます。それから、所員達の戦後ですね。実はこれは登戸研究所を考える上で非常に重要なところです。1946（昭和21）年1月に公職追放令というのが出て職業軍人の人たちは公職に就けなくなる。この場合の公職というのは公務員、議員ですね。それから教育関係やマスコミ関係も公職という枠内に含まれ、そういう職業に就けなくなります。そうしますと、当然自分たちが今まで身

に付けてきた技術を活かして企業を起こしたり、あるいは民間企業に勤めたり、さらには米軍に参加するという人たちが出てきます。特に登戸研究所に関係した人たちのなかでも、偽札関係とか、そういう秘密中の秘密の作戦に関わった人たちのなかには米軍に参加をして、その後の朝鮮戦争、初期のベトナム戦争の頃まで米軍の仕事をしていたという人がいらっしやるんですね。実はこの部分は本当にわかりません。といいますのは、戦前のことについて非常に詳しく本に書いているような人たちでも、戦後、米軍のなかで何をやったのかということについてはほとんど語っておられないのです。これはいろいろ語れない事情というのがあるわけですし、現在につながっている。それから米軍との関係で、やっぱり今もって話すことができないということがたくさんあるわけです。伴繁雄さんという登戸研究所ができた時からずっと関わって、第二科で班長を務めた非常に重要な人が、『陸軍登戸研究所の真実』という本を戦後お書きになりました（1993年脱稿、2001年芙蓉書房出版より刊行）。人体実験などについてもその本のなかで触れているわけですが、戦後の米軍との関わりについてはほとんど触れておられない。ですから、私たちも文献で確かめるということがなかなかできないものですから、やはり関係者の方、そこに関わった方への聞き取りを中心に、こういうことが行われたのではないかということを推定せざるを得ないということですし、また証言をしてくださった方への差し障りもあるものですから、あまり具体的にお名前を出して語るができないという部分がございますので、その点あらかじめご了承くださいと思います。しかし、現実問題としては米軍の秘密戦に協力する、協力するというか、まさに米軍の一員となってそれに参加していく人たちが出てきたということです。

【明治大学生田キャンパスの歴史】

私たちが今いますのが明治大学生田キャンパス内の中央校舎という建物の6階ですね。これが終戦直後、1947（昭和22）年にGHQが撮影した登戸研究所の写真です。もちろんこの段階では、すでに登戸研究所ではないわけですが、ここ（現在の生田図書館北側の敷地）にあるのが登戸研究所の本部本館と呼ばれているものでして、この本部本館とその西側にある建物（現在の中央校舎の北半分）、この一角は、実は登戸研究所ができる前からこの地にあった建物です。登戸研究所は1937（昭和12）年にこの場所に実験施設が初めてできるのですけれども、それ以前は何もなかったのかというと、そうではなくて、実は1932（昭和7）年からここには日本高等拓植学校というブラジル移民、特にブラジルのアマゾン地方に移民をする移民養成のための学校があったのです。アマゾンへの移民ってどういうことをやるのかというと、ジュート栽培、ジュートっていうのは麻です。麻を栽培する。何で麻を栽培するのかというと、一番の需要はコーヒー袋ですね。コーヒーを入れるための袋、これを作るために、麻の繊維を編んで袋を作ります。そのジュートを栽培する移民というのがあったんですね。普通、ブラジ

ル移民というとコーヒー農園に移民する人をイメージしますが、そのコーヒーを入れる袋を作る移民というのがあったということなのです。1936（昭和11）年、二・二六事件があった年に撮られた航空写真にはちょっと不鮮明ですが、建物が写っています（拓植学校本館・寄宿舎）。私たちはまさにこの寄宿舎跡上空に今いるわけですし、隣に本館が写っています。他の建物はみんな登戸研究所になってから新たに建てられた建物です。更にこの後、本館・寄宿舎の北側にも、それから南側の方にも施設が増設されていくんですね。今、資料館になっている建物はここ（西南部）に写っています。現資料館の東側の大きな建物は偽札の印刷工場なんですね。偽札については後でまたお話をしますが、偽札の製造というのはずっとここで行われているのです。疎開をせずに、一部機能を福井県の方に移しますが、基本的には、偽札の印刷というのは終戦までずっとこの生田の地で行われておりました。



【写真1・日本高等拓植学校（ポストカード）1932（昭和7）年頃撮影】（上塚芳郎氏提供）

これは高等拓植学校時代の写真、南の方から北の方に向けて撮った写真でして、右側に高等拓殖学校の本館、ちょっとお洒落な建物ですね。左側に寄宿舎がありました。この台地上がすべて農園だったんですね。そういう場所だったのです。この写真はとも、お土産にするための絵はがきでして、ここにポルトガル語で説明が書いてあります。1932（昭和7）年にできた当時の写真ですね。

今、お話しましたように1932年、昭和7年から昭和12年まではこの日本高等拓植学校があったのですが、1937年にその土地を陸軍が買い取りました。と言いますのは、ブラジル移民をする人がいなくなっちゃうんですね。もう当時、時代は満洲移民の時代になって、満洲へ満洲へと移民が送られていく時代になりました。ですから、ブラジルに移民をするという人がいなくなりまして、結局この日本高等拓植学校は閉鎖されることになったのです。その土地に注目したのは日本陸軍でして、そこをすべて買い取ってここに登戸研究所を作りました。1945年までは、ここに登戸研究所があったわけです。1945年から1950年までは、実はこの登戸研究所の建物を利用して、慶應義塾大学、それから北里研究所、巴川製紙所、こういうところがこの土地を利用していました。慶應義塾大学は、日吉のキャンパスがもともと連合艦隊の司令部として使われていたものですから、GHQに接収されてしまって使えなくなってしまうのです。ですから日吉のキャンパスを一時こちらに移転させて、この生田に「登戸仮校舎」というかた

ちで5年ほど慶應大学がここを使っています。ですから慶應大学がこの登戸研究所の建物の中を改装して、教室だとかそういうものにしていたようです。あと、登戸研究所時代に偽札を製造するための製紙工場をここに作りました。それを利用したのが巴川製紙所で、巴川製紙所はもともと偽札製造で技術を陸軍に提供していたのです。そういう関係もあります。戦後5年ばかりこういう時期がありました。一旦陸軍がこの土地を全部、買い上げておりますので国有地なんですね。国有地を借りるかたちで、このようなものがあつたんです。そしてその後、1950年に明治大学がこの土地を取得いたしました。当時比較的に安いお金で国有地を払い下げることが行われておりますので、戦後つくられた大学のキャンパスというのは大体もとを辿れば軍用地であつたり、軍需工場であつたりというのが多い。この登戸もまさにその通りです。登戸研究所の敷地は、11万坪ほどありました。東京ドーム9個分という非常に広い土地です。現在の生田キャンパスが5万坪くらいですから、現在でも結構広いキャンパスですが、これの倍以上の敷地が登戸研究所時代はあつたということです。明治大学が取得した段階でも、そのなかに建物89棟がありました。明治大学が取得していない部分もありますので、登戸研究所の建物というのは少なくとも100棟以上あつたのです。そのうち、明治大学が取得しただけでも89棟、コンクリート製が7棟ありました。これらは全て平屋建てです。二階建ての建物というのは無いですね。このコンクリート製の建物1棟が、現在資料館になっている建物です。1951年から農学部のカンパスになりました。しばらくここは農学部単独のカンパスだったのですけれども、1964年、前の東京オリンピックがあつた年に、聖橋校舎と言つてもともと御茶ノ水にあつた工学部がこちらに移転をしてきまして、現在でも中央校舎を挟んで北側、小田急線の方の側は理工学部が使っている（後に工学部が理工学部という名前に変わりました）。中央校舎よりも南側を農学部が使っておりまして、実はごく一時期、1950年代に経営学部もここにあつたことがあるのです。これは本当にごく一時期、3年ばかりですけれども、ここで学んだ経営学部の人がいいます。これは極めて貴重な存在なんですけれども実際そういう方が資料館にいらっしゃつたこともあります。なかなか今では知られていない事実なんですけど。

1960年代に撮られた明治大学生田キャンパスの写真には、ヒマラヤ杉が写っています。図書館の前の空間に、このヒマラヤ杉が今でもあります。この建物というのがもともと日本高等拓植学校の講堂であつた建物なんですね。登戸研究所では本部本館として使われていたこの建物が、戦後は明治大学の図書館になったのです。ですから全く同じ建物が、移民養成学校の本館、登戸研究所という軍事施設の本部、そして戦後は、大学の図書館とですね、全く機能を変えずに使われ続けて、この建物は1990年まで残っていました。わりと最近まであつたんですね。この建物はもとをただせば拓植学校時代の本館です。その段階では凄く綺麗な建物ですけれども、長年使われている内にだんだん朽ち果てていってしまい、今では解体されて、もうなくなつてしまいました。

I 敗戦にともなう証拠隠滅作業

1 証拠隠滅作業

少しこのキャンパスの紹介をさせていただきましたけれども、昭和20（1945）年8月15日、玉音放送よりも前に実は午前中に陸軍省の軍事課というところ、これはまさに陸軍省の一番中枢部分ですが、ここから命令が出まして、「登戸」、それから「ふ号」関係、「ふ号」関係というのは風船爆弾のことですね、これらは優先的に証拠を隠滅せよという指令が出ます。これなぜこんな命令が出たかと言いますと、ポツダム宣言を8月14日に日本は受諾をするわけですが、そのポツダム宣言のなかの項目に戦争犯罪人の処罰というのが入っています。ですからポツダム宣言を受諾して日本は降伏をしたわけですが、そうすると連合国が自動的に戦争犯罪人の処罰を行うぞということなんです。ですから日本側としては何を考えたかという、戦争犯罪人とは何かというのは不明確なので、それならば戦争に関する資料は一切合財消してしまおうというのが当時の軍の考え方でした。ポツダム宣言受諾が8月14日ですが、米軍が上陸してくるのはいつかと言いますと、一番初めに上陸してきた部隊は8月28日なんです。これは上陸とは言っても、厚木飛行場にまず第一陣、先遣隊がやってきた。8月30日にマッカーサーも厚木にやってくるわけですね。ですから日本は降伏したけれども占領されていないという時期が2週間あります。この2週間に徹底的な証拠の隠滅、具体的には書類の焼却が行なわれます。登戸関係はまさに真っ先に証拠書類の焼却、それから器物の破壊ということが行われまして、疎開先の伊那でも書類の焼却、それから器物の破壊、作った武器なんかの破壊が行なわれます。ただ建物そのものはみんな残るのです。特にこの登戸研究所は空襲（爆撃）を受けていませんで、建物は綺麗に残っているんです。ですからなかにあった書類だとかそういう証拠物件は綺麗さっぱりなくなってしまうんですけれども、外側の建物はそのまま残りました。実はこれは登戸研究所だけではなくて、全国の軍事施設で行われた共通の作業です。私は歴史の研究者ですから、一番ここは残念に思うのですが、膨大な資料がここで失われてしまうんですね。戦争に関係した一次資料、まさにリアルタイムで作成された資料というのが、これは数量で表すことはできませんけれども、しかし少なくともおそらくは90%以上の文書資料がここで焼却処分されてしまう。実は戦後残された資料というのは戦後復元された資料が多いです。元の、それを起案したような人たちが思い出してもう一回復元したような資料が多いのです。本当の原資料というのは、徹底的に処分されてしまいました。これはなぜかという、当時日本軍の命令系統は全部生きているわけですね。日本国内は全く占領されていないわけですから、軍中央から命令を出せば、全部それが実行されます。それを邪魔するものはだれもないわけです。全国の軍事施設、これは当時、敗戦時に軍隊にいた人の共通体験で、大体大きな穴を掘って、そこで書類を焼いたという思い出が語られています。伊那でもそうです。重要

な戦争関係資料がここで消滅してしまいます。2週間あれば相当のことが出来るわけですよね。本来この2週間というのは、別にこのために2週間空けたわけではなくて、米軍が上陸する準備がまだ出来ていなかったんですね。ですから、準備を整えて上陸してくるまでの2週間の間に軍と政府はいろいろと都合の悪い戦争関係の資料を徹底的に処分することができた。ですから、東京裁判というのは証拠物件がない裁判なのです。そのために、証言に頼らざるを得ないということで延々と続いてしまうのです。ドイツに対するニュルンベルク軍事裁判は、これは証拠物件を連合軍が押さえたものですから1年で終わっているのです。ところが東京裁判というのは、1946年から始まって、46、47、48と足かけ3年も続く長い裁判になってしまうのは、文書資料がなくて、結局証言をもとにした裁判にならざるを得なかったということがあります。その大もとをつくったのは、この敗戦から2週間の大々的な証拠の隠滅作業であったということですね。今から考えると処分しなくてもいいようなものまで徹底的に処分をしている。例えば役所、村役場とか町の役場にあった兵事関係書類、つまり、今この町から誰が出征しているとか、そういう資料も徹底的に処分してしまったんですね。ですから今ほとんど残っていません。たまたま偶然残ったものはあるのですけれども、大半のものは、内務省の命令によって徹底的に焼いてしまって証拠が残っていない。それは後から考えると非常に無駄なことをしたという感じもします。そこまでやらなくてもよかったはずなのです。実際に伊那地方に行きますと、これは登戸研究所が移転していた中沢国民学校、現在中沢小学校ですけれども、その校庭を掘り出しますと、ちょっとわかりにくいですが、ガラス交じりの瓦礫が出てまいりました。これは最近になって掘り出されたものですが、焼け焦げた土とか木の燃えカスみたいなものですね、いろんなものが雑多に入っています。元の状態では何が何だか分からないものですから、資料館でも少しこれを分類して、それを展示しております。こういうことが全国で行われた。特に登戸研究所は小学校とか、お寺、神社、そういうところに分工場を作って移転しておりましたので、それらで証拠隠滅作業が行われたということなのです。

2 証拠隠滅にともなう事故・不始末

この証拠の隠滅作業にともなう事故も起きます。わりとよくあるのは作った兵器を破壊したときの爆発で何か飛んできてけがをしてしまうということです。企画展で展示していますので、まだご覧になっていらっしゃる方は是非見ていただきたいのですが、証拠隠滅を免れたものが例外的にあるのです。証拠隠滅を免れたというか、本来だったら完全に隠滅されてしまうはずだったけれども、偶然残ってしまったものというのがあるのです。これは中沢第三分工場、福岡社という神社に残されていたプラスチック製の棒のようなもの、この中に燃焼物が詰められておりまして、火を付けて放火をする道具として使おうとしたもののようなのですけれども、これが残っていたのです。今、企画展で展示しておりますけれども、ちょうど1メー

トルぐらい、直径1.5センチぐらいの棒です。樹脂製と言いましょうか、プラスチック製の棒みたいなものですが、真ん中に穴が空いておりまして、つまり大きな鉛筆みたいなものを想像していただければいいんですが、真ん中の鉛筆の芯の部分に燃焼物が詰められていて、マッチとかライターで火を付けると、20センチくらいボーッと火が出ます。これを福岡社で、当時動員されて働いていた地元の方がどういうわけか持って帰った。どういうわけかよくわかりません。普通こういうものは処分されてしまうはずですけども、処分される前に10本くらい持ち帰ったようです。持ち帰っても、実用的なものでもありませんから、そのまま捨てられてしまうのが普通ですけども、これを持って帰った方は、これが非常に便利なものだということに気が付いてずっと戦後使っていたのです。使っていたというのは、これ火が出るものですから、蜂の巣を焼くのにちょうどいいということです。長い棒で先から火が15センチから20センチくらいボーッと出るんですよ。確かに蜂の巣を焼く便利な道具になるわけで、これをずっと70年間使ってきた。ですからどんどんなくなってしまった。簡単に火が付いて簡単に消せるんですね。蜂の巣を焼いては消す、焼いては消すってずーっと使ってきて、どんどんなくなる、だんだん溶けてなくなってきますので、10本ぐらいあったのが残り3本ぐらいになった段階で、ちょうど私たちが調査に訪れたのです。その方にそれを見せてもらうという予定で行ったのではありませんでしたが、こんなものがあるよと、地元ですと登戸研究所のことを調べていらっしゃる先生から紹介をさせていただいて、その方のお宅に行ったら、こんなものがあるよ、じゃあちょっと今から火を付けてみようとかって言われたんですけども、危ないので、ちょっとそれはやめましようということにしたのです。このことが、地元の新聞に載りまして、NHKがそれを聞いてこの方のところに来て、その残りの1本に火を付けちゃったんです。その方も実際に蜂の巣を焼いて見せた。そうしたら確かによく燃えると言いましょうか、非常に役に立つと。NHKはその成分分析もしてくれました。私たちはよっぽど特殊な薬品が詰められているのではないかなと思ったのですが、ほとんど松脂のような植物性のものなのだそうです。70年経ってそれがすぐに使えるというところがなかなか凄いですよね。凄く単純な、簡便な兵器です。でも、非常に役に立ったものですが、その方が大切に保管していたということではないのです。何かガレージの片隅に普通に置いていたという感じなのですが、そういう置き方していても使える状態だった。これは例外というか、例外中の例外です。秘密戦のために当時作った兵器の一部が、今、現物が残っているなんていうことはちょっと考えられないことですね。たまたまこれは違ったかたちで使われていたので、残されたけれども、こういう事例が他に沢山あるとは思えません。もっと高度な兵器ですと、当然残らずに処分されてしまったということが言えると思いますし、もっと危険なもの、例えば毒ガスのようなものでしたら危ないので、まず真っ先に処分されてしまうわけです。ですから、これは証拠隠滅の例外中の例外ということですね。

もう一つ、証拠隠滅にともなう事故がありました。伊那では毒入りチョコレート誤食事件と

いうのが起きているのです。伊那村分工場、これは当時の伊那村国民学校、現在、東伊那小学校というところですけど、ここもやはり工場になっていた。そこで毒入りチョコレートというものを作っていた。これも謀略の兵器です。つまり、もし本土決戦になったら毒入りチョコレートを米軍のいるところに撒いて、間違っって米兵がそれを食べると、お腹が痛くなるか死んでしまうかわかりませんが、そういうことを狙って作ったものです。ところがそれをうっかり事情がわからない人が子どもに与えてしまったのです。すぐに処置をして犠牲者は出なかったようですが、毒入りチョコレートを作っていたという証言も残っています。明らかにこの伊那村分工場では本土決戦用の攪乱兵器として、秘密戦用の毒入りチョコレートを製造していたということですね。当時の伊那村国民学校の学校日誌には、1945年8月18日に「登戸学徒有毒チョコレート誤食…事前処置完了」と書いてある。「事前処置」と書いてありますが、おそらく「事後処置」でしょうね。ですから、多分犠牲者は出なかったと思いますが、こんなこともあった。普通の学校じゃ有り得ないことですが、この学校が登戸の分工場として使われていたためにこのようなことが起きたわけです。実は他の軍事施設でもわりとあるのはニトログリセリンの誤食です。ニトログリセリンというのは甘いんですね。甘くて、それだけ舐めると結構おいしいそうで、残されていたニトログリセリンをなめちゃった、というようなもの。ニトログリセリンというのは要するにダイナマイトの原料となっているものですから、それが爆発した事故も、戦後、結構起きます。伊那では毒入りチョコレートですが、全国の軍事施設でもこのような事件も起きている。あるいは不発弾の爆発とか、それから処理が不十分で、例えば毒ガスの薬液が浸み出てきたとか、そういう事故が起きております。実は、現在でも毒ガス関係というのは日本国内、あるいは特に中国ですが、当時遺棄した毒ガス弾の毒ガス液、ガスとはいっても元は液体で、それが漏れ出てきて、今でも事故が起きています。

もう一つ、登戸、この生田では、偽札の処理が行われました。先ほど申しましたように8月15日までずっと偽札を印刷しました。ですから大量の偽札がこの登戸に残されていました。それを処分するわけです。イメージは掴めると思いますが、札束になったようなものをいきなり焼いても、なかなか燃えないですね。焼くけれども、燃え残りが出てしまうわけですね。燃え残りは捨ててしまおうということで、最初は多摩川に捨てに行ったらいい。しかし、気がついてみたら明らかにお札だというのがいっぱい川岸に漂着してしまいました。蛇籠というものが、石を詰めて堤防にありますね。それに燃え残りの偽札がいっぱい絡み付いているという状態です。これはいかん、ということで、またそれを集めて、今度は海に捨てに行ったそうです。処分もなかなか大変です。この登戸でも証拠隠滅は行われておりまして、器物を破壊するためではないかと思うのですが、わざわざ戦車まで持ってきている。警備のためという関係もあるかもしれませんが、別に戦車で守らなきゃいけないような事態ではないわけですし、恐

らく踏み潰す、何かを破壊するというようなことに使ったのではないか。「戦車が来てた」っていう証言は結構あります。

それから不思議なのは、偽札製造のための印刷機です。これはかなり何台もあったはずですが。しかも登戸研究所にある印刷機は非常に高価な印刷機です。本当のお札を印刷するための印刷機と同じものを使っていたわけですから。大元はドイツから輸入した立派な機械を日本国内でコピーしていくつか作って、それを何台もこの登戸研究所に入れていた。何で地方に移転しなかったかという、印刷機を持っていく、移動する、ということができなかったからです。非常に貴重なものですから、香港から運んできたものは破壊して埋めたというような証言もあるんですけども、多くは払い下げられたのではないかと思います。ただこれは、町の印刷屋さんが使うにはあまりにも大型の精巧な機械ですから、それなりの大きな会社でないと使えない。たくさん印刷機はあったはずですけども、いつの間にかみんななくなってしまう。ですから、これはよくわからないところです。

それから残った製紙材料がたくさんありました。紙の原料ですね。これは偽札関係ですから、パルプもあるでしょうし、あるいはここは風船爆弾の研究もやっていましたので和紙もあったと思いますし、偽札の切れ端も残っていたでしょう。これは偽札製造の過程で断裁した切れ端がいっぱい出ますから。お札であるというのがわからない部分というのが結構ありますので、そういうものは、当時こういう原料が不足していましたので、地元の業者・山田紙業、私と関係ないですけども、に払い下げられた。どうも登戸関係には山田さんが多いんですね。第二科長の山田桜さんという人もいますし、第一科で怪力光線をやっていた山田愿蔵さんとかですね、山田一族が結構関係しているんですけども、ここでも山田紙業が出てきます。交通銀行六連偽札は完成品ではなくて、資料館でも展示している半完成品です。これを断裁、六分割してナンバーを打って、それで完成ですね。これはたまたま戦後、偶然出てきた六連の偽札です。こういうものを大量に作っていたはずですが。ですから、登戸では、処理に困るほど大量に偽札が集積されていたということです。終戦近くになりますと、作った偽札をなかなか中国に輸送できなくなってしまう。もともとは、この登戸で造った偽札は中野学校を出た人が警備をして、鉄道で北九州まで運んで、そこから輸送船で上海に送る、朝鮮半島と北京経由で送るということをやっていたのですが、それができなくなってしまう。ですから、どんどん造った偽札がたま一方だったので、膨大な偽札がこの登戸研究所には残っていたと思われます。

このように、さまざまな形で証拠隠滅作業が行われました。私たちも今回いろいろと調査をいたしましたけれども、まだ、ごく一部を明らかにしたというだけです。まだまだ明らかにしなければいけないところがある。例えば伊那地方はさっきの小学校の学校日誌が残っていたので、どんなことが起こったのかというのはある程度わかりますけれども、研究部門が移転していた安曇野ではどうだったのか。これは当時作られたパラボナアンテナを湖に沈めたとか、そ

ういう証言と言いましょうか、回想はあるのですけれども、なかなかそれは確認ができないところで、これは今後の課題として残っております。それから、登戸研究所、他にも移転した場所、分散疎開した場所がありますので、そういう所もきちんと戦後どうなったのかということを見ていかなければいけないと思います。

Ⅱ 登戸研究所の所員たちの戦後

1 所員・雇員たちの復員

次に、登戸研究所の所員たちの戦後ということなんです。「所員・雇員たちの復員」と書きましたが、所員というのは登戸研究所の正式なメンバー、例えば技術将校・技師・技手など、まさに登戸研究所には「所員何名」というかたちで、軍に認められた人数がいます。こういう正式メンバーを「所員」といいます。それとは別にこの研究所の所長の裁量で雇える人たちがいます。定員外の職員ですけれども、それが「雇員」あるいは「工員」ですね。これらの人々を予算内で雇うことができる。これは特に定員があるわけではなくて、必要ならばたくさん雇うし、不要ならば減らす、ということが出来る人たちです。この証拠隠滅作業が終わった後、8月のうちに伊那では解散式が行われるのですが、残務整理者以外の所員、それから雇員、工員の人たちは、当然戦争が終わりましたので、復員することになるわけです。米軍による登戸研究所施設の接収は10月ぐらいから、これは長野でも行われます。実際にGHQが来て調査をして、建物を接収しました。建物を接収しただけではなくて、GHQの参謀2部という情報部で、主な所員は尋問を受けます。大体、技術将校、技師、技手、つまり幹部職員です。この人たちに限られますけれども、尋問が行われます。登戸研究所は第二科で人体実験をやっているのです、厳密に言うと、人体実験には捕虜を使っていますから、当時のBC級戦犯ということ、実際はこの場所（登戸）で人体実験をやったのではなくて、中国（南京）でやっているわけですが、当然そういう容疑というのはあるわけです。しかし、情報提供と引き換えに免責措置がとられたと言われておりまして、これは731〔部隊〕でも同じで、この登戸研究所からは戦犯として起訴された人は全くおりません。

当時の登戸研究所関係者の置かれた立場はどうであったのかといいますと、研究所の所員（技術将校、技師、技手）の人たちは、1946年1月にGHQの「公職追放令」というのが出ましたので、公職には就けません。公職というのは公務員・議員・教員、マスコミ関係も「公職」と規定されておりまして、こういうところに就けないわけです。ですから、自分で仕事を始めるか、あるいは企業に勤めるか、あるいは家業のある人は家業に復帰するか、あるいは帰農、ふるさとに帰って農業をやるか、ということになるわけです。雇員や工員は、退職一時金が支給されて、解雇・帰郷、ということになります。実際、この登戸周辺出身で採用された人も多い

ので、ここにまた戻ってくる、という人も多いわけですね。

2 起業した事例（伴繁雄氏の場合）

一つ起業した事例として、伴繁雄さんの事例を挙げます。伊那村分工場、先ほどの毒入りチョコレート的事件があったところですが、伴繁雄さんはもともと第二科の第一班の班長で、終戦時技術少佐でした。この人は地元の長野に残って、元所員たちと「上伊那農村工業研究所」を設立しまして、登戸研究所の技術と地元の資源を活かした製品の開発を行います。例えば、パーマネントキャンドル。当時、電力不足でよく停電が起きましたので、パラフィンを補充することでランプのように使える蠟燭ということです。こういうものを作って売っていたということです。それからベントナイトクレンザーという、ベントナイトというのは、伊那地方でとれる粒子の細かい白土でして、これを使ってクレンザーを作ったというんですね。その包装箱と中身が残されております。戦後の物不足、それから地元で採れるものを利用してこういう製品を作っていたということです。伴さんは、終戦後しばらくは、元の所員のの人たちと研究所時代の技術を使ってそれなりに仕事をして、物を売って、生活を立てようとしていたようです。

3 関連企業に就職した事例

また関連企業に就職した事例は多いです。北安曇郡の池田町に移転していた「日本高周波」という会社、これはもともと登戸研究所と非常に結びつきの強い会社です。登戸研究所の第一科長、第一科というのは「く号」兵器、電波兵器とか風船爆弾を開発したところですが、その科長であった草場季喜元陸軍少将をはじめとする人たちが役員として就職をして、電波兵器技術の平和利用、もちろん戦後ですから、当然平和利用しかできないわけで、かつて研究した技術を活かしていろいろなものを製品化したということです。電波とはいっても、高周波を使って木材を乾燥させる、接着させる、それからあるいは木材を曲げるというようなこと、あるいは金属の焼き入れとか、塩化ビニールの接着とか、高周波を使って、何か材料を加工するということに研究成果を活かしたということです。登戸研究所はもともと1937（昭和12）年にここに実験施設ができた時はまさに電波兵器の実験場としてできたわけですね。もともと「登戸実験場」と言っていたのです。最初の実験は電波兵器の実験だった。ですからもともこの登戸は電波関係、電波と言ってもすごく幅は広くていろいろなものに使えるわけですが、特に超短波、それを使った兵器開発をやっておりましたので、それを応用したことをまた戦後、始めたということになります。関連企業への就職という点では、この登戸研究所の所長であった篠田鐸という人、終戦時陸軍中将ですが、この人は巴川製紙所に迎えられまして、後には巴川製紙所の社長にもなりました。

4 登戸研究所関係の軍事技術のその後

登戸研究所関係の軍事技術のその後を少し見ておきたいと思います。登戸研究所が最も力を入れていた「く号」兵器、つまり「怪力光線」,「怪力電波」は、別にこれが元になったというわけではなくて、同じ原理で電子レンジとか、魚群探知機などにこの技術が応用されていきます。電波、目に見えない力で何かを破壊するというような、こういう発想としてはレーザー兵器として現在継承され、実用化されています。こういうものがどうして有効なのかというと、例えば大砲などは撃った反動が起きます。これは地上だったら別に構わないのですが、例えば飛行機から大砲を撃つことはできないわけですし、宇宙空間ですと、反動があると、例えば人工衛星に大砲を積んだとすると撃ったその反動で人工衛星の方が飛んで行ってしまうということが起きるわけです。ところが電波とかあるいはレーザーですと、全く何の反動もなく照射できますから、兵器として非常に都合がいいということです。ですから、このレーザー兵器というのは、実は地上ではほとんど見当たらないものなので私たち気が付きませんが、宇宙空間にはこのレーザー兵器は配備されているのです。つまり人工衛星が人工衛星を攻撃する、つまり核戦争になった時にミサイルを目標に誘導するのは人工衛星です。あるいは相手の目標を確認するのは、まさに今私たちは車でもナビを使っているわけですが、あれは人工衛星の技術がなければ成り立たないわけです。もしその人工衛星が破壊されてしまったら、そういうGPSも使えないし、当然ミサイルの誘導も、通信もできない、ということになります。そのような戦争が起きた時にはまず相手方の人工衛星を徹底的に破壊するということが考えられています。そうすると、宇宙空間にさっきも言いましたようにミサイルとか大砲だとかそういうものを配備できませんから、このレーザー兵器を配備して全く反動が起きない兵器として使われているということですね。実は恐ろしいことに、兵器開発というのは、何か可能性があるとどんどん進んで行ってしまうということです。

それからもう一つ、第一科でやった風船爆弾の和紙の技術、和紙の機械漉きの技術のことで。和紙というのは洋紙と同じく紙ですが、実はちょっと性格が違います。紙の繊維の長さが和紙は長いために簡単に機械で漉くということができません。洋紙はパルプで繊維が短いのですから、これは容易に機械で漉くことができます。和紙は、手漉き和紙を想像していただけるといいのですが、普通に網の上に水をサーッと流しただけでは、上手く均等に広がらないのです。それは繊維が長くて、絡まり合ってしまうからです。ですから、揺らすような、よく手漉き和紙ですと^{すけた}簀笥を職人さんが揺らしていますよね。あの揺らす技術がないと、上手く漉けないのです。ところが、風船爆弾を開発する時に、何とか大量に同じ質の和紙ができないかということで、機械漉きの技術を開発しました。もともと、これはまだ試作段階ぐらいで、大量生産はされませんでした。しかし、戦後、懸垂短網自動抄紙機、懸垂というのは手漉き和紙の揺らす動作ですが、これを機械で行うという、手漉き和紙と機械漉きの技術を上手く混合さ

せた和紙の機械製紙技術ができるのです。ですから今では、和紙の活用範囲が非常に広まりました。例えば手漉き和紙ですとどうしても大きさが限られてしまいます。つまり、和紙を濾過する簀桁よりも大きなものはできないわけですけど、機械で、ロール状にどんどん巻いていきますと、壁紙のような非常に大きなものまでできる。今ではこうしたことは実用化されているのです。ところが非常に皮肉なことに、自動抄紙機が普及したために各地の手漉き和紙が苦しくなってしまうということが起きました。しかし、和紙の自動抄紙、自動で紙を漉くという技術の元はまさにこの戦争のときに作られたということなんです。

それから登戸研究所でも関係しておりました、これは第一回目の講演会でもお話ししたものですけれども、「マルケ」と「ね号」、これらは別々のものでした。「ね号」という兵器が発展して「マルケ」になるのです。「ね号」というのは熱線、赤外線のことです。熱が出ているところからは赤外線が出るわけです。熱が出ているところに向けて自動的に大砲や機関銃を向けるという技術、これがもともと「ね号」というものです。これを登戸研究所でも研究しているのです。これが本土決戦用兵器「マルケ」に変化する。「マルケ」の「ケ」は決戦の「ケ」です。ですから決戦兵器として非常に期待されたもので、爆弾の頭に赤外線センサーが付いて、熱線、赤外線を発しているところめがけて爆弾が自動的に落ちていく。爆弾の羽のところに^{かじ}舵が付いていて、熱を発しているところに向けて爆弾が自動的に落ちていくという装置です。これは登戸だけではなくて陸軍の総力をあげて作っていた兵器ですが、まさに誘導式爆弾ですね。実は「ね号」も「マルケ」も今は完全に実用化されているのです。「ね号」、つまり銃砲の自動照準装置、赤外線を発しているところに自動的に大砲を向ける、あるいは機関銃を向けるというような技術です。海上自衛隊の護衛艦や海上保安庁の巡視船なんかに積んでいる機関砲の類はみんなこの装置を積んでいます。もちろん人力で照準を付けることもできますけれども、自動的に相手のエンジンめがけて発射するというものです。それから「マルケ」の方はミサイルの誘導技術として実用化をされています。実際に熱を発している、例えば飛行機は当然エンジンから熱を出しているわけです。それをめがけてミサイルが追いかけてくという技術です。ですから、こう見ますと登戸研究所で考えていたことは、もちろん平和利用として使われている部分もありますけれども、やはりそれを使ってさらに高度な兵器を作ろうというところに結びついているということです。当時の日本の技術ではできなかったわけですが、今の技術水準になるとこういうことが実現してしまうということです。

それから、第三科でやっていた偽札とか偽パスポートですね。これはまさに戦後、米軍の秘密戦遂行の道具として活用されます。これは登戸の技術が非常に精巧であったということと同時に陸軍はもともと対ソ戦争ということをずっと考えていてソ連情報を集めていました。例えばソ連のパスポートの紙質あるいはパスポートを綴っている針金の材質などをずっと研究していたわけです。ソ連情報プラスそれを製造する技術、両方持っていたのが登戸研究所第三科で、

この第三科の科長は山本憲蔵さんという人で、この人はもともとは対ソ謀略戦、ソ連に対する情報活動をやっていた。そういうこともあって戦後にこれらはみんな繋がってまいります。

5 米軍GPSO（政府印刷補給所）での活動

今回の第二期の企画展のひとつの目玉でもあるのですけれども、米軍のGPSOという組織、GPSOというのは、Government Printing Supplies Office、直訳すれば政府印刷補給所みたいなことになります。なんてことない名前が付いているのですけれども、「補給」しているものは何なのかというと、別に印刷物の消耗品を「補給」しているのではなくて、偽札とか偽パスポートとか、こういうものを「補給」していたところですよ。証言によりますと、1950年春、まだ朝鮮戦争が起きる前に第三科長山本憲蔵さん、この人はまさに登戸での偽札造りの責任者ですが、この人から第三科の科員数名に連絡がいきます。米軍の横須賀基地のなかにあるGPSOで働かないかと。このGPSOというのは米軍の野戦研究班というものの下部機関にあたるもので、当時是对共産圏秘密戦のための資材を「補給」する組織として作られていました。この山本憲蔵さんをチーフにして、第三科の科員を中心にして、10名ほどが集められまして、横須賀基地の中でこれを行うということです。今回、証言をたよりにGPSOがどのあたりにあったのかということを調べてみました。これは横須賀基地の航空写真です。



【写真2・横須賀基地航空写真】



【写真3・GPSOが使用していた建物】
(資料館撮影)

これは秘密に手に入れたものではなくて普通に手に入るものです。登戸研究所資料館はそういう諜報活動をやっているところではありません。これは横須賀基地ですね。横須賀軍港に米軍の航空母艦が停泊しているのがわかります。その上にあるのが空母用のドックです。もともとは日本海軍が大和型戦艦の三番艦「信濃」を造るために作ったドックなんですね。このドックは現在でもアメリカの航空母艦の修理をするため使われている。つまりこのような大型ドックは、極東にはここしかない。米軍が横須賀を手放さないのは、このドックの役割が大きい。帝国海軍の遺産ですけども、このように、軍事施設がたくさん集中しているこの横須賀基地のなかのこの部分にGPSOが最初あったという証言が得られまして、今でもその建物が残っていました。別に登戸研究所資料館の学芸員が密かに潜入して撮影してきたわけではなくて、ちゃんと許可を得てこの基地内で撮ってきた写真です。こういう建物が今でも残っていて、二階でやっていたそうですけれども、まさに戦後の秘密戦の舞台のひとつがわかってきた。後に別の所に移転をしたようです。何で移転するかといいますと、1952年6月、既に1950年から朝鮮戦争が始まっているわけで、山本憲蔵さんは新拠点設置のためにサンフランシスコに行くということになりました。そこでこの横須賀に駐在する後任のチーフとして、伴繁雄さんを選ぶのです。伴さんはもともと偽札造りを中心にやっていたわけではないのですが、秘密インクだとか、

写真とか、まさにスパイ活動のいろんな道具を開発していた人なので、伊那で会社を立ち上げてやっていた伴さんと呼ぶわけですね。1952年4月より伴さんは横須賀に行って契約期間10年ということでGPSOで働くことになりました。その頃、極東情勢が非常に緊迫していて、実際に朝鮮半島で戦争が行われていますし、その前1949年には中華人民共和国ができていたりしているわけで、まさにGPSOの機能も強化されていました。30人ほどの規模になっていたそうです。登戸の第二科、第三科の関係者を中心に働いていた人がここにいたということです。1961年までGPSOは横須賀にありまして、1961年に全部サンフランシスコに移転するまでは、2年交替で横須賀とサンフランシスコを交互に勤務をしていたということです。何をやってたのかというと、中国や北朝鮮やソ連のパスポート、証明書類の偽造です。まさにスパイ活動の最前線がここにあったということです。実はこの後1961年にGPSOがサンフランシスコに移りますと、1961年以降はそろそろベトナム戦争が始まる頃で、まだ大々的に米軍が介入する前ですけども、ベトナムの偽造紙幣の製造も行われたということです。ですから戦後も1960年代前半くらいまでこれに関わっていた旧登戸関係者がいたということです。まさに登戸研究所の秘密戦と戦後のアメリカの秘密戦がこういう接点を持っていたということです。今までも少しはわかっていたところはありますけれども、具体的に「ここでやってた」ということが明らかになってまいりました。

おわりに

戦争、あるいは秘密戦というものの記憶、これは放っておくと必ずなくなってしまう記憶です。誰かが残そうと意識をして、伝えていこうと思わないと自然に残るものではないですね。関係者の方は普通には話さないことです。ですから、こういうことをきちんと残していく、これは登戸研究所資料館の一つの役割だと思っていますけれども、戦後との連続性ということもちゃんと考えていかなければいけないと。8月15日で歴史が切れてしまうわけではないのです。ずっと同じ人たちが歴史を作っているわけです。それに関係すると、この生田キャンパスの歴史、それから中野ですね。中野のことについて今日は全然とりあげませんでしたけれども、やはり中野キャンパスは中野学校があったわけで、そこで秘密戦に関わった人たちの中には戦後も何らかのかたちでそれに関わった人もいます。そういったキャンパスの歴史を通じて戦争を語り継ぐということです。やはり戦後70年という節目で、いろいろなかたちで戦争の記憶というのを語り継いでいかなければならない時期に来ておりまして、私たち平和教育登戸研究所資料館もその一端を担えればと思っております。この生田キャンパスに残っている戦争遺跡をより多くの方に見ていただいて戦争の記憶を引き継ぐ舞台としていければと考えております。資料館そのものも登戸研究所の建物ですので、戦争遺跡そのものであるということです。企

画展，3月26日までやっておりますので，ぜひまだご覧になっていらっしゃる方，あるいは前半は見たけれど後半は見てない，という方はぜひお立ち寄りいただければと思います。

質疑応答

質問者1：貴重なお話ありがとうございました。ちょうど私の年代は1941（昭和16）年に国民学校1年生に入りました。そして12月に太平洋戦争が始まった。私の言うなればガキの時代です。本当にガキ〔餓鬼〕だったんです。食うものも何もなく。そういう時代だったものですから。先生のお話で、「空白の2週間」というお話がありました。それを僕は今お話をうかがって記憶をたどってみますと，当時の国民学校には先生方，警察官，それから当時は警護官〔？〕といった人たちが来て，校庭に大きな大きな穴をあけた。それを子供心に見ていましたら，兵器庫っていう僕の年代の人ならわかるんですが，学校に兵器が入っていたんですね。我々はそれは何があるかっていうのはわからないけど兵器だったということはわかる。その兵器と，学校の書類を大きな穴にぼんぼん埋めてたという記憶があります。ですからそういう意味で，非常に今日の先生のお話は私のガキの頃の経験と重なりました。それから今一つ大きな問題として，中国で731部隊の石井中将なんかの責任者が米軍とGHQと，情報の交換ということで免責されたと。まさにこの登戸研究所の責任者もそうだったというふうに先生からうかがって，ああ，歴史っていうのは怖いなあ，我々が目をパッチリ開けてよく見てなきゃいかんなあ，というふうによく感じました。ありがとうございました。

山田：ありがとうございます。もちろん今のようなご意見でも構いませんので，他にございますでしょうか。

質問者2：アメリカのナショナルアーカイブスで登戸研究所に関する資料ってないんですか。出さないんですか。

山田：アメリカに残っている資料については，今調査をしているところですが，日本軍の軍事技術についてはアメリカは戦中から終戦直後にかけてかなり詳細に調べておりまして，「コンプトン・レポート」とか「サンダース・レポート」とかいろいろとレポートを作っております。ただ，登戸研究所だけに焦点をあてたレポートというのは今のところ発見されていません。登戸も関係したであろうというようなものはあるのですが，当然アメリカは資料を集めていろんな聞きとりをやっているわけですから，どこかでまとめているはず。ところがそれが，公開されているかどうか，今のところ見つかっていないというのが実情で，風船爆弾関係で，アメリカでも研究している人はいるんです。いるんですけれども，何か特別な資料というのは今のところ出てきてないというのが実状です。ただ，今年度，戦後70年というのをき

かけに、結構マスコミなんかにも戦争のことが取り上げられまして、わりと注目を浴びているんですね。それで、例えばアメリカのスミソニアン博物館であるとか、カナダの軍事博物館などで風船爆弾なんかの現物を持っているようなところでも、この時期になって新しくわかってきたようなこととか、後に行なった聞き取り調査などの成果が少し見られるようになってきていますね。ですから、劇的に資料環境がよくなっているわけではないんですけども、こうしたことを調べようという人たちが増えてくると、資料というのはどこからか発掘されてきたり、新しい証言が出てきたりするというようなことがあって、これはこの資料館の大きな役割だと思っていますので、今後とも、公開資料、それからまだ公開されていない資料の発掘ということを努めていきたいと思います。

質問者3：偽札というのは実際に中国で使われたのかというのが一つと、今見せていただいた写真は交通銀行ということだったんですけど、交通銀行の一種類だけの偽札なのか、最近例えば中国人民銀行とか中国銀行があるんですけども、他の銀行用の偽札は造っていたかどうか。

山田：この偽札は中国で大規模に使われました。非常にたくさん使われてます。昭和20年の日本の国家予算が200億円という時代ですけども、40億円以上の偽札が造られました。しかも、当時、中国は発券銀行、お札を発行している銀行は4つありまして、すべての銀行の紙幣の偽札を登戸研究所は造っています。特に流通量の多い紙幣を中心に偽札を大量に造っておりまして、そういう点ではもともと中国経済を混乱させようと思って偽札を大量生産したんですね。大量に偽札を流通させればインフレが起きるのではないかと、あるいは偽札が流通しているという風評で中国のお札の信用が落ちるのではないかと、ひいては中国の経済に打撃を与えられるという、そのために偽札を造ったのですが、中国は広いですから少々のお札を撒いてもインフレにはならないということと、それからだんだん偽札の技術が高くなりまして見分けがつかなくなってしまう。偽札が流通していることを中国政府は認識しているのですが、一般には全くそれは気が付かれないで流通してしまったものですから、そういう意味で経済混乱を起こすという目的はうまく造りすぎてしまったために達成できませんでした。ところがうまく造ったために物は買えるんですね。それで物を買って、実は偽札の原料すら中国で偽札使って買っているのです。日本軍にとっては物資調達という点では偽札はずいぶん役に立ったということなんですね。ただ偽札はなんと言っても非合法です。戦争中といえども相手の国の偽札を造っていいというわけではありませんので、やはり犯罪行為なんですね。そういう点ではこれは公にできることではなかったんですね。ですから登戸研究所のなかでも第三科、偽札関係だけは別扱いで建物の外側を全部板塀で囲んで普通の所員が入れないようになっていました。ただ偽札の件は日本では一般には知られていないことであると同時に、実は中国でもあまり知られてい

ないんですけれども、日本軍にとってはひょっとしたら一番役に立ったものなのかもしれません。

〔終〕

〔追記〕

本稿は、2016年1月9日（土）に明治大学生田キャンパス中央校舎6階メディアホールにて開催された第6回企画展記念第二回講演会「NOBORITO 1945 ―8月15日以降の登戸研究所―」の書き起こしに加筆・修正したものです。

第6回企画展「NOBORITO 1945 ―登戸研究所 70年前の真実―」記録

企画展記念第三回講演会 長野県に疎開した登戸研究所と高校生たちとの調査

館長挨拶 山田朗（文学部教授）

本日は当資料館の企画展記念講演会にお越しいただきまして誠にありがとうございます。資料館もおかげさまでこの3月末に開館6年を迎え、間もなく通算5万人の来館者を達成します。

本日は登戸研究所の最初の重要な調査をされました、木下健蔵先生にお話をいただきます。木下先生は1980年代、長野県^{あかほ}赤穂高等学校の教諭で、同校平和ゼミナールの顧問として高校生達と共に、戦争末期に長野県に疎開をした登戸研究所について調査をされていらっしゃいました。現在〔講演時〕、長野県辰野高校の教諭をされています。ご著書の『消された秘密戦研究所』⁽¹⁾は、登戸研究所についての総合的な研究の最初の本です。現在でも私たちは木下先生のご著書によく学びながら展示をさせて頂いております。

それでは木下先生、よろしくお願いいたします。

第一部 講演「長野県に疎開した登戸研究所と高校生達との調査」

〔講師〕木下健蔵氏（長野県辰野高等学校教諭[※]） ※2016年3月26日の講演当時

はじめに

ご紹介いただきました木下でございます。今日は25年以上前に高校生達と共にいろいろ調べたことを中心に話したいと思います。

最初に調査を始めた高校生たちの、次の年代の高校生たちが、当時の関係者の伴繁雄さんですとか、そのほかへ行った様子が信越放送で特集番組⁽²⁾として放送されました。地方の番組で全国放送ではありませんが、高校生たちがどのような活動をしていたかがよくわかる内容になっています。

今の生徒たちと違いまして、当時の高校生達は非常にしっかりしたことを番組内で言うのですが、最初の頃はごく普通の生徒でした。それがなぜ変わったかという、聞き取り調査をしていく中において、いろいろと学び、考えが深くなっていったからだと思います。

1. 赤穂高校平和ゼミナール

(1) 赤穂高校平和ゼミナールの活動

私は社会科の教員ではなく、簿記を担当している商業科の教員です。一般的な歴史の知識もごく普通のものでした。偶然に赤穂高校で、私が平和教育の担当になっていたこともあり、授業を教えていた生徒会役員の春日（現・北原）いづみさんから「今年の文化祭で登戸のことを発表したいから手伝ってください」と言われました。「登戸って何？」というのが、私が彼女に最初に言った言葉です。私は登戸研究所のことは全く知りませんでした。ましてやこの場所（明治大学生田キャンパスのある川崎市多摩区）の地名だということも知りませんでした。当時も文化祭はお祭りのようになっていて、文化的な展示は少なかった。そこで、こういうことを発表するなら良いのではないかとということで、私も手伝いました。

駒ヶ根は田舎で交通の便が悪いものですから、毎日私の車に乗って調査に行きました。その結果を文化祭で発表しました。新聞とかを調べ、聞き取り調査をしていくなかで、お二人の名前が出てきました。その一人が伴繁雄さん、もう一人が杉山圭一さんという方です。「この二人は元将校で登戸研究所のことは良く知っている。だけど絶対話さないよ」と聞き取りをした人から言われました。伴さんは神奈川県葉山が自宅ですが長野県駒ヶ根市東伊那に別荘を持っていて年に何回か来ると聞いたので、伴さんのところへ何度か行きました。当然、最初はごまかされて話をしてくれませんでした。それでも高校生たちが大勢で行って話を聞くと、だんだん分かってきて、当時のことを話してくれるようになりました。私一人で行ったら話してくれなかったと思います

(2) 法政二高・川崎市民との交流会

こうした活動をしているうちに、川崎でも高校生たちが登戸研究所のことを研究しているということが分かりました。私から法政第二高校の渡辺賢二先生に電話をしたところ、それでは交流しましょう、ということになりました。最初は赤穂高校で、そのあと私たちが川崎に行って川崎市民の方や高校生たちと一緒に交流会をしました。このことが新聞などで報じられると、関係者から連絡がきて、当時のことを話してくれるようになりました。

(3) 川崎市での登戸研究所の展示

文化祭で調べたことやその後の調査などをまとめた資料を手作りの冊子⁽³⁾にして発表しました。それがテレビに取り上げられて反響を呼び、色々な方たちが情報を寄せてくれるようになりました。その研究成果を川崎市で発表しています。

(4) 石井式濾過管の発見

活動のなかで一番大きかったことは、伴さんにお会いできたことです。伴さんは一切話さないといい、私たちが行ってもなかなか話をしてくれませんでした。毎日、高校生たちが文化祭で発表したいので話を聞きたい、別に何の意図があるわけではないと言って話を伺いに行きました。大人が聞きに来ると、何らかの意図があって恣意的な質問をする、と、伴さんはとても警戒していました。しかし、高校生たちは何も知らないし、伴さんのことや登戸研究所のことを話して欲しいと本当に純粋な気持ちでいると、伴さんもだんだん話をしてくれるようになって、資料も提供してくれるようになりました。

ある時、伴さんが庭に案内してくれて、筒みたいなものを見せてくれました。きれいな筒だったので、戦時中のもものとは思えませんでした。「軍事秘密」という刻印がある。伴さんに「これは何ですか」と聞いたところ、「731部隊の石井四郎が使っていた濾過フィルターで、水を濾過するための筒だ。登戸研究所に払い下げてもらった」ということを話してくれました。当時は、何に使うのかということとはあまり良くわかっていませんでしたが、きれいな水を作るということとは分かりました。

濾過筒には「ニホンロスイキ」という刻印がありましたので、私は日本濾水機の社長さん到手紙を書いたところ、社長さんから丁寧な手紙をいただきました。手紙にはいつ特許を取ったとか、構造的にはどういうものであるとか、そして会社には当時の濾水機がある、ということが書いてありました。濾水機の使い方は、この濾過筒を5～6本、濾水機の装置に入れて、圧力をかけて水をきれいに濾すというものです。731部隊は人体実験などで有名になってしまいましたが、もともとは関東軍防疫給水部といって、濾水機を使ってきれいな水を作るための部隊でした。

(5) 実験器具等の発見

長野に登戸研究所が来たという証拠が無かったものですから、手っ取り早いところで『駒ヶ根市誌』⁽⁴⁾にはどのように書かれているかを探しました。ところが登戸研究所のことはたった4行しか書いてありません。戦争末期に来て研究をしていたと、その程度の本当に簡単なものだったので、他に資料がないかと探しました。

伴さんから、疎開した登戸研究所は中沢小学校が中心になっていたと聞きました。中沢小学校に行ったら何か当時の資料は残っていないか教頭先生に聞いたところ、学校日誌が残っているということでした。その学校日誌を調べたところ、登戸研究所の所員や関係者が疎開してきたという文章がありました。登戸研究所が確実に来ているということがその日誌から分かりました。その日誌に、戦後、小学校へ実験器具を寄贈したという記述を見つけました。そこで、「そういう記述があるのだけれども、実験器具のようなものはありませんか」と教頭先生に聞いた

ところ、「屋上の倉庫の中に何か古い器具があって、これはちょっと小学校では使わないものだからそれかもしれない」ということで見せてもらいました。ただ、それが登戸で使ったものであるかどうかは分かりませんので、関係者に尋ねることにしました。

伴さんは長野には夏の間滞在するだけなので、夏を過ぎるといけません。他に登戸研究所の関係者は杉山さんしかいません。杉山さんも将校の方で、元々東京出身で薬剤師の方ですが、唯一駒ヶ根市に残られて、山奥でカボチャを作りながらひっそりと住んでいました。誰に聞いても「杉山さんは登戸研究所のことは絶対話さないよ」と言われました。登戸研究所の将校だったということはみんな知っているのですが、どんなに親しい人でも「登戸研究所のことを話しているのを聞いたことがない、絶対無理だよ」と言われました。私達は杉山さんを訪ねて行きましたが、最初は関係のない話ばかりしていました。でもそこが生徒たちのすごいところで、諦めずに何度も行って人間関係を先に作っていく。とにかく大人はその内容を聞きたいといいますが、生徒たちは人間関係を作っていく、そこから話してもらえることを聞こうという態度だったので、杉山さんも次第に話をしてくれるようになりました。毒物のセクションにいたこと、色々な実験をしたことを話してくれるようになりました。具体的に人体実験のことは言いませんでしたが、「何人かは南京に行って実験をした」ということも話してくれました。先程の実験器具を杉山さんに見ていただいたところ、これは間違いなく登戸研究所で使っていたものだとおっしゃいました。こうして初めて登戸研究所の具体的な資料が出てきました。

これは生徒たちが根気よく何回も訪ねて、人間関係を作ったおかげです。先程紹介した番組の中で、生徒たちが人体実験については聞けなかったという場面があります。私が生徒たちに言っていたのは「向こうが嫌なことは聞くな」ということです。話してくれた内容を追及するのではなく、地元で何があって、どういうふうになったか、を聞くということです。だから番組で生徒が言っていますが「おじいさんたちを追及するのはどうかと思う」と。生徒たちがそういうスタンスだからこそ、登戸研究所の元所員の方たちも心を開いたのだという気がします。

2. 陸軍登戸研究所の疎開

(1) 兵器行政本部作成の資料

登戸研究所の疎開内容についてはよく分かっていなかったのですが、兵器行政本部が作った1945（昭和20）年8月31日付の疎開に関する資料が出てきました。私たちは登戸研究所の疎開先の本部は中沢村であると伴さんから聞いていました。ところがその資料には本部は宮田村であると書いてある。宮田村の調査は全然しておらず、私が発表した地元の記事に宮田村のことは載せていませんでした。それを見た神奈川県にお住いの真慶寺出身の方からお手紙をいただきまして、本部は宮田村の真慶寺であったということが書いてありました。当時、真慶寺の庭

には、中にお札がいっぱい詰まっていた箱があった。本部は給料を払わなければならないので、東京から給金を送ってもらっていたのです。そのため庭に箱がいっぱい積まれていて、相当お札があったと。また、戦後、資料を一週間かけて焼いたという話を聞きました。そこで、私達も真慶寺へ行ったところ、数十冊の本に「登戸研究所」というハンコが押してありました。それでやはり真慶寺が本部だったということがはっきりしました。

資料によると、長野県には本部・北安分室・中沢分室に分かれて疎開。本部が宮田村の真慶寺、北安分室は北安曇の松川村、中沢分室というのが駒ヶ根市の旧中沢村です。ほかに小川分室というのは兵庫県の小川村です。元の登戸研究所は全部疎開した後なので登戸分室ということになっています。

それぞれの内容は、本部は庶務や人事。北安分室というのは主に電波兵器の研究。中沢分室と小川分室は挺進部隊、女子挺身隊とは字が違いますが、簡単にいうとゲリラ戦のための焼夷剤や行動資材を作っていました。登戸分室は他機関との連絡や残務整理ということが書いてありました。

(2) 本土決戦に備え疎開した各研究機関

1945（昭和20）年6月沖縄が落ちると、その後は当然本土決戦になることは分かっていました。まず九州へ来る、その次は関東平野に来て、だいたい相模湾か九十九里浜から米軍は上陸して来る。最終的には大本営を守るために登戸研究所は長野県へ疎開してきた。その途中、製糸場がある群馬県の富岡に、登戸研究所と非常に関係のある陸軍中野学校、スパイのための実戦部隊ですが、その本部が来ます。そこは当然長野県の本営への通り道になっています。もう一つは韮崎から諏訪に入る道。そのあたりに軍の施設が非常にたくさん疎開してきている。やはり最終的には本土決戦に備えるための研究所の配置ではないかと考えられます。

(3) 長野県の疎開先・上伊那地方

登戸研究所の主な疎開先ですが、宮田村の真慶寺というお寺、第二科と第四科は中沢小学校。第二科は主に化学兵器の開発、第四科は製造部署です。だから実験などのメインは中沢小学校になっています。ほかにも東伊那小学校・赤穂小学校・飯島小学校とその分校といったところに第二科が分散疎開していました。

真慶寺が本部になっていて、ここに将校たちがいて色々会議をしていました。戦後、書類を一週間かけて焼いたということを言っているのです、膨大な資料があったはずですが、その資料が残っていれば今の研究に役立ったと思うのですが、登戸研究所関係の資料は焼却が命じられていたので、ほとんど現物が残っていません。たぶん川崎でも現物はそんなに残っていないと思います。まだ長野県の方が若干残っているものがありますが。

他には、工場となっていた中割協議所、今でいう集会所です。集会所の中身を全部取り除いて、ここで作っていたのは缶詰爆弾です。どういうものかと言うと、羊羹のような形で、高等科2年（いまの中学2年）の生徒たちがその中に爆薬を詰めて、登戸研究所の工員がその中に信管を入れていました。先程の学校日誌の中に爆発実験がでてきますが、あれはその爆弾を中学生に見せているのです。近くの特龍川に行ってどのくらい爆発するかという実験をしました。香花社という神社では、社務所や舞台で缶詰爆弾の旋盤をしていました。上割という地区の上割協議所の中でも缶詰爆弾を作っていました。

先程、登戸研究所の本部だった真慶寺で資料が見つかったといいましたが、それが書籍です。「登戸研究所」とハンコが押してあります。登戸研究所の正式名称は第九陸軍技術研究所ですが、一切正式名称は使われていません。全て秘匿名である「登戸研究所」という名前を使っています。

(4) 長野県の疎開先・北安曇地方

もう一つの長野県の疎開地である北安曇に残る礎石の写真があります。ここに10mのパラボラアンテナを作り、そこから赤外線を出してロケットをその軌道で飛ばす。それによってB29を撃墜する、そういう設備をつくっていました。

ここは第一科ですが、第一科は風船爆弾の放球を1945（昭和20）年3月までおこなっていて、それが終わってすぐこの地区に来ています。他の施設は全部既存の施設を借り上げていたのに対して、松川の北安分室だけは研究所を新たに作っています。研究を本格的にやろうとしていたということです。別の方の証言ですが、これは大本営を守るためにB29を撃墜するための設備であるというようなことを聞きました。その設備のための礎石ですが、パラボラアンテナは完成しませんでした。10mの大きさのものを途中まで作って、米軍が来るというので近くの木崎湖に沈めたそうです。現物は見つかりませんが、探せばもしかしたらあるかもしれません。この礎石も現在はありませんので、これは当時の写真を持っている方からいただいたものです。一般的に殺人光線と言われていますが、極超短波とか超短波とかの研究をしていたという証言もあります。

3. 終戦

(1) 陸軍省軍事課特殊研究処理要領

なぜ資料がないのかというのは「陸軍省軍事課特殊研究処理要領」に基づいています。1945（昭和20）年8月15日に陸軍省の軍事課から、特殊研究の書類を処分しなさい、という通達があります。敵に証拠を得られることを不利とする特殊研究はすべて証拠を隠滅するというもので

す。そこですぐ焼却作業に入りました。

本部でも一週間かけて焼却し、中沢でもグラウンドに大きい穴を掘って、研究器具とか爆薬も色々入れているうちに大爆発が起こったということが当時見ていた人の証言から分かります。戦後すぐ、焼却やグラウンドに穴を掘って埋めるという作業に追われたそうです。北安曇ではグラウンドに大型の工作車、トラックのようなものでロケットなどを製造するための機械があったのですが、そういう大きいトラックなども、近所の人をみんな招集して埋めたそうです。米軍がきてそれを掘り返したという記録も学校日誌に載っています。

「陸軍省軍事課特殊研究処理要領」の本文を見ていただくと、一番先にあげられているのがふ号兵器及び登戸研究所関係です。「ふ号兵器」というのは登戸研究所で開発していた風船爆弾です。登戸研究所関係はすぐ処置しなさいということで、一番先に登戸研究所がでてきます。その次に出てくるのが731部隊と100部隊。100部隊と言うのはあまり聞いたことがないと思いますが、関東軍の軍馬防疫廠という馬の防疫関係をしているところです。ここでも人体実験があったという話も聞いておりますが、731部隊は人体実験で有名になっているところです。あと糧秣本廠1号。これは秘匿名で、植物を枯らす細菌兵器だと思っています。

このような通達が出されたものですから、登戸研究所関係の資料はほとんど残っていない。この通達によって全部処分されたということです。

(2) 中沢国民学校 GHQ の接收

中沢も最終的に全部庭に埋めたり、焼却したりしましたが、米軍は登戸研究所の疎開先ということはずでに把握していましたので、CICの441支隊という日系二世などを中心とした調査・聞き取りをする部隊がきました。

長野県に進駐軍が最初に来たのは1945（昭和20）年9月中旬といわれております。登戸研究所関係で最初に米軍が来たのは松川小学校（当時の松川国民学校）で10月5日に来ました。かなり早い時期だと思います。そのうちだんだんGHQの組織が整ってきますので、駒ヶ根方面へ来たのは10月25日です。これは2、3年前資料館の人たちと一緒に調べた結果、中沢小学校（当時の中沢国民学校）に10月25日にGHQが接收に来たという資料がありました。赤穂小学校などの記録を見ても、同じ25日に来ています。その頃にはすべての登戸研究所関係の所へ調査に来ています。

なぜ登戸研究所が上伊那に来たのか、それは北澤隆次さんという方が中沢の出身だった関係で来たということを言われています。また、長野県にきたのは本土決戦に備えるためである、というのが普通に考えられることではないかと思っています。

おわりに

短い時間で簡単に説明しましたが、とにかく生徒たちの活動がなければ資料館もできなかったし、当時の関係者も話してくれなかったと思います。実は私も25年も携わることになるとは当時は思っていなかったのですが、今日もお話しする機会をいただいたということは非常にありがたいと思っています。長野県の高校がこうした活動をしていることの一端をご紹介できたと思います。ありがとうございました。

第二部 パネルディスカッション

〔パネリスト〕 木下健蔵氏（長野県辰野高等学校教諭[※]）※2016年3月26日のパネルディスカッション当時
渡辺賢二（平和教育登戸研究所資料館展示専門部会委員）
山田 朗（文学部教授・平和教育登戸研究所資料館長）

山田：木下先生，ありがとうございました。これから第二部のパネルディスカッションとなりますが，木下先生から伺ったことを含めて，簡単にまとめさせていただきます。

本土決戦に際して，登戸研究所はいくつかの地域に分散疎開をすることになります。疎開と言っても，これはあくまでも本土決戦に備えて，場合によっては本土決戦を有利に展開するために，特殊な兵器を製造する所，その要員を養成する所が，大本営として準備されていた長野県松代を中心とした地域に移転をしていきます。

長野県上伊那地区には登戸研究所の第二科・第四科。実際に遊撃戦部隊が使う兵器，謀略用の放火道具などを作る所が疎開します。「く号兵器」（電波兵器）を中心とした開発部門は上伊那より北の松川村，池田町に置かれました。

上伊那地区を中心にみていきますと，本部が宮田村の真慶寺にあります。中沢国民学校（現中沢小学校）・伊那村国民学校（現 東伊那小学校）・赤穂国民学校（現 赤穂小学校）・飯島国民学校（現 飯島小学校），こうした学校が工場になって，実際に武器の生産がおこなわれることになりました。学校だけではなく，神社やお寺も分工場にしていました。

伴さんを中心に木下先生と高校生を写した写真は1989（平成元）年8月9日の日付です。1989年は登戸研究所の様々な秘密が明かされた年でした。木下先生と高校生たちの活動について，資料館では大きなパネル一面を使って展示しています。その活動については『消された秘密戦研究所』と『高校生が追う陸軍登戸研究所』⁽⁵⁾ にまとめられていますが，高校生たちが調査をして登戸研究所研究のスタートになる本ができたということは，すごいことです。

以上が概要です。これから渡辺先生にお話ししたいと思っています。渡辺先生は法政二高

の教員をしていた時代に、木下先生と共に登戸研究所の調査をおこないました。特に川崎ではいち早く登戸研究所の存在に注目されて、高校生たちと共に調査活動にあたってこられた先生です。

渡辺：渡辺です。よろしくお願いします。今回のテーマである、長野県に疎開した登戸研究所の実態と、それを掘り起こした高校生たちに焦点をあてて話を進めさせていただきます。最初に、登戸研究所に取り組んできた歴史を振り返ります。

私が登戸研究所に接したのが、『陸軍贋幣作戦』⁽⁶⁾という山本憲蔵氏の本が出版され、この本をもとにNHK「歴史への招待」で登戸研究所において偽札がつくられていたという番組が放送されて驚いたことがきっかけです。さらに斎藤充功さんというジャーナリストが登戸研究所の関係者を追って取材した本⁽⁷⁾を読んでまた驚きました。それが今から31年位前に私が初めて接した登戸研究所です。

ちょうどその31年前、1985（昭和60）年に川崎市が教育委員会主催の平和教育学級を設置することになり、1986（昭和61）年から私が勤めていた川崎市中原区で市民参加の平和教育学級が始まりました。そこで私は地域の戦争について学ぼうという提案をして、クラスの高校生も一緒に連れて行って参加しました。その時、登戸研究所というのが有名になっているので行ってみよう、ということで明治大学を訪れました。そこには動物慰霊碑とか色々なものはあるが、一切何の資料もない。登戸研究所について書かれた本はあるが、どれだけ信憑性があるかまだわからない。

そんな時にある新聞記者が、この生田周辺で戦時中、稲が実らなかった時期があった。調べてみたらどうか、という提案をされました。そこで私たちは1987（昭和62）年、高校生を連れて現場を徹底して見ることにしました。当時はまだ、たくさんの木造の建物がありましたので何回か見学会を実施しましたが、誰も名乗り出てくれる人がいない。防衛庁（現・防衛省）防衛研究所で調べても資料が何もないので、すぐに壁にぶつかりました。

何度も見学会をやっていれば登戸研究所に勤めていた人が来るかもしれない、ということで見学会の開催案内を新聞に載せてもらいました。すると5回目の時に、高齢の方がついて来たのです。それが登戸研究所に勤めていた井上さんという方でした。この人との出会いが無ければ我々は調査をやめていました。この時1987（昭和62）年ですが、井上さんに「随分経つのに誰も話をしてくれない」と言うと、「みんなで墓場まで持っていこうと言って解散したんだ」と教えてくれました。資料がないだけでなく、勤めた人が大勢いるのに語らない世界でした。その事について「最近はどうですか」と聞くと、「戦後40年過ぎてくると、だんだん苦しくなってきたね。昔登戸研究所に勤めていた近所の人たちはお互いに挨拶するようになった。それで名簿をつくりだした。」と言うので、99名の名前が書かれた名簿を提供してもらいました。しかし「こ

の人に電話をすれば話してくれますか」と聞くと、「いや、やめてくれ。絶対みんな話さないから」と言うことでした。

困っていたら、一緒に参加していた高校生からいい案が出ました。それは「登戸研究所について話をしてくれるか尋ねるアンケートを出そう」ということでした。そこで川崎市教育委員会の名前を借りて99名にアンケートを出したところ、26名の方から返事がきました。その中の15才で登戸研究所に勤めたという女性が、アンケートに自分は資料を持っている、と書いていました。どこに行ってもなかった資料があるということです。たいした内容ではないだろうと思っていましたが、今、資料館展示室にも複製が展示してある『雑書綴』という資料でした。これは登戸研究所第二科という生物化学兵器を扱っていた科の資料です。極秘のものはないけれども、何をやっていたかはこれを見れば全部わかります。960数点の綴りです。これをみんなで分析して、登戸研究所の実態に迫ることができた最初の資料でした。こうしたことをきっかけとして市民と高校生も参加するグループの『私の街から戦争が見えた』⁽⁸⁾が1989年に出版されました。

1987年、88年は色々と調べて、1989年には法政二高でも平和ゼミナールが動き出して『雑書綴』の分析にとりかかりました。それがテレビ番組で取り上げられたところ、木下さんから電話があり「自分たちも登戸研究所を調べています。一緒に交流しましょう」という話になりました。まさに偶然の積み重なるのなかで登戸研究所が結びついたのでした。

登戸研究所本部が1945（昭和20）年5月から駒ヶ根に転居したということが分かり、高校生同士が聞き取りに入るということになりました。しかし一番の問題は、関係者が口を開かない事でした。私たちは『雑書綴』を見て、伴さんにも接触を試みましたがなかなか会ってくれませんでした。その背景には、先程木下さんがおっしゃったような、私たちの聞き取り方に問題があるのではないのか、ということです。悪いことをした、という前提で聞いたら駄目だろうと。だから高校生には真っ白な状態で、話すのを待つという形で聞きに行こう、と呼びかけました。そうすると関係者は「大人には話さないが、高校生には話そう」と、合言葉のように皆さん語ってくれました。これは本当に驚くべきことでした。川崎でも長野でも、色々なことを聞き取り、そして資料を提供されるようになる。こうした経過があったということを、先程の木下さんの話の補足とさせていただきます。

そして木下さんたちが聞き取りに入ります。1989（平成元）年、高校生が登戸研究所の聞き取りをしたいと来た時、どんな気持ちで、どんな反応で、取り組み始めたのでしょうか。

木下：最初は、ただ文化祭で生徒会の発表をしたいということでした。生徒会役員だった彼女たちが平和ゼミナールという会議に出席して、登戸研究所のことを聞いてきたようです。私は登戸研究所と聞いても何も分からなかったのですが、一緒に聞き取ることになりました。しか

し、どこから手を付けていいのか分からず、片端から誰か登戸研究所のことを知りませんかと聞いてまわることから始まりました。

渡辺：その時、一緒に参加された高校生だった池田幸代さんが今日お見えですので、その時の感想をちょっと話していただきましょう。

池田：みなさんこんにちは。ご紹介いただきました、赤穂高校平和ゼミナールだった池田と申します。木下先生の所に押し掛けて行った女子高生の一人です。当時、上伊那の平和ゼミナールで活動をしていて、そこで帝銀事件⁽⁹⁾のこと、それから陸軍登戸研究所のことを知りました。地元のことなので調査しようと思い、木下先生の所に押し掛けて行ってお願いをしました。同じ生徒会の北原さんたちと一緒に調査をすることになりました。

その時の経験は今でも生きています。私は今、参議院議員秘書の仕事をしてしていますが、日本はまだ戦争を始めるような時代になっていると感じています。私たちは一緒に研究をして、二度と戦争を起こさないで欲しいということを、伴さんやその先達から託されたのだと思っていますので、ここで戦争させないために、しっかり声を上げていきたいと思っています。

渡辺：高校時代にそういう体験をすると、それが生涯の生き方としているということが、今の話からうかがえると思います。

それではまた木下さんに聞きたいと思います。私たちが話を聞く時には、悪いことをしていたのでは、という先見的な気持ちでいたら駄目だった。高校生はどのように話を聞いて、伴さんや杉山さんが心を開いてくれたのか。その辺りの取り組みについて、もう少し質問します。

木下：やはり、私たちは何も知らなかったということが良かったわけです。私は社会科の教員ではありませんし、登戸研究所のことも全く知りませんでした。とにかく話してくれることは何でも素直に聞こう、という姿勢が一番でした。

初めはやはりなかなか話してくれません。文化祭で当時のことを調べて発表したいと言っても、最初は当たり障りのない話しかしていません。インタビューのようになるとなかなか話をしてくれませんので、お茶を飲みながら色々話すことをただ聞いていました。段々と人間関係を築いていくのです。

杉山さんは「一切話をしない、絶対無理だ」ということで、初めのうちは外ですぐ帰されましたが、そのうち家に入れてくれて、カボチャをごちそうになったりしました。お茶を飲むようになり、登戸研究所のことではない、一般的な戦争の話を聞いたりしているうちに、登戸研究所の話もするようになりました。伴さんがこういう話をしてくれましたけれど、これはどう

なのですか、とか言っていると写真などを出してくれました。

一番注意したのは、相手の嫌な事は聞かないこと。メディアとか、私もそうですが、人体実験はどうですか、とか知りたいことをまず聞いてしまいます。私は高校生たちに、相手が嫌な事、喋りたくない事は聞かないようにあらかじめ言っておいたので、高校生たちは聞きませんでした。そういうことで生徒たちが全然野心がなくて、純粋に当時の事を知りたがっていることが通じたのです。もう一つは、1989年は昭和から平成に変わった年でした。話さないと決めていても、心の底では誰かに話しておきたいという部分があったと思っています。高校生がその部分をうまく引き出してくれて瓦解に至った。やはりまず、人間関係をつくることから始めたということです。

渡辺：大変大事な問題だと思います。私も同じ思いでした。伴さんも、高校生と一緒にいくと、私の方を見ないで高校生の方を見るのです。それで「あの戦争、君はどこであったか知っているか」という質問を高校生にします。高校生は私たちから教わったように「アメリカです」なんて言うのと無然とします。なぜなら、後で分かることですが、中国との戦争で何とかしたかったから秘密戦兵器を開発したのだ、という複雑な思いが彼らのなかにはあった。口にはしないけれども、歴史が伝わってないという思いがあったと思います。

調査が行き詰ると、逆に伴さんから資料が提供されることもありました。その一つが濾過筒です。この濾過筒が提供されて、解明されていく過程をもう少し話していただけますでしょうか。

木下：伴さんに「庭にちょっと面白いものがあるから、見ていきなさい」と言われて行ってみました。最初に濾過筒を目にした時は何なのか全然分からなかったが、「軍事秘密」という刻印が全部に書いてある。「陸軍のなにか重要なものですか」と聞くと「731部隊で使ったものだ」ということでした。どういうふうに使ったかは私もよく分からなかったが、「ニホンロスイキ」と書いてあって、もう一個は渡辺先生の生徒さんたちが色々調べて「松風^{しょうふう}」と書いてあることから、どちらも今もある会社が作ったものと分かりました。渡辺先生や生徒たちと一緒に日本濾水機の会社に見学に行って、社長さんに色々尋ねました。当然、日本濾水機でも当時の現物は損なわれて持っていないということでした。伴さんがどういう理由で所持していたのか分かりませんが、大量に濾過筒があったということは、もしかしたら細菌戦を想定していたのではないか、ということも考えられます。

山田：今、木下先生から濾過筒の話がありましたが、現物はほとんど残っていません。軍事秘密ということで、戦後日本軍の手で徹底的に破壊されています。また、残っていたとしても

GHQの命令で破壊されている。破片は出てきますが、どこからも完品では出てこないのに長野だけは大量に出てきた。長野県のように水のいい所では本来濾水機は必要ない。水が汚染されるということを前提にして考えないと、こんなに大量に濾過筒を持ち込むことは考えられない。本土決戦に際して、細菌戦もありえるということを想定していた、一つの証拠なのかなというふうにも考えています。これは裏付ける文書資料がありませんので、確定的な事は言えません。ただ大量に濾過筒の現物が残っていたということ自体が、極めて珍しい事例です。

渡辺：濾過筒について私の方で概要を話しますと、木下先生との交流のなかで、木下先生のグループから濾過筒が持ち込まれました。これは水を濾過するもので、日本濾水機という会社で作られたものであることが分かり、その会社に行ってみるようになりました。私は最初、同じ日本濾水機でも違う会社ではないかと思っていましたが、社長室に通されて「君たち高校生が濾過筒を調べに来たのは、進駐軍以来だ」と言われてびっくりしました。進駐軍はちゃんと調べていたが、戦後日本人は誰も石井式濾水機や濾過筒について調査研究をしていなかったものを、高校生が調べに行ったのです。

それからもう一つ高校生から学んだことは、「これは731部隊のものではない」と私が言ったら、高校生は「先生、これは兵器にも道具にもなるのだから731部隊とも関係あるのではないですか」と言うのです。日本濾水機の社長さんに聞くと「これは自分たちが731部隊より前、関東大震災の時に開発し特許をとっていたものだ。それを戦争中に持っていかれたのだ。戦後も水を濾過するために作り続けた」ということを話してくれました。こういう兵器にも道具にもなるというような発想を私は高校生から学んだと痛感しています。

こうしたことをふまえて、長野のことに移ります。1945（昭和20）年4月29日天長節の日をもって風船爆弾作戦が中止され、登戸研究所本部が長野に移りました。長野県での登戸研究所の実態を明らかにしたのが、木下先生の個人のグループと、そのきっかけを作った長野県の高中生たちでした。木下先生は平和ゼミナールの生徒から触発されて調査研究に入り、『消された秘密戦研究所』という本を出されました。この本をまとめた経緯や気持ちを補足していただきながら、長野県における登戸研究所の活動をどのように語り継いでいくのかをお話してください。

木下：私は本を出版する予定はありませんでした。平和ゼミナールは学校の決められたサークルではないので活動資金がありません。聞き取り調査へ行くにも、生徒を連れて行っても旅費が出ず全部自腹でした。そこでクラブにしてもらい、生徒の引率で出張ということで行くようになりました。それまでは『上伊那地方における「陸軍登戸研究所」の実態調査について』という資料を作り、8月広島の平和集会などで販売して資金をカンパしてもらい活動をしていま

した。

本を出版した理由の一つが、こうしてせっかく作った資料があり、また、地域の歴史雑誌に書いたものがあったことです。そして一番の理由は『駒ヶ根市誌』です。市の歴史に4行しか登戸研究所に関する記載がなかった。これだけのことを4行だけですましてはいけないのではないかと思いました。そこで、私も凝り性な性格なものですから、もう少し調べたいと思いました。今まで出版された登戸研究所関連の本は第二科の内容がほとんど出ていません。伴さんに提供していただいた資料とともに、地域の歴史として残していかなければいけないと思い、ずっとまとめていました。

もう一つの理由は、登戸研究所の歴史的位置付けに触れた本がなかったからです。図書館へ行き、大正時代からの官報をずっと見ていて、どういう形で登戸研究所が編成されたかを調べようと思いました。ところが登戸研究所に関する記載がないのです。スパイの研究所に関する記述を載せること自体があり得ないことです。そういうことを知り、歴史的な位置付けとか、体系とか、当時の状況とかをまとめたものを、信濃毎日新聞の記者の知り合いから本にしないかと言われて出版することになりました。登戸研究所のことを体系的にまとめた最初の本だと、自分でも思っています。

ただ聞いたことを書くだけでは裏付けがありません。きちんとした証拠がやはり必要だと思います。そのためには裏付けとなる情報、どういうものがあつたのかをきちんと調べて本にしておきたかった。一番は、4行しかなかった歴史を残さなければいけないということです。長野県の歴史として貴重なもので、大本営は非常に有名ですが、登戸研究所は県内でも知っている人がほとんどいない。地域でもない。やはりこれはきちんと残さなければいけない。陸軍が終戦時、最初に処分しなければいけないとしたのが登戸研究所ですから、それほど重要な施設のことを県の歴史として何も残っていない。残さなければいけないと思いました。

渡辺：どうもありがとうございました。今年9月頃には新しい登戸研究所の本を出される予定だそうです。ご期待ください。

木下さんのところには駒ヶ根周辺の資料が集まり、家中に資料があふれました。川崎では法政二高の研究室と私の家に、伴さんをはじめ、多くの人達の資料が提供されてきました。これをどうするのか。これは資料館を造るしかない、ということで保存運動、資料館づくりにずっとその後関わって、今の資料館ができました。資料館に行ってくださいと分かりますが、木下健蔵提供・渡辺賢二提供という資料が結構多くあるのはそのためです。

最後に山田先生にまとめていただきますが、その前に伴さんのことに少し触れておきます。伴さんは高校生が来るまで、人体実験のことについて一切言っていない。しかし高校生から触発されて、彼は原稿を書きます⁽¹⁰⁾。その生原稿800数枚の綴りは全て、この資料館にあります。

その中で、彼は自分の言葉で人体実験したことを認めます。たとえ戦争中といえども、捕虜といえども、人体実験してしまった。申し訳ない。冥福を祈る。という文言を書きました⁽¹¹⁾。そして奥さんにも「お前にも長い間すまなかった」と初めて謝ったのです。それまでは、国のために尽くしたという思いや、話してはいけないと悶々としていたのが、人間の世界に帰ってきてくれたというのが奥さんの言葉でした。この原稿以外にも、資料館には伴さんの資料が多く残っています。

最後に、疎開の問題と資料館ができたことを踏まえて、高校生が活動した意義などを山田先生にまとめてもらいます。

山田：私たちも、歴史に埋もれた、隠された歴史の事実をどう発掘し、さらに語り継いでいくかという木下先生・渡辺先生の活動に大変触発されています。どんな大きな事件であっても、自然に記憶は継承されません。特に秘密戦など、戦争に関することは、誰かが意識的に掘り下げて、事実を掘りおこさないとすぐに埋もれてしまう。それを本や資料館という目に見える形で、歴史を継承していく作業がおこなわれないと、たちまちのうちに消え去ってしまうものです。戦争が終わって70年経ちますと、戦争の記憶の継承が難しくなっています。家族のなかで戦争体験者はどんどん少なくなっていく。家の中で戦争の記憶が継承されることが極めて少なくなっている。しかし、どんな土地にでも、この生田の土地にも、長野県の上伊那の土地にも、土地に刻まれた歴史の記憶がある。自分が生きている、あるいは働いている、勉強している。まさにその土地に戦争の痕跡が残っている。そこに立っている自分も戦争と無関係ではなく、土地の歴史を通じて戦争とつながっているという意識を少しでも多くの人が持てば、歴史の記憶の継承は何らかの形でおきてくると思いますし、今日、木下先生にうかがいましたように、高校生たちの地元の歴史を純粋な気持ちで調べたいというその気持ちが、多くの人を動かしたということです。これは歴史研究あるいは戦争の記憶の継承の原点をここに見つけることができると思います。

渡辺：それでは質問があれば挙手をしていただいて、簡単に質問をお願いします。

質問者1：日本のスパイ活動において、戦争を回避するための工作もしくは色々な国と仲良くなるような工作を、登戸研究所や中野学校ではやっていなかったのか。もしそうした工作をしていたとしても、戦争に陥ったのはなぜなのかを知りたい。

渡辺：今日のテーマとはちょっと違いますが、山田先生からお願いします。

山田：日本が戦争に突き進んでしまったのは、中国の権益を確保したい、あるいは独占したいと考えたことが一番大きい。当然中国をめぐるのは欧米列強の権益もあるので、日本が進出するほど欧米の権益を脅かすことになって、中国に対して欧米列強が支援をする。だから戦争がなかなか終わらない、どんどん日本は踏み込んでいく、さらに欧米列強が支援をする。その悪循環に陥ってしまったということです。対英米戦争というのが最後の段階ですが、大本は中国に日本が踏み込みすぎたということです。自分の権益を守ろうではなく、拡大しようとしたところに最大の原因があったと思います。秘密戦に関わる人のなかには、東アジア解放のために活動をしていた人もいますが、結果として欧米列強に日本がとって替わるだけで、主観的なアジア解放論に陥ってしまったのだと思います。このことについては秘密戦をさらに解明していく中で実態を明らかにしていきたいと思います。

質問者2：先日、731部隊のドキュメンタリーを撮影する中国人監督と共に資料館に行きました。中国の人たちとのこれからのあり方において、資料館の存在は大事だと思うし、若い監督がどのようなドキュメンタリーを作るのか、興味があります。今日のお話で、高校生が端緒となったことはとても大事なことだと思います。また日本の高校生と中国や朝鮮半島の高校生との繋がりを持つことができればいいと思いながら、参加させてもらいましたが、そういう展望はどうでしょうか。資料館のことを含めてお話ししていただけたらと思います。

山田：731部隊にしても登戸研究所にしても、人体実験に焦点がいきます。それを解明することは重要なことですが、731をみても登戸をみても、戦争の本質というものはともに隠されています。戦争は一応ルールがあるように見えますが、結局手段を選ばないということになってしまう。しかもやっているうちに人間の正常な感覚というのが失われてしまう。しかし、そのことにやってる方は気が付かない。伴さんにしてみても、本当にまじめな研究者であった人が、大義名分のために戦争に勝つために人体実験をしても、何にも感じなくなってしまう。資料館の展示にもありますが「はじめは嫌であったが、慣れると一つの趣味になった」こういう言い方をしている。普通だったら考えられないことですが、そういうふう人間をしてしまうところに、戦争の恐ろしさがあるのではないかと思います。

質問者3：私は今、東京に住んでいますが、長野県出身で、結婚するまで長野にいて、ちょうど20歳の時に伴さんのお宅に残されていた資料というのを信濃毎日新聞とかで見て、とてもセンセーショナルなことだと思いました。二つ質問があります。聞き取り調査で話をするまで、あるいは資料を提供してくれるまでにどれくらいの時間がかかったのか。そして、今の高校生たちについて木下先生がどうお考えなのか、教えてください。

木下：最初は高校生3名と始めました。私も駒ヶ根に転勤して2年目で、地理に明るくない。ましてや天竜川の東側では屋号で呼ぶので、話を聞いてもどこの家のことか分からない。そのうちクラブを辞めた子たちが手伝ってくれるようになりました。その子たちは屋号がすぐ分かるし、その家のこともよく知っているの、調査する時はよかったです。

伴さんの時は、伴さんは夏だけ長野に来るので、アポを取ったのが7月終わり位でした。伴さんがこちらに来ている時に地元の新聞にたまたま登戸研究所の記事が載って、それを偶然伴さんが読んでいたのです。8月5日に行って、最初行ったらすぐ帰ってききましたが、夏休み中にはいろいろ話をしてくれるようになり、親しくしてくれるようになりました。

当時は、生徒を車に乗せて行ってもうるさく言う人いませんでした。今は事故を起こしたら責任問題になるからと、非常に厳しくなりできません。教師も今は暇がありません。聞き取りも当時の関係者がいたちょうど最後の時期です。そういう、色々な偶然が重なり、私も一緒に行くうちに興味を持って調べ出しました。

そういうことで、伴さんが話してくれるまでそんなにはかかりませんでした。ただし、杉山さんは何回も通いました。やはりなかなかすぐには話してくれない。でも伴さんが話してくれたという、話をしてくれました。人が話したならいいかって。杉山さんが話してくれたのは、奇跡だとみんな言います。それほど誰にも話したことがない。

ですから1、2か月でなんとか。夏休み中は毎日のようにおじゃましましたので、だんだん親しくなっていたのだと思います。

渡辺：ちょっと補足しますと、『雑書綴』を提供してくれた人は第二科という伴さんが中心となっている科にいた人です。資料を提供するかどうかは、伴さんに承諾を得ないと提供できなかったそうです。伴さんに承諾を得て、この『私の街から戦争が見えた』⁽⁸⁾という本を出すときにも承諾を得ていますので、私はこの本が出た時にすぐに伴さんに差し上げました。聞き取りの時も伴さんの家にこの本があったと思います。この本が伴さんの心を開く一つのきっかけになったのかな、というふうにも思います。ですからすぐに話したわけではなく、話していいのか関係者の中では話し合いがあったのではないかと想像されます。

質問者4：先程山田先生がおっしゃった、地域に刻まれた戦争の歴史を、どうやって若い人たちに伝えていくかということはとても重要な問題だと思います。当時の駒ヶ根の高校生が本当に真実を知りたいというところから始まって、解き明かしたように、当時の長野には平和ゼミナールという高校を超えた生徒間の組織があったということがすごく大きいのではないかと思います。しかし実際には長野県で登戸研究所の疎開地跡の事を知っている県民は少ない。若い世代に伝えていく時に、駒ヶ根市教育委員会とか川崎市教育委員会が非常に大きな影響を与え

るのではないかと思います。行政の方ではどのような姿勢を示しているかをお聞きしたい。

木下：協力はあまりよくありません。地元で資料館をつくってほしい、残したいと言ったのですが、結局は実現しなかった。それで本を出したということもあります。やはりなかなかそういう意識を持ってもらうことが少ないし、どんどんメンバーも変わっていきますし。協力的な方もいますが、なかには学校の資料は個人情報が入っているから見せられないと言われます。昔はそういうことは言われてなかったのですが。地域としてなんとか残そうと、写真などの資料は寄贈しましたが、先日戦後70周年で25年ぶりに展示会を開催してくれました。昔も一回開催しています。そういうことに関心を持っている方は少ないですね。生徒についても、最初から意識があるというわけではなくて、色々な話を聞くうちに、ということが非常に多いと思います。最初はおもしろそうだな、という程度で、話を聞いていくうちに変わっていく。

最近も組織づくりをしたのですが、途切れてしまいました。今の子たちに対して、なかなか難しい。周りの環境も、集会を持つこと自体禁止しているところもありますので。そういう難しさもあります。

渡辺：川崎市の事も詳しくは知りませんが、登戸研究所に関しては高く評価していると思います。産業観光課は産業観光資源として位置付けていますし、教育委員会もしっかりと位置付ける方向性を持っているようです。市民がその気になり、高校生が動けば可能性は新たに出てくるのではないかと思います。そういう意味で明治大学平和教育登戸研究所資料館の役割は決定的だと思いますので、最後に山田館長から決意表明を含めて話をしていただきたいと思います。

山田：戦争に関わることで、マイナスイメージでとらわれていて、それを残していくことが地域の振興や、地域の文化向上につながらないのではないかとという誤解があります。むしろそういうものがあることで、色々な人が訪れ、ものを考えるようになる。登戸研究所があった生田の地は明治大学の農学部・理工学部のキャンパスになっていて、資料館ができる前は学生たちも都市伝説みたいなものしか知らなかった。弥心神社の下には死体が埋まっているとか、もちろん嘘ですが。それがきちんと伝えられていくと、また変わっていきます。技術と戦争との関わりのように、人間が変わっていつてしまう戦争について、少しだけでも考えるきっかけができるようになりました。各地域でもものを考えるきっかけ、まさに歴史を見るということは、現在を見るということ。歴史を通じて過去があり、その土台の上に現在があるということですから。意味合いをさらに考えるためには、現在と過去をきちんとおさえていく。決してそれはマイナスの遺産ではなく、未来をつくるための積極的なものとして、ポジティブなものとしてとらえていけば、活用の仕方があるのではないかと思います。そういう役割を資料館も担って

いければと思っております。6年目を迎えましたけれども、今後とも皆様のご支援をいただきまして資料館を充実させていきたいと思っておりますのでよろしくお願いいたします。どうもありがとうございました。

〔終〕

注

- (1) 木下健蔵『消された秘密戦研究所』（信濃毎日新聞社、1994年）
- (2) 信越放送SBC特集「陸軍登戸研究所 高校生が見た戦争」（1990年10月30日放送）
- (3) 長野県赤穂高等学校平和ゼミナール『長野県赤穂高等学校平和ゼミナール報告集 上伊那地方における「陸軍登戸研究所」の実態調査について』
- (4) 駒ヶ根市誌編さん委員会編『駒ヶ根市誌 現代編上巻』（駒ヶ根市誌刊行会、1979年）
- (5) 赤穂高校平和ゼミナール・法政二高平和研究会編『高校生が追う陸軍登戸研究所』（教育史料出版会、1991年）
- (6) 山本憲蔵『陸軍贋幣作戦』（徳間書店、1984年）
- (7) 斎藤充功「ドキュメント陸軍登戸研究所」（『週刊時事』1986年9月20日号～1987年3月28日号連載）、のちに斎藤充功『謀略戦 ドキュメント陸軍登戸研究所』（時事通信社、1987年）として単行本化
- (8) 川崎市中原平和教育学級編『私の街から戦争が見えた―謀略秘密基地 登戸研究所の謎を追う―』（教育史料出版会、1989年）
- (9) 1948（昭和23）年に帝国銀行でおこった毒物による集団殺人事件。使用された毒物から元登戸研究所関係者の関与が疑われた。
- (10) 伴繁雄『陸軍登戸研究所の真実』（芙蓉書房出版、2001年）
- (11) 前掲『陸軍登戸研究所の真実』 82頁

〔追記〕

本稿は、2016年3月26日（土）に明治大学生田キャンパス中央校舎6階メディアホールにて開催された第6回企画展記念第三回講演会「長野県に疎開した登戸研究所と高校生達との調査」の書き起こしに加筆・修正したものです。なお、肩書きは2016年3月26日時点のものです。

参考資料（木下健蔵氏作成・提供）

1, 赤穂高校平和ゼミナール

赤穂高校平和ゼミナールの活動

1989(平成元)年、赤穂高校3年生の春日(現北原)いづみさんから「今年の文化祭に登戸のことを発表したいから手伝ってください」というのが登戸研究所の調査をするきっかけでした。

連日、放課後を使い中沢・東伊那の聞き取り調査を行いました。登戸研究所の名前は知っていても、その内容についての詳しいことは知りませんでした。

そのうち、当時の将校であった伴繁雄さんと知り合いになり、多くの時間、聞き取り調査をすることができました。



文化祭で展示内容を説明する春日さん



伴繁雄氏から聞き取りをする春日さん

平和ゼミナールの活動

最初の平和ゼミナールのメンバーと記念撮影(東伊那の自宅にて)



平和ゼミナールの活動 (法政二高・川崎市民との交流会)

その後、同様の研究をしていた川崎の法政二高平和研究会や登戸研究所の調査をしていた川崎市民と合同の交流会を、赤穂高校と川崎市で持つことができました。この合同調査によって、登戸研究所の研究が進展し、当時の関係者の話などから全貌が徐々に明らかになってきました。



天野良治氏からの聞き取り調査
(赤穂高校)



赤穂高校での交流会



川崎での交流会

登戸研究所の跡地見学(明治大学生田校舎)



登戸研究所本館



第3科建物



第2科建物(現:登戸資料館)



弥心神社

平和ゼミナールの活動 (川崎市での登戸研究所の展示)

合同研究の結果は、川崎市で展示され、多くの市民から注目されました。

赤穂高校平和ゼミナールの研究成果も展示されました。

このことが、後に「高校生が追う陸軍登戸研究所」という本になりました。



平和ゼミナールの活動 (石井式濾過管の発見)

平和ゼミナールの調査で注目されたのが、伴氏宅で発見された「濾過管」です。この濾過管には「軍事機密」という刻印があり、731部隊長の石井四郎が発明された物で、戦後初めての発見でした。



東伊那の伴氏宅で発見された濾過管



日本濾水機(株)で発見された石井式濾水器



石井式濾過管

平和ゼミナールの活動

(実験器具等の発見)

「駒ヶ根市誌」には、登戸研究所のことは数行しか記述されていませんでした。

そのため、疎開していた中沢小学校の昭和20年の「学校日誌」を調査しました。このなかに、登戸の関係者が来校していた事実や実験器具を学校に寄贈した事実などの記述があり、実際に登戸の関係者が来ていた事実が明らかになりました。

また、当時の実験器具らしいものが倉庫にあったので、当時の将校であった杉山圭一氏に確認したところ、実際に登戸研究所で使用していた物であることが確認されました。



中沢国民学校昭和20年の「学校日誌」



実験器具を確認する杉山圭一氏

2. 陸軍登戸研究所の歴史

- ・1927(昭和2)年 東京新宿戸山ヶ原に日本で最初の秘密機関「秘密戦資材研究所」が創設される
- ・1939(昭和14)年 川崎の登戸に移転、「登戸出張所」となる
このときから通称「登戸研究所」と呼ばれる
- ・1941(昭和16)年 陸軍技術本部の設立により、「陸軍技術本部第9研究所」となる
- ・1942(昭和17)年 兵器行政本部の設立により「兵器行政本部第9陸軍技術研究所」となる
- ・1945(昭和20)年 空襲の激化により、本部・第2科・第4科が上伊那地方に疎開する。第1科は北安曇地方・兵庫県小川村、第3科は福井県に疎開

3. 陸軍登戸研究所の研究内容

総務科……研究・運営に関する総務全般

第1科……物理関係全般

- ・風船爆弾、殺人光線、宣伝用自動車、スパイ用無線通信機、
宣伝用自動車など

第2科……化学関係全般

- ・秘密インキ、秘密カメラ、生物化学兵器(毒薬・細菌)、
青酸ニトリール、特殊爆弾、時限信管など

第3科……経済謀略資材関係全般

- ・偽造紙幣、偽造書類、偽造パスポート、各種証明書の偽造

第4科……機材製造関係全般

- ・第1科・第2科で研究開発された機材の製造、陸軍中野学
校の指導

第1科の研究内容

風船爆弾(ふ号)

1944(昭和19)年11月から翌年の3月
までの間に、約15,000個を放球予定
(実際は9,300個)

この製造のために、全国の高等女学校
の生徒が動員された



第2科の研究内容

登戸研究所の研究で、明らかにされなかったのが、第2科の研究である

毒物や細菌などの実験のため、中国で人体実験を行っている

戦後、これらの研究成果をアメリカは戦犯を免責してまで入手したかったのである

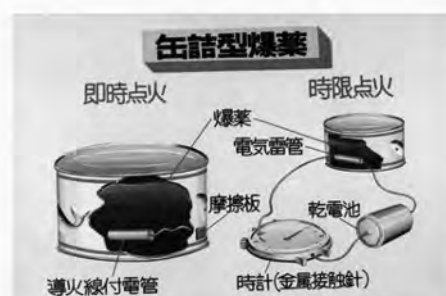
登戸研究所の所員の何人かはアメリカに渡り、軍で働いていたなかでも枯葉剤の研究は、その後のベトナム戦争でアメリカが使用したものの基礎になったものと言われている



第2科の研究内容

第2科の研究は、疎開してからはほとんどの研究ができなかったが、缶詰爆弾については、高等科の生徒を動員して、軍需工場があった中沢青年学校や中割協議所などで製造されていた

爆破実験の様子を天竜川穴山沖で生徒たちに見学させている
(中沢国民学校「学校日誌」の記述)



第2科の研究内容

青酸ニトリール

この青酸系の毒薬は、遅効性の毒薬で数分してから効果が現れる。

青酸がすぐに効果が現れるのとは対照的である。この薬品を南京において中国人捕虜名に人体実験をしたことがわかっている。伴繁雄氏もこの事実を著書の中で認めている。

戦後、帝銀事件で使用された青酸がこの青酸ニトリールではないかと疑いがもたれた。

警視庁の刑事がその調査のため上伊那地方に来て、関係者に尋問している。



青酸ニトリール
正式名称は「アセトン・シアン・ヒドリン」

第2科の研究内容

毒 物



台湾へ毒蛇の毒を
採取しに行った所員

土方博技術少佐(右)
杉山圭一技術大尉(左)



図2-5 イヌサフラン
〔「毒のはなし」
東京図書より〕



図2-6 アマガサヘビ (『世界大百
科事典』平凡社より)

第2科で研究していた毒物

第3科の研究内容

偽造紙幣

第3科の研究で有名なのが偽造紙幣の研究である

中国の通貨である「法幣」を偽造して、蒋介石の国民政府にインフレーションを起こし、中国国内を経済不安にさせる目的で実施された

この偽造紙幣は中野学校出身者が運び、中国における特務機関である「松機関」を通じて市場に流通させた



中国の偽造法幣

第3科(杉工作)の関連図

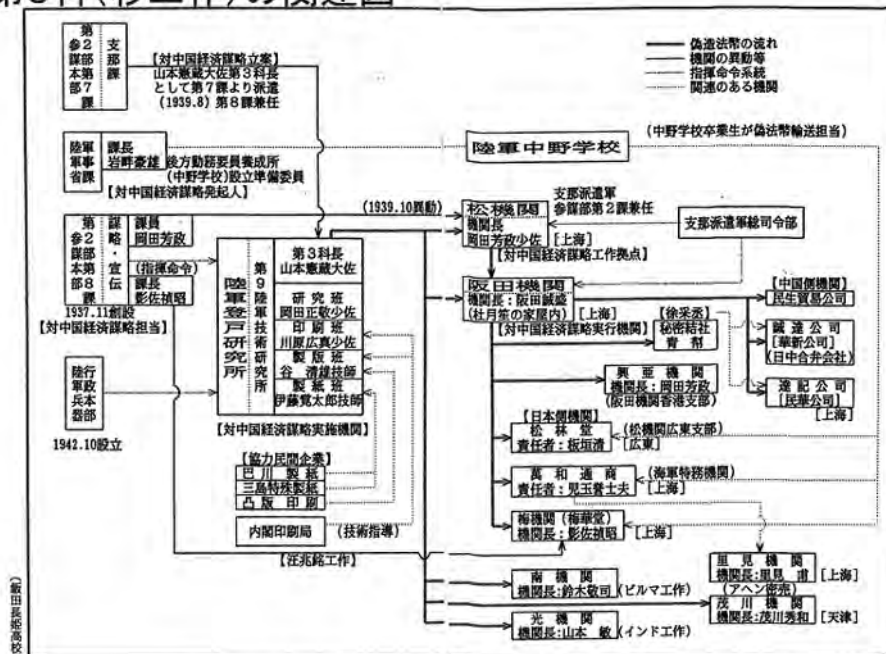


図7 杉工作関係図

図7 中国経済謀略(杉工作)における関係図

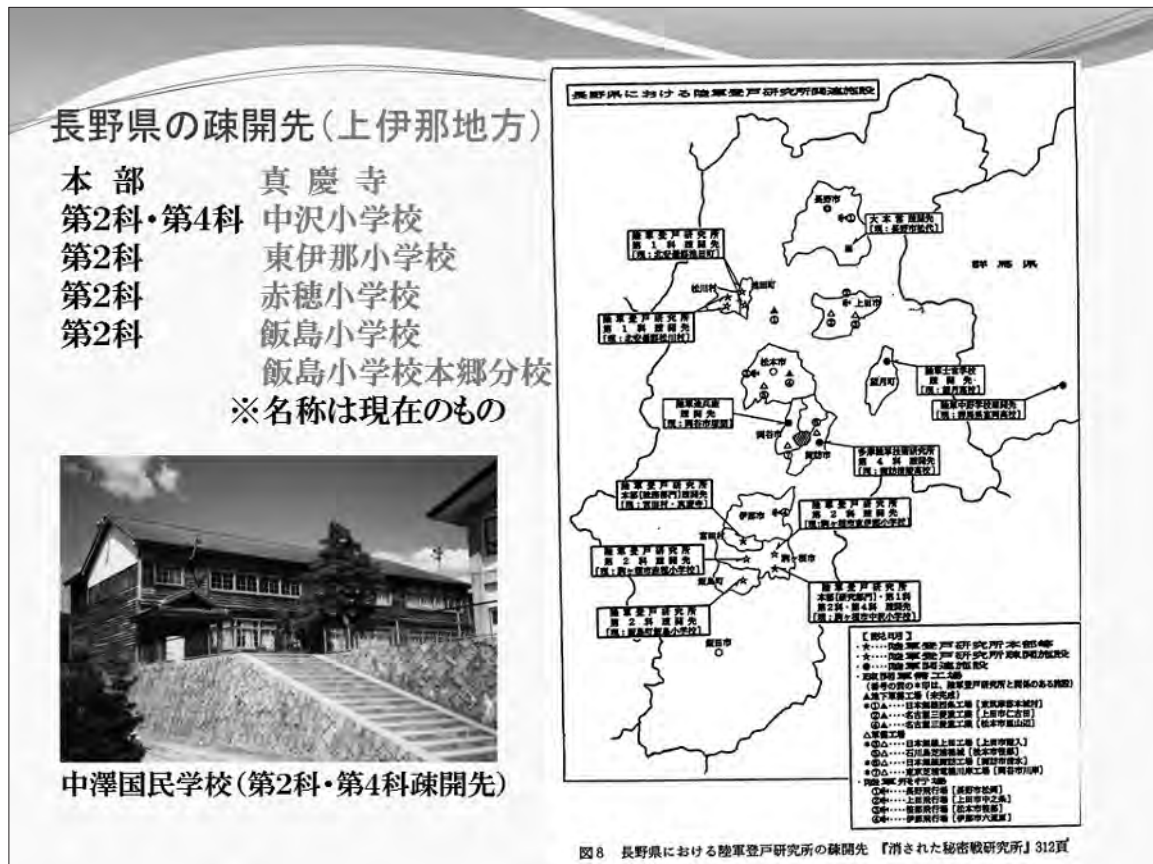
4. 陸軍登戸研究所の疎開

兵器行政本部作成の資料(1945年8月21日付)

疎開先	本 部	長野県上伊那郡宮田村
	北安分室	長野県北安曇郡松川村
	中澤分室	長野県上伊那郡中澤村
	小川分室	兵庫県氷上郡小川村
	登戸分室	川崎市生田
内 容	本 部	企画・庶務・人事・経理・医務・福利
	北安分室	強力超短波の基礎
	中澤分室	挺進部隊爆破焼夷及び行動資材、宣伝資材、
	小川分室	憲兵資材並に簡易通信器材の研究及び製造
	登戸分室	資材の収集、他の機関との連絡、疎開後の残務整理

本土決戦に備え疎開した各研究機関





長野県の疎開先(上伊那地方)

本 部 真 慶 寺



長野県の疎開先(北安曇地方)

第1科 松川小学校[松川村]

第1科 会染小学校[池田町]

※名称は現在のもの



松川村に建設されていたパラボラアンテナ
(電波兵器)の礎石

駒ヶ根訪問の市陸軍登戸研究所員

「殺人光線」の研究 証言



松川村に建設パラボラアンテナ
米機「電波で撃墜狙う」

【松川村】長野県松川村に建設されたパラボラアンテナ(電波兵器)の礎石が、地元住民の記憶に刻み込まれている。このアンテナは、米軍が「殺人光線」の研究のために設置したとされている。地元住民の証言によると、アンテナの建設には多くの労力が投入された。アンテナの形状は、巨大なパラボラ反射鏡の形をしており、電波を集中させることができた。このアンテナは、米軍が「殺人光線」の研究のために設置したとされている。地元住民の証言によると、アンテナの建設には多くの労力が投入された。アンテナの形状は、巨大なパラボラ反射鏡の形をしており、電波を集中させることができた。このアンテナは、米軍が「殺人光線」の研究のために設置したとされている。地元住民の証言によると、アンテナの建設には多くの労力が投入された。

『信濃毎日新聞』1998年10月13日付記事

伊那村分工場退官退職調査票

[illegible]

5. 終 戦

「陸軍省軍事課特殊研究處理要領」と標題が就いた文書がある。この文書は、敗戦と同時に關係機關に發した通達である。

陸軍省軍事課特殊研究處理要領

昭和20年8月15日

軍事課

一、方 針

敵ニ証拠ヲ得ラルル事ヲ不利トスル特殊研究ハ、全テ証拠ヲ隠滅スル如ク至急ニ処置ス

一、實施要領

1. ふ号及登戸関係ハ兵本草刈中佐要旨ヲ伝達、直ニ処置ス (15日8時30分)
2. 関東軍、731部隊及100部隊ノ件、関東軍藤井参謀ニ電話ニテ連絡処置ス (本川参謀不在)
3. 糧秣本廠1号ハ衣糧課主任者(渡邊大尉)ニ連絡処置セシム (15日9時30分)

以下略



中澤国民学校 GHQの接收 1945(昭和20)年10月
(左) 杉山圭一大尉、(中央) 山田桜大佐
(前列左から4人目) 夏目五十男少佐、(前列右から3人目) 北澤隆次技師



中沢 林氏宅(丸山班疎開場所)をGHQが接收 家人と記念撮影

6. 戦 後

戦犯の免責

登戸研究所の所員で、戦後、戦犯になった者は一人もない。

研究成果と引き替えにアメリカが免責を与えたためである。この免責は731部隊と登戸研究所のみに与えられたものである。

帝銀事件

1948(昭和23)年1月26日、帝国銀行椎名町支店で行員ら12人が青酸化合物によって毒殺されるという事件が起きた。警視庁は青酸化合物が登戸研究所で開発された青酸ニトリールではないかと疑い、上伊那地方に調査に訪れている。伴繁雄氏も伊那裁判所において、証言している。



帝銀事件の犯人とされた平沢貞道

第6回企画展「NOBORITO 1945 ―登戸研究所 70年前の真実―」記録

企画展関連イベント「証言会」 元登戸研究所関係者が語る1945年の登戸研究所

証言者（登壇順）

栗山武雄氏（元陸軍登戸研究所第四科第一班勤務員）

1941（昭和16）年から少年工員として登戸研究所第四科の機械工場に勤務。1945年の春ごろから兵庫県・小川村への疎開作業にも携わり、小川村にて終戦を迎えた。

正地次男氏（元陸軍登戸研究所第三科勤務員）

1939（昭和14）年から登戸研究所第三科にて偽札製造作業に従事。以来、敗戦後の偽札製造の証拠隠滅作業を含めた残務整理終了までの約7年の間勤務した。

やすのぶ
會津保進氏（元陸軍登戸研究所第四科第二班勤務員）

1944（昭和19）年から少年工員として登戸研究所第四科に勤務。主に爆弾に火薬を詰める工程や敗戦後の登戸での証拠隠滅作業に携わる。火薬の材料などについては知らされていなかった。

三上峰緒氏（元陸軍兵器行政本部制式課タイピスト）

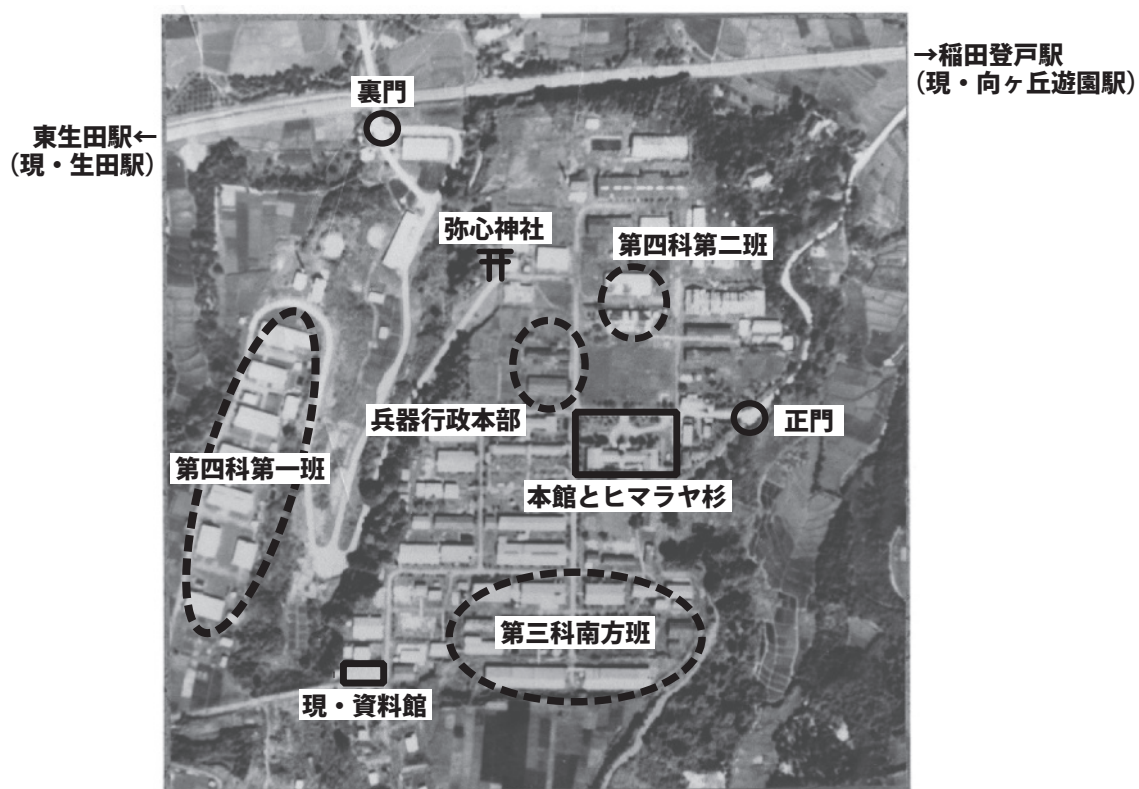
1942（昭和17）年よりタイピストとして元陸軍兵器行政本部制式課に勤務。1945年5月以降、空襲の被害を受けた兵器行政本部とともに登戸研究所の場所へ疎開をした。

インタビュアー

渡辺賢二（平和教育登戸研究所資料館展示専門部会委員）

山田 朗（文学部教授・平和教育登戸研究所資料館長）

参考資料

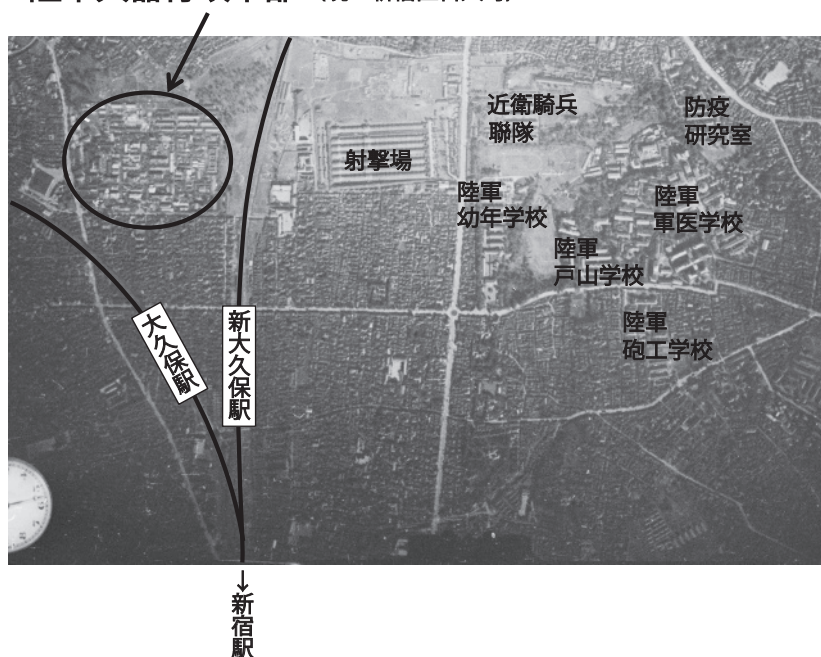


第1図

1945年6月以降の登戸研究所〔登戸分室〕

(国土地理院所蔵1947(昭和22)年米軍空撮写真をもとに資料館作成)

陸軍兵器行政本部 (現・新宿区百人町)



第2図

戸山ヶ原の陸軍兵器行政本部の位置

(国土地理院所蔵1944(昭和19)年陸軍空撮写真をもとに資料館作成)

〔山田〕 皆さまこんにちは。本日は登戸研究所資料館主催証言会にお越しいただきまして誠にありがとうございます。登戸研究所資料館長の山田です。よろしくお願いします。

登戸研究所資料館は、毎年このような証言会を行っております。それから、毎年11月から企画展をやっておりますが、今年は戦後70年という節目になるものですから、特別に8月から企画展をやっております。その企画展「NOBORITO 1945」は、1945（昭和20）年の登戸研究所はどうであったか、ということを表示しております。今日は、まさにその1945年の登戸研究所に関係した皆様にお越しいただき、登戸研究所でどういうことが行われてきたか、ということ伺っていかうと思います。

まず簡単に登戸研究所の概要についてご説明します。この生田の地に登戸研究所ができたのが1937（昭和12）年です。これは元々、「陸軍科学研究所登戸実験場」という研究施設でした。それが2年後の1939（昭和14）年に「登戸出張所」という名前になり、組織が拡大します。この時点で、後に風船爆弾や電波兵器などを開発した第一科、毒物・薬物・生物兵器・スパイ用品を開発した第二科、そして偽札を行う第三科、というのができました。その後、太平洋戦争になり、登戸研究所の最盛期には1,000人くらいの方が働くようになりました。現在の西三田団地になっている辺りに、第四科という、第一科・第二科で開発した兵器の量産工場ができました。終戦近くになり、1945年に登戸研究所は分散疎開をします。これは空襲の危険ももちろんあったのですが、どちらかというと本土決戦準備という考え方で、登戸研究所は長野県を中心とした地域に分散疎開をして、そこで兵器生産あるいは兵器開発を続けました。

本日は、4人の方に証言をしていただきます。會津保進さんと栗山武雄さんは第四科にお勤めでした。第四科というのは第一科、第二科で開発した兵器の量産を行っていたセクションです。もちろんこれも、移転をして、そこで生産を続けました。正地次男さんのお勤めは偽札製造の第三科です。基本的には印刷機を移設できないため偽札印刷はずっとこの生田の地で行われており、紙の生産などで一部福井県の武生の方に組織を移転して紙の確保などをやっていたようです。三上峰緒さんは、陸軍登戸研究所が属していた陸軍兵器行政本部にお勤めだった方です。兵器行政本部が空襲に遭い、その後登戸研究所のあったこちらに移ってこられました。

これから渡辺先生がインタビューをして、私もお手伝いをしながら、4人の皆さんに1945年の登戸、またその前後も含めたお話を伺います。よろしくお願いします。

〔渡辺〕 登戸研究所を調べ始めたのが30年前ですから、もう本当に長くとりかかってまいりました。そして登戸研究所に勤めた人たちが秘密にしていたものを次第に高校生なんかと一緒に話を聞く中でその苦しみや、あるいはやったことに対する^{ごんき}慙愧の念やいろんなことを聞いて、やはりこれを伝えなければいけないということで資料館の建設など、市民

の方々と運動をしながら今日までやってまいりました。そんな関係で、1982年にできた「登研会」という登戸研究所とけんかいに勤めた方々の会に、1990年くらいから参加させていただきました。したがって、皆様方と共に、今日はその体験を聞きながら、登戸研究所とは何だったのか、特に70年前の登戸研究所の実態についてお話を聞きたいと思います。

今日は、各4人の方々に15分位ずつインタビューをさせていただき、横断的なものを深めながら、最後の10分くらいで皆様方からの質問にお答えするというやり方で進めたいと思います。

それでは最初は栗山武雄さんからお聞きします。最初に、登戸研究所に勤められたのはいつだったのか、何歳だったのか、ということをお願いします。

〔栗山〕 1941（昭和16）年の4月から15歳で入所いたしました。

〔渡辺〕 そのときはまだ登戸研究所とは言っていない時代ですね。

〔栗山〕 科学研究所ですね。

〔渡辺〕 そして1945年まではずっとお勤めだったということですか。

〔栗山〕 そうです。

〔渡辺〕 働くきっかけ、ここを選ばれたきっかけというのはどんなことだったのでしょうか。

〔栗山〕 それはもう、学校の先生から推薦されました。

〔渡辺〕 粕江のお住まいだったんですね。

〔栗山〕 はいそうです。

〔渡辺〕 粕江の方から結構大勢来られていたんですか。

〔栗山〕 はい、結構大勢来ておりました。

〔渡辺〕 それは小田急線で東生田〔現・生田駅〕まで来て上って来るわけですか。

〔栗山〕 当時は稲田登戸〔現・向ヶ丘遊園駅〕ですね。そこから歩いて坂を上って通いました。

〔渡辺〕 それでは相当かかりますね。それでお勤めの科は、どこだったのか。〔地図を指し〕ここがヒマラヤ杉、本館ですね。それから右側、〔現在の〕生田中学校の方ですか、四科というのは。

〔栗山〕 まだ拡張していませんで、どちらかと言うと本館に近かったですね。

〔渡辺〕 まだ弥心神社もないですね。動物慰霊碑もないですから。本館があってその近くですか。

〔栗山〕 そうですね。

〔渡辺〕 それでお仕事の内容はどういうことをやられたんですか。

〔栗山〕 各科・研究室で研究開発した兵器ですか。それを製造、というか試作ですね。試作することが仕事だったですね。

〔渡辺〕 機械工場？

〔栗山〕 機械工場です。

〔渡辺〕 どんな機械なんですかね。無線機とか、盗聴器とか。

〔栗山〕 旋盤とか、ボール盤ですか、あんな感じですね。要するに工作機械ですね。一通りやりました。

〔渡辺〕 ものがどのようなものになるかなんてことは、あまり知られてなかったですか。知ることができなかったですか。

〔栗山〕 ほとんどわからなかったですね。

〔渡辺〕 そういう旋盤とか部品を作るというのに専念されていた。それについて、例えば所内で大勢勤めておられる方がいると思いますが、会話とかほとんどしなかったですか。

〔栗山〕 そうですね。養成所といいますか、一年ぐらいは講義がありまして、それに出ることがまず仕事ですね。

〔渡辺〕 15歳で勤められるからここに慣れるまでの間は、後では青年学校と言うと思いますが、そこで勉強したり、基礎的なものをやるという段階を経るわけですね。それで配属が決まっていくと。

〔栗山〕 いや、配属が先なんです。

〔渡辺〕 配属が先で。それでそこで訓練を受けるというか。15歳ですから、少しはちゃんと訓練しないと使い物にならないという判断だったかもしれないですね。

〔栗山〕 そうですよ。

〔渡辺〕 家に帰ったりしてもほとんどここで何をやっているのかなんてことは話すことはなかったですか。

〔栗山〕 職場にいても何をやっているのかさっぱりわからなかったですね。

〔渡辺〕 やっぱりやりがいみたいなのはありましたか。

〔栗山〕 当時は中国と戦っていましたから、当然お国のためという〔気持ち〕でした。

〔渡辺〕 一生懸命やったということですね。それで勤務する時間は9時くらいから始まるわけですか。

〔栗山〕 いや、もっと早くからです。

〔渡辺〕 もっと早くからですか。8時半くらいですか。

〔栗山〕 8時半かあるいは8時だったかもわからないですね。

〔渡辺〕 それで何時くらいまで？

〔栗山〕 定時は5時だったかと思うんですけども、はっきり覚えていません。

〔渡辺〕 15歳で勤められて最後までいられるわけですが、召集令状とかそういうのは来なかったですか。

〔栗山〕 それはありませんでした。ただし、当時は徴兵検査というのがありましたね。21歳で

行くって決まりだったんですけれども、それがだんだん繰り上がりまして、19歳くらいまで繰り上がったんですね。一応それは受けました。

〔渡辺〕 その結果は合格でしたか。

〔栗山〕 非常にお粗末な検査でして、通常ですと裸になってやるんだそうですけれども、そういうこともありませんで、体格を見て「おまえは合格だ」と。甲種とか乙とか一応ランク付けされました。一応甲種になったんですけど、ここに勤めているということで免除されたんですね。

〔渡辺〕 ちょうど70年ぐらい前の話ですね、1945年。そのとき、4月29日に篠田所長がここを解散するということになって疎開になりますよね。それでどこに疎開することになりましたか。

〔栗山〕 疎開ですか。疎開は兵庫県の小川分室ですね。

〔渡辺〕 登戸研究所は長野県を中心として、偽札の科は北陸、福井県武生・栗田部に行くんですが、西の方は兵庫県の小川分室というところに行くんですね。これについて山田館長がどういう意味があるのか話してください。

〔山田〕 本土決戦に際して日本軍は全国を二つに分けて、東日本は第一総軍、西日本は第二総軍という本土決戦を行う場所を2ヶ所に想定しました。西日本は、最初は九州の方から始まって、東日本は相模湾あるいは房総半島のあたりに米軍が上陸してくるということで、二つの場所に本土決戦場を想定しました。そのために、登戸研究所も全ての機能を1ヶ所に移すのではなく、西日本と東日本に拠点をそれぞれ作っていくんです。ですから小川分室も西の方に置く拠点という意味合いがあったかと思います。本当は九州で決戦ならばもっと九州に近いところの方がいいんだと思いますが、移転する利便性みたいなことも考えて、西日本でもわりと東寄りに機能を移していくと。この2ヶ所、全国を二分して登戸研究所の機能をそれぞれ分散して疎開していくやり方を採りました。

〔渡辺〕 私は小川分室というところを20年くらい前に関係者と一緒に調べたことがあります。そこが栗山さんの行ったところですが、どういうルートで行かれました？京都から行かれるわけですね、あそこは。

〔栗山〕 そうです。福知山線ですか、谷川駅で降りまして。

〔渡辺〕 小川村というところですね。そこにいつ行かれました？

〔栗山〕 昭和20年の5月頃だったと思います。

〔渡辺〕 5月頃。それでどういうところにお住まいだったんですか。

〔栗山〕 最初は軽工場が小学校の講堂を使いましたので、その前あたりだと思うんですけど、宗教団体の昼練道場という畳敷きの広い部屋がありまして、そこへ独り者は全員雑魚寝ですね。

〔渡辺〕 〔写真を指し〕小川小学校という学校が工場になる予定だったんですね。今は鉄筋の建物ですが、これを造るわけですね。そうするとどういう形で工場造ったのかは御存知ないんですね。

〔栗山〕 もう私が行ったときは大体が据え付けてありました。木造の2階ですか、床をはがしてコンクリートを打って機械を据えたわけですね。ですからまだコンクリートが乾いていないような状態で、とても動かせられるような状態ではなかったですね。

〔渡辺〕 機械を運んだり、工場を造る途上で敗戦になるということですね。何人ぐらい行っていたんですか。

〔栗山〕 ほとんど分散していますから、全然わからないですね。

〔渡辺〕 関西では、村上さんという方が所長ですか。

〔栗山〕 村上忠雄さんという、今、資料館があるところで研究していた人ですね。

〔渡辺〕 その方が所長で、その他何人かの将校と何人かの雇員・工員みたいなかたちで行ったわけですね。それで機械を運んで、仕事は何をやる予定だったのでしょうか。

〔栗山〕 一応、軽工場の工場長という人が竹下、という見習士官だったんですけど、まず顔も見たこともないですし、仕事をする状態ではなかったんですね、まだ。

〔渡辺〕 陸軍の参謀本部の資料によると、ここに長野県に次ぐぐらい焼夷剤が送られているんですね。だから焼夷爆弾なんかを作る用意がされたんじゃないかとも思いますが、いかがですか。

〔栗山〕 多分それは別の建物でやっていたんだと思います。

〔渡辺〕 そんなかたちで栗山さんは徴兵にとられないで、第二総軍という西の方の守りの秘密作戦部隊として敗戦を迎えることになります。それでは、またあとでお聞きします。ありがとうございました。

次に正地次男さんをお願いします。正地さんが登戸研究所に入られたのはいつ、何歳ぐらいだったのでしょうか。

〔正地〕 15歳ぐらい。1940（昭和15）年、太平洋戦争が始まるちょっと前です。

〔渡辺〕 入るきっかけというのはどんな感じでしたか。

〔正地〕 当時はよほど家が裕福でないと旧制中学は入ることができなくて、〔国民学校〕高等科というのが2年あったんです、〔現在の〕登戸小学校で。それから戦争がだんだんあれまして、就職という問題になったんですけど、最初は川崎にあります日本電気とか日本窒素（？）とかあそこらへんを受けたんですけど、みんな受かっちゃったんですよ。そのうちこの登戸研究所が入ってきまして、待遇がとにかく、給料がね、給料と言うと憲兵に怒られちゃうんですけど、手当ですね、それがなんか倍ぐらいくれるということで、さあ親もこれはいい就職だと言って、早速受けたんですけど、なんとか合格しまし

て。

〔渡辺〕 ということで、家族も喜ばれてここにお勤めされたんですね。

〔正地〕 そうですね。

〔渡辺〕 この場所ってというのは、どういう風に呼ばれましたか？当時、「役所」と呼んだり、「登戸研究所」と呼んだり、「第九研究所」と呼んだり、いろんな呼び方があったようですが。

〔正地〕 いや、最初私が入るちょっと前はなんか「実験所」っていいましたよ。

〔渡辺〕 実験所。

〔正地〕 登戸実験所。そのうちに技術本部ですね、陸軍技術本部。第七研究所…。

〔渡辺〕 第九ですね。

〔正地〕 とても短くて一年か一年半で今度、兵器行政本部ってなったんですよね。やっぱり秘密をあれするんでいろいろ名前変えたみたいな感じだった。

〔渡辺〕 「登戸研究所」っていう名前は日常的に使っていました？

〔正地〕 いや、普通は使ってました。

〔渡辺〕 「登戸」,「登戸」で。

〔正地〕 いちいちあの「第七」とか「第九」とかってあまり使わないですね。最後は「第九研究所」になったんですかね。

〔渡辺〕 それでその、どこに属するかというのはいつ決まったんですか？

〔正地〕 それは、身上調査とかいろいろしましたよ。私の実家にも二度三度憲兵が来たりしてね。それで、三科に入るのは、成績ばかり良くても、家庭がちょっと複雑だと入れないですよ。私なんかわりと順調で、入れましたけれども。

〔渡辺〕 その、三科に入ってどういう部署かっていうのは、入る前は全然わからないままなんですね。

〔正地〕 ええ、わからないですね。入って半年くらいは兵器学校の真似事みたいな勉強をずっとやっていたんですけど、だんだんと戦争が激しくなって、本当は2年間やれば兵器学校の令状がもらえるっていうことだったんですけど、半年ちょっと過ぎるともう中止だっていうんですよ。それぞれ現地室に配属になるから、そちらでよく働け、ということで。

〔渡辺〕 それでその場所ですけれども、〔地図を見て〕ここでもよろしいでしょうか。ここが本館ですが、第三科の南方班ってというのは〔地図の〕一番下の方、この辺でもよろしいですか？

〔正地〕 そうですね、南方班はね。三科は北方班、中央班、南方班ってあったんですよ。で南方班ってというのは今の〔川崎市水道局の長沢〕浄水場のある所と近い方なんですよ。一番南側なんです。で、北方班というのは紙工場で。それは北側だったんです。

〔渡辺〕 〔南方班の位置の内部を指し〕ここが5号棟という、これですね。これが印刷ですね。どこで働いたんですか。ここに印刷機がいっぱいある。

〔正地〕 唯一堀があるところですね。そこは使ってなかったもので、そこは検査の場所に使っていました。そこへ、わりと空いてるところがあったんで、中野学校を出た、スパイ学校ですね、あそこの生徒が卒業すると研究所へどんどん入ってきた。当時三科へ入ってたんですね。

〔渡辺〕 こころへんは板堀で囲われたという。

〔正地〕 そうです。三科だけは板堀でね。

〔渡辺〕 3メートルぐらい。

〔正地〕 絶対よその科の者は入れないです。所長でも断って入れないってほど嚴重にあれしたんですね。

〔渡辺〕 それで、偽札というのはどんなものを造られていたか、ご記憶はありますか。こういうやつですか。こちらの写真を見てみてください。

〔正地〕 そうですね、中央銀行〔券〕ね、孫文の肖像。あと中国銀行〔券〕。交通銀行〔券〕ね、これは最後までやりましたね、交通銀行は。

〔渡辺〕 これが一番大量にやったという。

〔正地〕 いや、大量に出したのは中国銀行。上海の銀行ですね。それがピン札だとね、上海で、ばれそうだっていうんで、すぐ参謀本部から通達が出てね、中止になったんですよ。それで今度は交通銀行、これを古い札にして至急送れってなったんですよ。それで、それを印刷した新しいのをわざわざ古い札にね、コンクリートミキサーの中へくちゃくちゃにした札を入れて、中に糠入れたり、あと土も入れましたね。それから中を掻き回してみると使ってきた札のように見えるんですよ。それをシワが寄っているんで、手が足りないんで学徒動員で女学生を10人程、高津女学校と用賀にあった清和女学校、ここに10人くらいいる。私が全部指揮したんですよ。それで一度伸ばして、それを今度一回プレスにまたかけて、それを今度百枚ずつね、それはもう、番号は連番でなくてそのままで、そうして送ったんですけどね、上海へ。

〔渡辺〕 それで後で調べて見ますと、1940（昭和15）年にピン札で日本の特務機関が中国で使ったら、偽札が出てるってばれましてね。なんでかって言ったら文化の違いで、中国の場合は新札を日本のように一万円札を新しいままで使わないらしいんですよ。くしゃくしゃにして使うらしい。それで偽札だって言われたっていうので、古札仕上げて工程を入れるんですよ。こちらでね。だから古札仕上げの工程を指揮されたのか。

〔正地〕 私は最初、検査室の方へ配属になったんですけど、検査も大変だったけどそういう直々にね、命令が出るんですよ。それでなんか上海の方でいろいろ問題が起きたらしくて。

とにかく、盛りな頃は、鉄道の国鉄時代ですけど、あれに一車ずつ送ったんですから。あれいっぱい積み込んでね。

〔渡辺〕 結局、運びたいのはちゃんとうこう…

〔正地〕 梱包箱ね、あと、縄を何重にもかけてね。それで登戸のあのマルツのあそこから、長崎までですよ。それにまた一回ついて行けっていうんでね、大変だったんですよ、貨車の中で。窓もないしねえ、時々開けてね、空気吸うような。嫌な役だった。

〔渡辺〕 運ぶときの指揮をするのが中野学校出身の人ですね。その人の下でついていって。

〔正地〕 うちの部屋にね、5人くらい来てましたね。あの時代はね、男はもうほとんどで丸坊主。

〔渡辺〕 坊主刈りでしょう。

〔正地〕 でも中野学校の人たちはね、ポマードを付けてね、長髪でね、背広着てね、本当にうらやましかったですよ。ああいう格好してみたいなって。

〔渡辺〕 それで、あそこからトラックでずっと運んで、あの弥心神社の下の道路を歩いていくわけですね。

〔正地〕 そうですね。

〔渡辺〕 それで作った額が45億円〔元〕も刷ってるわけですよ。

〔正地〕 そういう計算になるのかわからないですけども。

〔渡辺〕 30億円〔元〕くらい使った、という史料もあるんですが、45億円〔元〕というと、偽札の主流だった10円〔元〕札で1枚1枚重ねていくと富士山の27.5倍くらいの量があるんですね。それを毎日毎日包んで運んだんですかね。毎日のように。どうだったんですか。

〔正地〕 最初のうちはね、紙幣というのは凹版印刷とか凸版印刷とあって、凹版印刷がね、なかなか生産があがらないんですよ。〔凹版印刷は〕手ふきでやるんですよ。それで香港にあるっていうんで、参謀本部でね。どうして持ってきたか知らないですけども。

〔渡辺〕 第三科所員の大島〔康弘〕さんなんかは御存知ですか。お付き合いとかありました？

〔正地〕 大島さんは中央班で、私は南方班ですぐ隣だったんですよ。で、私の仲いい友達が大島さんのところにいたんですよ。で、時々遊びに行ったり、来たりしていました。

〔渡辺〕 それで、他の科と違うのは、特務機関ですから、使っても軍事物資を買い取ったりするわけでしょう。だから、結構裕福になって戻ってくると、お土産なんかを持って。

〔正地〕 ああ、はい。それが楽しみだった。

〔渡辺〕 どうだったんですかね。やっぱりそうだったんですか。

〔正地〕 札入れて送った空箱へね。当時日本にはね、ほとんどチョコレートだとかああいうお菓子類はほとんどない時代、もちろんウイスキーもない。それを特務機関の、中野学校

を出た人たちがね、梱包の間、梱包箱へ、偽札で買ったんでしょけどね、もちろん。ウイスキーとかチョコレートを送ってくれたんですよ。それで表を見るとね、「参謀本部軍務局〔ママ〕 御寄進」という判子が。警察もそれは手が出せないんだね。で、開けてみるとチョコレートがおいしそうで。みんな喜んだんですけど。

〔渡辺〕 その、阪田誠盛というのが中国で指揮してね、儲かるわけですね。それを持ってきた中野学校の人たちが戻ってくるとその売り上げをくれたと。

〔正地〕 そうですね。

〔渡辺〕 他の科の人とは全然態度がちがう…

〔正地〕 その点はね。

〔渡辺〕 それから、他の科の人とも一応、所内で会うことがありますが、ほとんど口を聞いてはいけなかったんですか、やっぱり。

〔正地〕 うん、まあ、聞かれても話しちゃいけないと。

〔渡辺〕 それでは、家でもほとんどそれについては。

〔正地〕 家族にね、絶対息子のやっている事を聞くな、っていう承諾書を書かされる。判を押して。だから、親は震えあがったけど憲兵が来てね。お国のためならっていうんであれしたんですけど。

〔渡辺〕 もう一つ他の科と決定的に違うのは登戸研究所に入られてから19歳になった時、今から70年前になると、徴兵検査がありますね。それで合格されますね。そのときどういうふうな処置があったんですか。

〔正地〕 前にも一度お答えしたことがあるんですけど、私らの頃から、それまでは20歳で徴兵検査だったのが、一年外して19歳で。一応、研究所に行ってたんだけど受けた。やっぱり甲種で合格したんだけど、研究所に行ってるから召集なんか来ないよ、っていう話だった。ところが赤紙が来ちゃった、私の所に。それで、川原〔広真〕中尉だったかね、すぐそれ持って相談に行ったんです。

〔渡辺〕 相談に行った。

〔正地〕 そしたら、すぐね、「ちょっと待て」って言ってね、横浜の連隊区司令部ですかね、あそこに電話を入れましてね、「この間発送した召集令状、正地次男っていうのは重要な任務に就いているんだから、そんな兵隊なんかにとられたら困る」っていうんです。反対に連隊区司令部は「そうですか」って言って、まだ階級もこっちは大尉か中尉ですから、「結構」って、「じゃあその令状をないことにして返してくれ」って。もうあのときは驚きましたね。

〔渡辺〕 だから兵士にも行かなくてよかったんですね、三科は。

〔正地〕 言い方もすごいですよね。「兵隊行って1年や2年やって国のために何になる。今正

地君は重要な仕事に就いている。参謀本部の仕事。おまえら口出しすることじゃないからそんなもの取り消せ」って。そのまま向こうも引っ込んだんですね。

〔渡辺〕 それほどだから偽札と言ってもお札を刷るのが重要な兵器だったということですね。その関係で他の場所に移動することができないものですから、半分は製紙部門を中心に移動するけども、最後の最後までここで刷り続けるわけですよね。8月まで。何日ぐらいまで刷っていました？

〔正地〕 前日までやっていましたね。

〔渡辺〕 8月15日〔ママ〕までここで偽札を造り続けた。それで8月15日の朝早く、証拠隠滅命令が出されますね。そのときどんな感じでした？

〔正地〕 私なんかは下っ端ですから別にそんなこと恐がらなかったんですけど、将校だとかは戦犯に関わる、これは一切わからないように隠滅しなくちゃだめだ。それで焼却。古い札、合格品もたくさんあったんですけど、それを全部焼いてしまえと。ちょうど四科と三科の間に谷があったんです。そこへ持ち込んで。最初燃えないんですね、固まった札は。それををはがして、油を染み込ませて、石油ですね、それを撒いて燃やしたんです。

〔山田〕 このあたりですかね〔地図を指しながら〕。

〔渡辺〕 今の三田小学校のあるあたりですかね。

〔正地〕 三田団地のこっち〔東〕側ですね。

〔渡辺〕 そこに埋めたわけですか。

〔正地〕 いや、完全に燃えないんですよね。きれいには。灰になっても見ると、札の模様が出ちゃって。それで将校連中が怖がってこのままではだめだ、川へ流そうということで多摩川へ流しに行ったことがあるんですよ。カマスと言ってわらで編んだ袋へ詰めましてね、それで夜、今のちょうど登戸の橋があるところ、当時あの橋はなくて、小田急の鉄橋があったんですけど、あれの陰側で。そこで洪水や大水のときに流したらあんなことないんだけど、普通のときに流しちゃったでしょ。夜だから水がどのくらいあるかちょっとわからないんだよね。とにかく命令だから全部流しちゃった。そしたらそのすぐ下にね、今でもダムがありますけども、昔のことだからあの時代は蛇籠といって竹の籠でそこへ玉石詰めて、それで堰にして川崎の方へ送る二ヶ領用水の水を流すんだよね。私が上からの命令で「お前、あの辺近くて詳しいから、札のカス、燃えカスがどうなっているか、堰行って見てこい」って言うから、〔見たら〕蛇籠の中にいっぱい入っちゃって。焼けたのも焼けずにいたのも。それですぐ報告したんですけど、そしたらすぐ中止になった。川はダメだってなって。洪水でも出てないと。あとは湘南海岸、海に流そうと。ちょうど江ノ島と鎌倉の間ですね。腰越というところがあるんですよ、漁師町でね、その海岸へ行ってね、〔偽札の灰を〕流したんですね。海だから波があるから川とちがっ

てね、安心だったんですね。そんなことありました。

〔渡辺〕 そういうふうに徹底した証拠隠滅をやった。何日ぐらいまでやりましたか。

〔正地〕 終戦が昭和20年。21年明けまで。我々は何でもないですよ。ただ将校連中が怖がってね。軍事裁判で私がB級になる、A級になる、そんな話ばかりしてましたね。

〔渡辺〕 それじゃ、悪いことやったという意識はあったんですね。将校は。

〔正地〕 ありましたね。最初はわからなかったんですよ。ところがいろいろ情報が入ってくるんでね。とにかくあの当時、支那派遣軍総司令部が上海〔※資料館注 南京の誤りか〕にあったんです。畑俊六という人が大将でね。そこに特務機関と言われる特殊なね、中野学校を出た連中が関係してる。上海にあったんですよ。情報関係は兎玉誉士夫というのがやってた。そういう人ですよ。それから物資の阪田機関ですね、阪田さんという人が。札なんかを阪田さんがそれでそこで品物買ったりね、いろいろやったんですね。阪田さんが研究室一回来たことがありまして、そのとき「大陸に現在、満洲を合わせて35万人の兵隊がいるんだ。その食糧を買うのをこの札で買っているんだ。札が不足して兵隊が飢え死にしちゃうから、徹夜でも生産上げろ」と命令が来ましてね、きつかったですね。

〔渡辺〕 どうもありがとうございます。ここが〔航空写真を見ながら〕南方班ですね。

〔正地〕 そうですね。北方班が紙工場で。中央班に大島さんがいた。

〔渡辺〕 北方班ですが、ここが製紙をする場所で、透かしなんかする。この場所で働いていた方が今日お見えなんです。今日は証言の方には立ちませんが、そこで短い期間ですが働いて、戦後も山本〔憲蔵第三科長〕さんなんかとも付き合いのあった岸井三治さんがお見えですので、ご紹介だけします。今度、ぜひ岸井さんのお話を聞く機会を設けますので、よろしくお願いします。今度楽しみにしています。岸井さんは岸井さんですごく話をお持ちですので、楽しみにしていただければと思います。それではどうもありがとうございます。

それでは次に會津さんの方に移ります。會津さんは何歳でいつここに入所したんでしょう。

〔會津〕 そうですね、14ですか。14か15です。登戸国民学校高等2年卒業して、4名でここへ来て、4名が受かって、一科、二科、三科、四科と。私が四科で配属になって。

〔渡辺〕 昭和19年4月に入所されたと。

〔會津〕 4月1日ですね。

〔渡辺〕 それですぐに配属されないで。

〔會津〕 三ヶ月見習教育で青年学校で軍事教練ですね。そして7月に四科に配属になった。

〔渡辺〕 四科ではどういうことをされてましたか。

〔會津〕 ここに見本〔模型〕があるんですけど、これは今、市販されている羊羹の形をしていますけども、これはブリキ缶でできていて、この中へ爆薬を詰めて、それで導火線が4尺くらいついていて、下にはねる雷管がついている。それで作ってました。あとは缶詰、これは鮭缶のような缶ですけども、このなかへやっぱり火薬を入れて、導火線をつけて使っていた。そういうことですね。

〔渡辺〕 缶詰型爆弾みたいな。

〔會津〕 そうです。火薬で破裂するということですね。

〔渡辺〕 缶詰型爆弾なんかが四科で作られていました。その威力なんかを実験するためのこともやられていましたよね。

〔會津〕 これは多摩川の河原で実験があったんですけど、私はまだ見習工だからしてません。上の人とか将校が行っていたと思いますけど。

〔渡辺〕 今、見習工と言われましたが、その若かりし頃〔少年工時代〕の會津さんの写真〔本誌P.61,第26図〕をちょっと見てみましょう。こんな感じなんですね、本当にこういう子が登戸研究所に勤めていたということ自身が脅威ですよ。本当に中学校の年齢で爆弾作りをやっていた。それで、ここに入っていた証拠写真みたいなものもあります〔登戸研究所勤務工員のバッヂの写真〔同,第27図〕を指して〕。これをちょっと説明してください。

〔會津〕 これは〔研究所に〕入ると皆さんがもらったんです。これは工員用で、この裏側に数字が彫ってあり、私が666番なんです。だからこれは666人目の私はそうだったんじゃないかと思っています。その上に雇員という身分があったんですね。詳しいことはわかっていません。

〔渡辺〕 こういうバッヂがあったという話は聞いていますが、現在残っているのが會津さんのバッヂしかないんです。ですから大変貴重なものだというふうに思いまして、復元して資料館に展示をさせていただいています。それで、若かりし頃に登戸研究所というものに対する、家族とかご本人の思いはどうだったんでしょうか。

〔會津〕 うちの周りには研究所が近かった関係で大勢いたんです。私が一番下だったと思うんです、年齢的には。有名な人はみんな亡くなっちゃっているようです。歳からいって。だからこういう席に出る人もいないわけですね。大勢いたんです、近所には。

〔渡辺〕 登戸小学校だけでも同期だけで4人ですよ。先輩なんかも入れると結構登戸にいっぱいいたわけですね。それでそういう人たちは登戸に勤めているからお互いに道で会ったりすると「おまえ何やっているんだ」と話はできました？

〔會津〕 だけどそれが今言ったように秘密の工場ですから、こっちも聞きもしないし、ここでも聞きません。

〔渡辺〕 だから勤めていると分かっているけど、別にその内容はお互い交流とかは絶対しない。

家でもやはりお話は？

〔會津〕 しなかったです。それに空襲警報が鳴ると、登戸と生田ですね、夜中でも自分の職場へ駆け付けたんです。それは今でも覚えています。

〔渡辺〕 勤めていたときに、機銃掃射とか、遭われたことありました？

〔會津〕 私はねやっぱり、研究所だったかどうかはわかんなかったけれど、今の向ヶ丘遊園駅ですね、近くの家には弾の当たった痕があったんです。

〔渡辺〕 會津さんが勤められた四科というのは、現在の生田中学校の場所が一班、こちら側〔現・明大生田キャンパスの側〕に二班、〔二班は〕正門入ってすぐ右手の建物で爆薬とか、そういうのをやられたわけですね。四科は分かれていたってことですね。勤務はやっぱり八時半くらいからだったんですか。

〔會津〕 そうですね。7時か8時で、終わりが6時だったんですかね。それであと忙しい時は残業。残業は8時くらいまでやったんですかね。タイムレコーダーがあったんで押して帰ったんですね。

〔渡辺〕 正地さんと同じように、給料が良かったとか条件が良かったとかそういう気持ちってありますか。他に行くよりは。

〔會津〕 その当時は遊んでいる人間はいなかったから、勤めている上ではまあ良かったんじゃないかと。中に食堂もあってご飯も食べられた。酒保〔兵営内・艦内にある兵士相手の日用品・飲食物などの売店〕もあって、街中では売っていないものも売っていた。それから床屋さんがあって、床屋へも行けた。不自由はしなかったですね。

〔渡辺〕 これは今度、岸井さんから聞くとときもまた出るかもしれませんが、講堂なんかで、エンタツ・アチャコとかが来て、演芸会をやるとかいうのがあったんですけど、ご記憶ありますか。

〔會津〕 これはね、毎月1回、第一講堂っていう講堂があって、そこで映画を観て、その後落語なんかを聞いたことを覚えていますね。

〔渡辺〕 戦争中の昭和20年にそういう演芸会とかまでやっていたのがこの登戸研究所だなんていうのは驚くべきお話だと思いますが。そういう意味では空襲で命の危険を感じたことは、ここに勤めている限りはなかったわけですね。

〔會津〕 ここ山だったから笹藪のなかに防空壕が、個人防空壕といって、幅が1 mくらい高さが1 m50くらいで、一人一人の防空壕を皆掘って持っていたんです。

〔渡辺〕 そんなことで四科のなかで本当にまだ少年の盛りのときに登戸研究所に勤められた、しかも爆弾を作ったということを今紹介していただきました。それではまたあとでうかがいます。ありがとうございました。

それでは三上峰緒さんに移ります。三上さんの場合は登戸研究所ではないので、それについて山田先生に補足していただきます。

〔山田〕 三上さんのお勤めだった陸軍兵器行政本部というのは、あまり一般的に知られていないかもしれません。兵器というのは、まず開発するところ、陸軍技術本部っていうところがあります。そして兵器を製造する、兵器廠という工場があります。そして、どの兵器をどれくらい造るのかと予算配分をしたり、重点を決めるところがあります。これが陸軍省の兵器局というところなんです。そういう開発・生産それから予算配分というのを一元化しようとしてしました。つまり戦争が始まって、いろいろと簡素化しなきゃいけない、合理化しなきゃいけないということで、1942（昭和17）年に、今言った陸軍省の兵器局と、それから陸軍兵器廠、この下に工廠があるわけですが、そして更に陸軍技術本部が合体して、陸軍兵器行政本部という組織になったんです。登戸研究所も、この陸軍兵器行政本部の下に位置していて、この陸軍兵器行政本部ができたときから、登戸研究所は第九陸軍技術研究所っていう名前になるんです。ですからいろんな陸軍の研究所も、基礎研究をやっていた陸軍科学研究所系統の研究所と、陸軍技術本部に属していた実際の兵器を開発するところと2系統あったんですが、それが完全に一本化されて陸軍兵器行政本部の第一から第十までの技術研究所、登戸の場合は第九陸軍技術研究所という組織になったんです。ですから登戸研究所を監督しているところがこの兵器行政本部であるということになります。

〔渡辺〕 そういうところに勤められた三上さんが、何で登戸に関係するのかというお話を聞きたいと思いますが、最初に何年に兵器行政本部にお勤めだったのでしょうか。何歳くらいだったのでしょうか。

〔三上〕 大体1942年頃に、タイピストとして陸軍兵器行政本部、陸軍技術本部の方に試験を受けて入りました。タイピストで入りましたけれど、それから1年くらい経ってから、それまではほとんど技術の製図の方ばかりが周りにいて、私たちは庶務でタイピストをしていました。そのときは私一人だけがタイピストで、他に別館とか製図室とかいろいろありましたけど、そこの方にもみんなタイピストがいたんですけど、兵器行政本部へ変わってから、それが全部合併して、製図の方たちもいっぱいいたんですけども、みんな散らばって解んなくなっちゃって、タイピストだけが13人の部屋に残ったわけ。その13人の部屋のタイピストのときはものすごい忙しくて夜勤なんかもあったんですね。そしてタイプでもってそれが始まったら13人の音ですから、もうガチャガチャ凄い音がして、耳鳴りするほど大きな音でタイプが大変だったんです。あとは、戦争で、5月25日に…。

〔渡辺〕 そのことはちょっと後で聞きます。場所はまず、戸山ヶ原周辺っていうのは、軍隊のあらゆるものがいた場所ですよ。その場所の百人町の辺がお勤めだった場所ですか。

〔三上〕 そのときも朝の朝礼のときなんかありますと、朝礼は朝早くからみんな、朝礼が終わったらずぐ剣道の面をさせられて、毎日毎日剣道を、女性でも男性でも構わない。もう全部がとにかく鍛えるために。そして敵機が来襲してきたら自分たちを守るんだという感じで、毎日剣道をやらせられました。女性でも全部やらされました。

〔渡辺〕 向こうに何人くらいお勤めでした？

〔三上〕 当時は400人だと思うんですけど。

〔渡辺〕 これがそのときの兵器行政本部時代の写真ですね。三上さんがあそこの上の方に。女性が結構いますね。

〔三上〕 女性もいっぱいだから、製図室でいたわけですよ。製図を作ってた。そしてうちの方の製図は、点検をする場所で、あちこちからいろいろなものが製図が出来たものをここで全部点検して、女性もやっぱりその仲間に入ってやっていました。私なんかはタイピストで製図のことは何にもわからなくて、いろんな銃砲だとかいろんな機械班だとかいろんなのがあって、そのなかのタイプを打つんですね。タイプを打つんでも、今考えると三八式野砲だとかそんなのが書いてあったけど、なにがなんだか訳わからなくてタイプ打っていました。あと、銃器関係の方が多かったので、戦争の方の機械班だとか銃砲だとか、そういったものの中味は何にもわからなくて。それから、科学研究所っていうのも、何にも分からなかったし。そこにあったということも知らない。それで、技術本部と科学研究所が合併したっていうことも、あんまり知らされてなかったから、何のために行政本部ができたのかなって思っていました。

〔渡辺〕 科学研究所って隣に建物あったんじゃないですか。ご認識ないですか。

〔三上〕 私たちのところは駅のすぐそばなので、そっちの方はあんまり行ったことがないから、戸山ヶ原の方は行かないんです。

〔山田〕 この百人町、ここにですね、陸軍科学研究所と陸軍技術本部というのが隣り合わせにあったんですね。科学研究所っていうのは兵器の基礎研究をやるところで、技術本部っていうのはそれを具体的に兵器にしていって仕事をしていたところなんです。ですからまさに基礎研究と応用研究と、そういう二本立てであったんですね。三上さんがお勤めだった制式課っていうですね、これはちょっと聞きなれない名前なんですけど、この制式という言葉は、要するに技術開発して兵器が出来ますよね、これを量産する体制になったときに、それを制式兵器というんです。この字を使うんですね。陸軍に採用されて、これから量産されていく兵器を制式兵器というふうに言って、ここで三上さんのこの課で図面を作ってそれに基づいて製造が始まるという、まさに陸軍のすべての兵器の設計の元締めみたいなですね、そういう存在がこの制式課というところ。

〔渡辺〕 そんな関係で、陸軍というと男性ばかりの職場かと思うと、そうではなくて女性が結

構いたということも分かりましたが、そこが、5月に空襲を受けますね。その状況をちょっとお話し願えますか。空襲ですね、5月25日の。

〔三上〕 空襲ね。5月の25日のときは私たちは毎日毎日、もう毎日B29が来ますから、毎日その支度をして寝るんですよ。支度をして寝るっていったって、ゲートルはいて、それこそ逃げる支度して。雑のうのなかで足腰はそこへ入れておかないと駄目なんで、そのなかに必要なものだけ入れて、そして逃げたりして。とにかく上から焼夷弾がものすごく落ちてきますから。焼夷弾が六角棒みたいだね。ものすごく輝いて見えるのが大きく固まっておっこちてきて、それが破裂しますと、油脂が出てきて、途中でみんな跳ねて流れ出ると、みんな焼け焦げて死んでしまったり。だからなるべくそういうところに、ほとんど私なんかも水のなかに入ってたんです。そして布団を一枚被って、その上から防空壕の方たちが水をかけてくれて、それでその上に…とにかく水のなかに入って川のなかに入って、そこにみんな「ちょっとでもいいから頭入れてください、頭入れてください」って言うと布団ですからみんなが入りきれないんですよ。だから、出た人はそのまんま直撃を受けて死んでしまったりなんかして。だから周りでもいっぱい死んだ人がいて。あとはもう朝まで爆撃をくらっていましたから、そのまんま私は自分の家の方に行って、うちの兄がちょうど隣組の組長をやっていたから、その組でまとめて第六小学校へ逃げたんです。第六小学校に一応避難して、食べるものはないし、なんにもないし、みんなお腹は空いてもなんにもない。何も持ってきてくれない。そんな状態でいましたら、キウチさんね、あの方がね、お弁当をね、すごく持ってきて。伯江のキウチさんです。その方とはもう仲良くしてもらったから、それで焼跡に施設が建ったんですね。それで、みんなを引っ張ってくれて、本当にありがたいと思います。今でも。

〔渡辺〕 そして翌日に登戸に皆さん、健康な人は疎開してくるわけですね。その状況をちょっとお話しください。

〔三上〕 ほとんどの方が皆疎開するっていったって、私たちはもう陸軍に行くことしか考えてなかったです。それから、うちの兄たちとか近所の人たちはみんなもうバラバラで、地方に自分たちの疎開した場所に行っちゃっていなくなって、私は陸軍のキウチさんのお家にお邪魔して、そこで寝泊まりして、登戸研究所を紹介してもらって、それからキウチさんと一緒に通うようになって。

〔渡辺〕 そのときは登戸という部分に異動するというようにお聞きになりました？あるいは聞かないまま？

〔三上〕 登戸の〔研究所のことは〕知らないでキウチさんに連れて行かれて。それで研究所に行ったんです。

〔渡辺〕 どこかわからないままここに来て。

〔三上〕 もう、連れて行ってもらうままに、とにかくそこへ行きましょう、ってことで。

〔渡辺〕 それで、場所は、本館とヒマラヤ杉がありますが〔地図を示しながら〕、三上さんがいうのはこの辺り〔本館北側〕のところでしょうか。

〔三上〕 一番よく分かっているのが、弥心神社っていうところ。そこをいつも通るんで。この弥心神社なんかはもう私、涙が出そうになるくらいね。

〔渡辺〕 そこから入った近くですね。

〔三上〕 ええ。そこから入って行って、それからヒマラヤ神社っていうのはもっと先だったですよ？

〔渡辺〕 ヒマラヤ杉ですか？

〔三上〕 ヒマラヤ…ヒマラヤ杉っていうんですか。その間辺りに兵舎があって、そこで機銃掃射を受けた。

〔渡辺〕 機銃掃射を受けたわけですね。

〔三上〕 それで、とにかくみんな一応はここに集まったんですよ。200人いる人たち全員じゃないけども。来れない人もいた。その人たちは全部、小金井の方にね、全部制式課の人だけ、全部ほとんど行っちゃいました。残ったのは庶務の人だけで何人もいなかったです。そのなかに私とキウチさんはいつも一緒だったから、よくわかるんです。そうして、そういう人たちの人事ですよ、私はそれを受けて打つだけだから。キウチさんはもう大変だったみたい。

〔渡辺〕 登戸研究所で実際に作業している北方班というのは北のほうと、南方班っていうのは解散しないでここで仕事をされてるんですね。それで、通信をする部隊も本館を中心にあってそこにいるんですけども、他はみんな疎開してガラガラになったものですから、そこを使っていたんだと思うんですね、三上さんはね。そのときに登戸研究所の例えばタイピストの方なんかいらっしゃいますね、交流とかはありました？話したり、食事したりする機会っていうのは。登戸研究所のタイピストの方と。

〔三上〕 なんかそういうこともなかった…

〔渡辺〕 登戸研究所のタイピストの方でお名前をご存知の方とか、いらっしゃらないですか。

〔三上〕 あとは、イトウさんという人が南方班ですね。それから、カワセさんっていう人が事務のところの人だったんですね。

〔渡辺〕 それは兵器行政本部から一緒に来られたということですか。

〔三上〕 そうです。でも私とは別々に後からみんな来たから、全然わからなかった。わからなくてみんな来ていましたよ。

〔渡辺〕 それでは、仕事はどういうことをされていたんですか。ここでもやっぱりタイプだったんですか。登戸でやっていた仕事はタイピストとして…

〔三上〕 タイピストなんですね。

〔渡辺〕 タイプはあったんですか。

〔三上〕 タイプはね、一台だけあって、それを私がやっていたんですよ。ですから、他の科の人の「これをちょっと打ってください」なんていうのがあったんですよ。

〔渡辺〕 敗戦になるとき、そういうものについて、処分というのはどういうふうにされていたんですか。証拠隠滅とか。やっぱり命令は出ました？

〔三上〕 敗戦の時もね、あんまりよく分からなかったんですよ。それで、ただ集まってくさいという感じで、別に大々的に集まったわけではない。少ししか人数いませんでしたから、将校と下士官と私たちぐらいと何人か集まって、そのときになかザワザワザワザワ言っていて、何言っていたか訳がわからなくて、戦争が終わったということも分かってない。

〔渡辺〕 それでも戦争が終わった後はここに実際に来なくてもよくなったんですか。

〔三上〕 終わった後は、将校たちが、「今戦争が終わったんだ」って言って、それで「終わったの」って言って、手を皆で握りしめたりなんかして、「これからどうしよう」ってなった感じだったんですね。皆さんはこれから戦争が終わったら今度仕事もなくなって、それがすごくみんな心配だったみたい。私が8月の15日にうちの親戚の人が美容院をやっていたんです。それで、護国寺の前の所に焼け跡があって、そこに早々と支度をして始めるんだっていうときにうちに話が来たの。そしてうちの父が「これからは平和な時代なんだから平和なものを選んだ方がいいから」って言われて、それで美容師になって。だけど学校もないし、何にもなくて一応入って、学校がないから徒弟制度ですよ。なかで勉強して、いろいろ教わって免許を取ったんです。

〔渡辺〕 ありがとうございます。時間も15分ちょっとですが、一言ずつ。戦後40年くらい沈黙されるわけですね。誰にも話さないで。今こういうふうに語って、伝えたい思いたいなものがなんなのか、一言ずつ、もう一回お願いしたいと思います。まず栗山武雄さんから。

〔栗山〕 戦後長い間登戸研究所にいたことを公にしなかったことは、我々の時代の人は大変だったと思うんですけど、新聞などで渡辺先生がこの保存運動をされていることを知りまして、それから、新聞を読むようにして、こんな立派な資料館を作っていただきましたことを、ここで若いときを過ごしました者として非常に感謝しております。

〔渡辺〕 それでは、次に正地次男さん。

〔正地〕 先ほど、向こうの方から機銃掃射を受けたという話があったんですけど、私が経験しているなかでも3回くらいグラマンが機銃掃射をかけてきまして、私の同僚が1人足を撃たれてましてしばらく医務室であれしてましたけど、この場で皆さんにお話したいのは

そのグラマンがちょうど三科と四科の谷間から上がってくる。四科に4ヶ所くらいに監視がいたんですけど、全然気がつかないんですよ、グラマンが来たのに。谷間からこう上がってくる。それでそのときにね、余分な話ですけど、ビラを撒いてくるんですよ。そのビラをね、私大事にとっいたんですけど、その後誰かが忠告したのか、憲兵が、私知らないって言いましたけどね、みんな持っていかれたんですけど。そのビラで言えば、私、そのビラを見たときは「アメ公が何言ってるんだ」っていうような気持ちで何も信用していなかったんですけど、後になったら全部本当のことですね。原子爆弾という特殊爆弾が今度できて、大型重爆撃機が一気にグアム島から東京を一周して楽々帰ってこれる。それで今降伏しないと日本は全滅するっていうわけ。それでその後、その爆弾を一度使うんで、中小都市に一発落としてみるって。それが広島ですね。後で考えたら嘘言っていないですよ。私もそれは感心しました。そのときは「何言ってるか」というような感じだったんですけど、それ大事に取っとうと思ったけど、取られちゃってね、憲兵に持ってかれちゃったんですけど。その他にね、ビラに書いてあるのはね、「日本中攻撃するけれども、降伏しなければね、京都だけは攻撃しない」って言ってましたね。なるほどね、京都にはなにも来ませんでしたね。それで、その当時にはちょっと私も信用していなかったんですけど、これでもし降伏すればね、アメリカとロシアが戦勝国で、ロシアが強く主張してるのは、朝鮮だとかドイツみたいに、北と南と東京を中心に分けて、北の北海道と東北はロシアが管理する、そして南はアメリカがやる、そんなことをビラに書いてあるんですけど、確かにね、本当具体的に、なるのかなあと心配したんですけれども。とにかく、アメリカという国は紳士の国ですね。私つくづくビラでわかりました。決して嘘一つも言っていないんです。日本の大本営なんかでたらめに戦果を発表してね、あるいは国民は惑わされますよね。そのくらいのことなんですけれども。

〔渡辺〕 どうもありがとうございました。それでは會津保進さん。ずっと話さなかったことを話せるようになったお気持ちを。

〔會津〕 私は今、町会の老人会に入っているんです。そうすると話になると決まったように元気で長生きという話になるんです。これは私は今は平和な時代ではいいことだなあと。思って。それともう一つ、戦後生まれの人は幸せだなあと。思っています。それだけです。

〔渡辺〕 戦争のないことがいかにいいかということですね。三上峰緒さん、いかがでしょうか。

〔三上〕 私は今までも戦争が、生まれたときから戦争ばかりやってきましたから、本当に平和な時代をこれからも皆さんも、平和、大事にして長く生きていきたいと思います。どうもありがとうございます。

〔渡辺〕 どうもありがとうございます。それでは山田先生からまとめをして、質問があれば一言。

〔山田〕 皆様からなにかこの際ですね、前の4人の皆さんに聞いてみたいということがございましたらご質問をどうぞ。時間の制約もございますけれども、今マイクを持ってまいります。この際なにか聞いてみたいという方はいらっしゃいますか。

〔質問者〕 この戦争は負けそうだったのはいつ頃ですか。また、そういうことは全く考えてもみなかったのでしょうか。

〔山田〕 どうでしょうか、今のご質問、戦争負けるんじゃないかと思ったのはいつ頃ですか。あるいはそういうことは考えませんでしたか。

〔正地〕 私の感じでは1943（昭和18）年後半からちょっと日本はね、このままいったら大変なことになるなと思いましたね。それは宣伝ビラがね、本当に具体的に実行されるんで、私ね、これはもう。私それでね、余分な話になるんだけど、調布の飛行場ってあるじゃないですか。そこにね、日本にはまだ飛行機がたくさんあるんですよ、戦闘機が。それを見に行こうって1回行ったらね、中野学校出た人だと思うんだけどね、よくそばへ寄って触ってみろって言うんですね。そしたら並んでいる戦闘機が黒く塗ったベニヤ板なんですよ。これを見たときね、もう日本はだめだと思いましたね。上空からB29が来てね、写真撮って、まだ日本には飛行機があるぞって。だからまだ攻撃かけようということですね。だからむちゃくちゃな戦争ですよ。そのときそう思いました。以上です。

〔山田〕 どうもありがとうございます。だいぶ長い時間にわたって4人の方に伺ってまいりました。

今の皆さんの証言も活かしながら、後半の企画展を準備していきたいと思います。前半の展示をそのまま残して8月15日以降の登戸研究所という後半を新たに付け加えるかたちで、11月の下旬から企画展の後半が始まります。まず一つは証拠の隠滅についてです。いろいろとお話ありましたように、8月15日以降、とにかく徹底的に証拠を隠滅するために、あらゆるものが焼却されるということが行なわれます。今まで具体的にわからなかったこともありますが、今回、正地さんのお話にもありましたように偽札の廃棄処分など、そういうことを含めて展示をしたいと思います。さらに、登戸研究所の証拠が消された後、登戸研究所に勤めていた方のなかには、その後、米軍で働く方も出てくるんです。伴繁雄さんなんかもそうです。どういうところでどんな仕事をしていたかということなどは、調べようとしてもなかなか難しいところも実はございますが、可能な限り、戦後の登戸研究所について実態の解明をしていきたい、また、その中間的な報告として11月からの企画展後半を準備したいと思いますので、ぜひご覧いただければと思います。どうも今日は皆さん、ありがとうございました。

〔終〕

〔追記〕

本稿は、2015年10月24日（土）に明治大学生田キャンパス中央校舎6階メディアホールにて開催された第6回企画展関連イベント「元登戸研究所関係者による証言会」の書き起こしに加筆・修正したものです。

明治大学平和教育登戸研究所資料館2015年度年次報告

1. 2015年度活動概要と今後に向けての展望

館長 山田 朗

開館6年目、〈戦後70年〉で来館者堅調、通算5万人に迫る

2015年度は、開館日数219日で来館者8,176名、回収アンケート1,685通であった。平均来館者数は、ひと月あたり681.3名、一日あたり37.3名になる。前年度（来館者8,733名、回収アンケート1,849通、ひと月あたり727.7名、一日あたり38.9名）に比べて、来館者数で93.6%と若干減少したものの概ね堅調で、開館以来の通算来館者は、48,753名に達した。なお、〈戦後70年〉にあたる2015年1月から12月までの来館者は、9,065名であった。

開館6年目に比較的順調に来館者が得られたのは、〈戦後70年〉にあたり資料館がメディアに取り上げられる機会も多く、リピーターに誘われた新規の個人来館者が多かったこと、グループ見学（学校見学を除く）が163グループ・2,797名（前年度：219グループ・2,952名）と、堅調であったからであると思われる。また、例年に比べて開催時期を拡大して8月から翌年3月にかけて開催した第6回企画展がマスコミでも広く紹介され、企画展第一期が始まった8月に1,336名、同じく第二期が始まった11月に1,175名と、来館者が高水準であったことなどによるものと考えられる。

学校単位の見学は、42校（グループ）1,182名（前年度：34校1,845名、前年度比64.1%）と校数は増加したが、人数ではかなり減少した。一般団体のグループ見学は上述のように、団体数では減少したが、人数では前年度比94.7%を維持した。前年度に比べ、学校見学が663名減、一般団体見学が155名減（合計818名減）であったが、全体の減少数557名であることから、学校見学・一般団体見学の減少はあったものの個人来館者の増加が2015年度の堅調さの主たる要因であると見てよい。

展示内容の点検、資料の収集

登戸研究所の実態解明は依然として進行中であり、資料館独自の調査と来館者からの情報提供によって不断に展示内容を点検するとともに新たな展示・キャプションを加えてきた。2015年度は、企画展で展示した、風船爆弾作戦終了に際して登戸研究所に授与された「陸軍技術有功章賞状」等を第二展示室の、旧中沢国民学校の校庭で出土した処分品の瓦礫を第五展示室の常設展示に加えた。また、懸案であった資料館隣接の倉庫天井の防水工事を実施し、見学しやすくなることができた。

資料の収集・調査研究という点では、企画展に向けての調査の段階で、駒ヶ根市の旧登戸研究所中沢分室第三工場（福岡社）から敗戦時に持ち出された放火用謀略兵器と推定される現物

が見つかり、所有者より2点の寄贈を受けた。当時の秘密戦用兵器の現物が見つかることはきわめて珍しいことである。また、12月には資料館の主催としては4回目の「証言会」を開催して貴重な証言を得ることができた。

企画展・イベントの実施

2015年度は企画展として「NOBORITO 1945 - 登戸研究所70年前の真実 -」を開催した。〈戦後70年〉にあたり開催期間を拡大し、8月から第一期展示「8月15日までの登戸研究所」を、11月から第二期展示「8月15日以降の登戸研究所」を実施した。この企画展のために、長野県駒ヶ根市・飯島町等に実地調査におもむき、前述した放火用謀略兵器の現物の寄贈を受けたほか、かつて登戸研究所が移転した先の小学校で、長らく所在が不明であった当時の当直日誌の現物を確認することができた。また、登戸研究所関係者の証言にもとづき、米海軍横須賀基地に調査におもむき、朝鮮戦争時に登戸研究所関係者が米軍の秘密戦業務にかかわったとされる機関GPSOが活動をしていた建物が現存していたことを確認した。なお、企画展は、2016年度に入ってから中野キャンパスにおいても出張展示（本展示と同じ内容のパネル展示）を行なった。2015年8月22日には企画展記念第一回講演会を、2016年1月9日には企画展記念第二回講演会を開催し、3月26日には登戸研究所研究のパイオニアの一人である木下健蔵氏の講演会およびパネルディスカッションを実施した。

学部間共通総合講座「登戸研究所から考える戦争と平和」に連動した資料館主催の見学会（隔週土曜日）も予定通りに実施することができ、一般来館者の参加が中心ではあるが、明治大学教員・学生の参加も増えてきている。

教育・研究活動

2015年度も上記総合講座を春学期には生田キャンパス、秋学期には駿河台キャンパスで開講した。また、社会教育主事課程授業科目「登戸探求プロジェクト」と連携して、本学学生と多摩区在住の小学生とともに1年間の教育実践活動を行った。リバティアカデミーの生田講座として春期・秋期にそれぞれ5回の連続講座を開催した。総合講座の授業とリバティアカデミーの連続講座は、2016年度以降も継続していく予定である。

研究に結びつく活動としては、企画展に関連して、大戦末期の風船爆弾作戦の実態、15m試作気球、研究所移転後の兵器開発の実態、終戦後の研究所関係者のさまざまな事例（起業、公職追放、米軍秘密戦への協力）について実態の解明を進めることができた。また学芸員が、登戸研究所関係者へのインタビューを随時行った。

資料館の調査・研究活動の成果をより広く普及するために、2015年度より『資料館館報』の刊行と図書館・資料館等への配付を始めた。

地域・社会との連携活動

10月に資料館展示専門委員である渡辺賢二氏が長年の登戸研究所研究、戦争遺跡保存運動の

成果により「川崎市文化賞」を受賞され、生田キャンパスにおいて受賞報告・祝賀会を開催した。

職場体験の受け入れも前年度と同様に行った。

宣伝・広報活動

2015年度も大学ホームページの資料館専用ページを改善・充実させるとともに、資料館独自の広報手段として『資料館だより』第12号、第13号を発行した。

2015年度は、〈戦後70年〉に関連して、TV局17件、新聞社23件、その他雑誌等10件、合計50件の取材を受けた。また、SNSを利用した広報にも力を入れた。だが、アンケートに寄せられた声からは、依然として大学や資料館自体の広報宣伝活動はポスターの掲示を含め効果が不十分であり、資料館の存在をかならずしも社会・学内にアピールできていないことも分かる。

今後にむけての展望

開館6年目も来館者動向・アンケート回収もおおむね順調で、好意的な評価を受けることが多かったが、こうした好調さに甘んじることなく、資料館は展示内容の充実と来館者対応のさらなる向上に努めていかなければならない。

調査によって訂正・改善が必要と認められた展示パネルについては今後も改修するとともに、新たに収集した物品・資料やレプリカを効果的に展示することが急務である。また、企画展における展示をより見やすくするために廊下の照明を改善しなければならない。所蔵資料の増加に対応するために、生田キャンパス内にさらなる収蔵スペースを確保することも必要である。

生田キャンパス内の登戸研究所関係の遺物を保存し、戦争遺跡として保存・整備することにも努め、文化財登録を実現させたい。また、明治大学各キャンパスの戦争遺跡の保存・活用についても提案をしていきたい。企画展・イベントを実施して、これまで以上に登戸研究所と資料館に対する社会的な関心が高まるようにしたい。また、『資料館館報』をさらに充実させるとともに、懸案である『図録』の編集準備を始めたい。「平和教育の発信地」としての役割を高めるために、資料館・学内遺跡を案内できるガイドの養成を進めることも大切な課題である。

2. 開館状況（2015年4月1日～2016年3月31日）

(1) 来館者状況

	開館日数（日）	来館者数（人）
合計	219	8,176

【参考】開館以来の来館者数

年度	開館日（日）	来館者（人）
2010年度	208	11,185
2011年度	215	6,751
2012年度	218	7,019
2013年度	217	6,889
2014年度	224	8,733
2015年度	219	8,176
合計	1,301	48,753

(2) 学校、団体等による来館者数

	団体数	来館者数（人）
学校見学	42	1,182
団体見学	163	2,797
合計	205	3,979

3. 資料

(1) 2014年度まで所蔵資料点数

・実物資料

1,567件 3,409点

・視聴覚・記録資料（登戸研究所に関するテレビ番組の映像、証言映像など）

217件

(2) 2015年度収集資料

主なものとして、風船爆弾研究開発の責任者である草場季喜^{すえき}氏（登戸研究所総務科長兼第一科長）の関係者より、同氏旧蔵の資料一式（64件）の寄贈があった。この中には、風船爆弾開発に対する陸軍技術有功章賞状・徽章や15m気球実験時の撮影ネガ、草場氏による15m気球の構造説明メモ、米軍側研究者とのやり取りなど大変貴重な資料が含まれていた。他にも、長野県伊那地方での調査の成果として、登戸研究所製の謀略兵器、登戸研究所の敗戦時の証拠隠滅を裏付ける現物資料の寄贈があった。2015年度の収集資料は以下の通り。

・実物資料

収集資料点数 158件、175点

資料名		件数
大分類	小分類	
1. 登戸研究所 119件（133点）	書簡・証言メモ・手記	35件
	写真	27件
	雑誌・新聞・書籍など発行物	23件（25点）
	その他	34件（46点）
2. 風船爆弾製造 23件（25点）	写真（データのみ）	19件
	書簡・証言メモ	1件
	雑誌・新聞・書籍など発行物	1件
	その他	2件（4点）
3. その他 17件（18点）		

・視聴覚・記録資料

収集資料点数 42件（DVD 9件、撮影データ13件、音声20件）

(3) 2015年度証言収集状況

特筆すべきは米国のGPSO（政府印刷補給所）について、P氏に計3回聞き取りを行い、実態がかなり解明できたことである。証言収集状況は以下の通り。

聞き取り回数37回（来館者11回、聞き取り調査24回、他社の取材1回、証言会1回）、証言者32名

【証言者内訳】

1. 登戸研究所元所員	8名	2. 登研所属以外の風船爆弾関係者	9名
総務課輸送班	1名	3. 登研疎開先（長野）関係者	7名
第二科	2名	4. 登研関係者遺族・知人	4名
第三科	2名	5. 戦後の登研跡地の様子を知る人	1名
第四科	3名	6. その他	3名

(4) 今後の資料収集について

戦争体験者が少なくなっている今、登戸研究所関係者への聞き取り調査は早急に行っていく必要がある。また、すでに関係者が鬼籍に入っている場合も、資料散逸を防ぐため、早急に遺族への調査が必要である。

4. 活動内容

(1) 企画展

①概要

2015年8月5日（水）から2016年3月26日（土）まで、「NOBORITO 1945 ―登戸研究所70年前の真実―」を資料館内で開催。第一期「8月15日までの登戸研究所」（8月15日（水）開始）でテキストパネル11点、資料展示20点（内複製5点）、写真展示10点（内複製9点）、ハンズオン2点の計43点、第二期「8月15日以降の登戸研究所」（11月18日（水）開始）でテキストパネル9点、資料展示18点（内複製3点）、写真展示1点の計28点を展示した。

②主な関連イベント

・企画展記念講演会

第1回：2015年8月22日（土）

「第一期：8月15日までの登戸研究所 本土決戦準備と登戸研究所」

講師 山田朗

第2回：2016年1月9日（土）

「第二期：8月15日以降の登戸研究所 戦後の登戸研究所と所員たち」

講師 山田朗

第3回：2016年3月26日（土）「長野県に疎開した登戸研究所と高校生達との調査」

第一部 講演会 「長野県に疎開した登戸研究所と高校生達との調査」

講師 長野県辰野高校教諭※ 木下健蔵氏 ※講演時

第二部 パネルディスカッション

パネリスト 木下健蔵氏、渡辺賢二、山田朗

・元登戸研究所関係者による「証言会」：2015年10月24日（土）

(2) 地域社会と連携した活動

①川崎市民との連携

- ・川崎市民が行う朗読劇「ヒマラヤ杉は知っている」を当館見学プログラムに追加。
- ・元第三科所員の聞き取り調査実施。

②職場体験の受け入れ

- ・2校3名、延べ4日間実施。

(3) 学部間共通総合講座「登戸探求プロジェクト」との連携

多摩区在住の小学生12名と明治大学学生8名による、紙芝居および映像作品制作への協力。

(4) 貸出および館外展示状況

博物館、テレビ局・出版社などメディア、市民団体あわせて34件の資料利用願があり、原物資料、各種写真データなどを貸出し。個人・テレビ局などから調査依頼が15件、うち2件は現在調査継続中。

(5) 他館への資料寄贈

2015年8月にリニューアルオープンした侵華日軍第七三一部隊罪証陳列館（中国・黒龍江省哈爾濱市）へ「石井式濾水機濾過筒」6点を寄贈。

(6) 資料館主催見学ツアー

月2回、土曜日に開催、2015年度は全21回、参加者372名。

5. 取材

マスメディアによる取材は主なものでテレビなど17件、新聞社23件、その他出版物への掲載など10件あった。2015年5月29日にはフォーリン・プレスセンター主催による外国人記者の登戸研究所資料館見学ツアーが実施され、フランス・アメリカ・中国・韓国・スイスからの記者計14名が参加。フランス・中国などで資料館特集記事が各メディアに掲載。

6. 来館者感想

【10歳代】

- ・久しぶりに来たのですが、今日はDVDなどを見てここでどんなに悪いことをしていたのかが分かりました。今日は終戦の日です。テレビでやっていたアニメの主人公が、戦争が終わった日って喜ばいいのか？悲しめばいいのか？と言っていました。私は今日この展示を見て、終わってよかったのではないかと思います。子供でも戦争はいけないと知っているのに、戦争をした昔の日本の気持ちがよく分かりません。でも、同じまちがいを日本がしないように、たくさんの人が登戸研究所に来てほしいと思いました。（中1 女性）
- ・改めて戦争とは何か、戦中日本は何をし、どうして道を踏み誤ったのか、について深く考えさせられました。この資料館に残されている資料（史料）からは、当時のひっ迫した戦争状況が現実味をもって感じられました。私たちが次世代のためにできること、すべきこと、伝えなくてはならないということに対する「ヒント」がこの資料館には多く詰まっていると私は考えます。私は大学で日本史専攻を学んでいる者ですが、まだ未熟ながらも、その「ヒン

- ト」をこの手につかめた気がします。ありがとうございました。(明治大学文学部1年 男性)
- ・ 当時の戦争の悲惨さや、明かされていなかった現実。などなど当時の事が間近に感じられることができよかった。やはりこの戦争という物は忘れてはいけない存在なのだと改めて知らされた 過去の遺物ではなく、今の歴史としてこの後に残していこうと思った (男性)
 - ・ 暗室の雰囲気怖かった。その時の人々の気持ちにふれた気がした。(女性)

【20歳代】

- ・ 戦争中に日本が受けた被害よりも与えた被害について知る機会はほとんどなかったので、今回の見学で戦争の裏側について具体的なお話が聞けてとても面白かった。(男性)
- ・ 戦争と一言でいってもすぐに連想するような、「武器をもって戦う」画だけなのではなく、隠された裏の戦争もあるのだと知れてとても勉強になった。(女性)

【30歳代】

- ・ 知らなかったことがたくさんあり、この身近な登戸の土地でこんなことが行なわれていたのかとおそろしくなりました。が、知ることで誰かにまた伝えていければよいと思います。明大の学生さんは選択科目で学習の機会があるそうですが、他の大学の多くの学生さんにも学ぶ機会があればよいのにな、と思いました。(女性)

【40歳代】

- ・ ずっと秘密にされていた研究所が、多くの人々の手で守られて戦争の悲劇を後生に伝えていく役割を果しているということを知った (女性)
- ・ 木造の「にせ札」製紙工場もみたかった…復元などできないものでしょうか (女性)
- ・ 平和教育ということで川崎のすべての区の小・中学校の授業でぜひとりあげて欲しいと思いました。(もしかしたらあるかもしれませんが) 今の子供たちにもどんどん知ってもらいたいです。このような貴重な場を守る活動をしている方々がいる事が本当にありがたいなと思いました。(女性)

【50歳代】

- ・ 地元登戸の戦争経験者も残り少なくなっていると思われます 今の内に研究所のことを語れる人を聴き取り調査しておいてほしいと願います。(女性)

【60歳代】

- ・ 一般に物事を公平公正に判断することは難しいものだ。平時でもそうなのだから、有事戦時

なら尚さらである。ここに展示されている品々は後世に続けられるべきである。〔中略〕是非とも広い視野，深い理解のもとで歴史の見えにくい部分を見せて頂きたい。(男性)

- ・弾薬庫とかの設備を含め，かかわる設備の維持メンテをお願いします。(男性)

【70歳代】

- ・科学者の陥りやすい心性（成果，達成感，好奇心）が，結果的に人間性の破壊につながるこの実例として市井人より自覚的でなければならない 往々にして科学者は自分の行為を良きものとして捉えがち（女性）
- ・共感をもって見られる世代がどんどん減ると，若い人はこれらからどんなメッセージを受け取るのだろうか（女性）

【80歳代以上】

- ・我々の知らないところで軍部は恐しいことをしていたことにびっくり（女性）

(来館者感想は全て原文のまま掲載しています。)

館報第1号に誤りがあったため、以下訂正いたします。

p.46 第3表

誤

品種	横×縦／尺 (cm)	重量／匁 (g)
一号 (大判)	6.35×2.2 (192.4×66.6)	21.7～25.9 (81.3～97.1)
二号 (小判)	2.2×2.2 (66.6×66.6)	9.2～10.9 (34.5～40.8)
三号 (大判)	3.3×2.2 (100×66.6)	10.9～13.0 (40.8～48.7)
四号 (大判)	5.6×2.0 (169.6×60.6)	17.4～20.7 (65.25～77.6)
五号 (小判)	2.0×1.7 (60.6×51.51)	6.5～7.7 (24.3～28.8)

正

品種	横×縦／尺 (cm)	重量／匁 (g)
一号 (大判)	6.35×2.2 (192.4×66.6)	5.79～6.91 (21.7～25.9)
二号 (小判)	2.2×2.2 (66.6×66.6)	2.45～2.91 (9.2～10.9)
三号 (大判)	3.3×2.2 (100×66.6)	2.91～3.47 (10.9～13.0)
四号 (大判)	5.6×2.0 (169.6×60.6)	4.64～5.52 (17.4～20.7)
五号 (小判)	2.0×1.7 (60.6×51.51)	1.73～2.05 (6.5～7.7)

→

編集後記

『明治大学平和教育登戸研究所資料館 館報』第2号をお届けします。

本号は、資料館の2015年度（2015年4月～2016年3月）における活動報告が主な内容です。巻頭論文は、登戸研究所研究のパイオニアの一人である木下健蔵氏の特別寄稿です。木下氏自身の調査によって存在が明らかにされた長野県上伊那地方における登戸研究所関係資料の詳細な紹介・分析をぜひお読みください。

第6回企画展「NOBORITO 1945 ―登戸研究所70年前の真実―」の記録は、ボリュームもさることながら、質的にも非常に高いものに仕上がっていると自負しています。とりわけ、2期に分けての展示内容紹介は、資料館独自の現地調査と関係者への聞き取り調査の結果を反映したものになっており、随所で新しい事実を紹介しております。今回は、企画展関係の講演記録も3本あり、特に、企画展記念第3回講演会の記録、木下健蔵氏の「長野県に疎開した登戸研究所と高校生たちとの調査」は、1989年8月の伴繁雄氏の証言を引き出した高校生たちの活動に関する貴重な証言記録でもあります。この伴証言は、登戸研究所研究にとっては非常に大きな前進で、1993年に脱稿された伴繁雄『陸軍登戸研究所の真実』（芙蓉書房出版、2001年）につながるものでした。

資料館は、2016年5月21日に、開館6年目にして来館者5万人を達成しました。今後とも館員一同、展示の質の向上と見学者対応のさらなる改善を目指して精進いたしますので、忌憚のないご意見をいただきますようお願い申し上げます。

本号から年度前半（9月まで）に『館報』を発行できる態勢を組みました。以後、これを資料館のルーティンワークとしていきたいと思います。また、国際的な発信力を高めるために、本号から英文目次と論文には英文要旨を付することにいたしました。

（文責・山田朗）

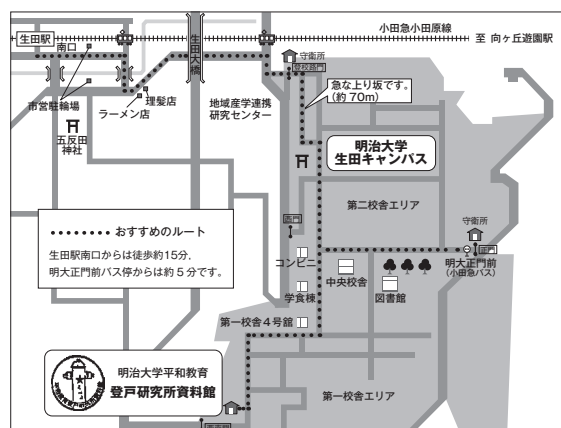
アクセス

小田急線「生田駅」から来館される場合 南口から徒歩15分

※地域産学連携研究センターからエレベーター・エスカレーターをご利用いただけます。(日・祝日除く午前8時～午後6時半。運転時間等については今後変更になる場合がございます。)

小田急線「向ヶ丘遊園駅」から来館される場合 北口から小田急バス「明大正門前」行き終点下車

※駐車場がないため、お車でのご来館はお控えください。



利用案内

開館時間 水曜～土曜 午前10時～午後4時

入館料 無料

※明治大学の夏季・冬季休業期間、7月・1月の定期試験期間及び12月～2月の入試実施に伴う入構制限期間等は閉館する場合がございます。

※事前に団体予約がある場合に限り日曜開館。開館スケジュールについてはお問い合わせください。

団体予約について

団体見学(10名以上)の場合は、事前申し込みが必要です。

見学希望日の1か月前までに電話またはEメールにてお申込みください。

団体見学に関する内容や受け入れ人数についてはご相談ください。

※団体見学に限り、日曜日の見学予約を受け付けております。希望される場合はお問い合わせください。

※団体の重複等により予約をお受けできない場合がございます。あらかじめご了承ください。

明治大学平和教育登戸研究所資料館

〒214-8571 神奈川県川崎市多摩区東三田1-1-1 明治大学生田キャンパス

TEL/FAX: 044-934-7993

E-MAIL: noborito@mics.meiji.ac.jp

http://www.meiji.ac.jp/noborito/

twitter: https://twitter.com/meiji_noborito

Facebook: https://www.facebook.com/Noboritoshiryokan

明治大学平和教育登戸研究所資料館 館報 第2号 2016年度

2016年9月30日 発行

編集兼
発行者

明治大学平和教育登戸研究所資料館

〒214-8571 神奈川県川崎市多摩区東三田1-1-1

明治大学生田キャンパス

電話 044-934-7993

印刷所 株式会社 丸井工文社

The defunct Imperial Japanese Army Noborito Laboratory Museum for Education in Peace, Meiji University

Museum Review

No.2 2016

Contents

Remarks upon Receiving the Kawasaki City Culture Award..... WATANABE Kenji 1

Specially Contributed Article

Materials on the Evacuation of the Imperial Japanese Army Noborito Laboratory
to Nagano Prefecture: The Kami Ina Area (Ina Valley).....KINOSHITA Kenzo 3

Sixth Exhibition ‘NOBORITO 1945 -The Truth of Noborito Laboratory 70 years ago-’
..... 23

Exhibition

First Period: Noborito Laboratory until August 15th
The Implementation and End of the Balloon Bomb operation
.....TSUKAMOTO Yuriko 23
Clandestine Warfare Research Continued After Dispersed Evacuation
.....SHIINA Maho 43

Second Period: Noborito Laboratory after August 15th
Destroying Evidence of the Noborito Laboratory, a Member's
Demobilization, and Use of Related Research.....SHIINA Maho 69
Noborito Laboratory Members' Post-War.....TSUKAMOTO Yuriko 83

Lectures

1) 'Noborito Laboratory until August 15th'.....YAMADA Akira 101
2) 'Noborito Laboratory after August 15th'.....YAMADA Akira 121
3) 'Noborito Laboratory after Evacuation to Nagano Prefecture and
Survey with High School Students'
Lecture.....KINOSHITA Kenzo 141
Panel discussion.....KINOSHITA Kenzo, WATANABE Kenji 148
YAMADA Akira

Exhibition Event: "Testimonies"
Noborito Laboratory in 1945, as Described by Formerly Affiliated Individuals.... 175

FY2015 Annual Report..... 199

**The defunct Imperial Japanese Army Noborito Laboratory Museum
for Education in Peace, Meiji University**